

なれすか

て、おのが妻衣(めかけ)、それならて又は誰にかなれ(ころも)
なれすかた 馴姿・襲姿【名】常に家に居る時の姿。「古語」襲衣今日よりは、おはしましどころを、御念佛の所にしつらひて、佛おはしまさせ、僧などのなれ姿も、いみじくかたじけなう、よろづに悲し
なれすかば 不馴顔【名】未だ馴れぬらしきやうす。夫木、秋はさぞ吹くないぶきの山風になれずが恨にも鹿のわぶらも
なれすく 馴過ぐ・慣過ぐ(動上三自)ほどを越すばかりになる。餘りになる。
なれすく 熟過ぐ(動上二自)ほどに過ぎて熟す。餘りに熟す。熟すなれすきた餅をあるじの遺恨かな
なれすし 熟鮓・馴鮓【名】魚を鹽にまぶして壓したる後、冷飯に合はせて桶に入れ、重き石にて壓して、数日の間、熟らして造りたる鮓
なれそむ 馴染む(動下二自) 馴れることをはじむ。初めて陸ぶ。初めて馴染になる。天神御時平の大臣の御内奏の兼竹と申す御隨身の侍と、入知れずなれそめ、忍び逢ふ夜の數重なり
なれそめ 馴初【名】馴染めたること。親しくなりたる最初
なれつく 馴附く(動四自) なれ親しむ。なつく。なじむ
なれじ 馴事【名】なれ(馴事)の音便。浮世風「江戸で傳法、上方で書跡などといふあばずれがあれど、夫れさへも馴事(じ)になつてゐる所爲か、更にかまはぬ」
なれども 然ども【接】さにはあれども。然れども。けれども
なれなじみ 馴馴染【名】なじみ(馴染)に同じ。さのふりよる物語、なれなじみの中ほどなる事はさるまじ
なれなれし 馴馴し【形二】甚だ馴れたるさまなり。したしさうなり。露氏なれなれし・振舞ひたり
なれ 隠・面なきさまなり。ぶしつけなり。傾城通言「一見と申し武者骨、なれなれしき事ながら、盲蛇

に怖ぢすとやら、身に迫つての物語」
なれ 甚だなれ古びたり。「襲義し」「古語」新去いつか我れしほ焼くあまのぶちころもなれなれしくも妹にあひ見ん」夫木なれなれし床はふるきの皮衣着きまきねばあたらしむし
なれのはて 爲の果【句】爲(な)れる果の訛。「成の果」用明天皇職人鳥この鳥へ流されし、五位介諸岩がなれの果にて御座候
なればむ 襲ばむ(動四自) 襲(な)れたる様あらはる。襲れて見ゆ。ふるぶ。「古語」秋「狩衣は、何も打ちなればみたる」
なれも 馴者【名】世馴れたる人。物事によく通じたる人。今昔人笑はする馴者なる翁にてぞありければ
なれよる 馴寄る(動四自) 馴れて近寄る。源氏「女房にもけちかうなれよつつ」
なわ名和【名】「地」伯耆國西伯(す)郡に在る村。御來屋(す)町の南に接す。名和長年の故邑にして、元弘三年後醍醐天皇、隱岐國よりこの地に著御あらせられき。もと奈和とよ書きたり。「姓氏」一。本姓は村上源氏。右大臣顯房の第八子雅兼より出づ。その第十一世孫行高伯耆守長年を生む。長年、本國名和莊の地頭となり、因りて氏とし、其の孫顯興、懷良(す)親王に、西海に隨ひしが、その後裔伯耆に歸りて、世世名和神社の祠官たり。明治維新後、男爵を授けらる。
なわこんち ちゆうけんきうじよ名和昆蟲研究所【名】昆蟲學者名和靖(す)の昆蟲に關する研究を成すために設けたる研究所。岐阜市の公園内にあり。
なわじんじや 名和神社【名】伯耆國西伯(す)郡名和村に鎮坐せる別格官幣社。祭神は名和長年。
なわすれ ぐさ 勿志草【名】「植」ほなるかなわながしげ名和長重【名】「人」勤王家。長年の従子。太郎左衛門と稱す。長年に隨ひて義兵を擧げ、京師に戦ふ。正平七年足利義詮(す)の男山の行宮を侵しし時、神鏡の櫃を奉じて走る。その終るところを

なれのは

知らず。
なわながとし 名和長年【名】「人」勤王家。初名は長高、通稱は又太郎。伯耆國名和の人。元弘三年後醍醐天皇の隱岐國におはするや、詔を奉じて義兵を擧げ、天皇を船上山(す)に迎へて賊を破りしが、延元元年足利尊氏の京師を犯すにあり、諸將と驍て之を走らせしが、尊氏再び至るに及び奮戦して死す。「中海」の別稱。
なわのうら 名和浦【名】「地」なかのうらなる【名】ち(人)地震に同じ。「古語」駕(お)みの子のやぶのしは垣したとよみななるが搖(り)こばやれむしは垣」を垣ありつより、聲の響高きまきりて、かみいとさわがしくひらめきて、なるのやうに土うごく」
なるふる【句】地震す。地震がふる。紀「地震、ナキフリテ」定額十月月ばかり、夜、なるいたくふりければ、木末にはのこりもある神無月なべてふりつる夜はのくれなる」
なるのかみ 地震神【名】地震を司る神。地震の神。「古語」起地震、舍屋悉破、則合四方傳(す)地震神(す)」
なるはむし なるは蟲【名】「動」『菌葉(す)』蟲の轉訛か「あをむし(蚊蚋)に同じ。「古語」字彙、ナエハシム」
なをり 名折【名】「名を折る」を見よ」名譽をきすつこと。なをり。「古語」拾玉「しづの男が麻の衣の花すれは萩の名をり」のものにぞありける」長閑なまきたなしや、源氏のなをりに返し合はせたまへ」
なをり 波折【名】波の折重なりて立つこと、又その所。一説に、波の折返すこと、又その所。「古語」重瀬(す)のなをりをみれば遊び來る鮪(す)がはた手に妻立てり見ゆ」

なわな

なをる 名折る【句】(名)の條下を見よ。
なをれ 名折【名】「名折る」を見よ」名譽のきすつこと。はち。盛盛(す)源氏の名折不審なりとて、一門に擯出せられて」大藏虎補物(す)他領(入)つて苛察をさせば、一在所の名折せ」
なをる 名折る【句】(名)の條下を見よ。
なをれ 名折【名】「名折る」を見よ」名譽のきすつこと。はち。盛盛(す)源氏の名折不審なりとて、一門に擯出せられて」大藏虎補物(す)他領(入)つて苛察をさせば、一在所の名折せ」

に

【發音】**ニ** 行第二の音。羅馬字にては ni と書けども、他のな行音な (ニ)・ね(ニ)の(ニ)の子音が舌端音(齒音)なるに對し、とぬとの子音は、發音の場所、それよりも一層後方に位置し、舌の中部を高めて、發音のなるが故に、口蓋音に屬す。これ(ニ)・(ニ)が口蓋の母音なるがために、子音 n もその感化を受くるに因る。類例は、さ行のしじ、た行のちぢ及びは行のひにも求むることを得べし。故ににはにに非ずして、實はこの音なり。長音は、にいと書くとにと書くとの兩法あり。本書は前者に依れり。目拗音にやにゆにえによは舌の中部をなねの子音を發する場合よりも更に高めて、母音 i を發する場合の位置に置きたる子音に、母音 a・o・o の結び附きたるものにして、にに母音 a・u・o の結び附きたるものともいふを得ること、にに説ける所によりて知らるべし。又、その長音はにやめにゆらにええによおなり。四一語の中に、にの直後にう又はよの續く時は、相合して拗長音ニウウとなす。例へば(来和)にぶが(入學)をニウウメン・ニウウ・ニウウガクと發音する類。一語の中の變化

ををわろれるりらよゆやもめんむみまほへふひはのねぬになとてつちたせせすしきこけくきかおえういあ

にはあらざれども、はにふ(増生)をハニ
ユウと發音する類、亦、これに準ずべし。
【にやう】は、物長音ニヨオと同じく發音
す。例へば、猫の鳴聲なるにやうの類。【音
母音iの脱落してん(リ)に變化するこ
とあり。例へば、たにびさ(何人)のなんび
さいかに(如何に)のいかん、死にたり」の
「死んだとなる類。【漢語の熟語の中、
足利時代以前よりの發音にて、n韻の文
字の直後に、い又はのの頭音を有する文
字の續く時は、そのい又はの音、n韻の
影響を受けて、ニと轉呼するもの多し。
例へば、えんいん(延引)・しんい(顯患)・さん
る(散位)・いんあ(因位)をエンニンレン
ニ・サンニンインニと發音する類。又、n
韻の文字の直後に、や又はよの頭音を有
する文字の續く時も、同様に、n韻の影
響によりて、續音ニヤ・ニヨと發音する
ことあり。例へば、きんや(禁夜)・れんや(鍊
治)・さんよう(算用)・ねんよ(年預)をキン
ヤ・レンニヤ・サンニヨ・ネンニヨと發
音し、あんや(安養)・まんえやしふ(萬葉集)
を、養葉がヨオの如く發音する文字な
るがために、アンニヨ・マンニヨ・オシ
ユウと發音する類。【(四)】參照。
【字源】平假名には「仁」(吳音ニ)の
草體、變體平假名にも同字の草體、よ・平
本は「爾」(吳音ニ)の別體なる「尔」の草
體、才は「耳」(吳音ニ)の草體、且は「丹」
(訓ニ)の草體より出づ。片假名ニは、
【(二)】(吳音ニ)より出たりとも、「仁」の
略體なりともいひ、又、萬葉假名として
は、前記「仁」「爾」「尔」「耳」「二」の外
字音に據れるものに「通」「逆」「爾」
「你」「兒」「耳」「而」「貳」「尼」「人」
「柔」「日」等、訓を取れるものに「煮」
「煎」「似」「荷」等あり。

【荷(名)】【擧へ、になひ、又、運送しなど
する品物。にもつ。【一身に負ふ實買
擔。任務。責任。「荷、重し」【目手敷を要
する物。厄介のもの。じやまもの。「荷にま
する」【四、梁柱などの上にかかる重量
にもつ荷持參照。
荷が下(オ)りる【句】責任除かる。義

務、完了す。重荷(オ)がおりる。今宮心
中、御念が入つて忝い、私の荷が下りま
したと。【荷、重きに過ぐ。【
荷が勝つ【句】【荷、重きに過ぐ。【
負擔、過重なり。
荷が過ぎる【句】前條に同じ。
荷にす【句】邪魔物にす。荷厄介(オ)に
す。もてあます。
荷になる【句】擧へてゆく手敷を要
し、途中の邪魔になる。
荷の緒【句】荷を結ぶ緒。荷に結びつ
けて、これを持つて便なるやうにした
緒。こには、萬葉(東人(オ)の荷前(オ)
の箱の荷の緒にも妹が心に乘りにけ
るかも。【
荷を下(オ)す【句】責任を果す。義務
を完了す。重荷(オ)をおろす。【にろし
土(名)【土(オ)と同じ。古語】「亦に」
【青に】土黒(オ)し。【
に丹(名)【あかつち。あかに。古、染料
に用ひたり。【にぬり(丹塗)參照。【赤き
繪具(オ)。酒松「口びるは、にといふも
塗りたるやうに」【方支調丹着き、白がね
こがねの箱など、所所に著きて見ゆる木
のわれ。【
丹の穂(オ)【句】顔面に、赤く美しくあ
らはること。「赤穂(オ)のほに」參照。
【古語】萬葉にのほなす(面(オ)の上)に
何處ゆか、敷かきたりし。【吾が戀ふ
にのほのおもわ今宵かも天の川原に
岩枕纏(オ)かむ。【
に瓊(名)【たま。赤色のたま。【古語】釋紀
に「私記」古者謂玉或爲努、或爲貳(オ)。
【煮(名)【煮ること、又、煮たること。【
え。【煮が足らぬ。【
に尼(名)【びに(比丘尼)の略。あま。
に貳(名)【二の度目。二番。第二。つ
ぎ。【二の矢】【二の鉞(オ)】其(一)には一に
思はずば、……いみじう憎まれ惡しう
せられてあらん。二、三にては、死ぬとも
あらじ。【源氏「二の車に忍びて」【二なら
ぶこと。同等。【二重ぬること。二重。

【同】一ならぬこと。たがふこと。異にす
ること。【價を二にせす】【ふたごころ
二心(オ)】。【三味線などの三本の線の眞
中にあるもの。にのいと。【一三に對し
て】【にがり(二上)參照。【二が上る。【
二鷹三茄子(オ)【句】「一富士、二鷹、
三茄子」を見よ。
二の刀(オ)【句】二度目に斬りつく
る太刀。【平家「景經が打つ太刀に、義盛
が、(オ)の、胃の眞向(オ)打割られて、
二の太刀に頸打落さる。【
二の手【句】には二(二番手)に同じ。
二の階(オ)【句】位階の二位。【増鏡】文
治元年、二のはしを上りしも。【
二の槍【句】二度目に突出す槍。【二
の槍を入る。【見よ。
二越前(オ)【句】「一播磨、二越前」を
【貳(名)】太宰府の次官。大貳、少貳の
別あり。【ふたつ。
に貳【數】一に一を加へたるもの。
二無し【句】になし(似なし)を見よ。
二も無く三も無し【句】(佛)「二つ
も無く三つも無し」に同じ。大鏡「只今
の入道殿下の御有様、古を聞き、今を見
はべるにも、二もなく、三もなく、並な
く、はかりなくおはします。【
に不【助動】(オ)の連體形なるぬの轉。
【古語】貳己(オ)が緒をぬす入日(オ)せむ
と。【窺はく已知るに御眞木入日(オ)せむ
はや】萬葉言はむすむすむすべ知らに。【
に【助動】ぬの命令形なるぬの詠。【古語】
萬葉「久方の天路(オ)は遠しなほなほに家
に歸りて業(オ)をしままに」【同、この川に
朝菜洗ふ子なれもあれもよちをぞ持てる
いて子たばり。【
に【助】【名詞】代名詞に添ひて、事物地
位方向時などを、それと指示する語。地
位方向の場合のは、へに似て、一層明確に
指示する意あり。【汝に與ふ】冷氣に襲
はる【東京に赴く】右に向く【午後三時
に歸る】三に二を加ふ【乙は甲に劣る】
【名詞に添ひて、その事物に、他の事物の

添ひ加はる意を示す語。【月に村雲、花に
風】【鬼に金棒(オ)】【名詞・代名詞に添
ひて、にて、に於て、等の意を示す語。
【泰き次第に候ふ】大に非ず】よき折に
もあるかな【名詞・代名詞に添ひて、變
化する事物を示す語。【氷解けて、水
になる】黒色に變ず】「議員に選舉す」大
臣に任ず】【名詞又は名詞狀動詞に添
ひて、原因・手段・方法、又は目的の事物
を示す語。【紙を買ひ添ひて、に就きての意
を示す語。【深き心を君に見るかな】産
物に富む】【名詞・動詞又は句などに添
ひて、副詞又は副詞句を形づくる語。【俄
かに】疾く】【思ふがままに】雪のごと
くに】【ひた下(オ)】に下る。【二つの同
一なる動詞の中に挟まりて、その動詞の
意を強むる語。【雨降りに降る】採みに
採うてぞ攻め寄する】【動詞・形容詞に
添ひて、然るにの意を示す語。【ものを
「風も無きに」花散る】【動詞・形容詞に
添ひて、云云なるに因りて、云云なるが故
に等の意を示す語。【風寒きに、疾く歸ら
ずや】
にあがり【二上(名)】三味線の弾き方
の一。二の糸の調子が、本調子の場合より
も高きこと、又その曲。(本調子三下(オ)
に對して)。
にあがり【二上新内(名)】新内
節の節まはしにして唄ふ、二上の小歌。詞
も、節も、哀婉の情趣に富む。
にあがる【煮上る】【動四自】にえがる(煮
上る)の詠。
にあく【煮灰汁(名)】煮立てたる灰汁
にあぐ【煮上ぐ】【動下二他】完全に煮る。
にあげ【荷揚(名)】船に積みたる荷物を、
陸地に揚ぐること。みづあげ。
にあげ【かう】荷揚港(名)【にろしかう(荷
卸港)に同じ。
にあげ【煮揚(名)】煮たる食物
などを器より取出し、その液(オ)を、したた
せなどを器にため、暫時入れおく。【煮
魚などを煮る時、その肉のくづれぬや

【同】一ならぬこと。たがふこと。異にす
ること。【價を二にせす】【ふたごころ
二心(オ)】。【三味線などの三本の線の眞
中にあるもの。にのいと。【一三に對し
て】【にがり(二上)參照。【二が上る。【
二鷹三茄子(オ)【句】「一富士、二鷹、
三茄子」を見よ。
二の刀(オ)【句】二度目に斬りつく
る太刀。【平家「景經が打つ太刀に、義盛
が、(オ)の、胃の眞向(オ)打割られて、
二の太刀に頸打落さる。【
二の手【句】には二(二番手)に同じ。
二の階(オ)【句】位階の二位。【増鏡】文
治元年、二のはしを上りしも。【
二の槍【句】二度目に突出す槍。【二
の槍を入る。【見よ。
二越前(オ)【句】「一播磨、二越前」を
【貳(名)】太宰府の次官。大貳、少貳の
別あり。【ふたつ。
に貳【數】一に一を加へたるもの。
二無し【句】になし(似なし)を見よ。
二も無く三も無し【句】(佛)「二つ
も無く三つも無し」に同じ。大鏡「只今
の入道殿下の御有様、古を聞き、今を見
はべるにも、二もなく、三もなく、並な
く、はかりなくおはします。【
に不【助動】(オ)の連體形なるぬの轉。
【古語】貳己(オ)が緒をぬす入日(オ)せむ
と。【窺はく已知るに御眞木入日(オ)せむ
はや】萬葉言はむすむすむすべ知らに。【
に【助動】ぬの命令形なるぬの詠。【古語】
萬葉「久方の天路(オ)は遠しなほなほに家
に歸りて業(オ)をしままに」【同、この川に
朝菜洗ふ子なれもあれもよちをぞ持てる
いて子たばり。【
に【助】【名詞】代名詞に添ひて、事物地
位方向時などを、それと指示する語。地
位方向の場合のは、へに似て、一層明確に
指示する意あり。【汝に與ふ】冷氣に襲
はる【東京に赴く】右に向く【午後三時
に歸る】三に二を加ふ【乙は甲に劣る】
【名詞に添ひて、その事物に、他の事物の

【同】一ならぬこと。たがふこと。異にす
ること。【價を二にせす】【ふたごころ
二心(オ)】。【三味線などの三本の線の眞
中にあるもの。にのいと。【一三に對し
て】【にがり(二上)參照。【二が上る。【
二鷹三茄子(オ)【句】「一富士、二鷹、
三茄子」を見よ。
二の刀(オ)【句】二度目に斬りつく
る太刀。【平家「景經が打つ太刀に、義盛
が、(オ)の、胃の眞向(オ)打割られて、
二の太刀に頸打落さる。【
二の手【句】には二(二番手)に同じ。
二の階(オ)【句】位階の二位。【増鏡】文
治元年、二のはしを上りしも。【
二の槍【句】二度目に突出す槍。【二
の槍を入る。【見よ。
二越前(オ)【句】「一播磨、二越前」を
【貳(名)】太宰府の次官。大貳、少貳の
別あり。【ふたつ。
に貳【數】一に一を加へたるもの。
二無し【句】になし(似なし)を見よ。
二も無く三も無し【句】(佛)「二つ
も無く三つも無し」に同じ。大鏡「只今
の入道殿下の御有様、古を聞き、今を見
はべるにも、二もなく、三もなく、並な
く、はかりなくおはします。【
に不【助動】(オ)の連體形なるぬの轉。
【古語】貳己(オ)が緒をぬす入日(オ)せむ
と。【窺はく已知るに御眞木入日(オ)せむ
はや】萬葉言はむすむすむすべ知らに。【
に【助動】ぬの命令形なるぬの詠。【古語】
萬葉「久方の天路(オ)は遠しなほなほに家
に歸りて業(オ)をしままに」【同、この川に
朝菜洗ふ子なれもあれもよちをぞ持てる
いて子たばり。【
に【助】【名詞】代名詞に添ひて、事物地
位方向時などを、それと指示する語。地
位方向の場合のは、へに似て、一層明確に
指示する意あり。【汝に與ふ】冷氣に襲
はる【東京に赴く】右に向く【午後三時
に歸る】三に二を加ふ【乙は甲に劣る】
【名詞に添ひて、その事物に、他の事物の

【同】一ならぬこと。たがふこと。異にす
ること。【價を二にせす】【ふたごころ
二心(オ)】。【三味線などの三本の線の眞
中にあるもの。にのいと。【一三に對し
て】【にがり(二上)參照。【二が上る。【
二鷹三茄子(オ)【句】「一富士、二鷹、
三茄子」を見よ。
二の刀(オ)【句】二度目に斬りつく
る太刀。【平家「景經が打つ太刀に、義盛
が、(オ)の、胃の眞向(オ)打割られて、
二の太刀に頸打落さる。【
二の手【句】には二(二番手)に同じ。
二の階(オ)【句】位階の二位。【増鏡】文
治元年、二のはしを上りしも。【
二の槍【句】二度目に突出す槍。【二
の槍を入る。【見よ。
二越前(オ)【句】「一播磨、二越前」を
【貳(名)】太宰府の次官。大貳、少貳の
別あり。【ふたつ。
に貳【數】一に一を加へたるもの。
二無し【句】になし(似なし)を見よ。
二も無く三も無し【句】(佛)「二つ
も無く三つも無し」に同じ。大鏡「只今
の入道殿下の御有様、古を聞き、今を見
はべるにも、二もなく、三もなく、並な
く、はかりなくおはします。【
に不【助動】(オ)の連體形なるぬの轉。
【古語】貳己(オ)が緒をぬす入日(オ)せむ
と。【窺はく已知るに御眞木入日(オ)せむ
はや】萬葉言はむすむすむすべ知らに。【
に【助動】ぬの命令形なるぬの詠。【古語】
萬葉「久方の天路(オ)は遠しなほなほに家
に歸りて業(オ)をしままに」【同、この川に
朝菜洗ふ子なれもあれもよちをぞ持てる
いて子たばり。【
に【助】【名詞】代名詞に添ひて、事物地
位方向時などを、それと指示する語。地
位方向の場合のは、へに似て、一層明確に
指示する意あり。【汝に與ふ】冷氣に襲
はる【東京に赴く】右に向く【午後三時
に歸る】三に二を加ふ【乙は甲に劣る】
【名詞に添ひて、その事物に、他の事物の

うに、それを入れて煮る。煮る。

にあげにんそく 荷揚人足【名】荷揚に
従事する人足。こあげにんそく。
にあげは 荷揚場荷揚場【名】荷揚をな
す場所。あげば。はとば。

にあし 荷足【名】そこ(底荷)に同じ。
にあせ 荷汗【名】穀類・押粕などを船舶
に積込み、暖地より寒地へ向けに航行す
る時、諸貨物蒸熱して、船舶内に生ずる汗
の如き水滴。鋼鐵船は、木船に比してこ
れを生ずること多く、貨物を濡れ損ぜし
む。これを汗瀧【名】と稱す。ふなあせ。
あせ。

にあはし 似合はし【形二】似合ふやうな
り。釣合ひであり。ふさはし。相慮なり。
にあはず 煮合はず【動四他】まぜ合は
せて煮る。共に煮る。【同じ】
にあはず 煮合はず【動二他】前條に
にあひ 似合【名】似合ふこと、又、似
合ひであること。釣合ふこと、又、釣合ひ
であること。在言(厨下)似合(用)【
三】結婚などの上にて、年齢・身分などの釣
合ひであること。五人女(都)の物がたき住
合(を)嫌ひ、物静かなるかか(る)山家に、似
合の縁もなき身をひきま(さ)けて、里の仕業
の庭ば(た)らき【無類昔八五】又、かのお方
も、若い身の上、何時までも(獨身)【
三】でも
濟まぬ程に、似合な者もあるならば奥深
も持たせま(し)て【
三】
似合似合の釜の蓋【名】句【大】
形などの同一ならざる釜の蓋も、それ
ぞれし(り)と合ふ釜のある意【い】か
につ(ま)らぬ物にも、それぞ(れ)釣合ひた
る相手のあるものなり。似合ふ釜の蓋。
破鍋(心)に緩蓋(心)【
三】
にあひてら 似合頃【名】結婚の上にて、
年齢の釣合ひであること。四五二つちが
ひのつ(ま)は、似合比との調(調)【か】
にあふ 似合ふ【動四自】配合よく見ゆ
つりあふ。につく。ふさふ。適合す。相
當す。相應す。にやふ。
似合はぬ僧の腕立(腕立)【句】人は、
その身に似合はしからぬ事を好む傾あ

るものなり。【諺語】曲曲(曲曲)似合はぬ
僧の腕(腕)だて、さこそをかしと思(思)すら(ら)め【
三】
似合ふ釜の蓋【名】句【似合(合)】似
合の釜の蓋に同じ。鍋(鍋)合(合)口(口)に任(任)
する法(法)問(問)、似合ふ釜の蓋ありて響(響)むれ
ば、よきぞと心得(心得)て、鼻頭(鼻頭)を反(反)ら(ら)し
慢(慢)すれども【
三】
似合ふ夫婦の鍋の蓋【名】句【似
合(合)】似合の釜の蓋を見よ【夫婦の、
性行(性行)相(相)似(似)て、釣合(釣合)ひてある形容(形容)【や
嘲(嘲)る意(意)にてい(い)ふ】似(似)た者(者)夫婦(夫婦)【諺語】
に(に)あ(あ)へ(へ)煮(煮)置(置)煮(煮)和(和)【名】鮭(鮭)などの皮(皮)梅
干(干)田(田)作(作)【名】木(木)茸(茸)【名】銀(銀)杏(杏)【名】樺(樺)【
三】
黒豆(黒豆)胡桃(胡桃)【名】などを混(混)合(合)して、旨(旨)煮(煮)【
三】
とし、玉子(玉子)をかけたる食品(食品)。
にいり 兄【名】あに(兄)を云(云)ふ。【幼兒の、
【語】
にいり 二西【名】類書(類書)纂(纂)要(要)に「小西大
西(西)二山(山)名、在(在)古(古)辰(辰)州(州)府(府)城(城)西(西)、中(中)有(有)三(三)書(書)千
卷(卷)相(相)傳(傳)、秦(秦)人(人)于(于)此(此)而(而)學(學)因(因)留(留)焉(焉)」とある
に本(本)づく【書籍(書籍)を多(多)く藏(藏)する所(所)【二西
の書(書)】
にいさま 兄様【名】にい(兄)の敬(敬)稱(稱)。
にいさま 兄様【名】前條(前條)の音(音)便(便)。
にいり 丹石【名】(鑿)代(代)諸(諸)石(石)【名】又(又)は
黃土(黃土)の類(類)。
にいり 二【名】次條(次條)を見よ。
二(二)天(天)作(作)【名】の五(五)【句】珠算(珠算)の割
算(算)にて、一(一)を二(二)にて割(割)る時(時)、桁(桁)の上(上)の五
珠(珠)【名】を一つ(一つ)おろすこと。【かぞふる
こと。計算(計算)】
にいちゃん 兄様【名】にい(兄)の敬(敬)稱(稱)の
訛(訛)【幼兒(幼兒)の語(語)】
にいり 煮煮【名】煮(煮)ること。【幼兒(幼兒)の
ににい(い)せ(せ)むににい(い)に(に)蟬(蟬)【名】「動(動)兒(兒)な
つ(つ)み(み)【夏(夏)蟬(蟬)に同じ。】
にいり 賑やか【名】賑(賑)やか(賑)やか【
の音(音)便(便)【東京(東京)の幼(幼)兒(兒)の語(語)】
にいり 木乃伊【名】みいら(木乃伊)の訛(訛)。
にいり どり木乃伊取【名】みいら(木
乃伊取)の訛(訛)。
にいり 丹色【名】丹(丹)の色(色)。丹(丹)の如
き色(色)。たんいろ。

にいろ 煮色【名】食物(食物)の煮上(煮上)りたる
色(色)【いろ(色)【名】を見よ【鯨(鯨)節(節)を削(削)り、醬
油(油)と共に煮(煮)出(出)して、その滓(滓)を去(去)りたるも
の。吸(吸)物(物)などの汁(汁)に用(用)ふ。】
にいろ 乳【名】にいろ(乳)を見よ。
にいろ 乳【名】乳(乳)【名】の粥(粥)を見よ。和名
【乳(乳)離(離)通(通)字(字)可(可)遊(遊)】
にいろ 二羽【名】合掌(合掌)する時(時)の、左(左)右(右)の手
盛(盛)衰(衰)記(記)【二羽(羽)合(合)掌(掌)する時(時)の、十(十)念(念)稱(稱)名(名)の
聲(聲)絶(絶)えず【
三】
にいろ 荷受【名】送り來(來)りたる荷(荷)を受
る人(人)。にいろ(荷)受(受)主(主)【名】荷(荷)受(受)をす
る人(人)。にいろ(荷)受(受)主(主)【前條(前條)に同じ。】
にいろ 荷受主【名】荷(荷)受(受)をす
る人(人)。にいろ(荷)受(受)主(主)【前條(前條)に同じ。】
にいろ 柔弱【名】じょう(柔)弱(弱)【
三】
にいろ じん 柔順【名】じょう(柔)順(順)【
三】
にいろ 牛莊【名】地(地)【歐(歐)米(米)人(人)の、こ
の地(地)の北(北)方(方)にある牛(牛)莊(莊)城(城)の所(所)在(在)地(地)と混(混)同
して稱(稱)へたるもの【えい(こ)【管(管)口(口)に同じ。】
にいろ 牛環【名】Newton's
ring【名】【理(理)】一(一)面(面)平(平)なる凸(凸)レンズを、
その凸(凸)面(面)を下(下)にして、硝(硝)子(子)板(板)に載(載)せ、上(上)方
より光(光)線(線)を當(當)つる時(時)に、現(現)る明(明)暗(暗)の縞(縞)の
如(如)き美(美)麗(麗)なる色(色)彩(彩)の輪(輪)。英國(英國)のニウ
トンの發(發)見(見)に係(係)り、凸(凸)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)
波(波)と、平(平)板(板)の上(上)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)波(波)
と、互(互)に干(干)渉(渉)するによりて生(生)ず。にいろと
んりんぐ。
にいろ 運動の第一法則【英
Newton's first law of motion】【理(理)】
静止(静止)せる物(物)體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる
間は、静止(静止)状態(状態)を繼(繼)續(續)し、又、運動(運動)せる物
體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる間は、同一(同一)
の方向(方向)に、同一(同一)の速(速)さにて進(進)行(行)を繼(繼)續(續)す
といふ法(法)則(則)。慣(慣)性(性)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の第三法則【英
Newton's third law of motion】【理(理)】
作用(作用)あれば反(反)作用(作用)あり、而(而)して作用(作用)と反
作用(作用)とは、大(大)きさは相(相)等(等)しく、方(方)向(向)は反(反)對(對)な
りといふ法(法)則(則)。反(反)作用(作用)の法(法)則(則)。

にいろ 運動の第二法則【英
Newton's second law of motion】【理(理)】
運動(運動)量(量)の變(變)化(化)は、力(力)と力(力)の作用(作用)せる時間(時間)
との相(相)乘(乘)積(積)に比例(比例)し、且(且)つ、その變(變)化(化)の方
向(向)は、作用(作用)せる力(力)と同一(同一)なりといふ法(法)則(則)。
又、力(力)は質(質)量(量)と加(加)速度(速度)との相(相)乘(乘)積(積)に比例
すともいふ。加(加)速度(速度)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の法則【英
Newton's law of motion】【理(理)】物(物)體(體)の運動(運動)に關(關)して、
英(英)人(人)ニウ(ニウ)ト(ト)ン(ン)が規定(規定)したる法(法)則(則)【第
一(一)法(法)則(則)【第二(二)法(法)則(則)【第三(三)法(法)則(則)の三(三)つあり。
各(各)條(條)を見よ。】
にいろ 牛環【英
Newton's ring】【名】
【理(理)】二(二)面(面)平(平)なる凸(凸)レンズを、
その凸(凸)面(面)を下(下)にして、硝(硝)子(子)板(板)に載(載)せ、上(上)方
より光(光)線(線)を當(當)つる時(時)に、現(現)る明(明)暗(暗)の縞(縞)の
如(如)き美(美)麗(麗)なる色(色)彩(彩)の輪(輪)。英國(英國)のニウ
トンの發(發)見(見)に係(係)り、凸(凸)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)
波(波)と、平(平)板(板)の上(上)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)波(波)
と、互(互)に干(干)渉(渉)するによりて生(生)ず。にいろと
んりんぐ。
にいろ 運動の第一法則【英
Newton's first law of motion】【理(理)】
静止(静止)せる物(物)體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる
間は、静止(静止)状態(状態)を繼(繼)續(續)し、又、運動(運動)せる物
體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる間は、同一(同一)
の方向(方向)に、同一(同一)の速(速)さにて進(進)行(行)を繼(繼)續(續)す
といふ法(法)則(則)。慣(慣)性(性)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の第三法則【英
Newton's third law of motion】【理(理)】
作用(作用)あれば反(反)作用(作用)あり、而(而)して作用(作用)と反
作用(作用)とは、大(大)きさは相(相)等(等)しく、方(方)向(向)は反(反)對(對)な
りといふ法(法)則(則)。反(反)作用(作用)の法(法)則(則)。

にいろ 運動の第二法則【英
Newton's second law of motion】【理(理)】
運動(運動)量(量)の變(變)化(化)は、力(力)と力(力)の作用(作用)せる時間(時間)
との相(相)乘(乘)積(積)に比例(比例)し、且(且)つ、その變(變)化(化)の方
向(向)は、作用(作用)せる力(力)と同一(同一)なりといふ法(法)則(則)。
又、力(力)は質(質)量(量)と加(加)速度(速度)との相(相)乘(乘)積(積)に比例
すともいふ。加(加)速度(速度)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の法則【英
Newton's law of motion】【理(理)】物(物)體(體)の運動(運動)に關(關)して、
英(英)人(人)ニウ(ニウ)ト(ト)ン(ン)が規定(規定)したる法(法)則(則)【第
一(一)法(法)則(則)【第二(二)法(法)則(則)【第三(三)法(法)則(則)の三(三)つあり。
各(各)條(條)を見よ。】
にいろ 牛環【英
Newton's ring】【名】
【理(理)】二(二)面(面)平(平)なる凸(凸)レンズを、
その凸(凸)面(面)を下(下)にして、硝(硝)子(子)板(板)に載(載)せ、上(上)方
より光(光)線(線)を當(當)つる時(時)に、現(現)る明(明)暗(暗)の縞(縞)の
如(如)き美(美)麗(麗)なる色(色)彩(彩)の輪(輪)。英國(英國)のニウ
トンの發(發)見(見)に係(係)り、凸(凸)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)
波(波)と、平(平)板(板)の上(上)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)波(波)
と、互(互)に干(干)渉(渉)するによりて生(生)ず。にいろと
んりんぐ。
にいろ 運動の第一法則【英
Newton's first law of motion】【理(理)】
静止(静止)せる物(物)體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる
間は、静止(静止)状態(状態)を繼(繼)續(續)し、又、運動(運動)せる物
體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる間は、同一(同一)
の方向(方向)に、同一(同一)の速(速)さにて進(進)行(行)を繼(繼)續(續)す
といふ法(法)則(則)。慣(慣)性(性)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の第三法則【英
Newton's third law of motion】【理(理)】
作用(作用)あれば反(反)作用(作用)あり、而(而)して作用(作用)と反
作用(作用)とは、大(大)きさは相(相)等(等)しく、方(方)向(向)は反(反)對(對)な
りといふ法(法)則(則)。反(反)作用(作用)の法(法)則(則)。

にいろ 運動の第二法則【英
Newton's second law of motion】【理(理)】
運動(運動)量(量)の變(變)化(化)は、力(力)と力(力)の作用(作用)せる時間(時間)
との相(相)乘(乘)積(積)に比例(比例)し、且(且)つ、その變(變)化(化)の方
向(向)は、作用(作用)せる力(力)と同一(同一)なりといふ法(法)則(則)。
又、力(力)は質(質)量(量)と加(加)速度(速度)との相(相)乘(乘)積(積)に比例
すともいふ。加(加)速度(速度)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の法則【英
Newton's law of motion】【理(理)】物(物)體(體)の運動(運動)に關(關)して、
英(英)人(人)ニウ(ニウ)ト(ト)ン(ン)が規定(規定)したる法(法)則(則)【第
一(一)法(法)則(則)【第二(二)法(法)則(則)【第三(三)法(法)則(則)の三(三)つあり。
各(各)條(條)を見よ。】
にいろ 牛環【英
Newton's ring】【名】
【理(理)】二(二)面(面)平(平)なる凸(凸)レンズを、
その凸(凸)面(面)を下(下)にして、硝(硝)子(子)板(板)に載(載)せ、上(上)方
より光(光)線(線)を當(當)つる時(時)に、現(現)る明(明)暗(暗)の縞(縞)の
如(如)き美(美)麗(麗)なる色(色)彩(彩)の輪(輪)。英國(英國)のニウ
トンの發(發)見(見)に係(係)り、凸(凸)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)
波(波)と、平(平)板(板)の上(上)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)波(波)
と、互(互)に干(干)渉(渉)するによりて生(生)ず。にいろと
んりんぐ。
にいろ 運動の第一法則【英
Newton's first law of motion】【理(理)】
静止(静止)せる物(物)體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる
間は、静止(静止)状態(状態)を繼(繼)續(續)し、又、運動(運動)せる物
體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる間は、同一(同一)
の方向(方向)に、同一(同一)の速(速)さにて進(進)行(行)を繼(繼)續(續)す
といふ法(法)則(則)。慣(慣)性(性)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の第三法則【英
Newton's third law of motion】【理(理)】
作用(作用)あれば反(反)作用(作用)あり、而(而)して作用(作用)と反
作用(作用)とは、大(大)きさは相(相)等(等)しく、方(方)向(向)は反(反)對(對)な
りといふ法(法)則(則)。反(反)作用(作用)の法(法)則(則)。

にいろ

にいろ

にいろ

にいろ 運動の第二法則【英
Newton's second law of motion】【理(理)】
運動(運動)量(量)の變(變)化(化)は、力(力)と力(力)の作用(作用)せる時間(時間)
との相(相)乘(乘)積(積)に比例(比例)し、且(且)つ、その變(變)化(化)の方
向(向)は、作用(作用)せる力(力)と同一(同一)なりといふ法(法)則(則)。
又、力(力)は質(質)量(量)と加(加)速度(速度)との相(相)乘(乘)積(積)に比例
すともいふ。加(加)速度(速度)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の法則【英
Newton's law of motion】【理(理)】物(物)體(體)の運動(運動)に關(關)して、
英(英)人(人)ニウ(ニウ)ト(ト)ン(ン)が規定(規定)したる法(法)則(則)【第
一(一)法(法)則(則)【第二(二)法(法)則(則)【第三(三)法(法)則(則)の三(三)つあり。
各(各)條(條)を見よ。】
にいろ 牛環【英
Newton's ring】【名】
【理(理)】二(二)面(面)平(平)なる凸(凸)レンズを、
その凸(凸)面(面)を下(下)にして、硝(硝)子(子)板(板)に載(載)せ、上(上)方
より光(光)線(線)を當(當)つる時(時)に、現(現)る明(明)暗(暗)の縞(縞)の
如(如)き美(美)麗(麗)なる色(色)彩(彩)の輪(輪)。英國(英國)のニウ
トンの發(發)見(見)に係(係)り、凸(凸)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)
波(波)と、平(平)板(板)の上(上)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)波(波)
と、互(互)に干(干)渉(渉)するによりて生(生)ず。にいろと
んりんぐ。
にいろ 運動の第一法則【英
Newton's first law of motion】【理(理)】
静止(静止)せる物(物)體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる
間は、静止(静止)状態(状態)を繼(繼)續(續)し、又、運動(運動)せる物
體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる間は、同一(同一)
の方向(方向)に、同一(同一)の速(速)さにて進(進)行(行)を繼(繼)續(續)す
といふ法(法)則(則)。慣(慣)性(性)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の第三法則【英
Newton's third law of motion】【理(理)】
作用(作用)あれば反(反)作用(作用)あり、而(而)して作用(作用)と反
作用(作用)とは、大(大)きさは相(相)等(等)しく、方(方)向(向)は反(反)對(對)な
りといふ法(法)則(則)。反(反)作用(作用)の法(法)則(則)。

にいろ 運動の第二法則【英
Newton's second law of motion】【理(理)】
運動(運動)量(量)の變(變)化(化)は、力(力)と力(力)の作用(作用)せる時間(時間)
との相(相)乘(乘)積(積)に比例(比例)し、且(且)つ、その變(變)化(化)の方
向(向)は、作用(作用)せる力(力)と同一(同一)なりといふ法(法)則(則)。
又、力(力)は質(質)量(量)と加(加)速度(速度)との相(相)乘(乘)積(積)に比例
すともいふ。加(加)速度(速度)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の法則【英
Newton's law of motion】【理(理)】物(物)體(體)の運動(運動)に關(關)して、
英(英)人(人)ニウ(ニウ)ト(ト)ン(ン)が規定(規定)したる法(法)則(則)【第
一(一)法(法)則(則)【第二(二)法(法)則(則)【第三(三)法(法)則(則)の三(三)つあり。
各(各)條(條)を見よ。】
にいろ 牛環【英
Newton's ring】【名】
【理(理)】二(二)面(面)平(平)なる凸(凸)レンズを、
その凸(凸)面(面)を下(下)にして、硝(硝)子(子)板(板)に載(載)せ、上(上)方
より光(光)線(線)を當(當)つる時(時)に、現(現)る明(明)暗(暗)の縞(縞)の
如(如)き美(美)麗(麗)なる色(色)彩(彩)の輪(輪)。英國(英國)のニウ
トンの發(發)見(見)に係(係)り、凸(凸)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)
波(波)と、平(平)板(板)の上(上)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)波(波)
と、互(互)に干(干)渉(渉)するによりて生(生)ず。にいろと
んりんぐ。
にいろ 運動の第一法則【英
Newton's first law of motion】【理(理)】
静止(静止)せる物(物)體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる
間は、静止(静止)状態(状態)を繼(繼)續(續)し、又、運動(運動)せる物
體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる間は、同一(同一)
の方向(方向)に、同一(同一)の速(速)さにて進(進)行(行)を繼(繼)續(續)す
といふ法(法)則(則)。慣(慣)性(性)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の第三法則【英
Newton's third law of motion】【理(理)】
作用(作用)あれば反(反)作用(作用)あり、而(而)して作用(作用)と反
作用(作用)とは、大(大)きさは相(相)等(等)しく、方(方)向(向)は反(反)對(對)な
りといふ法(法)則(則)。反(反)作用(作用)の法(法)則(則)。

にいろ 運動の第二法則【英
Newton's second law of motion】【理(理)】
運動(運動)量(量)の變(變)化(化)は、力(力)と力(力)の作用(作用)せる時間(時間)
との相(相)乘(乘)積(積)に比例(比例)し、且(且)つ、その變(變)化(化)の方
向(向)は、作用(作用)せる力(力)と同一(同一)なりといふ法(法)則(則)。
又、力(力)は質(質)量(量)と加(加)速度(速度)との相(相)乘(乘)積(積)に比例
すともいふ。加(加)速度(速度)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の法則【英
Newton's law of motion】【理(理)】物(物)體(體)の運動(運動)に關(關)して、
英(英)人(人)ニウ(ニウ)ト(ト)ン(ン)が規定(規定)したる法(法)則(則)【第
一(一)法(法)則(則)【第二(二)法(法)則(則)【第三(三)法(法)則(則)の三(三)つあり。
各(各)條(條)を見よ。】
にいろ 牛環【英
Newton's ring】【名】
【理(理)】二(二)面(面)平(平)なる凸(凸)レンズを、
その凸(凸)面(面)を下(下)にして、硝(硝)子(子)板(板)に載(載)せ、上(上)方
より光(光)線(線)を當(當)つる時(時)に、現(現)る明(明)暗(暗)の縞(縞)の
如(如)き美(美)麗(麗)なる色(色)彩(彩)の輪(輪)。英國(英國)のニウ
トンの發(發)見(見)に係(係)り、凸(凸)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)
波(波)と、平(平)板(板)の上(上)面(面)より反(反)射(射)したる光(光)波(波)
と、互(互)に干(干)渉(渉)するによりて生(生)ず。にいろと
んりんぐ。
にいろ 運動の第一法則【英
Newton's first law of motion】【理(理)】
静止(静止)せる物(物)體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる
間は、静止(静止)状態(状態)を繼(繼)續(續)し、又、運動(運動)せる物
體(體)は、外(外)力(力)の作用(作用)を受けざる間は、同一(同一)
の方向(方向)に、同一(同一)の速(速)さにて進(進)行(行)を繼(繼)續(續)す
といふ法(法)則(則)。慣(慣)性(性)の法(法)則(則)。
にいろ 運動の第三法則【英
Newton's third law of motion】【理(理)】
作用(作用)あれば反(反)作用(作用)あり、而(而)して作用(作用)と反
作用(作用)とは、大(大)きさは相(相)等(等)しく、方(方)向(向)は反(反)對(對)な
りといふ法(法)則(則)。反(反)作用(作用)の法(法)則(則)。

にうめん 煮麵 [名]「煮麵」の音便
醤油を加へて煮たる素麵(素)しよめん
ん。宜風(風)入麵(天)酒等」

にうり 煮賣 [名]飯又は副食物などの
煮たるを賣ること、又その煮たる物、又こ
れを賣る人。やきうり(燒賣)参照。

にうりざかや 煮賣酒屋 [名]煮賣を兼
業とする居酒屋。下等なる飲食店。

にうりだいや 煮賣臺屋 [名]煮賣を兼
業とする臺屋。

にうりちやみせ 煮賣茶店 [名]宿場(宿)の
などにありて、煮賣を兼業とする茶店。

にうりちやや 煮賣茶屋 [名]煮賣を兼
業とする茶屋。徳州(本)南無三(後)の
煮賣茶屋の錢忘れた。遣つて來(三)う」

にうりふね 煮賣船 [名]川筋又は港の
内を漕ぎまはりて、かかり船などの旅客
に、酒食を賣る小舟。うろろふね。一葉
「涼しきや笠を帆にして煮賣舟」

にうりや 煮賣屋 [名]煮賣をなす家、又
その人。一代(五)數寄屋橋(三)の河岸端(三)
びなる煮賣屋」

にうわ 柔和 [名]柔順にして、温和なる
こと。すなほ。温順。

にうわ 柔和 [名]柔順にして、温和なる
こと。すなほ。温順。

にうわじつちきじや 柔和質直者 [名]
「佛」法華經の壽量品に「諸有(三)修(三)功德(三)
柔和質直者、則見(三)我身在(三)此而説(三)法(三)」と
あるに本づく。柔和にして、道に隨順し、
質朴且つ正直なる人。十誦(法華經)には、
柔和質直者とも、又、質直意柔軟とも述
べて」

にうわにんくえ 柔和忍辱衣 [名]
「佛」法華經の法師品に見えたる語「法華
(三)を弘通(三)する者は、柔和忍辱の心
あるを要し、この心あれば、一切の魔賊

(三)の毒毒を防ぐを得るを、衣服の、寒暑
を防ぎ得るに譬(て)いふ語。柔和、忍辱
の衣(三)也。にんくえ(忍辱衣)参照。續(拾)
選(柔和忍辱衣。我がために憂きを忍ぶ
のすりごろも亂れぬ色や心をならん」

にえ 煮 [名]煮ゆること、又煮えたる程
あり。 「(刃文)に同じ。

にえ 鈍沸 [名]「前條の語の轉義」はもん
にえ二衣 [名]「佛」十八物(三)の一。
袈裟(三)のみにては、右の肩と胸との露る
るによりて佛の制したる肩覆衣と袂と、

にえあがる 煮上る。煮揚る。【動四自】
煮えて、沸きあがる。沸き立つ。にえた
つ。にあがる。太平(記)煎え揚が湯の中
にして。【三十分】に煮ゆ。にあがる。

にえいる に入る。【動四自】にえむ(に
え込む)に同じ。

にえう 二曜 [名]「曜は燿に同じ。即ち
二つの燿(三)く物の義。しちえう(七曜)參
照」日と月。

にえかげん 煮加減 [名]煮えたる程あ
ひ。程よく煮えてあること。續(續)養(屬)
菓「初(し)ぐれ小鍋の芋の煮加減」

にえかへる 煮返る。【動四自】【甚しく
煮ゆ。たぎる。にえたつ。にえくりかへ
る。沸騰す。【三非常】にいらだつ。甚しく
煮ゆ。【湯】が煮ゆ。にえくりかへる。曾(根)崎(心)中
に「腸が煮え返り」

にえきる 煮切る。【動四自】全く煮ゆ。
煮え切らず【句】しかと決定せず。な
まにえなり。「態度、煮え切らず」

にえくりかへる 煮繰返る。【動四自】
にえかへる(煮返る)に同じ。

にえこじける 煮拗 [名]煮えこじけるこ
と、又、煮えこじてあること。にえこじ
れ。薩摩(歌)歌うても見せず、心がら、煮え
こじける(若)後家」

にえこじける 煮拗ける。【動下】「自」こ
じけて、容易に煮えず。にえこじれる。
にえこじれる煮拗 [名]にえこじける(煮拗)に
同じ。

にえこじれる 煮拗れる。【動下】「自」にえ
こじける(煮拗)に同じ。

にえこぼる 煮溢る。【動下二自】煮えか
へりて、器の外に溢る。煮えたちて、こぼ
れ出づ。にこぼる。

にえこむ に入込む。【動下二自】落入り
て、くこむ。めりこむ。陥没す。没入
す。にえいる。手(習)土ににえ込む(車)の
轍(三)也」

にえたぎる 煮滾る。【動四自】にえかへ
るにえたつ。煮立つ。【動四自】煮えて沸立
つ。にえかへる。にえたつ。先(代)鼓(胸)も煮
えたつ(風)爐(先)の也」

にえちや 煮茶 [名]煮えたちてある茶。
【動四自】に煮茶を掛く」

にえはな 煮花 [名]にはな(煮花)に同じ。
長(町)女(腹)切(に)え花の茶瓶(天)窓(三)を振
立てて」

にえふ 呻ぶ。【動四自】によぶ(呻ぶ)に同
じ。平(室)女(岩)屋の口(に)佇んで聞きけれ
ば大なる聲して、にえびけり」

にえゆ 煮湯 [名]煮えたちてある湯。た
ぎれる湯。熱湯。
煮湯を飲まず【句】相手の期待を裏
切りて、その心を苦しましむる所行(三)
をなす。【出す】こと。

におくり 荷送 [名]先方へ、荷物を送り
におくりじやう 荷送状 [名]おくりじやう
(送状)に同じ。

におくりん 荷送人 [名]「法」荷物を
運送するために、その荷物を差出す人。
(荷受人に對して)

におひ 荷負 [名]にかけ(荷)に同じ。
におひうま 荷負馬 [名]荷を背負ひて
運ぶ馬。にうま。駄馬。起(紀)ニオヒ
ウマ」

におん 二恩 [名]【父母の恩。榮(花)賊(二)
二恩父母之廟壇】。【師と親との恩。
におもひ 煮御水 [名]【ひはイと發音
す】。ツリみつ(作水)に同じ。【古語】
和名(粟)豆(久)利(美)豆。俗云(通)於(毛)比」

におもひ 煮御水湯 [名]【ひはイと發
音す】。前條(に)同じ。【古語】。名(義)抄(「粟ニ
オモヒニユムツクリ水」

におもひ 煮御水湯 [名]【ひはイと發
音す】。前條(に)同じ。【古語】。名(義)抄(「粟ニ
オモヒニユムツクリ水」

におろし 荷下荷卸 [名]【荷物をおろ
すこと。【三】「荷を下す」を見よ】責任を
果すこと。義務を完了すること。
におろしから 荷下港荷卸港 [名]「英
Port of discharge」船舶が荷卸をなす港。
「見よ。」

にか 二價 [名]「化」くわが(化合價)を
にか 二雅 [名]「文」詩經に於ける大雅
と小雅と。

にか 二河 [名]「佛」次條を見よ。「二河
の譬喻」。【曲曲(船)橋】二河の流はありなが
ら科(白)は十(の)道多し」

にか 二河(死) 【句】「佛」地獄に在り
といふ火の河及び水の河と、その中間
にある白道と。人あり、西に向ひて行
かんとするに、百千里にして、南に火の
河、北に水の河あり、各闊さ百歩、深き
こと底なく、南北邊際なく、その間に、
廣さ僅かに四五寸、東西の長さ百歩な
る白道あり、二河の火燭と水浪とは絶
えずこの道を燒き又は浸すを以て行
くに由なきに加へて、後より、六賊追ひ
來りて殺さんとし、此方の岸には、人あ
りて、急ぎ渡れと云ひ、向の岸には、又
人ありて、待つぞ、渡れと呼ぶに、意を
決して、白道を直進すれば、極樂の彼岸
に達し、永く諸難を免ると説く譬喻。
火の河は噴毒の炎に、水の河は貪慾の
水に、白道は衆生(三)が煩惱(三)之(妄)
想を排して、一念(發)起(三)し、往生淨土
の樂をなし得る道に、六賊は六根より
生ずる六慾に、又、誘ふ人は釋迦(と)阿彌
陀佛(と)に譬へたるもの。にかびやくたう
(二)河白道圖(參照)。太平(記)二河白道も
斯くやと覺えたる道、一通り纏れ出で
たり」

にか 二我 [名]「佛」人我(三)と法我(三)
にか 苦 [名]「にがし(苦し)の語幹」にがき
さま。「あらにがや」

にうめん

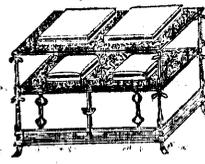
にえ

におん

におろし

二階

に「かい」二階【名】二階づくりの家の、上層の部分。【かい】へり(二階造)の略。遊女屋の二階、即ち各娼妓の部屋のある處。娼妓前庭(二階)の客別(二階)として、惚れられる氣もなく、又、きいた風のものがある。【かい】へり(二階造)の略。遊女屋の二階、即ち各娼妓の部屋のある處。娼妓前庭(二階)の客別(二階)として、惚れられる氣もなく、又、きいた風のものがある。



(四いかに)

又その厨子。二階棚の厨子。二階厨子。一説に、その扉のあるを厨子といひ、無きを二階といふと。源氏「づしにかいなど、あやしきまでし加へて」

二階が開(く)【句】主人に對する借金などのために、二階の使用を禁ぜられてゐる遊女、再びその使用を許さる。娼妓前庭「おま(さん)の病氣さへよくなれば、私(さ)がどうとも都合して、かへも濟まして上げ申し、内證の手前も取替ひ、二階のおくやうにして上げ申しんす」

二階から紙帳(しやう)【句】身に著けたる衣類などの吊しあがりであるさまの形容。つんつるてん。【諺語】

二階から尻(しり)を炙(い)る【句】二階に居ながら、階下の火にて煖を取る義。迂遠なる譬。【諺語】

二階から目薬(めやく)【句】次條の略。【諺語】二階から目薬をさす【句】二階に居ながら、階下の人に目薬をさす義。思ふやうに届かぬこと、又、迂遠なる譬。【諺語】

二階の伯母様(おばさま)【句】にかいまはし(二階廻)に同じ。【俚語】

にかい二界【名】佛十界と三界と。にかい尼戒【名】佛比丘尼(に)の持すべき戒。【】にある部屋。

にかいうら二階裏【名】二階の背面にかい【名】自家の二階

にかいだう二階貸【名】自家の二階

にかいが

を、他人に貸付すること。にかいがり二階借【名】他人の家の二階を賃借して住むこと。にかいへり二階蔵【名】二階づくりの蔵。【ある座敷】

にかいさき二階座敷【名】二階づくりにかいたまひ二階住【名】二階借をしてすまふこと。【堂】

にかいだう二階堂【名】二階づくりの膳夫娘(かきや)の造管に係る膳夫寺(かきや)の一名。初、大和國十市(かきや)郡香久山(かきや)村大字膳夫にありしが、後山邊(かきや)郡本尊は虚空藏(かきや)菩薩。【地】大和國山邊(かきや)郡の村。中(かきや)街道の一驛。佐保川と初瀬川との合流點に位す。前項参照。【地】永福寺の建築が、二階づくりの堂なりしよりいふ。相模國鎌倉町の大字。文治年中、源頼朝、奥州の大長寺院に摸して、永福寺をこの地に建つ。【姓氏】の

一。本姓は藤原。左大臣藤原乙臈第十四世の孫行政、源頼朝の兵を擧ぐるや、鎌倉に赴きてこれに屬し、遂に政所(かきや)の執事となり、始めて姓を二階堂と稱す。子孫、鎌倉幕府に仕ふ。にかいだうさだめ二階堂貞藤【名】

【人】武將。北條高時の臣。檢非違使、出羽守を兼ね、薨後、道藏と改め、出羽入道。又、引付頭人、政所執事に歴任す。初、北條高時、後醍醐天皇の廢立を圖るや、その不可を苦諫して用ひられず、命以て護兵親王を吉野に攻め、楠木正成を千早城に圍み、未だ抜くこと能はざるに、京師官軍に收められしより、圍を解きて降り、建武元年、雜決斷所衆に列せしが、後、陰謀を企て、六條河原に斬らる。年六十八。にかいだうたうら二階堂道藏【名】

【人】前條に同じ。にかいだうりう二階堂流【名】劍道の一派。中條流より出て、松山大吉を祖とす。にかいだて二階建【名】平家(かきや)の上

にかい

に一層を造り重ねる建築、又その家。二階づくり。二階。にかいたな二階棚【名】床の間書院などの脇に設くる棚の一種。書院脇又は寢間にも適すといふ。【甚に同じ】

にかいさき二階座敷【名】二階づくりにかいたまひ二階住【名】二階借をしてすまふこと。【堂】

にかいだう二階堂【名】二階づくりの膳夫娘(かきや)の造管に係る膳夫寺(かきや)の一名。初、大和國十市(かきや)郡香久山(かきや)村大字膳夫にありしが、後山邊(かきや)郡本尊は虚空藏(かきや)菩薩。【地】大和國山邊(かきや)郡の村。中(かきや)街道の一驛。佐保川と初瀬川との合流點に位す。前項参照。【地】永福寺の建築が、二階づくりの堂なりしよりいふ。相模國鎌倉町の大字。文治年中、源頼朝、奥州の大長寺院に摸して、永福寺をこの地に建つ。【姓氏】の

一。本姓は藤原。左大臣藤原乙臈第十四世の孫行政、源頼朝の兵を擧ぐるや、鎌倉に赴きてこれに屬し、遂に政所(かきや)の執事となり、始めて姓を二階堂と稱す。子孫、鎌倉幕府に仕ふ。にかいだうさだめ二階堂貞藤【名】

【人】武將。北條高時の臣。檢非違使、出羽守を兼ね、薨後、道藏と改め、出羽入道。又、引付頭人、政所執事に歴任す。初、北條高時、後醍醐天皇の廢立を圖るや、その不可を苦諫して用ひられず、命以て護兵親王を吉野に攻め、楠木正成を千早城に圍み、未だ抜くこと能はざるに、京師官軍に收められしより、圍を解きて降り、建武元年、雜決斷所衆に列せしが、後、陰謀を企て、六條河原に斬らる。年六十八。にかいだうたうら二階堂道藏【名】

【人】前條に同じ。にかいだうりう二階堂流【名】劍道の一派。中條流より出て、松山大吉を祖とす。にかいだて二階建【名】平家(かきや)の上



(つまいかに)

にかい

を云ふ。「加賀國の方言」にかいもん二階門【名】二階づくりの門。甲陽軍記(二の郭)の二階門へ、あがり。にかいや二階屋【名】二階づくりの家の格。にかいへり二階蔵【名】二階づくりの蔵。【ある座敷】

にかいさき二階座敷【名】二階づくりにかいたまひ二階住【名】二階借をしてすまふこと。【堂】

にかいだう二階堂【名】二階づくりの膳夫娘(かきや)の造管に係る膳夫寺(かきや)の一名。初、大和國十市(かきや)郡香久山(かきや)村大字膳夫にありしが、後山邊(かきや)郡本尊は虚空藏(かきや)菩薩。【地】大和國山邊(かきや)郡の村。中(かきや)街道の一驛。佐保川と初瀬川との合流點に位す。前項参照。【地】永福寺の建築が、二階づくりの堂なりしよりいふ。相模國鎌倉町の大字。文治年中、源頼朝、奥州の大長寺院に摸して、永福寺をこの地に建つ。【姓氏】の

一。本姓は藤原。左大臣藤原乙臈第十四世の孫行政、源頼朝の兵を擧ぐるや、鎌倉に赴きてこれに屬し、遂に政所(かきや)の執事となり、始めて姓を二階堂と稱す。子孫、鎌倉幕府に仕ふ。にかいだうさだめ二階堂貞藤【名】

【人】武將。北條高時の臣。檢非違使、出羽守を兼ね、薨後、道藏と改め、出羽入道。又、引付頭人、政所執事に歴任す。初、北條高時、後醍醐天皇の廢立を圖るや、その不可を苦諫して用ひられず、命以て護兵親王を吉野に攻め、楠木正成を千早城に圍み、未だ抜くこと能はざるに、京師官軍に收められしより、圍を解きて降り、建武元年、雜決斷所衆に列せしが、後、陰謀を企て、六條河原に斬らる。年六十八。にかいだうたうら二階堂道藏【名】

【人】前條に同じ。にかいだうりう二階堂流【名】劍道の一派。中條流より出て、松山大吉を祖とす。にかいだて二階建【名】平家(かきや)の上

にかい【名】自家の二階

火もいたうまよひて吹きかけらるるを拂

火もいたうまよひて吹きかけらるるを拂
 ひわびつつ、烟の中よりがみ出でたる
 主殿察(みま)の者の顔ども」
 にかみいる 苦入る「動四自」甚しくに
 がむ。大いに顔をしかむ。盛衰(せいすい)悪しく
 飛んで、腰を損じて、にがみ入りたりける
 顔の氣色」
 にかみかかる 苦掛る「動四自」にがみ
 ながら襲ひかかると。顔をしかめて向ひ來
 る。狭き(せま)いでいて、にがみかかる顔け
 しき、やまもせば、食ひかきぬべし」
 にかみきる 苦切る「動四自」甚しくに
 がむ。にがりきる。
 にかみおぼる 苦味走る「動四自」顔つ
 きににがみ有り。容貌(ようぼう)りりしく見ゆ
 「苦(く)が走る」參照。
 にかむ 苦む「動四自」にがにがしく思
 ふ。にがい顔をなす。にがる。盛衰(せいすい)心ち
 悪しうなりて、いかに仕らんとにがみて」
 住吉(すけよし)よくして、にがみたるなり」
 にかむ 苦む「動下二他」にがむ様子を示
 す。盛面(せいめん)を作る。眉をひそむ。しかむ。
 盛衰(せいすい)王の舞を舞ふなるに、面模(めんも)
 の下にて、鼻をにがむ事に侍るなり」
 にかむ 苦む「名」嘔まばにがからん
 と想像せらるる蟲。
 苦蟲を嘔潰(おうつぶ)したやうな顔「句」
 にがみきりたる顔つき。にがい顔。盛
 面(せいめん)。
 苦蟲を喰潰(くじむ)したやうな顔「句」
 前條に同じ。「同じ」
 にかよも 苦桃「名」「植」けも(毛桃)に
 にかよも 似通ふ「動四自」互に似る。
 にかよふ 類似す。源氏(げんじ)いとよく、似通ひ
 けるかなと思ひくらぶるに」
 にかよも 苦艾「名」「植」菊科に屬
 する多年生の草。高さ二尺乃至四尺に
 達し、葉は一回羽状に分裂し、下部の葉
 は長柄を有し、上部の葉は短柄又は無柄
 なり。葉の裏及び莖の全體には、柔き白
 毛密生し、且つ強き芳香有り。八九月の
 頃、黄色の花、半球形の小頭状花序をなし
 て開く。原産地は歐羅巴。果實は香料

種子は驅蟲劑に供せらる。日めはじき(益

種子は驅蟲劑に供せらる。日めはじき(益
 母草)に同じ。
 にかから 煮穀「名」にだしがら(煮出穀)に同
 じからが(英:Knechtling)「名」「地」中央亞
 米利加にある共和國。首府をマナガ(Ma-
 nagau)といふ。
 にかからひつ 荷唐櫃「名」長唐櫃の半分
 の長さなる唐櫃。その二つを棒の兩方に
 かけ、一人にて荷ふ。になひからひつ。
 にかがり 苦「名」にがること、又その有様。
 にかがり 苦「句」にがみはる(苦味
 走る)に同じ。盛衰(せいすい)にがりの走りた
 るも、一仔細ありてよし」
 にかがり 苦汁・濁汁「名」食鹽の、空中の水
 分を吸收するによりて滴りたる液。その
 成分たる鹽化マグネシウムなどのため
 に、苦味を有し、豆腐の製造に、レグミン
 を凝固せしむるに用ふ。にがしほ。
 にかがり 苦切る「動四自」にがみきる
 (苦切る)に同じ。
 にかがり わらふ 苦笑ふ「動四自」にがらふ
 (苦笑ふ)に同じ。盛衰(せいすい)和主(わしゅ)を鼓判
 官(こはん)と京中の童部の(こども)も申す
 は、人に打たれたまひたるか、又はられた
 まひけるかと問ひければ、判官(はんごん)苦笑ひ
 てぞ歸りける」
 にかがる 苦る「動四自」にがむ(苦む)に同
 じ。盛衰(せいすい)實に理(じ)なりければ、聞く
 人、皆、にがりあへり」。「苦笑(くせう)」。
 にかがらひ 苦笑「名」にがらふこと。
 にかがらふ 苦笑ふ「動四自」にがにが
 しく思ひながら、強ひて笑ふ。にがり笑
 ふ。苦笑(くせう)す。平素(へいそう)上には事なき様な
 れども、下には用心して、苦笑(くせう)ひてのみぞ
 候はれるに」
 にかき 日記「名」にっき(日記)に同じ。
 「古語」源氏(げんじ)わが御ありさまを、にきのや
 うに書きたまへり」。「日記(にっぴ)」を書く
 こと。日日の出来事を記すこと。「古語」
 狭葉(せま)月日たしかに記しつつ、にきして、き
 るべき所は、繪に書きたまへり」
 にかき 二氣「名」陰と陽と。陰氣と陽氣
 と。二儀。兩儀。

「春二季(春二季)とあり」四季の内二つ。

「春二季(春二季)とあり」四季の内二つ。
 主に、春と秋と、又は夏と冬とにいふ。
 東鑑(とうかん)二季彼岸(あな)佛聖田(ぶつせいだん)「禁抄(きんしょう)二季月次神
 今食(いまけ)「孟蘭盆(ぼん)と歳暮(としご)と。ぼんく
 今食(いまけ)にきほらひ(二季)拂(はら)ひとさきほう(二季)奉
 公(ほうこう)參照。「二季の諸拂(しよはら)ひ」
 にかき 助動「助動詞の運用形に、助動
 詞の添はりたる語」過去の意を強く表
 はす語。古今(ここん)名にめてて折れるばかりぞ
 をみなべしわれ落ちにきと人に語るな」
 にかき 二儀「名」天和地と。兩儀。太平
 島(たへじま)日本開漸の始を尋ねれば、二儀(ふたぎ)すてに
 分れ、三才漸く顯れて。陰と陽と。兩
 儀。二氣(ふたき)。在(あ)る居(い)る二儀(ふたぎ)七曜(しちやう)の火」
 にかき 和熟「接頭」柔かなる。精しき等の
 意。にご。荒(あ)らに對して「古語」和妙
 (わびた)「和魂(わこん)」
 にかき えぞ 熱蝦夷「名」上古、蝦夷を三種
 の風俗に従ひしもの。王化(おうか)に服して、皇朝
 (こうてう)の風俗に従ひしもの。にきえみし。熱蕃(ねつばん)。
 (麗)の蝦夷(れい)都加留(とかりゅう)の蝦夷(えい)に對して)紀
 「熱蝦夷(ねつえい)ニギエミシ」
 にかき えみし 熱蝦夷「名」前條に同じ。
 にかき かい 歸戒「名」佛(ぶつ)三寶(さんぼう)の内
 佛寶(ぶつぼう)と僧寶(そうぼう)とに歸依(き)する戒法。さんき
 (三歸)參照。
 にかき けは 仁岸川「名」「地」能登國風
 至(し)の那にある細流。古は越中國に屬
 し、鏡石川(かがし)と書きたり。萬葉(まんや)妹にあはず
 久しくなりぬにきし川清(かみ)瀬(せ)ごとみにな
 うらはへてな」
 にかき しね 和稻「名」稻の實の、稊(こ)を
 摺(すり)り去りたるもの。こめ。荒稻(あらい)の
 に對して「古語」祝詞(いのち)大忌祭(おほい)和稻(わい)荒稻
 (あらい)に」
 にかき すみ 和炭「名」にごすみ(和炭)に同
 じきたつ 熱田津・采田津「名」「地」伊
 豫國(いよ)温泉(おん)の那にありし地。今の同郡三
 津濱(さんづ)町(まち)古三津(ふるさんづ)の村の邊といふ。
 萬葉(まんや)にきたつに舟のりせむと月待(つきまち)ては潮
 かななひぬ今は漕ぎてな」。「わたつ(和田
 津)を見よ」。

「和妙(わびた)は接頭語、

「和妙(わびた)は接頭語、
 妙は假借の字」細かく柔かに織りたる袴
 (はかま)。一説に、打ちて柔かならしたたる袴
 なりとも、又色を染めず、且つ光澤なき
 帯の絹なりともいふ。(荒妙(あらい)に對して)
 にかき 和幣(わび)參照。祝詞(いのち)新年祭(としご)御服(みふく)
 は、明妙(あらい)參照。和妙(わび)と妙(た)と。
 にかき たま 和魂(わこん)和靈(わりやう)「名」にぎみたま(和
 魂)に同じ。「古語」類聚(るいご)其君(そのきみ)こそは忘れ
 たるらめにきたたまのたわやめわれは常の
 白珠(しろたま)」
 にかき たまの 和靈(わりやう)「枕」にきたまは、
 にかき たまの 和靈(わりやう)の誤ならんといふ。ころも
 (衣)にかけていふ。萬葉(まんや)にきたまのころ
 も寒(さ)かに」
 にかき て 和幣「名」にきた(和袴)の約に
 て、それを幣(へい)とするに就きていふものに
 て、ふてが古袴(ふるはかま)の義なる類なるべし
 とも、又、にき(和)は接頭語にて、美稱(みしょう)に用
 ひて、手の意にて、手にて捧(た)げ奉(た)ぐる幣
 (へい)の義なるべしといふ。(ぬき)幣(へい)に同
 じ。「古語」馬下枝(うまがし)に白(しろ)にきて、青
 にきてを取垂(と)りて」
 にかき どり 二季鳥「名」「動」秋、北方よ
 り我が國に渡り、春歸り去るよりいふ。に
 き(二季)參照)が(雁)に同じ。「古語」
 萬葉(まんや)雁(かり)二季鳥(ふたきとり)。いつ方を故郷(こきやう)とて
 は二季鳥の年に二たび行き歸るらん」
 にかき にき 握握「名」赤子が、自分の手
 を握りつ擁(よう)つすること。在(あ)る鳥(とり)の養子
 「手を握るやうな事をする。これも養(やう)か。
 「握飯(にぎい)をにきらふと申す(幼てごさる)」
 「握飯(にぎい)もう飯が出来ました。いつものヤ
 うににきにぎして上げましたよ」。「にぎり
 めし(握飯)を云ふ。「幼児の語」
 にかき にき 賑賑「貌」次條の語の語幹
 にきにぎしきさま。愚管抄(ぐくわんしょう)康頼(やすたのり)など云
 ふさるがうるひ者など、にきにぎと召
 使(めし)ひて」
 にかき にき 賑賑「形」二(い)かにもに
 ぎはし。非常(ひじょう)ににぎやかなり。
 にかき にき 賑賑「名」にぎはすこと。

帶してあらぬこと。からて。すて。手ぶら。にぎりつぶし。徒手。空拳。目盛の葉の、未だ開張せぬ時の譬。八笑人山ふところに早飯の握拳を開くより、盛(お)違へぬ花簾」
 握拳も、外(む)れりや、腹が立つ(句)「句」思のままにならぬ時は、不平の心おこる。「諺語」

握拳を戴(か)く「句」次條を、殊更に丁寧にいふ語。丹波與作「握拳を二つ三つつけたきながら泣聲に」
 握拳を喰(く)ふ「句」握拳にて打たる。拳骨(こぶし)を喰ふ。
 握拳を喰(く)ふ「句」前條に同じ。會我會精出御時分善からう。朝比奈が握拳の握飯、喰(く)うて見よ」

にぎりさかもり 握酒盛「名」越後國にて、邊鄙の貧民が、酒の糟を握りて、盆やうの物に盛り、人人、寄りあひて、酒のかはりに食ふこと。
 にぎりした 握下「動下二他」弓の、握革(がわ)より下の方。「握上(がわ)に對して」
 にぎりしむ 握締む「動下二他」握りて締めつく。固く握る。にぎりつく。容易に手はなさず。

にぎりしす 握鯨握餅「名」握り固めてこしらへたる餅。にぎり。
 にぎりずみ 握墨「名」墨を硯に當てて磨る時墨挾(ぼく)に挿まらず、握り締めて持つこと。又その墨。
 にぎりつく 握附く「動下二他」握りておしつく。にぎりしむ。

にぎりつづ 握拳「名」にぎりつづし(握拳)の音便。
 にぎりつづぶ 握潰「名」握りつぶすこと
 にぎりつづぶす 握潰す「動四他」握り締めてつぶす。握拳に回付し來れる案件を、結末を附けず、打棄てておく。
 にぎりつづへ 握尻「名」にぎりへ(握尻)の音便。

にぎりつむ 握詰む「動下二他」握りておしつむ。にぎりしむ。永き間絶

えず握る。
 にぎりづめ 握詰「名」握り詰むること
 にぎりざる 握取る「動四他」握りて、わが物とす。
 にぎりばら 握坊「名」にぎりや(握屋)ににぎりばさみ 握鉄「名」ごさばさみ吳服鉄に同じ。

にぎりばし 握箸「名」小兒などの、箸を用ふるに馴れず、握りつかむが如き手つきにて持つこと。
 にぎりばす 握蓮「名」建(建)勺(勺)などに、東(東)の上に設けて、手摺を支ふるためにする、蓮の葉の形せる飾。
 にぎりぶさ 握太「名」手に握りて持つに、手束に餘りて、太きこと。「握太のメテック」盛衰記「白木の弓の握太なるを」

にぎりへ 握尻「名」放屁したる時、それを掌中に受け握りて、漏れぬやうにすること。又その尻。にぎりつべ。
 握尻三里「句」臭氣の長く保つ形容。
 「諺語」



にぎりぼさげ 握佛「名」泥を握り固めて作りしといふ佛像。紀伊國名所園會「握佛、南叡山大同寺法華院にあり。本堂の後面、山道の傍にあり。慈覺大師、當山において、如法經(如法)修行の砌、自ら泥を以て握り固めたまひしに、即ち八萬四千の大日如來と拜まひさせたまひしとなん。その形の大さ、五六分より乃至一二寸、黄土を固めたるが如くにして、天然に佛壇を具せり。實に殊勝のものなり。初は、ここかここに散在してありしが、今は、集めて、小堂に安んぜり」。「そのあと、にぎりめ 握目「名」握りたる部分、又はにぎりめし 握飯「名」飯を握り固めたるもの。鹽氣を加へ、又は梅干(うめ)を挿入しなどし、當座に食し、又は遠足などの辨當として携帶す。にぎりいひ。つくねめし。すび。おにぎり。團飯(だんぱん)。」

にぎりもつ 握持つ「動四他」握りて持つ。把持す。
 にぎりや 握屋「名」金錢を貯へて、容易に使用せぬ人。にぎりか。にぎり坊。けちんぼう。

にぎる 握る「動四他」手の五本の指を、内側の方へ屈む。大鷲手を強く握りて、...握りたうびけるおよびは、あまり強くて、上にこそとほりて出でまへたりけれ」屈めたる手の指と掌とにて、物を締め又は持つ。つかむ。己が所有物とす。手に入る。掌中に收む。掌握す。五人女「一代見捨てじとの書紙を握り」四握(四握)又は握飯を作る。「容。握つたら放さぬ(句)怒心ふかき形握れる拳(こぶし)笑(え)める面(おもて)に當らす(句)怒れる拳、笑顔に當らず」に同じ。「諺語」

にく肉「名」動物體の一部。筋と共に筋肉を構成する柔軟なる物質。しむむら。し。み。鳥獸類又は鳥類の、食用に適するもの。にく(半肉)の略。果實の皮と種子との間にある、柔き部分。にく(英語)「からた。肉身。肉體。(靈に對して)にく(あひ。にくつき。にく中(中背)にく(厚き。厚み。かさ。紙の肉)彫物(彫)の肉)圓形にして中央に孔ある錢(か)の周囲をなせる厚き部分。にく(印肉)の略。肉餛(にく)れて蟲を生ず(句)次條に同じ。「諺語」

肉腐つて蟲を出だす(句)「荀子の勸學篇に「肉腐出蟲、魚枯出蠹」とあるに本づく」悪しき原因は、悪しき結果を生ず。「諺語」
 肉の切實(切實)「句」女が、金錢のため、多くの男に身を任すること。
 肉の關係「句」にく(肉交)に同じ。
 肉を重ねず「句」史記の晏嬰傳に「嬰以三節儉力行、重於齊、既相、齊食不重肉、妾不衣帛」とあり「飯に、二種以上の肉を食せず」
 肉を剝(む)つて瘡(かさ)を醫す(句)「葺夷中の傷田家」と題する詩に「二月

賣(う)新絲、五日糶(糶)新穀、醫(い)得眼前瘡、剝(む)卻(却)頭肉」とあるに本づく「眼前の小害を除かんがために、大なる犧牲を拂ふ」。諺語」
 肉を割(わ)いて疵(かさ)に補ふ(句)「股(こ)を割いて、腹に充たす」に同じ。「諺語」
 肉を以て蟻(あ)を去る(句)「韓非子の外儲説篇に「以肉去蟻、蟻愈多、以魚驅蠅、蠅愈至」とあるに本づく」方法を誤れるがために、反對の結果になる。諺語」
 肉を以て餓虎(う)に委(ま)す(句)「史記の張耳陳餘傳に「今必俱死、如以肉委餓虎、何益とあるに本づく」次條に同じ。「諺語」
 肉を以て餓虎(う)に投(な)す(句)「史記の信陵君傳に「無他端、而欲赴秦軍、譬若以肉投餓虎、何功之有哉」とあるに本づく」徒に命を捨つる形容。大死(お)す。「諺語」

にく癖「名」漢字の吳音「しとね。しきもの。和名、癖、通久。疵癖也」(動)「その皮はしとねとして用ふるに適するよりいふ」かも(か)粉羊(か)の異稱。運歩色葉集、粉皮糠皮ニクノカハ」
 にく二九「數」二と九との乗積。
 にく九十八「句」二と九との乗積。
 にく九と九「句」二と九との乗積。
 にく二九の十六「句」三五の十八に同じ。「諺語」

にく憎惡「貌」にく(憎し)の語幹「にくきさま。甚あなにくの男や」盛衰記「ある惡(あく)の殿の顔しげさま...あな惡の人の物論じたる顔の顔しげさま」
 にく逃ぐ 逃ぐ 遁ぐ 亡ぐ 北ぐ「動下二自」逃は逃の俗字「逃げて走る。のがる。逃遁(とうとん)す。逃亡(とうぼう)す。關係(かんけい)することを欲せず。責任の地位に立たぬやうにす。避く。回避す。
 逃ぐる魚を蛭子(むし)に供ふ(句)次條に同じ。「諺語」
 逃ぐる魚を蛭子(むし)に參らす(句)「願掛(ねが)のために捕(と)こなひた

ををわ ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

いんり

いんり

いんり

いんり

る魚を夷(ヒ)三郎殿に供へ参らすとの意「つまらぬ物事を提供して、望を叶へんとする譬」。「諺語」

逃ぐるが(一)の手「句」三十六計逃ぐるに如かず」に同じ。「諺語」

逃ぐるが奥の手「句」前條に同じ。「諺語」

逃ぐるが勝(カ)「句」(負)くるが勝に同じ。「諺語」

逃ぐる者道(カ)を擇ばず「句」逃げんとする目的のためには、手段の如何は問ふ暇なし。「諺語」

逃ぐるも一手(カ)「句」事窮したる場合には、逃ぐるも止むを得ず。「諺語」

逃ぐるをば剛(カ)の者「句」逃ぐるが勝に同じ。「諺語」

逃げた魚は大きい「句」逃(ヒ)した魚は大きい」に同じ。「諺語」

逃げた鱸(ツ)は大きく見える「句」前條に同じ。「諺語」

逃げ逃げ月を見る平家「句」平家の一族には、風流を解する者多く、源氏に追はれて、壇ノ浦に滅亡するに至るまで、逃げながら月を賞したりとの意」

碁を打つ時、相手が石を退くるを嘲りていふ語。「諺語」

逃げ逃げ天下を取る家康(カ)「句」徳川家康は勝算なければ、妄に兵を進めざりしよりいふ。「逃ぐるが勝」に同じ。「諺語」

逃げも隠れもせず「句」逃げかざる(逃隠る)を見よ「敵又は警官などに捕へられんとする時、わるびれずしていふ語」

肉厚「名」肉の多きこと。分厚(カ)。(肉薄に對して)

肉合「名」身體のふとりである程あり。肉つき程度。ししあひ。にくあん 肉案「名」肉を載せて切る臺。

まないた。肉凡。にくいち 腕「名」(數)和算にて、甲數の某倍數より、乙數の某倍數を減じて、不足なること一なる時、その兩倍數を知りて、甲乙の兩數を求むる算法。今の二元一次不定方程式の解法に相當す。じよういち(參照)

にくいれ 肉入「名」印肉を入れ置く器。にくいれいれ。にくつば。肉池(カ)。

にくいろ 肉色「名」肉の色あり。にくいろく。皮膚の色あり。にくいろく。皮膚の色に似たる色、即ち黄ばみたる淡紅色。にくいろく。

にくいろしゆばん 肉色襦袢「名」肉色に染めたる襦袢。多く俳優、輕業師などの、技を演ずる時に著用す。にくじゆばん。次條參照。

にくいろもひぎ 肉色股引「名」肉色に染めたる股引。所用は、肉色襦袢に同じ。前條參照。

にくう 二空「名」佛「我空」と法空との二空の滿月「句」佛「二空の理を悟れ。靈覺圓滿なるを、月に譬へていふ語。靈覺心痛まぬいかな。二夜の滿月を備へながら、生死(カ)の長夜の迷情たる事を」

にくう 二宮「名」二柱(カ)の宮たち。皇族御二かた。二后宮(カ)と東宮と。二宮の大變。二所大神宮。著聞伊勢の海一志(カ)の浦にて、……たまたま二宮の御前に参りて、太平皇太后神宮……二宮の末社、風の社の寶殿」

にくうわん 二空觀「名」佛「我空觀」と法空觀との併稱。

にくうす 肉薄「名」肉の少なきこと。分(カ)の薄きこと。(肉厚に對して)

にくえき 肉越幾斯「名」英「Fish extract」肉を溫湯にて浸出せしめたもの、即ちソップを煮詰めたもの。

にくえん 肉縁「名」肉體上の縁のあること。肉親たる關係。血縁。合那甚それこそ幽靈そなた、氣味が悪うはないか。

肉縁の深い程、死人になればこはい物、必ず門(カ)の月明けまいぞ」

にくが 肉芽「名」植「英「Easily bud」きうが(球芽)に同じ。」「醫」にくがそ(き)肉芽組織」に同じ。

にくかい 肉界「名」(カ)肉(カ)を見よ」肉身の世界。身體及びその作用の範圍。現身の界(靈界に對して)

にくから 肉莖「名」肉を材料として製したる莖(カ)。そつが。肉汁。

にくから 肉交「名」男女の肉體の交接。肉體上の交際。(情交に對して)

にくかく 肉角「名」孔「義子に」鈕商獲麟、乘子五父之衝、冉有告二夫子曰、墮身而肉角、豈天之妖乎」とあり肉に包まれたる角(カ)。「動」後漢書の班彪傳に「肉角則毛、宗子于外圍」とあり「きりん麒麟の異稱。

にくがそ(き) 肉芽組織「名」醫「Granulationsgewebe」組織の一部の、外傷のために缺損したる時、深部よりあらはるる顆粒状の組織。にくげ。にくげそ(き)。肉芽。

にくかん 肉感「名」肉體に感ずる感覺。にくがん 肉眼「名」支那明の張翥の詩に「肉眼紛紛爭醜好」とあり「俗人の眼。凡眼。(心眼に對して)にくげん(肉眼)參照。肉體に具はれる調力。眼鏡などの助を借らざる眼の力。「肉眼にて見ゆる星」

にくかんてき 肉感的「貌」哲「色慾の衝動を起させやすきさま。實感的。「肉感的なる女」

にくかんらん 肉感論「名」哲「ゆゑかゝらん(唯覺論)に同じ。

にくが 憎がる「動四他」憎しと思ふ。にくむ。いひ。

にくき 肉兒「名」(カ)肉案」に同じ。にくきり 肉牛「名」肉を食料とする目的にて飼養する牛。(乳牛に對して)

にくきは 肉際「名」肉つきの様子。にくきり 肉切「名」獸類などの肉を切ること、又その人、又それに用ふる刃物。」「次條の時、にくきりばらちやう 肉切庖丁「名」肉を切るに用ふる庖丁。にくきり。

にくんちやう 肉鯨「名」鯨肉を、食用に供する時にいふ語(皮膚に對して)

にくんわ 肉果「名」植「たにわ(カ)多」肉果に同じ。にくんわ(カ)肉豆蔻に同じ。にくんわ(カ)肉塊「名」肉の「かたま」りしむら。肉團。」「身體。肉體。にくんわん 肉冠「名」雄鶏の頭上にある、赤き肉質のもの。ときか。鶏冠。にくげ 肉芽「名」醫「にくが(肉芽)に同じ。

にくげり 肉刑「名」身體をきずつけそこなふ刑罰、即ち斬首(カ)刺(カ)刑(カ)類。」「炮烙。火貫。水貫。蛇貫などの類。」「惡膩沙」に同じ。

にくげり 肉髻「名」佛「うぢたしや(烏)」に同じ。にくげり 肉桂「名」植「樟(カ)科に屬する常綠喬木。高さ二三丈に達し、葉は革質、長橢圓形にして光澤あり、銳尖頭を有し、中肋及び二側脈顯著し、夏綠黄色の小花、聚聚花序をなして開く。原産地は交趾、那訶にて、帶辛甘味と一種の香氣とを有し、根及び樹皮は乾かして強壯藥、矯臭藥、矯味藥等に供す。かんなん。からだも。

にくげり 肉桂「名」植「めき(小蘗)に同じ。にくげり 肉桂酸「名」けいさん(桂酸)に同じ。にくげり 肉桂油「名」肉桂を和して製したる油。にくげり 肉桂水「名」けいさん(桂)に同じ。にくげり 肉桂油「名」けいさん(桂)に同じ。

にくげり 憎氣言「名」にくきげなる言葉。不愛想なる言語。甚にくきもの。……ただなるだにといしと思はしからぬ人の、にくげりとしたる」

にくげり 肉芽組織「名」醫「にくがそ(き)肉芽組織」に同じ。

にくげり 肉眼「名」佛「五眼(カ)の一。そ(き)肉芽組織」に同じ。

にくげり 肉體に具有せる眼。近前。内畫。

上を見れども、遠く後外夜、下を見るを得ずと説く。にぐん(肉眼)にてんげんつら(天眼通)参照。

にくさ 肉叉 [名] にぐん(肉刺)と同じ。

にくさうり 憎相 [名] 憎さげなる相好(相好)の者。太平記「面影の似たりける首二つ、猿門の木に懸けて、新田左兵衛督義貞、桶河内判官正成と書附をせられけるを、いかなるにくさうり者かしたりけん、その札の側に、これはた首なり、まさしげにも書きける虚事(虚事)かなと」

にくさげ 憎さ気(貌) いかにも憎く思はるさま。「古語」大和いと憎さげなる女子のあるを「十割その類、いかにも憎さげなり」

にくさじ 肉刺 [名] 西洋料理にて、肉類を刺して食ふに用ふる。熊手の如き形の具。ほおく。肉叉。

にくさび 荷轄 [名] 和船にて、碇を舷(舷)の覆(覆)又は部(部)として、浪をよくるやうにしたるもの。その上に打つ押縁(押縁)を四五(四五)といふ。にくさみ。みくさみ。「古語」小野瀬「漕ぎ来ぬやあまの風間も待たずして荷くさびかける碇の釣丸」

にくさみ 荷轄 [名] 前條に同じ。「古語」夫木「荷くさみぞかくべかりける難波湯舟打つ浪のいこそ寂れね」

にくらん 肉山 [名] 料理の肉の多量に積上げてあるを、山に譬(譬)へていふ語。「黃庭堅」の時に「六月火雲蒸二肉山」とあり「肥満したる人を嘲りていふ語」

肉山 肉林 [名] 帝王世紀に「夏桀爲二肉山肉林、殷紂爲二酒池肉林」とあり。脯は乾したる肉の義、山はそのうづだかき譬、林はその敷多き譬「宴席などの驕奢なる形容。酒池、肉林。」

にくらり 二句去 [名] 「文」去(去)の一連句にて、人偷居所意味、降物、降物、天象に關する語、又は互に意味の類似せる語にて、例へば「今」と「今日」、「頃」と「間」と「折」、「車」と「馬」と「舟」の類は、二句を

隔つるに非ざれば附くべからずといふもの。語の種類によりて、三句去五句去七句去などあり。

にくじ 肉肆 [名] にや(肉屋)と同じ。

にくじ憎し 惡し [形] 憎むべし。かはゆからず。にくらし。にくず。見又は聞きなどするに快からず。みにくし。醜惡なり。竹取御かへり事さすげににくからず聞えかして「其清げなる男の、にくげなる妻」持ちたる、鬚黒ににくげなる人の、年老いたるが、物語する人の兒(兒)もてあそびたる」

憎いが餘つて不便なり。不便のあまりの憎さや」

憎い者は可愛(可愛)の裏 [句] 「可愛(可愛)さ餘つて、憎さが百倍」の反對。「古語」心中「数緒草紙、誰に似てこの根性、憎いが餘つて不便なり。不便のあまりの憎さや」

憎い者は可愛(可愛)の裏 [句] 「可愛(可愛)を極めて憎しといふは、實は、却りて愛情こまやかなる證據なり。「古語」人は、口に言ふと心に思へる所と、正反對なることあり。「古語」憎い者は餌を與へよ [句] 「憎き鷹に餌を餌へ」に同じ。「古語」憎い者は糞(糞)と縫目に這入(這入)つた蚤(蚤) [句] 世人の憎く思ふ物を並べ擧げていふ語。「古語」憎き鷹に餌を餌へ [句] 憎み嫌ふ者に對しては寧ろ憐憫を加へよ。憎い者に餌を與へよ。「古語」憎き者は生きて見よ [句] 「命(命)有つての物種」に同じ。「古語」幸者悲用「命を全う持つ蟲は蓬萊に逢ふきて傳へたり。つらき人の果(果)をば、生きて見はてたまふべし。死しては何の曲あるべき」

憎き者は生きて見よ [句] 憎しと思ふ者は、殺さず、その成りゆきを見るがよし。「古語」緋細綿(緋細綿)の紅葉(紅葉)内に惡魔のある事も、憎くは生きて見よ、それも、世間の不承(不承)ぞし、憎くても袖の下(下)に廻る子は叩かれず [句] いかにか憎く思ひても、ま

つはり附く子は、慘酷に取扱ふこと能はず。「古語」憎さも憎し [句] いかにもにくし。在言正動方聲「憎さも憎し、おどしてくれう」

にくじ 惡し [接尾] 易からず、難しなどの意。動詞に添へて用ふる。「書きにくし」「讀みにくし」

にくじ 肉食 [名] 「佛」なまぐさき物を食ふこと。佛戒に、小乗教にては、三種の淨肉を食ふを許したれども、大乘教に於ては、菩薩の慈悲心を害すとて、一切の肉を食ふを禁じたり。にくしよく。肉食妻帯 [句] 「佛」肉を食し、妻を娶ること。佛教にて、僧徒に對しては、大抵これを禁ぜり。しんらん(親戀)・はうも(坊守)参照。

にくじ 禰鹿 [名] 「動」かもしか(羚羊)に同じ。

にくじ 肉質 [名] 肉の部分の多き性質。にくじ 肉汁 [名] 鳥獸の肉を煮出したる汁。そつぷ。にくしる。肉羹(羹)。

にくじ 肉漿 [名] 肉汁培養基 [名] 牛肉又は馬肉一斤に水一リットルを加へて煮たる後、濾過したる、黄色透明の肉汁にペプトンと食鹽とを加へて製する培養基。

にくじ 憎惡 [名] にくくむこと。にくみ。新笑記「玉眼、御氣色(御氣色)變りて、御惡(御惡)深かりし」合那が辻「父」様の御腹立、お憎しむは御尤も」

にくじ 憎しむ 惡しむ [動] 動他ににくむ(憎む)に同じ。天の綱鳥(綱鳥)先の男の無分別は恨みず、一門一家、其方(其方)を恨み憎しむ」

にくじ 肉身 [名] にたい(肉體)に同じ。「佛」しやうじん(生身)に同じ。著聞「西方」より紫雲現りて、堂の内へ入るを見程に、肉身ながら見えぬ。即身成佛(即身成佛)の肉にや。太平記「この仙人も……金母(金母)返りて、もとの肉身と

なりしかば」 「を見よ。肉身の像(像) [句] にぐわつたう(二月堂)にぐじん 肉親 [名] 肉縁の親族。血筋の最も近き人。血族。

にくじん 肉心 [名] 「佛」にぐたん(肉團心)に同じ。

にくじん ぼさ(佛) 肉身菩薩 [名] 「佛」肉身のままにて菩薩の位に至れる人。生身(生身)の菩薩。

にくじやう 肉漿 [名] 獸類の生肉を壓搾して得たる汁に、少量の食鹽を加へて、味を附けたるもの。肉汁。

にくじやう 肉醬 [名] しじ(肉醬)にくじやう 肉商 [名] 肉類を賣買すること、又その人。

にくじやう 肉障 [名] 「肉體」によりて風を障(障)ふる義。開元遺事に「楊國忠、冬月選禪妻肥大者二行二列于前、令遮風、謂二肉障、亦謂肉障」ことあり。にくた(肉障)にぐん(肉障)参照。にくじやう 肉情 [名] 肉體に有する情慾。肉慾。色情(色情)。

にくじ 肉腫 [名] 「腫」獨「Sarcon」一種の不定型なる悪性の腫瘍。初發期に施術せざれば外科的に摘出すとも、再發の要多し。

にくじ 植 [名] 「植」にぐん(肉從容)の訛ならん」きむたけを云ふ。「下野國日光、駿河國富士地方の方言」

にくじ 肉襦袢 [名] 肉色襦袢(肉色襦袢)の略。「色」の如何に拘らず、肌に密着するやうに作りたる襦袢。

にくじ 肉色 [名] にぐん(肉色)に同じ。「美」[英] English「或る畫家の人物描寫の上に現したる、皮膚の色澤の力」チチャンの肉色「ルウハンスの肉色」

にくじ 肉食 [名] 鳥獸などの肉を食すること。にくじき。食肉(食肉)に對して「左傳の莊公十年の條に「肉食者

2524

獸、未能「遠謀」とあり「美食、飽食、肉食の者」【句】「前條」を見よ。「古支那にて、厚き祿を食む者、即ち大夫以上の人。」【富貴の人】
 にくちよへむら 肉食動物【名】「動」にくちよへむら 肉食石【名】「礦」ちちうせき長石に同じ。
 にくちよへむら 肉食蟲【名】「動」英Predations insects「他の昆蟲又は小動物を捕へ食する昆蟲。例一は蜻蛉」【蜻蛉】。天道蟲の類。害蟲驅除の効をなすもの多し。
 にくちよへむら 肉食鳥【名】「動」Prey-birds 又 Birds of prey「猛禽類に属する鳥。例一は鴞鷹、鷹、鴟、などの類」
 にくちよへむら 肉食動物【名】「動」[英 Carnivorous animals]「肉食類に属する動物。例一は獅子、虎、熊、狼、海豹」などの類。肉食獸。
 にくちよへむら 肉食類【名】「動」meat(食用類)に同じ。
 にくちよへむら 肉汁【名】じゅうじゅう(肉汁)にくちよへむら 肉穂花序【名】「植」英Inflorescence of spadix「無限花序の一。穂状花序に似て、花軸の多肉なるもの。萬年青(玉蜀黍)の雌花穂、白葛(びび)などに見られ。又、芋、天南星」のに於けるが如く、その全體が一枚の花苞に包擁せられたるもあり。
 にくちよへむら 肉穂花軸【名】「名」【植】「英 Floral axis of spadix」肉穂花序の花軸。前條參照。
 にくちよへむら 肉聲【名】「肉は肉體の義」人の口より發する喉の聲(樂器などより發する聲と區別して)ふ。
 にくちよへむら 肉體【名】肉より成りたる身體。(神佛などを、體形を具へたるものと考へ、これと區別して)ふ。うつつしみ。肉身(靈魂・精神などに對して)肉體上の交際【句】にくちよへむら(肉交)に同じ。【俚語】
 にくちよへむら 憎體【名】にくちよへむら(憎體)に同じ。

2525

にくたたいじ 肉體【名】肉體に關するさま。
 にくたたいじ 肉體的【貌】肉體に關するさま。
 にくたたいじ 肉臺盤【名】「南唐書の義孔傳に「孫家事烈祖元宗二十餘年官至司空、家益富、每食不設三几盤、使衆妓各執一器環立而侍、號三肉臺盤、時人多効之」とあり。びびやぶ(肉屏風)參照」宴會に、多くの妓女をして、各、器具を持ちて侍せしむること。
 にくたたいじ 煮腐す【動四他】にくたたいじ(煮腐らす)に同じ。「瘦すること」
 にくたたいじ 肉脱【名】肉の脱落して、身體の一部をあらはすこと。古、支那にて打たることを覺悟せるを示す意にて、謝罪の法として行ひたり。
 にくたたいじ 肉團【名】肉のかたまり。一團の肉。肉塊。【佛】にくたたいじ(肉團心)に同じ。
 にくたたいじ 肉彈【名】肉の彈丸、即ち肉體を彈丸に代らしむる義。敵陣に突進肉迫すること、又その身體。
 にくたたいじ 肉圍心【名】「佛」梵文Arya(乾陀陀耶の譯語)六根の一なる意根の宿る所。八辨の肉業より成るといふ。即ち心臓。古は、精神の宿る所は腦髓なることを知らざりしによりて。肉心。「八葉」の肉圍心參照。
 にくたたいじ 肉彈戰【名】にくたたいじ(肉彈)を見よ。敵陣に肉迫突進する戰爭。
 にくたたいじ 憎たらし【形二】にくたたいじ(憎體らし)の轉訛。
 にくたたいじ 煮腐らす【動四他】煮て、くたくたと柔かにす。にくたたいじ。
 にくちよへむら 肉池【名】にくちよへむら(肉入)に同じ。
 にくちよへむら 荷口【名】荷物の口數の意。
 にくちよへむら 肉陣【名】にくちよへむら(肉陣)を見よ。にくちよへむら(肉屏風)に同じ。
 にくちよへむら 二九挺【名】にくちよへむら(十八挺立)に同じ。
 にくちよへむら 肉柱【名】にくちよへむら(肉柱)に同じ。
 (閉殻筋)に同じ。
 にくちよへむら 肉附【名】肉の附着してあること、又その物。一代男、女に切らせたる黒髪、肉つきの爪、數を知らず。肉身體の肥え、又は瘦せたる程あり。からだつき。ししつき。
 にくちよへむら 肉月【名】肉の字の變體にて、形は日月の月の字に似たるよりいふ。漢字の偏(一)「肌、脂、膝」などの左方の月の字。字書にては、肉の字に屬す。
 にくちよへむら 肉豆蔻【名】漢字の吳音。「植」肉豆蔻科に屬する常綠喬木。高さ三丈乃至五丈に達し、葉は全縁の長楕圓形にして、質厚く、鋭尖頭を有し、花は單性雌雄異株、壺狀をなし、帶黄白色を呈す。黄色にして、香大なる肉果を結び、假種皮と仁とは、香料及び藥用に供す。原産地は馬來諸島中のモルッカ諸島にして、現時、印度、馬來諸島、西印度諸島、南米等にも栽培せらる。ししづく。前項の果實の核。卵圓形又は球形をなし、外部は褐色又は淡灰色にして、白色の粉層を被り、網狀の脈あり、横断面は白褐色の組織交錯して、大理石様の紋理を呈し、特異の芳香を有す。芳香性の健胃藥、調味藥、縮臭藥として用ひ、又、香料として汎く應用す。
 にくちよへむら 肉附【動四自】身體の肉が、よく發育す。とる。肥ゆ。
 にくちよへむら 肉豆蔻科【名】「植」顯花植物、被子類、雙子葉門、離瓣花區の一科。喬木或は灌木にて、何れも熱帶の産なり。
 にくちよへむら 肉豆蔻油【名】肉豆蔻の實を蒸溜して得る香油。微黄色にて、濃厚なる特種之香氣を有し、石鹼飲料等に芳香を添ふるに用ふ。「づれしむ」
 にくちよへむら 煮壺【名】にくちよへむら(煮て、くたくたと柔かにす)よく煮て、くたくたと柔かにす。「づれしむ」
 にくちよへむら 肉池【名】にくちよへむら(肉入)に同じ。
 にくちよへむら 肉弟【名】血を分けたる弟。實にくちよへむら(肉波)に同じ。
 にくちよへむら 憎體【名】にくちよへむら(憎體)に同じ。

2526

にくちよへむら 憎體【名】にくちよへむら(憎體)に同じ。

2527

にくちよへむら 憎體口【名】にくちよへむら(憎體)に同じ。
 にくちよへむら 憎體面【名】にくちよへむら(憎體)に同じ。
 にくちよへむら 憎體口【名】にくちよへむら(憎體)に同じ。
 にくちよへむら 肉笛【名】にくちよへむら(肉笛)に同じ。
 にくちよへむら 肉酌【名】にくちよへむら(肉酌)に同じ。
 にくちよへむら 憎體口【名】にくちよへむら(憎體)に同じ。
 にくちよへむら 肉店【名】にくちよへむら(肉店)に同じ。
 にくちよへむら 憎體らし【形二】にくちよへむら(憎體らし)の略。標榜、標榜坊主、憎けりや、袈裟(びん)まで、已(びん)もう、何ぞや知らぬが、滅多やたらに憎てらしは、い(俗曲、曲道成寺)「こちや、こちや、よい首尾にくちよへむら(憎體らし)程」としらし。
 にくちよへむら 肉鍋【名】鳥獸などの肉を煮る。「土佐國の方言」
 にくちよへむら 肉鍋【名】鳥獸などの肉を煮るに用ふる鍋。底浅く、多くは鑄鐵製なり。
 にくちよへむら 憎憎【名】にくちよへむら(憎憎)に同じ。憎み嫌ふ人。
 にくちよへむら 憎憎の腹からいといとが出た【句】「憎憎の腹から、いとととと思ふ者の義」日頃憎く思ふ嫁が、愛らしき孫を生みたり(姑)「は嫁を憎む習なるを形容して」【俗語】
 にくちよへむら 憎憎【貌】にくちよへむら(憎憎)に同じ。
 にくちよへむら 憎憎【名】にくちよへむら(憎憎)に同じ。書簡、替れやれ、替れやれと、與の内よりいひけるを、力者(ひび)開きて、只、二人が外もなし、いかに替り候はんぞと、にくちよへむら(憎憎)に同じ。
 にくちよへむら 憎憎【名】にくちよへむら(憎憎)に同じ。思はるるさまなり。八衆人、甚むしやくしやくの、憎憎しいといふ面(か)が欲しい、にくちよへむら(肉波)【名】血に盛られたるさまの波に似たるよりいふ「さしみ(刺身)の異稱。

にくはく 肉薄 [名] 肉身にて薄(る)義。敵軍などに攻め近づくこと。借せず(に)訊問すること。つめよすること。

にくはせうせい 肉派小説 [名] 英文 Daily school。男女間の肉慾を主材とする小説。

にくびしほ 肉醬 [名] 肉のひしほ。今のしほからの類。たびしほ。ししびしほ。

にくびし 肉筆 [名] 書畫などの、書き又は描きたるもの。印刷に付せぬ書畫。正筆(正)。

にくびやうぶ 肉屏風 [名] 肉體の屏風の義。書言故事に「唐楊國忠、家富、凡有客設酒、令三妓女各執一事、號三肉案盤、冬月令三妓女圍之、號三肉屏風」とあり。

にくぶざん 肉蒲團 [名] 同衾する女を、蒲團に擬(て)いふ語。支那の海淫の書。我國にも、訓點を施し、覆刻せるものあり。

にくぶざん 肉太 [名] 肉體の太く書きてあるさま。肉太(た)に對して。

にくぶざん 肉粉 [名] 肥料に供するため、肉類を乾燥せしめて、粉末となしたるもの。多くは、肉エキスを製造の際に生ずる廢肉を用ふ。

にくべん 肉餅 [名] にくびやうぶ(肉屏風)に、肉に製したる餅の義。蒲餅(ふ)・銅煎餅(どう)などの類なる食品。

にくべん 肉パントン [名] 獨逸(ドイツ)の adpatron。パントンより製したるもの。胃液腺液の作用弱きため、攝取せる蛋白質食物を、パントンに分解するが如き場合の強壯性滋養品及び滋養洗腸料として用ふるに適す。

にくべん 肉片 [名] 肉のきれはし。肉に、肉棒 [名] 肉は印肉の義。ちち(ち)に同じ。

にくばな 肉細 [名] 書體の細く書きてあるさま。ふてばそ。(肉太(た)に對して)

にくぼんなんじやう 肉煩惱障 [名] 佛(佛)さんじやう(三障)を見よ。同じ。

にくぼり 肉彫肉雕 [名] ちぼり(浮彫)に、肉膜 [名] 羅(羅)Flesh。横紋筋纖維の外層を被る薄膜。中に肉膜核と稱する、無數の橢圓形なる細胞核を含む。

にくまへか 肉膜核 [名] 腎(腎)前條(前條)に、憎ます。憎ます。動四他(動四他)にくむ(憎む)の敬語。憎みたまふ。萬葉(萬葉)争へば神も惡ますよしやしよそふる君が憎からなく。下を見よ。

にくまへちやう 肉饅頭 [名] 鳥獸(鳥獸)の肉をまぜて作りたる饅頭。太平(太平)聖劍を賣りて、肉饅頭を買ふ。

にくまゆ 憎まゆ [名] にくむ(憎む)の條に、くしみ。盛衰(盛衰)記諸の神の憎まれを蒙ら(ん)の神なり。されども、いかなる故にや、おん憎まれを蒙り、既に根の國(根の國)の國に赴く。

にくまれち 憎まれ口 [名] 人より忌み嫌はるやうなることば。にくにくしき物いひ。にくていぐち。にくてぐち。悪口。毒舌。和合(和合)人「ええ、憎まれ口ばかりきかすと、早く仕掛けようちやあねえか」。

にくまれ 憎まれ子 [名] 世人より憎まる子。人に忌み嫌はる子。あくたれの子。にくまれこ。

にくまれ 頑(堅) [名] 頑(堅)と、堅しと、頑強を成す。憎まるほどの子。は、強健なるものなり。【諺語】

憎まれ子 國にはびこる [名] 憎まれ子、世にはばかるに同じ。【諺語】

憎まれ子の端米(端) [名] 憎まれる子は、十分なる給養を受くることなし。【諺語】

憎まれ子、世に出づ [名] 次條(次條)に同じ。【諺語】

憎まれ子、世に出づ [名] 次條(次條)に同じ。【諺語】

憎まれ子、世に出づ [名] 次條(次條)に同じ。【諺語】

憎まれ子、世にはばかる [名] 憎まれるほどの人は、却りて勢力ありて、威を振ふ。【諺語】

憎まれ子、世にはばかる [名] 憎まれるほどの人は、却りて勢力ありて、威を振ふ。【諺語】

憎まれ子の音便 [名] 憎まれる者(憎まれる者)の音便。

憎まれもの 憎まれ者 [名] 憎まれる人。忌み嫌はるる人。近所の憎まれ者(憎まれる者)の役目。或役目に服して、それがために憎み嫌はるること。かたきやく。八笑人(八笑人)又、おれが侍か。ちよつ、とかく憎まれ役(憎まれ役)だ。【み。憎悪(憎悪)】。

にくみ 憎悪 [名] にくむこと。にくし「打返し打返し炮(砲)の事、只、他人の肉味を調するに異ならず」。

にくみた 憎立つ [名] 動二他(動二他) 非常(非常)に憎む。憎む心を、行爲(行爲)にあらはす。【諺語】

にくむ 憎む [名] 動四他(動四他) にくしと思ふ。仇と思ふ。腹(腹)だたくと思ふ。いやに思ふ。いとふ。きらふ。にくしむ。憎悪(憎悪)す。【そねむ。ねたむ。うらむ。嫉む。疾む】。

憎まゆ [名] 憎まる。憎みを受く。【古語】

にくや 肉屋 [名] 肉類、殊に牛豚猪などの肉を商ふを業とする家、又その人もんじや。肉肆。肉店。

にくべん 肉慾 [名] 肉體上より生ずる慾。男女間の慾。性慾。情慾。色慾(色慾)。

肉慾の天國 [名] 肉慾をほしむままに、得る場所又は社會。

にくばら 荷鞍 [名] 荷を著くるための鞍。荷馬に置く鞍。くさぐら。駄架(駄架)。(乗鞍)

にくらか 憎らか 悪らか [名] 憎むべきさま。憎らに、【古語】

にくらか 憎らか 悪らか [名] 憎むべきさま。憎らに、【古語】

にくらりん 肉瘤 [名] 肉を懸けたる林。(主に形容に用ふ)

にくるん 肉林 [名] 肉を懸けたる林。(主に形容に用ふ)

ニク

にぐわん(入棺)同じ。「古語」花やがて、そのをりぞ、二火仕うまつ。女房、え仕うまつらねば、大納言・中納言・惟經・惟意など仕うまつ。さるべき御具など入れさせたまふ。[古語]

にぐわん二化[名]「動」一年に二回化するにぐわん耳外[名]耳の外。[古語]

にぐわん二化[名]「動」一年に二回化するにぐわん耳外[名]耳の外。[古語]

にぐわん二化[名]「動」一年に二回化するにぐわん耳外[名]耳の外。[古語]

にぐわん二化[名]「動」一年に二回化するにぐわん耳外[名]耳の外。[古語]

にぐわん二化[名]「動」一年に二回化するにぐわん耳外[名]耳の外。[古語]

にぐわん二化[名]「動」一年に二回化するにぐわん耳外[名]耳の外。[古語]

にぐわん二化[名]「動」一年に二回化するにぐわん耳外[名]耳の外。[古語]

にぐわん二化[名]「動」一年に二回化するにぐわん耳外[名]耳の外。[古語]

にぐわん二化[名]「動」一年に二回化するにぐわん耳外[名]耳の外。[古語]

ニク

二月は逃げて走る[句]「二月と、逃ぐと、頭韻を成す」二月の月は、一年十二箇月の中に、特に早く過ぎ去るやうに感ぜらる。[古語]

二月(一月を以て)は粉糠(か)三合で暮らす[句]二月の月は早く過ぎ去るため、生計に心を勞することなし。前條参照。[古語]

にぐわつたらう二月堂[名]大和國奈良市の東大寺にある佛堂。本尊十一面觀音は、昔攝津難波(今)の浦より得し像といふ。天平勝寶四年東大寺第二世實忠の開基。現今の堂宇は、寛文九年徳川家綱の重修に成る。本稱は絹索院(今)土俗にんぐわつ堂と呼ぶ。みづら(水取)さんむつたらう(三月堂)参照。

にぐわん二官[名]「神祇官と太政官(今)の併稱。めんわん(免官)参照。

にぐわん入棺[名]にぐわん(入棺)の略。「古語」花やがて、その夜、にくわんといふ事させたまふ。

にぐわん二巻鈔[名]「書真宗の教義を示したるもの。二巻。親鸞上人の著。小冊子なれども、教行信證にも記される深義を開示せり。二巻鈔とは西本願寺にての稱にして、東本願寺にては愚禿の鈔といふ。

にけ逃遁遁[名]「逃ぐること。遁逃。逃亡。花骨牌(今)にて、牌(今)をまきたる後、各自分の手を見定め、役(今)なきか、又は役ありても、他に出来役(今)あるべき憂あるために、つまらぬ手にて、數を得る見込なき時、一定の逃料を拂ひて、列を退くこと。おち。

逃を打つ[句]次條に同じ。

逃を打つ[句]逃支度(今)をなす。逃を打つ。

にげ二毛[名]馬の毛色の一。白と黒と二色まざりて鼠色に見ゆるものとも、なまけ(鼠毛)に同じともいふ。にげおち

ニク

にげあひ逃足逃足遁足[名]「逃げんとする足つき。逃げんとするやうすにげごし。おちあし。今昔極めておそろしくおぼえて、馬を取りて返して、逃足になるを。逃ぐる時の足どり、逃ぐること。曾我會村出居り合ふ兵(今)の、逃足強く、一人も手に立つ者候はず」

にげあひ逃穴遁穴[名]動物などの逃げ込む穴。

にげあひ逃穴遁穴[名]動物などの逃げ込む穴。

にげあひ逃穴遁穴[名]動物などの逃げ込む穴。

にげあひ逃穴遁穴[名]動物などの逃げ込む穴。

にげあひ逃穴遁穴[名]動物などの逃げ込む穴。

にげあひ逃穴遁穴[名]動物などの逃げ込む穴。

にげあひ逃穴遁穴[名]動物などの逃げ込む穴。

にげあひ逃穴遁穴[名]動物などの逃げ込む穴。

にげあひ逃穴遁穴[名]動物などの逃げ込む穴。

ニク

にげおつ逃落つ逃落つ遁落つ[動]「二自」逃げてゆく。おつ。にげおつ。原義「行軍、軍敗れて、逃げ落ちて、高野(今)にぞ籠りける」

にげかかると逃隠る逃隠る遁隠る[動]「二自」逃げて、人目にかからず。のがれひそむ。逃げも隠れもせず。参照。

にげかかると逃隠る逃隠る遁隠る[動]「二自」逃げて、人目にかからず。のがれひそむ。逃げも隠れもせず。参照。

にげかかると逃隠る逃隠る遁隠る[動]「二自」逃げて、人目にかからず。のがれひそむ。逃げも隠れもせず。参照。

にげかかると逃隠る逃隠る遁隠る[動]「二自」逃げて、人目にかからず。のがれひそむ。逃げも隠れもせず。参照。

にげかかると逃隠る逃隠る遁隠る[動]「二自」逃げて、人目にかからず。のがれひそむ。逃げも隠れもせず。参照。

にげかかると逃隠る逃隠る遁隠る[動]「二自」逃げて、人目にかからず。のがれひそむ。逃げも隠れもせず。参照。

にげかかると逃隠る逃隠る遁隠る[動]「二自」逃げて、人目にかからず。のがれひそむ。逃げも隠れもせず。参照。

にげかかると逃隠る逃隠る遁隠る[動]「二自」逃げて、人目にかからず。のがれひそむ。逃げも隠れもせず。参照。

にげかかると逃隠る逃隠る遁隠る[動]「二自」逃げて、人目にかからず。のがれひそむ。逃げも隠れもせず。参照。

には、栗焼く言葉には、逃栗・追栗・灰粉とて、三つは失せて候はず」

にげしうじやう 逃口上逃口上遁口上
【名】他人の間に對して、答辯を避けたる物いひ。にげく。遁辭。

にげこぼ 逃腰逃腰遁腰【名】逃げんとする腰つき。にげじたく。にげあし。にげじり。【責任などを避けたるとするこ

にげごぼ 逃言葉逃言葉遁言葉【名】にげごぼやう逃口上】に同じ。

にげごむ 逃込む逃込む遁込む【動四自】逃け來りて逃けこむ。にげいる。

にげごもる 逃籠る逃籠る遁籠る【動四自】逃げ隠れて、出でず。平家・泰舞陽といふ兵あり、……十三の歳、敵【物】を討ちて、燕の國へ逃げ籠れり」

にげざる 逃去る逃去る遁去る【動四自】逃げて、他所へ去る。のがる。

にげじたく 逃支度逃支度遁支度【名】逃げんとする支度。にげまらうけ。にげよ。にげごし。にげあし。和合人・臆病者の癖とて、……ぞくぞくとして、逃支度する心にて」

にげじな 逃しな逃しな遁しな【名】逃しなや水祝はるる五十掬」

にげじり 逃尻逃尻遁尻【名】逃げ行く人の尻。東海道名所記・駿野(あま)さまをそがれ、逃尻を切られ」

にげたす 逃出す逃出す遁出す【動四自】逃がした(逃出す)の略。逃がはじむ。【にげたす(逃出す)の略。逃がはじむ。】

にげたて 逃立逃立遁立【名】逃げんとする動作を示すこと。雪女五枚羽子板逃がだてしたら、撲ち据ゑる」

にげち 逃乳逃乳遁乳【名】旗に文字を書く時、その乳を我が右の方に見せること(逃乳)に對して

にげちる 逃散る逃散る遁散る【動四自】逃げて、ちりちりになる。

にげつく 似氣附く【動四自】につく(似附く)に同じ。【古語】源氏ににげついたりとも見んの御心なりけり」

にげつちり 逃尻逃尻遁尻【名】にげじり(逃尻)の詠。

にげてる 逃出る逃出る遁出る【動下自】にげら(逃出)の詠。【じ。】

にげとる 逃所逃所遁所【名】次條に同じに同じ。逃所。にげと。行くに適したる場所。にげと。

にげな 似氣無【名】にげな(似氣無し)の語幹。似げなきさま。空想あな似げなのかたの人人の夜妻(や)や」

にげなむ 似氣無し【形一】似合はしからず。釣合はず。不相應なり。源氏いと若うおはすれば、似げなく、はづかしとおはいたり」

にげのがる 逃遁る逃遁る【動下二自】逃げてまぬかる。逃遁(び)す。書圖・醍醐法師に返ひ散らされて、……逃げのがれにけれど」

にげののがる 逃退く逃退く遁退く【動四自】逃げてしりぞく。字書・物のうしろに逃げのきて」

にげののる 逃喧る逃喧る遁喧る【動四自】騒ぎながら逃ぐ。筆書・弓杖してただ打ちに打てば、とよみ逃げののするほどに」

にげのぶ 逃延ぶ逃延ぶ遁延ぶ【動上二自】遠く逃げて行く。おちのぶ。にげおつ。はしりのぶ。狂言・茶論「はあ嬉しや、逃げのびて御さる」

にげのぼる 逃上る逃上る遁上る【動四自】逃げて、高き處にのぼる。配わが逃げのぼりしありを上のほりの木の枝」

にげのびる 逃下る逃下る遁下る【動四自】逃げて、都へ行く。逃下(る)るに對して) 兼盛記・矢合(や)の討手の使の、矢一つだにも射すして逃げ上りたるいまましよ」

にげはる 逃走る逃走る遁走る【動四自】逃げて走る。急ぎて逃ぐ。逃走す。

宇治逃げなんと思ひて、人目をはかりて、飛び出でて、逃げはしる」

にげふ 二脇二夾二挟【名】(佛)次條の略。海通記・七寶の高臺には、四十八願の主、五劫思惟(ご)の光を放ちて、念佛の者を照し、二脇の片座には、三十三尊、大悲弘誓(び)の網を垂れて、苦海の沈没(び)を救ふ」

にげぶ 二脇士二夾侍二挟侍【名】(佛)左右二體の脇士。兩脇士。二脇。

にげぶる 二毛鼠【名】(にげ)二毛を見よ。馬の毛色、鼠色にして、斑のあるもの。爲患(ご)及びつる手はうちかけに見えながらにみにとられてにげぶちの駒」

にげばえ 逃吠逃吠遁吠【名】逃げながら吠ゆること。芭蕉「行く雲や犬の逃吠村しぐれ」

にげばた 逃たたくこと。源氏鳥帽子折「逃吠の犬侍」

にげぼさ 逃逆る逃逆る遁逆る【動四自】あわてて逃げて去る。並通三山壑、ヤマトニニニゲホトバシリテ」

にげまらけ 逃設逃備逃設逃備遁設逃備【名】にげじたく(逃支度)に同じ。廣野和殿が大将軍承りたらん時は、逃備して、百挺・千挺の逆櫓をも立てたまへ」

にげまど 逃惑ふ逃惑ふ遁惑ふ【動四自】逃げんとし、方向にまどふ。逃げてうろつく。逃げまよふ。用明天皇人驚泣き叫び、逃げまどひ」

にげまな 逃眼逃眼遁眼【名】逃げんと心がまへしたる時の目つきにげめ。金葉物・諸書、逃眼にぞなりにける」

にげまほる 逃廻る逃廻る遁廻る【動四自】逃げんとし、あちこちとあるさまはる。にげある。常曲・登壇(ご)にう悲しやと、五郎市は逃げまほり、……堪忍と詫びる眼元もおろおろ涙」

にげまよふ 逃迷ふ逃迷ふ遁迷ふ【動四自】にげまよふ(逃惑ふ)に同じ。

にげみち 逃道逃道遁道【名】逃げゆくべき道。血路。走路。遁路。【責任を避くべき方法。ぬけみち。】

にげみつ 逃水逃水遁水【名】春より夏にかけて、晴れわたりたる日、生ひ茂りたる草原に、水氣立ち昇りて、遠く望めば、草葉の末はゆるめきて、一寸ち白く水の流るさまに見ゆゆめきて、近づくと水に見えずなりゆくものといふ。武藏野の逃水とて、古歌に詠まれて名あれど、實は、陽炎(ご)・蜃氣樓の類なるべし。一説に、川水の、地中に伏してその流れゆく末の知られざるものなりと。【古語】散本「吾妻路にありといふなる逃水の逃竹かくれても世をすごすかな」芭蕉「逃水や椿流る竹の奥」

にげむち 逃鞭逃鞭遁鞭【名】馬に乗る人の、逃げんとし、鞭うつつこと。すてむち。吉野郡女橋「逃鞭打てひつ返す」

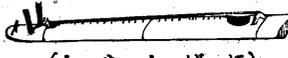
にげん 二言貳言【名】にげん(二言)に同じ。

にげんきん 二絃琴【名】琴の一種。加藤藤舟といへる人の、八雲琴を少しく改作したるものにて、絃二條を張る。歌曲も多くは、淨瑠璃・長門などの俗曲を取る。

にげんけう 二元教【名】(哲)「英・Dunand」善と惡とをこの世の始より存する根本の争闘と觀じて、兩者の神靈を對立せしむる宗教。波斯(ご)の教のごとき、その著しきものなり。

にげんちやや 二軒茶屋【名】道の左右兩側に一軒づつある茶店。腰馬(ご)平野の社に參る。……紙屋川のほとりに二軒茶屋あり。二人は空腹となりたるに、支度せんと、この茶屋に道入れば、女ども出向ひて」

にげんぢ 二軒茶屋【名】(神)大阪神社の鳥居より北、樓門までの間の兩側に、一軒づつありし茶屋。店頭に、鹽子(ご)をかけて、常に湯をたぎらし、香煎をたてて賣りたりし由。慶長の頃より有りしものといふ。後、この茶屋、漸く衰へ、神社參詣の人のために、精進を旨とし、田樂(ご)を製して、酒飯を賣りしが、終に名物となり、祇園豆腐の稱あるに至れり。俗曲・四季「春は花、いざ見にこんせ東



(ん きん げ に)

山、...

山、... 祇園豆腐の二軒茶屋 目昔、江戸深川の富岡(註)八幡宮の境内に在りて賑ひし茶屋。風来六部集里のた巻評「深川の地は、... 二軒茶屋、二軒に限らずして榮え」(俗曲、色山解撰川)寒さいとはぬ道もせや、妹春に並ぶ二軒茶屋、そもそも富ヶ岡と申せしは「四」(地)大阪市東區玉造(註)の東端の地。奈良街道に當り、伊勢參宮大和めぐり、大峰詣など送迎の場所として賑ひしが、汽車開通以來、大いに寂れたり。

にげんしき 二元的【英 Dunstie】事物の根元を二つの物とする見かた。(一元的に對して)

にげんしちう 二間牢【名】徳川幕府にて、無宿者の罪人を入れおきし牢獄、無宿牢。

にげんれんりつほうしき 二元聯立方程式【名】「數」れんりつにげんほうしき(聯立二元方程式)に同じ。

にげんちん 二元論【名】「哲」【英】Dialectic 全く對立せる二原理、例(ば有)と無物質と精神、神と世界、同情と利己心等の如きを認め、兩者の關係を、哲學、宗教、倫理等の説明に對して

にげめ 逃目 逃目 遁目【名】にげまなご(逃眼)に同じ。「古語」 漢兵にげ目をつかひて

にげようい 逃用意 逃用意 遁用意【名】にげじたく(逃支度)に同じ。最明寺殿百人上座かねてさやらの逃用意、障病神の末社殿

にげれう 逃料 逃料 遁料【名】花骨牌(註)にて、勝ち得る見込なくして、逃げ又は落ちて引込まんとする時に拂ふ料、場(註)の大小、各自の位置によりて、多少の差あり。

にこ和【名】にこやか(和やか)【同】に同じ。盛發語にこと笑ひて出て合ひたり

にこ和柔【名】にこや(和)に同じ。「古語」に「和草」に「物」に「風」

にこいた 二五板【名】「長さ」を二尺五寸と見ていふ。長さ二尺四寸、幅九寸、厚さ

二寸五分ほどの玄蕃石。にこい 尼公【名】尼(註)となる貴婦人の尊稱。あまきみ。太平記(瓜生)判官が老母の尼公

にこうちゆう 二口蟲【名】「動」ちすまにこさ 和草【名】「植」すばしん(薄葉細辛)に同じとも、くはがたさ(鐵形草)に同じとも、たんぼほ(蒲公英)に同じとも、ほねさ(箱根草)に同じともいひ、又、單にわか(若草)に同じともいふ。萬葉(蘆垣)の中に「にこ草」に同じに我とあましら人に知らぬに「新」おく箱に枯れにけらしな足柄の箱根のねるに茂るに「にこ草」

にこさ 和草の「枕」【名】草といふより、はな花にかけていふ。萬葉あしがりの箱根のねるのにこさの花妻なれや紐解かず寝む【同】同音のにこさにかけていふ。萬葉秋風に疎川邊のにこさのにこよかにしと思ほゆるかも

にこげ 和毛【名】毛髪又は羽毛の、柔かに薄く短く生えたるもの。むくげ。いもげ。「古語」和名、通古介、細羽毛也

にこじ 鏡【名】にこにこにふ。「古語」名義抄、輾然、ニココ

にこり 煮凝【名】魚などを煮たる汁の、寒さに凝(註)りたるもの。にこやし。にこよし。こよしもの。延喜式、蛭井伊具比魚煮凝【同】鮫(註)などを煮たる汁の中に、種種の具を入れて凝(註)らしたる食品。【五山】に同じ。

にこさん 尼五山【名】あまら(さん)尼寺にこし 和し柔し【形】あたらしからず。にこよかなり。やはらかなり。なごやかなり。おだやかなり。「古語」祝詞(天皇祭)山に住む物は、毛の和き物、毛の荒き物

にこしね 和稻【名】にぎしね(和稻)に同じ。和合(入)入用の品も著到し、荷(こ)しら(出来)れれば

にこす 煮凍す【動四他】にこす(煮凍す)に同じ。

にこす 濁す【動四他】にこす(濁らす)に同じ。

にこすみ 和炭【名】「消炭(註)の如く和炭(註)に同じ。荒炭(註)に對して。「古語」和名、和炭、通古須美。今案一云二賀知須美

にこそう 和奏【名】國司よりの不堪田(註)の申文(註)を、公卿の評定して奏せしこと。(荒奏(註)に對して) 江次(萬)和奏之度祝詞

にこた 植【名】「植」にんじん(人参)【同】に同じ。字、篤茂(茂)生、山其味甚苦、人能食、爾古多。又云、加之爾介

にこた 植【名】「植」くはがたさ(鐵形草)に同じ。

にこちん 英(英)Frothing【名】「化」烟草の葉又は實の中に、鹽類となりて含有せる油状の液、無色なれども、空氣に觸るれば褐色に變ず。水酒精エテテル等に溶けやすく、烟草に類する特異の臭を有し、燒刺するがごとき味あり。烈しき毒物にして、その二三滴にても、胃中に入る時は、數分間に於て死すといふ。

にこちんちゆうどく ニコチン中毒【名】烟草常用などの結果、身體にニコチンの毒毒を受くこと。前條參照。

にこちん 毒【名】ニコチンの中に含める毒。にこちん參照。

にこちゆう ニコチン【名】にこちんちゆうどく(ニコチン中毒)の略。「俚語」

にこく 動四他【名】にこにこす。にこやかに笑ふ。ほほむ。

にこく 和手 柔手【名】やはらかなる手にこよかなる手。「古語」むかづをに立てるせらがにこてこそ、吾が手を取らめ

にこごう 二鼓胸 二鼓胸【名】中部はくびれ、兩端ふくれたる鼓(註)の胸。

にこく 和和【名】にこやか(和やか)【同】に同じ。「古語」新(註)いかにして垣ほに生ふるにこ草のにこにこのみ妹にあひ見ん【同】にこやか(和やか)【同】に同じ。狭衣

にこにこ ちゆうち 笑みて

にこにこ 和顔【名】にこにこことせる顔つき。嬉しげなる顔。にこめん

煮がほ。にこにこ 煮込 煮込 煮込 込田【名】「煮込」みたる意に、にこにこ愛想よく賣る意を含めていふなるべし。おてんを煮ながら賣る時に呼び立てていふ語。「俚語」

にこにこ 和和者【名】にこにこ顔をせる人。和合(入)一番辯才を振って見せよう。... かの旅人のあたりに歩み寄り、にこにこ者にて

にこはだ 和膚 和膚【名】にぎはだ(和膚)に同じ。「古語」萬葉(夫)のみことた たなつく柔膚すらを

にこひ 似鯉 白魚【名】「動」喉鯉類に屬する魚。形、鯉に似て、鱗小さく、大なるは長き一尺餘に達す。河川など泥底の淡水に棲息し、五六月頃産卵す。肉味佳ならずして、破骨多し。さい。みこひ。

にこぶ 荷瘤【名】荷を擔ふ人の、その擔ふ箇所を生ずる瘤。にもちこぶ。和漢三才圖會、荷瘤、肩瘤也、獨身、備人、常荷、擔物、枵中處、病俗謂之三荷瘤、甚不害

にこぶ 二業【名】「佛」善業(註)と惡業(註)に同じ。

にこぼす 煮溢す 煮溢す【動四他】溢れ出づるほどに煮る。煮えこぼるるやうにす。

にこぼん【名】「故桂太郎が、他人をして、自己の所説に同意せしむる手段として、愛想よくその人の肩を打つ習慣ありしより、にこにこ顔をいふ」甘言を以て、他人を籠絡すること。「俚語」

にこぼる 煮溢る 煮溢る【動下二自】にこぼる(煮溢る)に同じ。

にこみ 煮込【名】煮込(註)を食するに當り、釜に水を充たして、煮沸し、製するにめたるもの。目(註)るこち(汗粉)を云ふ。「出雲國の方言」

にこみ 煮込【名】煮込(註)を大桶に移して、冷して澄ませ、醬油の醸造に使用し得るやうにしたる食鹽水

おえういあ けけきか せせすしき とてつちた のねねにほ ぼへふひは もめんむみま よゆや ろれるりら を五るわ

にこみをけ 煮込桶【名】煮込引【名】を製するに當り、煮込桶【名】を入れ、冷して澄ましむるに用ふる大桶。ひやしをけ。

にこむ 和心【動四自】なごむ【和心】に同じ。「古語」起「天地地祇、共和享而、アマツカミ、クニツカミ、トモニニコミテ」

にこむ 煮込む【動四他】一種種の物を、一つに入れ煮込めて煮る。【動】よく煮る。にしむ。

にこむ 蝕む【動四自】蟲の草木を食ふが如く、くひる。くひこむ。

にこむ 耳根【名】「佛」六根の一。聲境【名】に對して、耳識【名】を生ずるもの、即ち耳【名】。

にこむ 二言貳言【動四自】二度ものいふこと。ふたこと。「二言と言はせぬ」【動】既に言ひたると異なる言をなして、己が利益を計ること。前後相違のことば。二枚舌【名】を使ふこと。いひなほし。いひかへし。兩舌。謗【名】武士に二言無し。

にこむ 和物【名】やはらかなる物。一説に、「にき物又は「にき物」と訓ずべしと。「(産物)對して」【古語】詞【名】(大忌祭)「毛の和物」

にこむ 和や柔や【名】にこやかなること。なごや。「古語」聖あや垣のふはやが下、むしすまたにこやか下」

にこむ 和やか 柔やか【動】やさしくすなほなるさま。ものやはらか。しとやか。おとなしやか。おだやか。にこにこ。にこよか。婉然。溫柔。源兵にこよかなる方のなつかしきは、ことなるものを「心から嬉しげに笑を合むさま。にこ。にここ。にっこ。にっこにっこ。にこり。にっこり。にこよか。莞爾。

にこむ 婉けし【形】にこよかなり。しとよかなり。「古語」字彙、婉、從也、曲也、約也。爾己也介之」

にこむ 煮凍【名】煮こやすこと。又、煮こやしたる物。にこよし。こよしもの。「古語」名義抄、臘、ニコヤシ」

にこむ 煮凍す【動四他】煮てこごらす。煮こごりとなす。にこよす。にこらかす。「古語」字彙集、寒、ニコヤス、ニコラカス、コヨシモノ」

にこむ 和世【名】古六月の大神【名】の時、御領物【名】として、荒世【名】と共に神祇官より奉りたる和袴【名】の御衣。荒世【名】に對して

にこむ 和よか 柔よか【動】にこよか【和よか】に同じ。「古語」舊塾、秋風に靡く川邊のこ草のよかにしも思ほゆるかも」【動】なごやかと【和よか】に同じ。

にこむ 煮凍【名】にこよし【煮凍】に同じ。「古語」名義抄、臘、ニコヤシ」

にこむ 煮凍す【動四自】にこよす【煮凍す】に同じ。「古語」和名、寒、文選云、寒鶴蒸麩、師説、寒讀、古典之毛乃、此開云、通古典、寒」

にこむ 次條の略【動四自】にこよす【煮凍す】に同じ。字彙集、寒、ニコヤス、ニコラカス、コヨシモノ」

にこむ 濁ら【動四他】にこす【濁す】に同じ。發聲記、下流を濁らして」

にこむ 煮凍らす【動四他】にこら【煮凍らす】に同じ。

にこむ 濁らす【動四他】濁るやうにす。澄ますにす。にごら【濁ら】に同じ。濁ら【濁ら】に同じ。「濁らす」に同じ。發聲記、下流を濁らして」

にこむ 濁【名】にこること。澄まぬこと。又その物。【動】心の汚ること。私慾。邪念。源兵にこりなき心に任せて、目悟りえざる間におこる邪念、煩惱【名】、妄執【名】、情慾【名】など。五濁【名】。濁惡【名】。古今「はちす葉の濁に染」まぬ心もて何かは露を玉とあざむく」源兵かや姫の、この世の濁に汚れず」【動】はつきり【濁ら】に同じ。しぶり【濁ら】に同じ。酸味。

あいうえお

かきくけこ

せすせじ

たてつちた

なねぬ

はへふひ

まみむめも

やゆ

りる

わらわ

にじ「代」ぬし「主」の轉訛。「東國の方言」に「助動」にき「連體形」行きにしを「花ぞ散りし」

にじ「虹」名「理」日光が、空中に浮遊せる無数の水滴に直射する時、水滴内に於て、反射と屈折とをなし、分散せらるるによりて生ずる弧状の色帯。實は圓形なれども、その一半は、地平線下に隠るるにりよて、弧状に見ゆ。太陽と反對の天空に現れ、外環の赤色より、橙、黄、綠、靑の順序に排列し、内環の藍色に終る。時としては、普通の虹の外側に、別に、色一層薄くして、その順序全く反對する虹の生ずることあり。これ日光が、水滴中に二回反射して生ずる現象にて、前者を第一の虹、後者を第二の虹といふ。體験(てんけん)。

虹立つ「句」虹あらはる。にじふく。夫去雨はるる峰の浮雲うき散りて虹立ちわたる冬の山里

虹の帯「句」虹を帯に擬へていふ語。善の門松霞の袂、虹の帯、雲の上著もゆりかけて

虹の如し「句」意氣氣微の盛んなる形容。「氣を吐くこと、虹の如し」。出處集

にじ「文字」名「文字」の數二つ。多きは二つの漢字にて記すよりいふ。多(ま)や(實名)に同じ

二字の言葉「句」『きのふはけふの物語に「肥前國神崎の郷に、南無の二字を額に打ちたる比丘尼寺あり、すなはち二字寺といふ」とあり』「南無(なんぶ)の二字。山堂誓ありて額はん國へ往くべくは二字のことばに重ねたるかな』

二字を首に懸く「句」『二字とは、「武士」の體面を汚さぬやうにす。女殺油地獄且那より御扶持を蒙り、二字を首に

懸けたる森右衛門」二字を獻(けん)る「句」師弟の約を結ぶしるしとして、名簿(なぼ)に實名を書きて獻る。十調(じゅうてう)二字を、僧正に奉りて

二字を呈す「句」前條に同じ

にじ「二時」名「二時」の次、三時の前な時刻。午前のと午後のとあり。午前と午後との一日二回の食時。昔は、一日二食なりしなり。仍我(わが)時枯れたる賤(せんと)が身は、二時の食(け)さへ下されかね

にじ「名」名「植」にんじん(人参)を云ふ。「穢内の方言」

にじ「あかり」西明「名」日没後、しばし西の空のあかりのこと。西日のさすこと。西の空のあかりのこと。西日のさすこと。

にじ「あさね」西浅井「名」近江國の舊郡の一。明治二十九年伊香(いこう)郡に併せらる。

にじ「あなせ」西あなせ「名」戌(いぬ)の方向に西近江「名」近江國の琵琶湖以西の地。(東近江に對して)「荒蕪(あらく)乳(ち)の中、山を馳せ越して、西近江にかかりて、大津の浦に著きて」狂言廳坊「西近江から東近江まで、ちと用あつて参りまする愚僧(ぐそう)ござる」

にじ「あまね」西周「名」人「學者。津和野藩士時義の長子。漢學、蘭學、英學を修め、幕末、藩書取調所教授に任せらる。又、和蘭留學を命ぜられて政治法律を修め、歸朝後、開成所教授となる。維新の際、將軍慶喜に召され、明治以後、沼津兵學校教頭、兵部省出仕、陸軍大丞、學士會院長、元老院議員に歴任し、貴族院議員に勅選せられ、二十七年没す。年六十九。

東西に分れしもの。にじ「うけ」西受「名」家屋の一部の、西方に向きである所。間取の、西日を受くるむき。にしむき。西面。又、飛脚(ひやく)西受の竹連子、反故障子を細目に明けて

にじ「うす」西白杵「名」日向國八郡の一。郡役所を高千穂村に置く

にじ「うら」西裏「名」或建物の西方に當る背後。保正(たか)爲朝(たか)實莊(たか)殿院(たか)の西裏に返し合せて、火出づる程ぞ戦うたる

にじ「うら」西浦「名」地「常陸國霞ヶ浦の西北部。別稱、西浦湖。河内國南海内郡の村。大字西浦に、清寧天皇の坂門原(さか)陵あり。四相模國三浦郡の西側、相模灘に面する一帯の地。四伊豆國田方郡の村。風景甚だよし。同じ。

にじ「うら」西浦湖「名」地「前條」に同じ

にじ「うら」西浦湖「名」地「伊豫國十二郡の一。郡役所を入幡濱(いわた)町に置く

にじ「おほたけ」西置賜「名」地「羽前國十郡の一。郡役所を長井町に置く

にじ「おほたけ」西置賜「名」地「羽前國十郡の一。郡役所を長井町に置く

かば「花こそ咲きしにか」にじ「がう」の「たき」西河瀨「名」地「大和國吉野川の上流にある瀨。藤曲(ふじま)入静(いず)の宮瀨、西河の瀨」

にじ「がしら」西頭「名」馬などの、頭を西の方に向けをること。太平記「敵を相待ちて、西頭に馬をぞ控へたる」持統天皇御法「馬を早めて、西頭に歩まする」

にじ「かすが」西春日井「名」地「尾張國九郡の一。郡役所を枇杷島町に置く

にじ「かせ」西風「名」西方より吹き来る風。にし。にしけ。西風(せいふう)。

にじ「がた」虹形「名」虹の如き形。半圓形。天壽記「弓と矢番ひ、虹形に引き絞る」

にじ「かつ」西葛飾「名」地「下總國の舊郡の一。下野武藏兩國に接したる小郡なりしが、明治二十九年猿島(さるま)郡に合併す。

にじ「かは」西川「名」藤間(ふじま)花柳(はなぢ)と共に、那の師匠の家柄の一。元祖は仙造といひ、人形遣西川十三郎の族なりしが、五代扇造に至りて家絶ゆ。又、三代目扇造の門人に、花柳壽輔といふ者あり、初は俳優にて市川鯉吉といひ、西川光次郎と改め、弘化四年花柳の一派を立てたり。ちま(藤間)はな(花柳)参照。

にじ「かは」西川「名」地「京都の西方に在るよりいふ」山城國桂川の別稱。(東川(あづま)に對して)「源兵衛西川より奉れる鮎、近き川のいしぶしやらの物、御前にて調じまわらす」一方。

かば「花こそ咲きしにか」

にじ「がう」の「たき」西河瀨「名」地「大和國吉野川の上流にある瀨。藤曲(ふじま)入静(いず)の宮瀨、西河の瀨」

にじ「がしら」西頭「名」馬などの、頭を西の方に向けをること。太平記「敵を相待ちて、西頭に馬をぞ控へたる」持統天皇御法「馬を早めて、西頭に歩まする」

にじ「かすが」西春日井「名」地「尾張國九郡の一。郡役所を枇杷島町に置く

にじ「かせ」西風「名」西方より吹き来る風。にし。にしけ。西風(せいふう)。

にじ「がた」虹形「名」虹の如き形。半圓形。天壽記「弓と矢番ひ、虹形に引き絞る」

にじ「かつ」西葛飾「名」地「下總國の舊郡の一。下野武藏兩國に接したる小郡なりしが、明治二十九年猿島(さるま)郡に合併す。

にじ「かは」西川「名」藤間(ふじま)花柳(はなぢ)と共に、那の師匠の家柄の一。元祖は仙造といひ、人形遣西川十三郎の族なりしが、五代扇造に至りて家絶ゆ。又、三代目扇造の門人に、花柳壽輔といふ者あり、初は俳優にて市川鯉吉といひ、西川光次郎と改め、弘化四年花柳の一派を立てたり。ちま(藤間)はな(花柳)参照。

にじ「か」は「西川」(名)藤間(ふじま)花柳(はなぢ)と共に、那の師匠の家柄の一。元祖は仙造といひ、人形遣西川十三郎の族なりしが、五代扇造に至りて家絶ゆ。又、三代目扇造の門人に、花柳壽輔といふ者あり、初は俳優にて市川鯉吉といひ、西川光次郎と改め、弘化四年花柳の一派を立てたり。ちま(藤間)はな(花柳)参照。

にしき

にしきかんぼろ 西蒲原(名)「地」越後國十五郡の一。郡役所を卷(巻)町に置く。にしきかも 西加茂(名)「地」三河國十郡の一。郡役所を學母(まがは)町に置く。にしきから 螺殼(名)螺の貝殼。羅睡(まがは)の螺殼を懷中して歸りぬ。油煙(まがは)螺殼を蝸牛(まがは)と思ふらん。

にしき 錦(名)「丹敷の義。丹は赤色。敷は排列の義。即ち赤色を交へ綴る意にていふ。但し後には、赤色に限らざるに至れり」二種以上の染絲を用ひて、模様を織り出だしたる、地質厚く、美麗なる絹布。「赤地の錦」「青地の錦」「紫地の錦」若風(まがは)柿地の錦の守袋。錦(名)美しき物の響。「紅葉の錦」古今見渡せば柳櫻をこまませて都ぞ春の錦なりける。

錦暗し「古」今集に「見る人も無て散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」とあるに本づく。紅葉を、只一人にて寂し観る形容。源氏「紅葉はひとり見はべるに、錦暗う思ひたまふればなん」

錦の赤草(名)「赤地に唐草などの模様を白く染出したる草。錦の襪(まがは)「錦を用ひて作れる足衣(まがは)」。古、禮服の時用ひしもの。錦の旅(まがは)「錦を著飾りての旅。本朝三國志我も、昔は、もめん物、著つつ馴れにし縁あれば、今日の錦の旅をしぞ思ふ」

錦の波(まがは)「紅葉など散り浮びて、錦の如く、美しく見ゆる波。大徳(まがは)磯は吉野の花となり、海は錦の波漕る立田川とぞ變じけり。錦の帽子(まがは)「鷹飼(まがは)装束の一。錦を用ひて作れる帽子。定家(まがは)三首(まがは)狩人の錦のぼうし色色に鷹のしらみみあらひてぞ見る。錦の袴著て故郷に歸る(まがは)「錦を著て故郷に歸る」に同じ。「談語」盛衰記「院の御所までも、さる者ありと知ろしめされたるは、親しき奴原(まがは)が面目に非ずや。これこそ、錦の袴著て、故郷

にしき

に歸りたるにはあれ」錦の袋に裝を包む(まがは)「外観は立派にて内容の見すばらしき響。「談語」錦の御旗(まがは)「赤地の錦にて作り、その表面に、日月の形を、金銀にて打附け、又は描きたる旗。鎌倉時代以後の制に係り、古、箭刀を賜ひしに代へて官軍の武將に賜ひしもの。錦旗(まがは)」。錦を飾る(まがは)「次條に同じ。「談語」錦を著て歸る(まがは)「錦を著て故郷に歸る」に同じ。「談語」

錦を著て夜(まがは)行く(まがは)「漢書の項羽紀に「富貴不歸、如衣錦夜行」とあるに本づく。功成り、身榮えて、郷人に知られざる響。續(まがは)を著て、夜行く。「夜」の錦参照。「談語」曾我(まがは)人富みて、故郷に歸らざるは、錦を著て、夜行くが如しといふ。錦を故郷に飾る(まがは)「錦を著て故郷に歸る」に同じ。「談語」

にしき 耳識(名)「佛」六識の一。耳根(まがは)にて、音聲を識別すること。(三)にて、音聲を識別すること。にしき 二至規(名)「天」にじせん(二至線)に同じ。にしき 荷敷(名)「和船の敷板の兩側なる外板。河船の荷尻(まがは)といひ、海船のをほてといふ。加敷(まがは)。根柢(まがは)」。にしき 二食(名)「一日の中に、食事を二度すること。にしき 魚(名)「動」硬骨類に屬する魚。暖地の近海に産し、體形狭長、鰓蓋より尾部に達する黒條及び眼より吻と鰓蓋とに達せる條あり。口咽には着色の點あり、奇鱗は紫色を呈して、その縁は黄色、その他、體には種種の條線ありて、彩色美しけれど、肉は美味ならず。にしき 錦形(名)「模様の一。下圖を見よ。にしき 錦草(名)「紫地に、白く紋を出だしたる染草。おもてがは。

にしき 錦川(名)「地」周防國岩國(まがは)川の異稱。きんたに(まがは)錦帶橋(まがは)にじき 錦貝(名)「動」殻に美しき模様ある貝。錦(まがは)類に屬する軟體動物。殻は橢圓に近く、長徑三寸餘、十四本の隆起線ありて、各線上に細かき鱗板を有し、耳は前後形を異にし、後方の鱗板を有して、不等邊三角形をなす。色彩美麗にして、紅色又は紫色に白斑あるもの、褐色又は紅色に白色又は褐色の條線又は斑紋あるものなど、種種あり。我國近海に産し、肉は食用に供せらる。にしき 錦針(名)「植」なつらうたい(夏燈籠)に同じ。

にしき 錦魚(名)「動」硬骨類に屬する魚。暖地の近海に産し、體形狭長、鰓蓋より尾部に達する黒條及び眼より吻と鰓蓋とに達せる條あり。口咽には着色の點あり、奇鱗は紫色を呈して、その縁は黄色、その他、體には種種の條線ありて、彩色美しけれど、肉は美味ならず。にしき 錦形(名)「模様の一。下圖を見よ。にしき 錦草(名)「紫地に、白く紋を出だしたる染草。おもてがは。

にしき

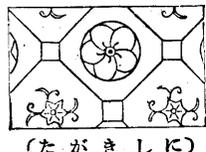
にしき 錦木(名)「昔、奥州地方に、男が逢はんと思ふ女の家の戸口に立つる習なりし木。五色に彩り、長さ一尺ほどなるもの。女同意する時は、直にこれを取り入れ、然らざるも、次次加へ立てて千束(まがは)に及ぶ時は、志深きを知り、取り入れて進ひたりといふ。にしき 錦木(名)「參照。詞意思ひかね今日立てて、錦木の千束(まがは)も待たて逢ふよしもがな」二語曲の一。袖中抄に據りて、錦木細布(まがは)の由来を作れるもの。古名、錦袋。にしき 錦帯(名)「科」に屬する落葉灌木。各地の山野に自生し、高さ一丈に達し、幹状の面に、褐色にしてコルク質なる翅状の隆起縱走す。葉は對生し、鋭頭にして錦齒あり。花は小形、黄綠色にして、初夏、柔嫩花序をなして開き、果實は蒴果にして、深く四分し、秋に至りて熟し、赤色の假種皮を有する種子露出す。秋季、美麗に紅葉するを以て觀賞用とし、材は質やや硬く、小細工用に適し、樹皮は製紙の原料となり、嫩葉は食用となる。くそまゆみ。にしき 錦(名)「植」「みぢ」はすにやはすのき。「衛矛」

にしき 衛矛科(名)「植」顯花植物。被子類雙子葉門。離瓣花區に屬する一科。喬木又は灌木。衛矛の外、黑莖(まがは)、蔓梅擬(まがは)、木荔枝(まがは)など、これに屬す。にしき 錦草(名)「植」「みぢ」はすにやはすのき。「衛矛」

にしき 錦草(名)「植」「みぢ」はすにやはすのき。「衛矛」

にしき 錦草(名)「植」「みぢ」はすにやはすのき。「衛矛」

にしき 錦草(名)「植」「みぢ」はすにやはすのき。「衛矛」



(たがきしに)

にしき

にしき 錦小路殿(名)「人」あしかた(まがは)足利直義(まがは)の異稱。にしき 錦衣(名)「植」唇形科に屬する草。山野の陰地に自生し、莖は高さ三四寸に達し、葉は對生し、卵形にして紫色を帯び、葉脈粗く、花は唇形にして小く、紫色を呈す。きんもんさう。にしき

にしき 錦草(名)「植」「みぢ」はすにやはすのき。「衛矛」

にしき 錦草(名)「植」「みぢ」はすにやはすのき。「衛矛」

にしき 錦草(名)「植」「みぢ」はすにやはすのき。「衛矛」

にしき 錦草(名)「植」「みぢ」はすにやはすのき。「衛矛」

にしきさう 錦草 [名] [植] 大戟科に属する草。山野庭園に自生し、莖は地に横臥し、よく分枝し、葉は對生し、楕圓形にして、よく、夏秋の候、各葉腋に、黄褐色の花開く。いちごき。ちぢごきにしきぐき。さかきかづら。[地錦] [前條]に同じ。

にしきざり 二色草 [名] [植] はつら (葉頭)に同じ。
にしきざら 錦皿 [名] 錦手の皿。會現會釋山御寮その日の御賞瓶……二膳白皿受けて召されたり。御相伴には、五郎丸、赤繪吳洲手(三)の錦皿、下したまはつて、これで喰ふ。[に同じ]。
にしきじやう 一名 [植] たまた (玉羊齒)にしきた 西北 [名] 西と北との間なる方角。いぬる。西北 [名] 北西 [名] に同じ。
にしきだいごん 錦大根 [名] [植] あかぢさ(赤高莖)に同じ。

にしきだひ 錦鯛 [名] [動] 硬骨類に属する魚。全體紅色を呈し、形、鯛に似て、眼甚だ大きく、鱗も大きく、鰓蓋に長き棘を具ふ。我國各地の近海に産す。きんだひ。きんときたひ。
にしきづか 錦塚 [名] 昔、奥州南部領の封境今の陸中國鹿角(三)郡の内の邊に在りきといふ古墳。千束(三)の錦木(三)を立てし男女の、未だ婚を成さずして死にしを、里人の哀みて合葬せし所といふ。[にしきぎ(錦木)に同じ]。
にしきづつ 錦包 [名] 次條の略。
にしきづつ 錦包の太刀(三) [句] 柄も、鞘も、共に錦に包める太刀。

にしきで 錦手 [名] 染附の磁器の、釉(三)にて、五色の模様を畫きたるもの。にしきやう。
にしきど 錦戸 [名] 謡曲の一。頼戸太郎泰衡(三)の、主君源義經に背きて、頼朝に從はんとせしを、弟の泉三郎忠衡(三)同心せざりしかば、遂に弟を滅す事を作れるもの。

にしきさへ 丹敷戸畔 [名] [人] 紀伊國荒坂津(三)の酋長。神武天皇東征の際、王命に抗せしため誅せられたり。にしきのうら 錦浦 参照。
にしきどり 錦鳥 [名] [動] きんけい(錦雞)に同じ。[こか(鹿)に同じ]。[古語]にしきながれ 錦流 流鼻鼻繡頂 [名] 馬の毛色の一。額より鼻の上にかけて、薄色の毛あるもの。
にしきぬり 錦塗 [名] 津輕塗のごとく、數種の色漆を不規則に蒔き散し、更に雲鶴千鳥桐鳳凰等の模様を置きたる漆器。陸奥國弘前(三)にて製造す。近代の産出に係る。津輕漆(三)に同じ。
にしきのうら 錦浦 [名] [地] 紀伊國北牟婁(三)郡にある海濱。西牟婁郡にも、串本(三)浦に近く、二色(三)浦あり、又、丹敷戸畔(三)の故址なりとの説あり、南牟婁郡荒坂村二木島(三)浦の名も、音相近きより見るに、丹敷の名は廣く熊野浦一帯に通用せしものかとも思はる。後拾遺「名に高き錦の浦に來て見ればかづかぬあまはすくなかりけり」[見よ]。
にしきのうら 二色浦 [名] [地] 前條をにしきのうらち 錦小路 [名] 姓氏の一。古の醫術の家なる丹波氏より出づ。家業を傳へて朝廷に仕へ、侍醫典藥頭・施藥院使(三)に補任せらるるを例としたり。明治維新後、子爵を授けらる。
にしきのうら 錦嶋 錦島 [名] [地] 伊勢國にある島。紅葉の名所。山家集波にしく紅葉の色を添ふゆゑに錦の島といふにやあらん。

にしきのうら 錦濱 [名] [地] にしきのうら(錦浦)に同じ。謡曲(安達原)分けゆく末は、紀の路がた、彌崎の浦をさし過ぎて、錦の濱のりをりは「にしきのうらちのみはた 錦の御旗」[句] にしき(錦)の條下を見よ。
にしきはな 錦花 [名] [植] たら(谷)にしきはな 錦花 [名] [植] たら(谷)にしきはな 錦花 [名] [植] たら(谷)

にしきぶんりう 錦文流 [名] [人] 淨瑠璃及び淨世草子の作者。大阪の僧本名、詳かならず。井原西鶴に俳諧を學び、俳名を錦頂子といふ。元祿・寶永頃の人。座敷(三)社邊に住し、淨瑠璃作者としては脚色秀てたるにはあらねど、櫻塚西吟・西澤一風と共に、古代文者三傑と稱せらる。
にしき 錦葉 [名] [地] 近江國にある紅葉の名所。夫木、いろいろの木木のみちを見渡せばはか織りかくるにしきべの里」[河内國の舊郡の一。明治二十九年南河内郡に合併せらる]。
にしきへび 錦蛇 [名] [動] 爬蟲類中、蛇類の一種。熱帯地方に産す。長さ二三丈。羊牛などをも締め殺して吞む。全身、多くは黒色又は褐色を呈し、錦の如き斑紋あり。肛門の兩側に、後肢の痕跡を存す。その鱗は藥用にすとすいふ。
にしきへみ 錦蛇 [名] [動] 前條に同じ。[古語] 和名、蛇。文字集略云、蛇、適之岐倍美。地文如三連錢錦也」。
にしきまめ 錦豆 [名] [植] へび(うら)かけまめ(黒靴掛豆)に同じ。[の一]。
にしきん 尼師今 [名] 新羅の君長の稱號にしきめがね 錦眼鏡 [名] 圓筒の中に、大き互に同じき長方形の硝子板を、三角に組みて構へ、別に、その筒の中に、種種に彩色せる硝子の小片を入れたる玩具。筒を廻しながら、一端より覗く時は、その小片、美しき六稜形をなして見ゆ。ひやく、美しめがね。[同じ]。
にしきやう 錦様 [名] にしきて(錦手)にしきやき 錦焼 [名] 本焼にしたる上に、人物・山水・花鳥・草木などを描きて、更に焼きたる陶器。
にしきゆき 錦靱 [名] 表に錦を張り附けたる、木製の切。
にしきれ 二文字切 [名] [文] 俳句の切字(三)は、一句の中に二つあるを普通とするものなるに、特に二つあること。例へば芭蕉の「君火焚けよき物見せん雪まらげ」などの類。二段切。
にしきゑ 錦繪 [名] [錦] の如く美しとして

いへる語 徳川時代に武者・役者の似顔などを木版摺にしたる、彩色美麗なる繪、多くは淨世繪師の手に成り、もと江戸の製産なれば、江戸繪又は東(三)錦繪ともいひ、又、初、一枚摺なりしかば、一枚繪ともいひ、次に、後に二二三枚摺きたるもの多く出づるに至れり。
にしきち 二文字口 [名] 相撲場(三)の内土俵の左方と右方とに、各その二俵づつを除(三)けて作りたる入口。
にしきくに 西國 [名] 西方にある國。西國(三)。土佐西(三)になれど、甲斐歌などうたふ」。
にしきくに 西國東 [名] [地] 豊後國十郡の一。郡役所を高田町に置く。
にしきくに 西頭城 [名] [地] 越後國十五郡の一。郡役所を糸魚川(三)町に置く。
にしきくに 西群馬 [名] [地] 上野國の舊郡の一。明治二十九年片岡郡と合せて、群馬郡となる。
にしきくる 踊る [動] 四他 [に] 踊る [に] 同じ。字鏡集、踊、ニシクル。ニシフム。フミニル。
にしきくるまつか 西車塚 [名] ちか(さ)のみに(さ)き(深草陵)を見よ。
にしきくわい 二次會 [名] 宴會の一、一旦終りたる後、參會者中の有志のみにて、更に開く酒宴。

にしきけ 西風 [名] にしき(西風)に同じ。
にしきけせん 二至經線 [名] [天] 『英 Solsitid contour』天球上二至點を通過して、黃道と赤道とに垂直なる大圓。(二分經線に對して)ぶんしけせん(分至經線)参照。
にしきけん 二次元 [名] [數] 『英 Quadratic (degree)』相異なる二つの未知數の積。例へば、a・b が未知數を示せるものとすれば、a・b・x などの類。
にしきいりる 二次コイル [名] [理] 『英 Secondary coil』コイルの第二コイルに同じ。
にしきうらうら 西江州 [名] [地] にしき(西)

にしきくるまつか 西車塚 [名] ちか(さ)のみに(さ)き(深草陵)を見よ。
にしきくわい 二次會 [名] 宴會の一、一旦終りたる後、參會者中の有志のみにて、更に開く酒宴。
にしきけ 西風 [名] にしき(西風)に同じ。
にしきけせん 二至經線 [名] [天] 『英 Solsitid contour』天球上二至點を通過して、黃道と赤道とに垂直なる大圓。(二分經線に對して)ぶんしけせん(分至經線)参照。
にしきけん 二次元 [名] [數] 『英 Quadratic (degree)』相異なる二つの未知數の積。例へば、a・b が未知數を示せるものとすれば、a・b・x などの類。
にしきいりる 二次コイル [名] [理] 『英 Secondary coil』コイルの第二コイルに同じ。
にしきうらうら 西江州 [名] [地] にしき(西)

にしきさう

にしきさへ

にしきぶんりう

にしきくるまつか

2202

み西近江)に同じ。(東江州に對して)
にじいんすう 二次根數 [名] 「數」『英
Quadratic root』根指數が二なる根數、又
はきを指數とする數。例へば、√2、√3
又は √5 などの類。

にじりしんじや 錦織神社 [名] 河内
國南河内郡川西村に鎮座せる神社。社殿
は足利時代の建築に係り、三間社入母
屋造(りやう)にて、前に向拜(むかひ)を葺き下
して、千鳥破風を附け、更に、軒は軒唐破
風(かぶ)とせる點、一種獨特の建築様式を
成す。芝上野日光等の東照宮の拜殿も、
これと同一の構造に屬す。

にじりたまき 錦織俊政 [名] 「人」
後醍醐天皇の朝の武士。判官代となる。
初、天皇、北條氏を討滅せんとて、元享二
年竊かに、日野資朝同後基等に命じて、
然るべき武士を召されし時、その募に應
じ、元弘元年天皇の笠置蒙塵の際にも、
車駕に供奉す。笠置城陥らんとし、將士
多く遁れ去るに當り、留戰して、遂に、そ
の子及び郎黨十三人と共に自殺す。

にじりや 錦織部 [名] 雄略天皇の時、
百濟より渡來せし錦の織工。

にじさかな 西肴 [名] 『西』とは、東より
來る春を迎ふる義なりとも、魚は西海の
を美味とするよりの稱ともいひ、又西は
假借の文字にて、實は二親の音に通ふ鯉
(り)を、その肴に用ひしためなりとも、
又、田螺(り)を、鍋の中に入れて煮せば、
その肉のづから出づるを、煮て蒸の肴
として食ひしものともいふ。初春の祝儀
に用ふる肴。『江戸時代の語』小町師(重次)
「三寶に組みしをいかににじさかな」

にじさばいっぼう 西澤一風 [名] 「人」
淨瑠璃また浮世草子の作者。大坂の書賣
本名は山本義教、通稱は正本屋九右衛門
(一説に九左衛門)、俳諧を好み、淨瑠璃
には、常に一風の名を用ひたれど、浮世草子
には、初は西澤與志又は西澤朝義(り)の
名を用ひ、又、淨瑠璃作者としては紀海音
(り)等と名を等しうし、浮世草子の作者
としては、錦文流、櫻塚西吟と共に、古代

2203

文者三傑と稱せらる。享保十六年歿す。
年六十七。

にじさばいっぼう 西澤一風 [名] 「人」 狂
言作者。一風の玄孫。幼名は利藏、通稱は
正本屋利助、後、西澤九左衛門と改め、一
風軒狂言結語堂・李斐等の號あり、俳名、
初は秋聲庵蒼蒼、後、滄滄と改む。兄利兵
衛も、才文ありて、實雖又は風堂と號せし
が、父利右衛門の歿するや、その後を繼
ぎ、父の號一風を襲ぎて別居し、書肆と貸
本業とを營み、傍ら劇作を樂し、遂に本
業の作者となり、晩年は演劇に關する著
述を事とせり。嘉永五年歿す。年五十一。

にじさむらひ 西侍 [名] 「にじさむらひ(西
侍)に同じ。
にじさんてう 西三條 [名] 「さんてう(三
條)に同じ。
にじさんてうだじん 西三條右大臣
[名] 「人」みなもさか(源光)を見よ。
にじさんてうのおとど 西三條大臣
[名] 「人」ふちはらよし(藤原良相)を
見よ。

にじさんてうのだいり 西三條内裏
[名] 京都の三條鳥丸の西室町(り)の東
に在りし里内裏、藤原顯隆の造遣に係り、
大治元年落成と共に、白河法皇、鳥羽上皇
と共に移り住ませられ、崩御の時まで在
し、後、一旦、鳥羽上皇の皇子統子内親王
の御所となり、藤原成親の造替を経て、承
安二年後白河法皇の仙洞となれり。一
名、三條室町殿。

にじしや 西周 [名] 「人」にしまね(西周)
にじしや 二次式 [名] 「數」『英 Quadratic
equation』或文字の二乗式又は二つ
以上の文字の二次元の項を含む代數式。
例へば、ax²+bx+c 又は ax²+bx+cx
などの類。
にじしやのたき 西椎谷瀑 [名] 「地」
豊前國宇佐郡南院内村宇西椎谷にある

2204

瀑。高さ一百間、幅五間。九州第一の稱
あり。

にじしま 西嶋西島 [名] 「地」播磨國播
磨洋の中にある、この國第一の大島。周
圍、約五里半。
にじしま 虹縞 [名] 虹の如き縞、又そ
の縞のある織物。二代男、虹縞の絲屋帶
にじしらは 西白河 [名] 「地」磐城國十
郡の一。郡役所を白河町に置く。
にじせん 二至線 [名] 「天」夏至(り)線と
冬至(り)線と。二至規。にじせん(二至
經線)參照。

にじせんりん 二次線輪 [名] 「理」『英
Secondary coil』だま(第二コイル)
にじそお 西贈啖 [名] 「地」大隅國の舊
郡の一。明治二十九年始良(り)郡に合
併せり。
にじそぎ 西彼杵 [名] 「地」肥前國十
四郡の一。郡役所を長崎市に置く。
にじせめ 虹染 [名] 虹の如き染模様。
縫置籠甲の總すかしの挿櫛(り)、虹染の
抱帶(り)に同じ。

にじたかづ 西高辻 [名] 姓氏の一。高
辻家の支流。後裔以長の第四子信嚴を祖
とす。明治維新の際、士籍に入りしが、十
七年男爵を授けらる。たかづ(高辻)參照。
にじたかは 西田川 [名] 「地」羽前國十
郡の一。郡役所を鶴岡町に置く。
にじたけ 西武 [名] 「人」やまもせ(したけ)山
本西武を見よ。

にじたけ 西嶽 [名] 「地」岩代國安達太
郎(り)山の別稱。
にじたにみやうもく 西谷名目 [名] 「書」
『西谷』とは、比叡山東塔に在る谷の名。『天
台宗の術語を、簡明に述べたるもの。』一
卷。著者不明。應仁頃の著ならんとの説あ
れど、疑はし。具には「天台圖宗四教五
時西谷名目」又は「天台西谷名目」。
にじたにみやうもくせう 西谷名目抄
[名] 『書』西谷名目を解釋したるもの。僧
眞迢の著。
にじたにりう 西谷流 [名] 「佛」『證空

2205

は、仁和寺西谷に新光明寺を開きしによ
りていふ。淨土宗西山(り)派四流の一。
證空を祖とし、京都東山の禪林寺(永觀
堂)を總本山とす。

にじたま 西多摩 [名] 「地」武藏國二十
郡の一。郡役所を青梅(り)町に置く。
にじたん 尼師壇(梵Nishidana) [名] 「佛」
十三資具衣(り)、又、僧の六物(り)また
十八物の一。坐臥の時敷くもの。太平記
「舍利弗(り)、定(り)より起(り)つて衣服
を整へ、尼師壇を左の肩に著け、歩むこと
師子王の如く來りたまふ」。
にじちくま 西筑摩 [名] 「地」信濃國十
六郡の一。郡役所を福島町に置く。
にじちやう 二七挺 [名] にじちやうたて
(十四挺立)に同じ。

にじちち 二七日 [名] 十四日の間。
(多くは、忌みつつし、祈りなどするに
つきていふ)。祭(り)中堂に參らせたまひ
て、二七日籠らせたまひて。徒然(り)わづら
ふ事ある折には、七日・二七日など、療治
とて籠りて。

にじちん 西陣 [名] 「地」山名の陣は、
細川勝元の堀河以東に陣せしに對して、
その以西に位せしよりいふ。『京都市の西
北隅、上京(り)區堀河の東西に涉り、一
條以北に在る地の總稱。應仁の亂に、山
名持豐の陣せし所。今、機業盛んなり。
一代玄當分の世わたり、西陣に絲線に
履はれ。』二次條の略。三代男、風小紋の布
子、西陣奥島の帯」。
にじちん 西陣織 [名] 京都の西陣
にて製産する織物、又、特に、その精巧な
る錦綾絹などの總稱。にしちん。
にじちやう 二四挺 [名] はちやうたて(八
挺立)に同じ。

にじつがる 西津輕 [名] 「地」陸奥國九郡
の一。郡役所を陸津(り)町に置く。
にじつごん 二十石船 [名] にじつごん
(從上荷)に同じ。
にじつせんきんくわ 二十錢銀貨 [名] 次
にじつせんきんくわ 二十錢銀貨幣
[名] 明治四年の新貨條例及び同三十年

三月の貨幣法に基きて發行したる、二十錢の補助銀貨、二十錢銀貨。
にじせんとさつ 二十錢札 [名] めいぢうらほ(明治通貨)を見よ。

にじちやうだて 二十挺立 [名] 小早(や)の、艦二十挺を設けて漕ぐもの。

にじつめ 西語西爪 [名] 西の橋詰(か)の、盛衰、西宮の兵(や)は、橋の西爪にて、きし詰め、きし詰め、さんざんに射ければ、面を向けたし。平家の軍兵は、東の爪に轉(か)を並べし。

にじつ 助 [名] に同じ。「これは、犬にして、猫に非ず」萬葉からころも据に取りつき泣く子らをおきてぞ來(か)ぬやおもなしにして。」

にじつ 朝集堂 [名] てうし(ぶ)だう(朝集堂)を見よ。
にじてん 二至點 [名] 「天」夏至(か)點と冬至(か)點と。「二分點に對して」

にじつ 二次電池 [名] 「理」英、secondary battery、他より電流を通じて電氣分解を起さしめたる上、普通の電池と同様に用ふるより、二次といふ。ちんちん(蓄電池)に同じ。「一次電池に對して」

にじつ 復蜻 [名] 「動」西(か)何(か)の義、鱗翅類に屬する昆蟲の蜻(か)。即ち地蟲(か)の土中に變態せるもの。多くは紡錘形にして、褐色を帯び、大さ一二寸、形、蠶の蛹に異ならず。指にてつまみて、「西はどっち、東はどっち」といへば、腰より上の方を左右に振動して、東西を答ふるが如く見ゆるより、小兒の遊ぶ所となる。にしはどっち。にしやどっち。にふだうむし。にしむけ。

にじつ 西蠅波 [名] 「地」越中國八郡の一。郡役所を石動(か)町に置く。

にじつ 西成 [名] 「地」攝津國の舊郡の一。郡役所を大阪市北區に置きしが、大正十四年大阪市の一部となり、西成區といふ。

にじつ 鏡 [名] しむじみ(染染)に同じ。伊達娘蘇麻子「この世の名残、今一度、顔がににしと見たいはいの、身を悶へ」

にじつ 西市 [名] 「地」奈良・平安兩京の、西半即ち右京(か)の市。萬葉西の市にただひとり出て眼並(か)べず買へりし絹し商(か)じりこりかも。」

にじつ 西内 [名] 次條の略。
にじつ 西内紙 [名] 「初」常陸國久慈(か)郡諸富(か)村大字西之内に産せしより、主に楮(か)の皮を用ひ、少量の米粉を混じて製する堅一尺一寸、横一尺六寸一分ありて日本紙、美濃紙よりも肉厚くして、質強く、四十枚を一帖とし、油紙・合羽の地紙、又、提灯傘などに張るに用ふ。初は常陸國の産物なりしが、製造地次第に擴張し、原料、製法等にも變化を生じたり。にしのうち。

にじつ 西海道 [名] 「地」さいかいだう(西海道)の古稱。

にじつ 西大寺 [名] さいだいじ(西大寺)に同じ。諸曲(か)龍田(か)西の大寺よそに見て、はや暮過ぎし秋篠(か)のや。」

にじつ 西の國 [名] にし(西)の條下に同じ。西の京の荒れたりつることなど宜ひ。」

にじつ 西嶋西島 [名] 「地」隱岐國島前(か)三大島の一。中島の西にあり。周圍、二十里二十六町。中央くびれて、幅僅かに二町の地塊を成し、船越(か)びての名あり。浦郷(か)の美田(か)別府宇賀の四村に分たれ、知夫里(か)島と併せて、知夫(か)郡を成す。

にじつ 西の對 [名] にし(西)の條下に同じ。西野黨 [名] 武藏の七黨の地一。今の大里郡長井村の一部なる西野の地に土著せしものとす。長井は齋藤實盛に緣ありと傳へらるる處なり。

にじつ 西父川 [名] 「地」石狩國石狩川の別稱。「下を見よ。」

にじつ 西の陣 [名] にし(西)の條下に同じ。西洞院 [名] 「地」京都の南北の通路の一。盛衰五條波(か)の西洞院在地の人。」

にじつ 西母川 [名] 「地」天龍(か)國天龍川の別稱。

にじつ 西丸 [名] にし(西)の丸に同じ。一代五丸の内、……日影も西の丸に傾くに驚き。」

にじつ 西道 [名] 「地」さいかいだう(西海道)に同じ。「古語」西道、ニシノミチ」

にじつ 西宮 [名] 「地」攝津國武庫(か)郡に在る町。西國街道に當り、大阪・神戸の中間に位し、酒造業盛んなり。

にじつ 西宮神社 [名] 攝津國武庫(か)郡西宮町字市場に鎮座せる神社。祭神は西宮大神・天照大神・大國主尊・素戔嗚尊(か)尊。俗に西宮の惠比壽(か)と稱し、福徳の神として、中世以降崇敬甚だ厚く、殊に商家に敬ばる。えびすまつり(惠比壽祭)参照。

にじつ 西宮渡海 [名] 和船(か)の一種。兵庫渡海よりも小くして、屋形(か)も矢倉臺(か)も無きもの。

にじつ 西宮大臣 [名] 「人」みなもとたかあきら(源高明)を見よ。さいきん(西宮記)参照。

にじつ 西院流 [名] 「佛」仁和寺の三流(か)を見よ。「岡」に同じ。

にじつ 西派 [名] 昔の大阪の淨瑠璃の、豊竹座に屬せし一派(東派に對して)に同じ。(アイヌ語 Nishin)「代」第二人稱。あなた。君。「北海道土人の語」

にじつ 西方式に對して」

にじつ 二次方程式 [名] 數(か)「英」Quadratic equation、未知數の最高次數が二次なる方程式。例へば、 $ax^2 + bx + c = 0$ 又は $ax^2 + 2bx + c = 0$ などの類。

にじつ 西端 [名] 「地」三河國碧海(か)郡にありし村。本多氏の舊藩地。明治三十九年明治村に入る。「明」治の初年設置の縣の一。ぬた(額田)参照。

にじつ 西側のはた。鴉籠(か)古川の西はたを。」

にじつ 西八條 [名] 「地」京都八條通の内、朱雀大路以西。平賀(か)入道相國の西八條の邸に參りて。「次條の略。右京大夫春の頃、宮の、西八條に出でさせたまへし程、月あかりし夜」

にじつ 西八條殿 [名] 「朱雀」大路以西に在りて、八條通に面したる邸宅の意。平清盛の邸宅。京都の八條坊門の南八條の北、大宮の西、壬生(か)の東、即ち今の下京區東寺の北なる大内村の邊にありしもの。一名、八條殿。はちだて

にじつ 西宮 [名] 前條に同じ。

2344

やうだいじん(八條太政大臣)参照。
にしはちてうの(だ)じやうだいじん 西八
條太政大臣【名】「人」たひらきより(平
清盛)を見よ。
「輪」に同じ。

にしはちぢぢ 復踏【名】「動」にじぢ(復
踏)はんおん 二字反音【名】「文」はんおん
(反音)を見よ。 運歩色葉集 二字反音、花
反、繩、夏反、綱、水反、罪」

にしはれ西晴【名】にしむき(西向)に同
じかるべしといふ。 新修廣雅「西はれの家の
の南庭をわたる時は、必ず右の手に据う」
にしひ 西日【名】西方に傾きたる日、又
はその光。いりひ。ゆふひ。夕陽。斜陽。

にしひかけ 西日影【名】西日のかげ。
西天に傾きたる日影。 伊賀越道中雙六尾羽
打枯れし松陰に伴ひ入るや、西日影、詠ひ
たる中の二人住(の)」。 「(七)」。
にしひがひ 西東【名】西と東と。東西
西東覺ゆ【句】物事をわきまふ。物心
を覺ゆ。やや世情に通ず。「東西(心)
を辨ふ」西も東も知らず」参照。 福山院
「西東覺えてより、終に、一度も、御氣に
遣へし事もなく」

にしふ 二執【名】「佛」我執と法執と。
にしふ 二十廿【數】十の二倍。はた。
はた。

にしふち二十一【名】「佛」Vinaya-arti
トランプの競技法の一。二十一點の點數
を得るやうにするもの。人數は、二人以
上、牌の點數は、普通、スベエトのポイン
トは(或方法にて)は戲牌(の)も、一十、
十一、零の何れを數ふる可し、その他
のポイントは一又は十、繪札は十、數札(の)
は數とほりに數ふることし、まづ、親
は各人に二枚づつの札を伏せて配り、そ
れ以上は、請求によりて表面を出して典
へ、又、五枚以上は需むべからざる定も
あり。持札の點數は、及第點即ち通例十七
八點以上二十一點以下なるを要し、又、同
じく二十一點にても、札數の多きを優者
とすることあり。親は最後に自己の札を
開き、二十一點を第一等とし、以下及第點
までは、數の多少によりて等級を定め、二

十二點以上と及第點に達せざるものと
は、勝敗の數に入らぬものとして、點數を
作る。

にしふいちじ 二十一寺【名】平安京及
びその附近に在りて、朝廷にて、恒例の御
讀經(の)を行はれし二十一箇の大大寺、即
ち廣隆寺・上出雲寺・常住寺・珍皇寺・清水
寺・延暦寺・法性寺・眞觀寺・寺極樂寺・
元慶寺・寺仁和寺・下出雲寺・祇園法成
寺・寺、鴨神宮(の)寺・六角堂佐井(の)
寺。にしふだいに(二十五大大寺)参照。

にしふいちだいに(二十一)代集【名】
「書」八代集と十三代集とを合せたる稱。
各條を見よ。

にしふいちなみ 二十一波【名】「背面の
波紋の數二十一あるよりいふ」明和五年
より同六年まで、江戸龜井月にて鑄造せ
し寛永眞鍮錢。
にしふいっかじまらうて 二十一箇寺詣
【名】口蓮宗の信徒が、同派に屬する二十
一箇の寺院に、順次に參詣すること。ひや
くかじまらうて(百日寺詣)参照。

2345

にしふいっくわい(ま)らうて 二十一回猛士
【名】「人」「吉」の字を分解すれば、「十
一」と「口」とになり、田の字は「十」と「口」
とになるを、「十一」と「十」とを合せて「二
十一」と「口」と「口」とを合せて「回」とした
るもの「よしだじやうん」吉田松陰の別號。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十一史【名】「書」支那
の正史の二十一種、即ち十七史に宋史・遼
史・金史元史を加へたるもの。にしふだいに
(二十二史)参照。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十一社【名】古の
京都の二十二社の内、吉田を除きたる二
十一箇所、最初は、伊勢神宮(の)清水(の)大原
上下賀茂松尾平野稻荷(の)春日(の)大原
野大神(の)右土(の)大倭(の)廣瀬
龍田住吉丹生(の)貴船(の)十六社な
りしを、一條天皇の御代に二十一社とせ
られ、後朱雀天皇の御代に、更に吉田の一
社を加へて、二十二社とせられしなりと
いふ。にしふだいに(二十一社)を見よ。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五と五とを
加へたる數。にしふだいに(二十五と五とを
加へたる數)参照。
二十五の曉まで延びる【句】人は、二
十五歳頃までは、生長發育の機能を具
へ、身の丈も、それまでは延ぶ。「諺語」
二十五の菩薩【句】「佛」にじふごぼさつ
(二十五菩薩)に同じ。 榮花「阿彌陀佛を
念じ奉る人」をば、二十五の菩薩も守り
たまふなり」

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五有【名】「佛」三界を
開きて、二十五所の果報の世界としたる
もの。即ち須彌(の)の四洲、又、四惡趣
を、各四有とし、六慾天を六有とし(以上
慾界)、四禪天を四有とし、初禪中の大梵
天和第四禪中の淨居(の)天と無想天と
を各一有とし(以上、色界)、四空處を四
有とし(以上、無色界)たるを合せたるも
の。諸曲(の)卷「十二因縁より、二十五有の
沉淪、生じては死し、死しては生じ、流轉
(の)に廻ること」

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五箇所參
【名】淨土宗の信徒が、紀伊國の誕生寺よ
り始めて法然(の)上人に緣ある靈場二
十五箇所を順拜すること。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五騎組【名】鐵砲
百人組の一。甲賀組(根來)組伊賀組
より後に新設せられ、與力二十五騎を以
て編制せしもの。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十石船【名】にしふ
ごぼ(二十石船)を見よ。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五絃彈三夜
【名】小勝(の)清怨(の)却飛來(の)とあり。但し文
獻通考には、十三絃十九絃二十七絃三
十六絃七十二絃の名目あれど、二十五絃
を載せず二十五の絃を張りたる、支那古
代の樂器。その製作は、今は傳はらず。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十汁五菜【名】料理の獻
立にて、本膳と二の膳と焼物とより成り、

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五菩薩【名】「佛」
「十往生經に見ゆ」釋迦・阿彌陀の二尊が
遣して念佛の行者(の)を擁護すといふ
二十五の菩薩、即ち觀音・勢至・藥王・藥上
・普賢・法自在・獅子吼(の)・陀羅尼・虛空藏
・金剛藏・德藏・寶藏・山海慧(の)・金藏(の)・
金剛藏・光明王・華嚴(の)・王衆寶(の)・王
日照王・月光王・三昧王・定自在(の)・王大
自在王・白象(の)・王大威德王・無邊身。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五菩薩
來迎圖【名】「美」阿彌陀佛の左右に二
十五菩薩薩侍し、臨終の行者(の)を來迎す
る様を描ける繪畫。諸處の寺院に所藏す
る中に、紀伊國高野山の、惠心僧都作と傳
ふるもの、最も有名なり。阿彌陀二十五菩
薩來迎圖。來迎曼陀羅。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五法【名】「佛」古、朝
廷にて行はれし御修法(の)の内、二十五
の重要なもの、即ち大元孔雀威盛光
(の)・藥師尊勝愛染明王・五大尊・尊星
(の)・王・一字金輪(の)・八字文殊(の)

本膳は飯汁坪・膾(の)・香(の)の物、二の
膳は猪口(の)・平(の)・汁なるもの。猪口
は、中皿盛又は小鉢などを以て、これに代
ふることあり。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五聲【名】宮・商・角
徵(の)・羽の五音(の)を、各五つづつに細
別していふ稱。 諸曲(の)源大夫「鼓の聲や二十
五聲の一」
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五大大寺【名】大和
國の十五大大寺に、京都及びその附近に在
る十箇の寺、即ち崇福(の)寺・梵釋寺・檀
林寺・延暦寺・眞觀(の)寺・元慶(の)寺・
仁和寺・醍醐寺・淨觀(の)寺・勸修寺を併
せていふ稱。にしふいちぢ(二十一寺)参照。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五條【名】二十五の
すぢ。にしふだいに(二十五條)の略。
二十五條の袈裟【句】「佛」袈裟の
一。大衣(の)の最も大なるもの。長き
布四、短き布一を縦に綴りて作りたる
布を、更に二十五條横に並べ綴りて仕
立てたるもの。 盛裝(の)式二十五帖の袈
裟に包みて出づ」

2346

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五箇所參
【名】淨土宗の信徒が、紀伊國の誕生寺よ
り始めて法然(の)上人に緣ある靈場二
十五箇所を順拜すること。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五騎組【名】鐵砲
百人組の一。甲賀組(根來)組伊賀組
より後に新設せられ、與力二十五騎を以
て編制せしもの。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十石船【名】にしふ
ごぼ(二十石船)を見よ。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五絃彈三夜
【名】小勝(の)清怨(の)却飛來(の)とあり。但し文
獻通考には、十三絃十九絃二十七絃三
十六絃七十二絃の名目あれど、二十五絃
を載せず二十五の絃を張りたる、支那古
代の樂器。その製作は、今は傳はらず。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十汁五菜【名】料理の獻
立にて、本膳と二の膳と焼物とより成り、

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五菩薩【名】「佛」
「十往生經に見ゆ」釋迦・阿彌陀の二尊が
遣して念佛の行者(の)を擁護すといふ
二十五の菩薩、即ち觀音・勢至・藥王・藥上
・普賢・法自在・獅子吼(の)・陀羅尼・虛空藏
・金剛藏・德藏・寶藏・山海慧(の)・金藏(の)・
金剛藏・光明王・華嚴(の)・王衆寶(の)・王
日照王・月光王・三昧王・定自在(の)・王大
自在王・白象(の)・王大威德王・無邊身。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五菩薩
來迎圖【名】「美」阿彌陀佛の左右に二
十五菩薩薩侍し、臨終の行者(の)を來迎す
る様を描ける繪畫。諸處の寺院に所藏す
る中に、紀伊國高野山の、惠心僧都作と傳
ふるもの、最も有名なり。阿彌陀二十五菩
薩來迎圖。來迎曼陀羅。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五法【名】「佛」古、朝
廷にて行はれし御修法(の)の内、二十五
の重要なもの、即ち大元孔雀威盛光
(の)・藥師尊勝愛染明王・五大尊・尊星
(の)・王・一字金輪(の)・八字文殊(の)

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五箇所參
【名】淨土宗の信徒が、紀伊國の誕生寺よ
り始めて法然(の)上人に緣ある靈場二
十五箇所を順拜すること。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五騎組【名】鐵砲
百人組の一。甲賀組(根來)組伊賀組
より後に新設せられ、與力二十五騎を以
て編制せしもの。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十石船【名】にしふ
ごぼ(二十石船)を見よ。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五絃彈三夜
【名】小勝(の)清怨(の)却飛來(の)とあり。但し文
獻通考には、十三絃十九絃二十七絃三
十六絃七十二絃の名目あれど、二十五絃
を載せず二十五の絃を張りたる、支那古
代の樂器。その製作は、今は傳はらず。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十汁五菜【名】料理の獻
立にて、本膳と二の膳と焼物とより成り、

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五菩薩【名】「佛」
「十往生經に見ゆ」釋迦・阿彌陀の二尊が
遣して念佛の行者(の)を擁護すといふ
二十五の菩薩、即ち觀音・勢至・藥王・藥上
・普賢・法自在・獅子吼(の)・陀羅尼・虛空藏
・金剛藏・德藏・寶藏・山海慧(の)・金藏(の)・
金剛藏・光明王・華嚴(の)・王衆寶(の)・王
日照王・月光王・三昧王・定自在(の)・王大
自在王・白象(の)・王大威德王・無邊身。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五菩薩
來迎圖【名】「美」阿彌陀佛の左右に二
十五菩薩薩侍し、臨終の行者(の)を來迎す
る様を描ける繪畫。諸處の寺院に所藏す
る中に、紀伊國高野山の、惠心僧都作と傳
ふるもの、最も有名なり。阿彌陀二十五菩
薩來迎圖。來迎曼陀羅。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五法【名】「佛」古、朝
廷にて行はれし御修法(の)の内、二十五
の重要なもの、即ち大元孔雀威盛光
(の)・藥師尊勝愛染明王・五大尊・尊星
(の)・王・一字金輪(の)・八字文殊(の)

2347

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五箇所參
【名】淨土宗の信徒が、紀伊國の誕生寺よ
り始めて法然(の)上人に緣ある靈場二
十五箇所を順拜すること。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五騎組【名】鐵砲
百人組の一。甲賀組(根來)組伊賀組
より後に新設せられ、與力二十五騎を以
て編制せしもの。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十石船【名】にしふ
ごぼ(二十石船)を見よ。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五絃彈三夜
【名】小勝(の)清怨(の)却飛來(の)とあり。但し文
獻通考には、十三絃十九絃二十七絃三
十六絃七十二絃の名目あれど、二十五絃
を載せず二十五の絃を張りたる、支那古
代の樂器。その製作は、今は傳はらず。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十汁五菜【名】料理の獻
立にて、本膳と二の膳と焼物とより成り、

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五菩薩【名】「佛」
「十往生經に見ゆ」釋迦・阿彌陀の二尊が
遣して念佛の行者(の)を擁護すといふ
二十五の菩薩、即ち觀音・勢至・藥王・藥上
・普賢・法自在・獅子吼(の)・陀羅尼・虛空藏
・金剛藏・德藏・寶藏・山海慧(の)・金藏(の)・
金剛藏・光明王・華嚴(の)・王衆寶(の)・王
日照王・月光王・三昧王・定自在(の)・王大
自在王・白象(の)・王大威德王・無邊身。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五菩薩
來迎圖【名】「美」阿彌陀佛の左右に二
十五菩薩薩侍し、臨終の行者(の)を來迎す
る様を描ける繪畫。諸處の寺院に所藏す
る中に、紀伊國高野山の、惠心僧都作と傳
ふるもの、最も有名なり。阿彌陀二十五菩
薩來迎圖。來迎曼陀羅。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五法【名】「佛」古、朝
廷にて行はれし御修法(の)の内、二十五
の重要なもの、即ち大元孔雀威盛光
(の)・藥師尊勝愛染明王・五大尊・尊星
(の)・王・一字金輪(の)・八字文殊(の)

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五箇所參
【名】淨土宗の信徒が、紀伊國の誕生寺よ
り始めて法然(の)上人に緣ある靈場二
十五箇所を順拜すること。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五騎組【名】鐵砲
百人組の一。甲賀組(根來)組伊賀組
より後に新設せられ、與力二十五騎を以
て編制せしもの。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十石船【名】にしふ
ごぼ(二十石船)を見よ。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五絃彈三夜
【名】小勝(の)清怨(の)却飛來(の)とあり。但し文
獻通考には、十三絃十九絃二十七絃三
十六絃七十二絃の名目あれど、二十五絃
を載せず二十五の絃を張りたる、支那古
代の樂器。その製作は、今は傳はらず。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十汁五菜【名】料理の獻
立にて、本膳と二の膳と焼物とより成り、

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五菩薩【名】「佛」
「十往生經に見ゆ」釋迦・阿彌陀の二尊が
遣して念佛の行者(の)を擁護すといふ
二十五の菩薩、即ち觀音・勢至・藥王・藥上
・普賢・法自在・獅子吼(の)・陀羅尼・虛空藏
・金剛藏・德藏・寶藏・山海慧(の)・金藏(の)・
金剛藏・光明王・華嚴(の)・王衆寶(の)・王
日照王・月光王・三昧王・定自在(の)・王大
自在王・白象(の)・王大威德王・無邊身。
にしふいっくわい(ま)らうて 二十五菩薩
來迎圖【名】「美」阿彌陀佛の左右に二
十五菩薩薩侍し、臨終の行者(の)を來迎す
る様を描ける繪畫。諸處の寺院に所藏す
る中に、紀伊國高野山の、惠心僧都作と傳
ふるもの、最も有名なり。阿彌陀二十五菩
薩來迎圖。來迎曼陀羅。

にしふいっくわい(ま)らうて 二十五法【名】「佛」古、朝
廷にて行はれし御修法(の)の内、二十五
の重要なもの、即ち大元孔雀威盛光
(の)・藥師尊勝愛染明王・五大尊・尊星
(の)・王・一字金輪(の)・八字文殊(の)

三、金剛童子如意輪樂衣(三)觀音普雨
經(三)安鎮延命四天王北斗七星十
二天・水天・星佛(三)冥通供(三)聖天供
(三)四天王供・千手供。
に「ふさん」や「二十三夜」(名)陰曆十月
二十三日の夜、この夜、月待を行ふ。
に「ふさん」や「二十三夜待」(名)二
十三夜の月待。

に「ふじ」から二十四孝(名)「人」支那
にて、孝行を以て著名なる二十四人、即ち
虞舜・漢の文帝・曾參(三)閔損・仲由・董永・
刻子(三)・江革・陸績・唐夫人・吳猛・王祥・郭
巨・楊香・朱壽昌・度野斐(三)・老萊子・蔡順・
黃香・姜詩・王襲(三)・子蘭・孟宗・黃庭堅・
元の郭居業の選といふ。荒唐無稽の俗話
なれど、我國にても、江戸時代、節用集
大雜書に、圖入として刊行してより、世
上に流布し、中には、仲由と江革とを除
き、張孝張禮の二兄弟と田眞・田廣・田慶
の三人兄弟とを以てせざるもあり。ほんとう
に「ふさかろ」(本朝三十不孝)参照。
に「ふし」しき、二十四氣(名)舊曆にて、五
日を一候とし、三候を一氣とし、一年を、
立春・雨水・春分・清明・穀雨(以上春)
立夏・小滿・芒種(三)・夏至(三)・小暑・大暑



(き し ふ じ に)

(以上、夏)・立秋・處暑・白露・秋分・寒露・霜
降(以上、秋)・立冬・小雪・大雪・冬至・小寒・
大寒(以上、冬)の二十四に分ちたるもの
候を以て數ふれば七十二候となる。も
と支那傳來の説にして、支那にても、その

廣大なる地域の何れの部分にも適用せら
るべきには非ず。従ひて、我國には、その
まは用ひがたきものなり。ほつせつ(八
節)に「ふさくせつ」(十六節)及び「二十四番の
花信風」参照。二十四氣節、二十四節。二
十四時。

に「ふじ」しき、二十四氣節(名)「人」同條
に「ふじ」しき、二十四史(名)「書」支那の
二十二史の内、唐書を新舊に分ち、これ
に舊五代史を加へて呼ぶもの。清の乾隆
年間に定めし所なり。

に「ふじ」しき、二十四節(名)に「ふさくせつ」
(二十四氣)に同じ。

に「ふじ」しき、二十七宿(名)「印度」に
て、星宿を二十七に分ちたるもの。支那
の二十八宿に比して、牛宿を闕く。

に「ふじ」しき、二十四挺立(名)
小早(三)の、繪の數二十四挺を設けて漕
ぐもの。にしろくちやち。

に「ふじ」しき、二十四輩(名)「人」に「よ」
まほし(二十四輩)を見よ。

に「ふじ」しき、二十四番(名)次條を見
二十四番花信風(三)の風(句)次條に
同じ。

二十四番の花信風(三)次條に同じ。
二十四番の花の開くを知らずる風
の義、二十四氣の中、小寒より穀雨ま
での八氣節を、各氣節を三候づつに分
ち、一候毎に新なる春の風を配當したる
もの。即ち梅・山茶(三)・水仙(以上、小
寒)・瑞香(三)・蘭山櫻(三)・望春(三)・以上、大
寒)・迎春(三)・櫻桃(三)・望春(三)・以上、桃
上、立春)・菜・杏(以上、雨水)・桃・棠梨
(三)・薔薇(以上、啓蟄)・海棠梨・木蘭(以
上、春分)・桐・麥柳(以上、清明)・牡丹・茶
藤(三)・棟(三)・以上、穀雨)。

に「ふせん」きんぐわ(二十錢銀貨)(名)
に「ふせん」きんぐわ(二十錢銀貨)を見よ。

に「ふせん」きんぐわ(二十錢銀貨)見よ。

に「ふせん」きんぐわ(二十錢銀貨)見よ。

「名」に「ふせん」きんぐわ(二十錢銀貨)を
見よ。

に「ふせん」きんぐわ(二十錢札)(名)に「ふせん」
きんぐわ(二十錢札)を見よ。

法華八講會)参照。
に「ふせん」きんぐわ(二十錢札)(名)に「ふせん」
きんぐわ(二十錢札)を見よ。

じふは

じふは

じふは

じふは

十八日なるに本づき、一日一宿と分野を劃して二十八の數を定めしものなるべしといふ。支那に於ける區分法は、東方は角(ノ)亢(ノ)氏(ノ)房(ノ)心(ノ)尾(ノ)箕(ノ)北方は斗(ノ)牛(ノ)女(ノ)虚(ノ)危(ノ)室(ノ)壁(ノ)西方は奎(ノ)婁(ノ)胃(ノ)昂(ノ)畢(ノ)猪(ノ)參(ノ)南方は井(ノ)鬼(ノ)柳(ノ)星(ノ)張(ノ)翼(ノ)輪(ノ)にじふち(ノ)に二十七宿參照。

にじふはちやうだて二十八挺立【名】小早(ノ)の、櫓の數二十八挺を設けて漕ぐもの。

にじふはつてんか二十八天下【名】天の二十八宿に配していふ。支那にて、戰國時代の英雄割據の狀態を形容していひし語。我國の戰國時代にも轉用せり。

にじふむ 踊む【動四他】にじる 踊る【ニジル】

にじふめくすり 二十丸藥【名】火繩銃に用ひし玉藥の一種。仍舊發物語。口藥に二十丸藥といふことあり。それ、なせに、十五丸磁硝三丸灰二丸硫黃、これは、よくよくおろして、口藥によきなり。

にじふめんたい 二十面體【名】數【英】Icosahedron 又 Icosahedron】二十箇の平面上にて圍まれたる立體。

にじふよかんきさく 二十四時間規則【名】「法」戰時國際法にて、交戰國の軍艦は、特別なる取極な限は、二十四時間以上、中立國の港灣内に碇泊するを得ずといふ規則。

にじふよはひ 二十四輩二十餘輩【名】「人」眞宗の祖師親鸞の高弟二十四人、即ち性信房・眞佛房・順信房・乘念房・信樂房・成念房・西念房・證性房・善性房・信房・無爲信房・善念房・信願房・定信房・道圓房・入信房・念信房・明法房・慈善房・唯佛房・唯信房・唯信房・唯圓房。親鸞の定めとも、三代目覺如の定めしものともいふ。

にじふよはいまうて 二十四輩詣二十餘輩詣【名】二十四輩に關係ある寺々に

順次參拜すること。その寺々は、性信房の建立に係る東京市淺草區北青島町報恩寺(東本願寺派)・眞佛房の下野國芳賀(西本願寺派)・村大字高田の専修寺(専修寺派)及び下總國結城郡那珂結城町那珂寺(西本願寺派)・順信房の常陸國鹿嶋郡巴村大字鳥栖(無量壽寺)及び西國同郡同村大字下富田無量壽寺(東)・乘念房の常陸國新治(郡)那珂柳町の如來寺(西)・信樂房の下總國結城郡安積郡村弘德寺(東)・成念房の同國猿島郡那森戸村の妙安寺及び上野國前橋市妙安寺(東)・西念房の下總國猿島郡那珂町西念寺(東)及び信濃國上水内(郡)那珂陽(郡)村長命寺(西)・證性房の常陸國水戸市青蓮寺及び磐城國東白河郡那珂町蓮正寺共に東、善性房の下總國結城郡石下(郡)村の東弘寺(東)・是信房の陸中國岩手郡米内(郡)村本誓寺及び信濃國松本市本誓寺(共に東)・無爲信房の磐城國東白河郡那珂町無爲信寺及び陸前國仙臺市の稱念寺(共に西)・善念房の常陸國東茨城郡酒門(郡)村善重寺(東)・信願房の下野國那須郡烏山町慈願寺(東)及び同國同郡馬頭(郡)町慈願寺(西)・定信房の常陸國那珂郡額田(郡)村阿彌寺(東)・道圓房の常陸國久慈(郡)村幸久(郡)村枕石寺(東)・入信房の常陸國那珂郡野口村壽命寺(西)・念信房の常陸國那珂郡隆輝(郡)村昭願寺(東)・入信房の常陸國筑波郡大穂(郡)村常福寺(東)・明法房の常陸國那珂郡神崎村上宮寺(西)・慈善房の常陸國那珂郡常弘寺(西)・唯佛房の常陸國那珂郡津町の淨光寺(西)・唯信房の常陸國茨城郡六戸(郡)町の唯信寺(東)・唯信房の常陸國多賀郡分村唯念寺及び同國水戸市信願寺(共に西)・覺圓房の常陸國久慈郡那佐竹村の西光寺。

にじふれう 二十寮【名】古の官制にて、八省に附屬せし二十寮、即ち大舍人(寮)・寮圖書(寮)・寮内藏(寮)・寮縫殿(寮)・寮内匠(寮)・寮大學寮・雅樂(寮)・寮支番(寮)・寮諸陵(寮)・寮主計(寮)・寮主税(寮)・寮木工(寮)・寮左馬(寮)・寮右馬(寮)・寮兵庫(寮)・寮陰陽(寮)・寮主殿(寮)・寮大炊(寮)・寮

掃部(寮)・寮齊宮(寮)・寮。

にじふろくちやうだて 二十六挺立【名】小早(ノ)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじふろくや 二十六夜【名】陰曆正月と七月との二十六日の夜。

にじふろくやまち 二十六夜待【名】密教の俗語の(ノ)の一部として、陰曆正月と七月との二十六日の夜に行ふ月待。月の出でんとして、光を放つ時、三尊の彌陀の象を現すといふ。今専ら、七月にのみ行はれ、略して、六夜待ともいふ。しちやまち(七夜待)・じちやまち(十七夜待)にじふさんやまち(二十三夜待)參照。次條の略。

にじふさんきんくわ 二十圓金貨【名】にじふさんきんくわ(二十圓金貨)の略。

にじふさんきんくわ 二十圓札【名】大正兌換券の一、二十圓に通用する紙幣。

にじふさんくわい 二十圓紙幣【名】前條に同じ。

にじふい 西閉伊【名】「地」陸中國の舊郡の一。明治二十九年南閉伊郡と合して、上(ノ)閉伊を立つ。

にじほんぐわんじ 西本願寺【名】「所」在の地、東本願寺に對して、西方なるよりいふ。京都市下京區六條堀河通に在る、眞宗西本願寺派の總本山。文永九年親鸞上人の末女覺信尼の開基。數回の移轉を経て、天正十九年現地に移る。一名本派本願寺。ほんぐわんじ(本願寺)參照。

にじほんぐわんじ 西本願寺派【名】眞宗の一派。親鸞第十一代の孫光佐の三男なる光昭を祖とし、西本願寺を總本山とす。眞宗本派。

にじまぐら 西枕【名】寝ぬる時、西方に枕を据へること。五人(ノ)脊に西枕の久七は。

にじませ 西ませ【名】西南より吹く風。

にじまつら 西松浦【名】「地」肥前國十郡の一、郡役所を伊萬里(ノ)町に置く。

にじまひつる 西舞鶴【名】「地」まひつる(舞鶴)を見よ。

にじまんだら 西曼陀羅【名】「佛」金剛界は諸佛始成の果相に屬する法門なるより、物の終歸する義ある西方と相應するよりいふ。「こんがらかいまだら(金剛界曼陀羅)の異稱。(東曼陀羅に對して)平家高野の金堂に曼陀羅を書かれけるが、西曼陀羅をば常明法印といふ繪師に書かせらる。」

にじまる 西丸【名】「城」の本丸の西方に在る郭。西の丸。江戶城の一部。本丸の西南に位し、前將軍並に世子等の住せし所。今の二重門内これなり。

にじまるひろしき 西丸廣敷【名】徳川幕府の職制の一。大奥に屬し、番頭(ノ)用達などの役員ありたり。

にじまるらうちゆう 西丸老中【名】徳川幕府の職制の一。將軍の編圖を輔翼し、西丸の衆務を統べしもの。

にじまるるさぬ 西丸留守居【名】徳川幕府の職制の一。江戶城内なる西丸の守衛を掌りしもの。るさぬ(留守居)參照。

にじまるわかじより 西丸若年寄【名】徳川幕府の職制の一。西丸老中の次に在りしもの。

にじみかき 鈍染書【名】雨中、月夜などの景を示す繪畫にて、山・樹木などを、朦朧たるさまに、にじませて描くこと、又その描き方なる繪畫。一面に水を引き、そのや乾かんとする時に描く。渲染。

にじみかみ 西南【名】西と南との間なる方角。ひつじきる。西南(ノ)。

にじみのぶ 西身延【名】めうてんじ(妙傳寺)を見よ。

にじむ 煮染む【動下二他】よく煮て、汁を染み込ませしむ。にじむ。にじむ。八美人「醤油てたやく煮染めたやうだ」煮染めたやう「句」汚れて、色の黒褐色に變じたる形容。會我虎屠見苦しい、

にじふろくちやうだて 二十六挺立【名】小早(ノ)の、櫓の數二十六挺を設けて漕ぐもの。

にじふろくや 二十六夜【名】陰曆正月と七月との二十六日の夜。

にじふろくやまち 二十六夜待【名】密教の俗語の(ノ)の一部として、陰曆正月と七月との二十六日の夜に行ふ月待。月の出でんとして、光を放つ時、三尊の彌陀の象を現すといふ。今専ら、七月にのみ行はれ、略して、六夜待ともいふ。しちやまち(七夜待)・じちやまち(十七夜待)にじふさんやまち(二十三夜待)參照。次條の略。

にじふさんきんくわ 二十圓金貨【名】にじふさんきんくわ(二十圓金貨)の略。

にじふさんきんくわ 二十圓札【名】大正兌換券の一、二十圓に通用する紙幣。

にじふさんくわい 二十圓紙幣【名】前條に同じ。

にじふい 西閉伊【名】「地」陸中國の舊郡の一。明治二十九年南閉伊郡と合して、上(ノ)閉伊を立つ。

にじほんぐわんじ 西本願寺【名】「所」在の地、東本願寺に對して、西方なるよりいふ。京都市下京區六條堀河通に在る、眞宗西本願寺派の總本山。文永九年親鸞上人の末女覺信尼の開基。數回の移轉を経て、天正十九年現地に移る。一名本派本願寺。ほんぐわんじ(本願寺)參照。

にじほんぐわんじ 西本願寺派【名】眞宗の一派。親鸞第十一代の孫光佐の三男なる光昭を祖とし、西本願寺を總本山とす。眞宗本派。

にじまぐら 西枕【名】寝ぬる時、西方に枕を据へること。五人(ノ)脊に西枕の久七は。

にじませ 西ませ【名】西南より吹く風。

にじまつら 西松浦【名】「地」肥前國十郡の一、郡役所を伊萬里(ノ)町に置く。

にじまひつる 西舞鶴【名】「地」まひつる(舞鶴)を見よ。

にじまんだら 西曼陀羅【名】「佛」金剛界は諸佛始成の果相に屬する法門なるより、物の終歸する義ある西方と相應するよりいふ。「こんがらかいまだら(金剛界曼陀羅)の異稱。(東曼陀羅に對して)平家高野の金堂に曼陀羅を書かれけるが、西曼陀羅をば常明法印といふ繪師に書かせらる。」

にじまる 西丸【名】「城」の本丸の西方に在る郭。西の丸。江戶城の一部。本丸の西南に位し、前將軍並に世子等の住せし所。今の二重門内これなり。

にじまるひろしき 西丸廣敷【名】徳川幕府の職制の一。大奥に屬し、番頭(ノ)用達などの役員ありたり。

にじまるらうちゆう 西丸老中【名】徳川幕府の職制の一。將軍の編圖を輔翼し、西丸の衆務を統べしもの。

にじまるるさぬ 西丸留守居【名】徳川幕府の職制の一。江戶城内なる西丸の守衛を掌りしもの。るさぬ(留守居)參照。

にじまるわかじより 西丸若年寄【名】徳川幕府の職制の一。西丸老中の次に在りしもの。

にじみかき 鈍染書【名】雨中、月夜などの景を示す繪畫にて、山・樹木などを、朦朧たるさまに、にじませて描くこと、又その描き方なる繪畫。一面に水を引き、そのや乾かんとする時に描く。渲染。

にじみかみ 西南【名】西と南との間なる方角。ひつじきる。西南(ノ)。

にじみのぶ 西身延【名】めうてんじ(妙傳寺)を見よ。

にじむ 煮染む【動下二他】よく煮て、汁を染み込ませしむ。にじむ。にじむ。八美人「醤油てたやく煮染めたやうだ」煮染めたやう「句」汚れて、色の黒褐色に變じたる形容。會我虎屠見苦しい、

煮染めたやうな乗物」

にしむ 鈍染む【動四自】色、染(ぬ)みて、散り亂る。墨油など、しみて擴がる。

にしむき 西向【名】西方に向くこと、又西の方面。

にしむげ 西向【名】(動)にしむ(復)に同じ。

にしむらじけき 西村茂樹【名】(人)學者。下總國佐倉藩士。幼名は平太郎、長じて鼎といひ、後茂樹と改む。字は重器。晩年、泊翁と號す。儒學を安井息軒、大槻盤溪に、西洋砲術を大塚同庵に、兵法を佐久間象山に學び、後蘭學、英學を修む。官、文部省出仕より、宮中顧問官、華族女學校長に歴任し、又、東京學士會員に推薦せられ、貴族員議員となり、文學博士を授けられ、明治三十八年歿す。年七十五。

にしむらじけなが 西村重長【名】(人)江戸の浮世繪師。通稱は孫三郎。仙花堂と號す。初、鳥居派の畫を學び、遂に一派を成し、俳優の似顔を善くす。後神田に移りて、書肆を業とせり。寶曆六年歿す。年六十五。

にしむらやま 西村山【名】(地)羽前國十郡の一。郡役所を寒河江(せむ)町に置く。

にしむらりら 西村流【名】(動)砲術の一。西村丹後守忠次を祖とするもの。

にしむろ 西牟婁【名】(地)紀伊國九郡の一。郡役所を田邊(たに)町に置く。

にしん 鮮鯨青魚【名】(動)硬骨類に屬する魚。體形は鰻に似し、大なるは、長さ一尺餘に達し、鱗は粗大柔軟にして、脱落し易く、側線には、これを缺き、頭部は裸出す。口は廣闊にして、下顎少し突出し、齒は柔軟にして細し。背部は藍色、腹部に至るに從ひ、少しく淡藍色或は淡紅色を帯びたる銀白色となり、光澤を増す。常に遠洋に棲息すれども、三四月頃、産卵のため、北海道に多く漁獲せらる。肉を食用とし、又、油を採り、粕は肥料とし、背肉は乾し



(にしん)

て各地に送らる。卵巢は塊狀をなす。これ、即ち、かつのこなり。亦食用とす。おきこのしる。かど。 「父母。雙親。兩親。

にしん 二心【名】(動)ふたおや。ちちははに「しん」二心【名】(動)心を二つにする義。即ち一心ならぬ義。心服せぬこと。ふたごころ。「二心を懷(いだ)く」。

にしん 二神【名】(動)二柱の神。に(ぞん)二尊(に)同じ。

にしん 二伸【名】(動)手紙などのおつてがき。なほなほがき。再伸。追伸。

にしん あらばら 鮭油【名】(動)鮭製造の際、搾り出す油。

にしん いし 二神石【名】(動)平庭の井戸の左右に設くる控石(ひき)。に「ん」かす 鮭粕【名】(動)鮭を煮沸して、油を去り、壓搾して乾かしたるもの。肥料及び飼料に用ふ。

にしん ひやうし 二進拍子【名】(動)音ひやうし(ひやうし)平等拍子に同じ。

にしん 煮染【名】(動)肉又は野菜を、醤油味醂砂糖などにて煮染むること、又その煮染めたる食品。八笑(は)「まづい物屋の煮染も、恐れるす」。

にしめ あげ 煮染揚【名】(動)煮染物を、油にて揚ぐること、又その食品。五人女、椎茸の煮しめあげ。

にしめ ぼろ 煮染牛蒡【名】(動)煮染めたる牛蒡。庭訓往來(てい)菜(さい)者(しや)「煮染牛蒡(にしめ)豆(まめ)に同じ。一代女、堀江焼の鉢に、飛魚の干物、蓋茶碗(け)に、煮しめ豆(まめ)絶えず」。

にしめ 煮染豆【名】(動)ざんまめ(座禪)豆(まめ)に同じ。一代女、堀江焼の鉢に、飛魚の干物、蓋茶碗(け)に、煮しめ豆(まめ)絶えず」。

にしめ 煮染物【名】(動)煮染めたる食品。看風(かん)鳥(とり)鉄(てつ)柳(りゅう)茸(しん)の(見)染(し)物(ぶつ)。

にしめ や 煮染屋【名】(動)煮染物を賣る家、又その人。和合人(わ)煮染屋(し)へ、重誦(じゆう)らしい物を取合せて、買ひにやうら。

にしやう 二聖【名】(佛)二人の聖人。八郡の一。郡役所を小林村に置く。

にしやう 二障【名】(佛)邪見などの正知見を妨ぐること、即ち理障と、貪(ごん)障、癡(ち)障、生死(し)を相續して、涅槃(ねはん)を妨ぐること、即ち事障と。貪(ごん)障、癡(ち)障、生死(し)を相續して、涅槃(ねはん)を妨ぐること、即ち事障と。貪(ごん)障、癡(ち)障、生死(し)を相續して、涅槃(ねはん)を妨ぐること、即ち事障と。

にしやう 二上山【名】(地)大和河内兩國の境に在る死火山。高田町の西一里に聳ゆ。頂上、雄嶽雌嶽の二峯に分れ、雄嶽の方高くして、一八九七尺に達す。別稱、大和富士。

にしやう 二掌侍【名】(動)明治初年の官制にて、掌侍の第二等に位せしもの、即ち勾當掌侍に次ぎしもの。

にしやがた 西屋形【名】(動)茶の湯の釜の、一種の形なるべし。其角松風や爐に富士を焼く西屋形。

にしやく はすん 二尺八寸【名】(動)太刀の刃の最も普通なる長さ。八笑(は)「たつて金を出さぬとぬかしやあ、これ二尺八寸と、腰を見れば、...大小は無し。今更丸腰に心づき」。

にしやつ 西八代【名】(地)甲斐國九郡の一。郡役所を市川大門町に置く。

にしやど 復讐【名】(動)「にしむ」(復讐)の訛(し)にしむ(復讐)に同じ。

にしやま 西山【名】(動)西方にある山。せいざん。【地】京都の西郊を南北に劃する一帶の山嶺。嵐山(あ)山(やま)など、その中に在り。南端は山崎の天王山となりて、淀川の岸に盡く。(東山、北山に對して)「更科、西由なる所におちつきたれば」。

國久慈(くに)郡に在る山。太田町の西北十四五町。その麓なる譽田村大字新宿(しん)は、徳川光圀隱棲の遺跡なり。せいざん(西山隠士(せい)せい)を參照(さん)にしやませ(せい)西山拙齋(せい)【名】(人)儒者。備中國の人。初名は思義、後、正と改め、字は見利、後、士雅と改む。初、岡白駒に學び、後、外孫那波魯堂に從ひ、又和歌を伴蒿溪(ばん)澄月(せい)に學ぶ。業成るや、専ら宋學を唱へ、書を柴野栗山に寄せて、異學を排撃す。諸侯その名聲を聞き、聘せしむるも應ぜず。寛政十年歿す。年六十四。

にしやま 西山【名】(動)西方にある山。せいざん。【地】京都の西郊を南北に劃する一帶の山嶺。嵐山(あ)山(やま)など、その中に在り。南端は山崎の天王山となりて、淀川の岸に盡く。(東山、北山に對して)「更科、西由なる所におちつきたれば」。

二つ

未至、公夢、疾爲三豎子、曰、彼良醫也、
體傷我焉、逃之。其一曰、居三之上、背
之下、若我何、醫至曰、疾不可爲也、在
背之上、背之下、攻之不可、達之不及、
藥不至焉、不可爲也」とあるに本づく
やまひ、病氣。略。

にじゆあんらん 二種安樂【名】次條の
にじゆあんらんきやう 二種安樂行【名】
【佛】有相(有)安樂行と無相安樂行との併
稱、各條を見よ。

にじゆきん 二朱金【名】徳川時代の金貨
の一。長方形にして、價額二朱なりしも
の。即ち元祿二朱金・天保二朱金・萬延二
朱金など。二朱判金。二朱判。

にじゆきん 二朱銀【名】徳川時代の銀貨
の一。長方形にして、價額二朱なりしも
の。即ち安永南銀・文政二朱銀・安政二
朱銀など。南銀二朱銀。南銀。

にじゆきん 二朱判【名】みんぶじやきんさ
つ(民部省金札)を見よ。

にじゆばん 二朱判【名】にじゆばんきん
【二朱判金】の略。【人】次條の略。其角
【二朱判】を取るが上にも年男

にじゆばんきん 二朱判吉兵衛【名】
【人】俳優。本名は中村吉兵衛。二朱判を
紋所とせるより、この綽名(あだ)あり。道
化(み)方の名人にて、大歌舞をよくし、紀
文・奈良茂などに愛せられたり。明和二
年歿す。年八十二。

にじゆばんきん 二朱判金【名】にじゆきん
【二朱金】に同じ。

にじゆばん 耳順【名】じゆん(耳順)に同
じ。運歩色葉順(耳順、ニジュン)

にじゆばん 二手類【名】【動物】人類を、哺
乳動物中の一目と立つる時、四手類(猿類)
に對して呼ぶ稱。れぢやうるる(靈長類)
參照。

二つ

幡大菩薩 足柄大明神・富士淺間(淺間)大
菩薩 二所の權現・三島大明神の御擁
護(ご)を、御疑あるべからず

二所の宗廟【名】にじよさう(二所)二所宗
廟に同じ。

にじよさう 二證【名】【佛】三學の中、戒學
を修する事證と、定(じやう)【慧】二學を修
する理證と。

にじよさう 二乘【名】【佛】【數】じよさう(自乘)
に同じ。【佛】一乘は即ち佛乘なれど
も、菩薩と佛とは、因果の別に過ぎずと
して、菩薩乘をも、一乘の中に攝し、これに
次ぐ下記の二者を、二乘と立てたるなり。

しじやう(四聖)【參照】聲聞(しやう)と緣覺
と。遠羅天(てん)【向】六塵を避け、八風を恐
れば、覺えず二乘の白鷺に墮して、永く佛
道を成(じやう)せじとなり。【佛】大乘と
小乘と。【佛】三乘と一乘と。

にじよさう 二乘根【名】【數】じよさう(二
乗)【平方根】に同じ。

にじよさう 二乗根性【名】【佛】
【二乘】即ち聲聞(しやう)と緣覺とは、自身の
出離生死(しやう)の事のみを思ひて、他を
化(じやう)する考のなきを思ひて、【自利】(じ
り)【參照】我事のみを思ひて、他人の上
を思ひやることなき心。自利のみを心に
かけて、利他の考をおこさぬこと。

にじよさう 二鐘亭【名】【人】江戸の狂
歌師。【初世】幕府の士。御徒士目付よ
り廣敷番頭となる。木室七左衛門朝忠と
稱し、又、卯雲(うづ)とも稱す。初め俳諧を
學ぶ。今日狂歌集(きやう)京物語の著あり。天明
三年頃歿す。【二世】幕府の小普請方
和田五郎兵衛定記と稱し、俳諧寮(しやう)編蝠翁
又編蝠老人とも稱す。文政十三年歿す。

にじよさう 二乗比【名】【數】じよさう(二
乗)【自乘比】に同じ。

にじよさう 二乘累【名】【數】じよさう(二
乗)【自乘累】に同じ。

にじよさう 二所參詣【名】【二所】の
權現を見よ。東海道名所記(しやう)伊豆の山は、走
湯山ともいふ。ここにまします御神をば、
走湯權現と申し奉る。昔、鎌倉の右大將、

二つ

伊豆箱根を信じ、常に二所參詣を致した
まへり

にじよさう 二所宗廟【名】【二所】をへち
【宗廟】(しやう)を見よ。日本國中にての二つの
大廟、即ち伊勢の天照大神宮と山城の石
清水(しみず)【八幡宮】と。

にじよさう 二所大神宮【名】
伊勢の大神宮の内宮と外宮(しやう)と。二宮。
正統記(しやう)内外宮(しやう)……これより二所大
神宮と申す。

にじよさう 二所略記【名】【書】しんめり
所大神宮神名略記【名】【書】しんめり
やん(神名略記)に同じ。

にじよさう 西四辻【名】姓氏の一。本
姓は藤原、四辻正二位權大納言公享の第
二子公領、始めてこの姓を稱し、官位、左
近衛權中納言中将正三位に至り、嘉永四
年薨す。子孫相續して、明治維新後、子
爵を授けらる。

にじよさう 二所語【名】【二所】の權現
を見よ。會費、文治四年戊申正月十五日に
は、鎌倉殿御二所語聞(しやう)えり

にじり 荷尻【名】にじり(荷尻)を見よ。
【初座入(しやう)】の際、膝にてにじり込み、後
を向きて、履物を揃へ、手拭にて手を淨む
るの作法あるによりていふ。茶室の客の
入口。にじりぐち。じしゆぐち(亭主口)參
照。【雨雨】、次第に舞上ること。

にじり 踊出づ・踊出づ・踊出づ【動】
【二自】坐りたるまゝ、膝にてにじり出
うにして進み出づ。【駈】駈馬(しやう)青木方齋と
いふ浪士あり、……膝手よりにじり出
づつ、掃部(しやう)に向ひて

にじりがき 踊書・踊書【名】筆にて、紙
をにじるやうにして、拙く文字を書くこ
と、又その書きたる文字。五六女(しやう)久七が
心おぼえほどににじり書(しやう)を羨しく。【舞村
【て】舞やその角文字のにじり書

にじりぐち 踊口・踊口・踊口【名】【千】
宗旦の言ひ掛てし語といふ。にじりあがり
(踊上)に同じ。

にじりこむ 踊込む・踊込む・踊込む【動】

二つ

四自【名】にじるやうにして入り込む。【
強ひて入り込む。本朝(しやう)十不孝(しやう)博奕の場に
にじり込みて(しやう)をいひても】春生(しやう)五大
方(しやう)しるに居らるる御子息といふも、こ
の後家御(しやう)の實子とせざる處へ、六右
衛門どのが、踊り込まれたる事

にじり 踊寄る・踊寄る・踊寄る【動】
【二他】抑へて、にじるやうにして、
立ち上りしめず。【笑】人物(しやう)狂はしく眼七
(しやう)をこき廻し、にじりする、物言はん
にも、聲出でず

にじり 踊寄る・踊寄る・踊寄る【動】
【四自】にじるやうにして近く寄る。おざ
りて近寄る。【源平(しやう)引陣】行綱はあたり見
まはし、にじり寄り

にじり 煮汁【名】物を煮たる汁。【金
工】作品に著色するに用ふる藥品

にじり 踊る・踊る・踊る【動】四他【押し
つけながら摩り動かす。【踏みにじる】
字並指にて、板敷に押しあてて、にじれ
ば】【足】足にて踏泥中に埋まれる蛤を漁
らんとて、足にて踏み、又は棒の先にて突
きて、その在る所を知る。【踏む】踏む【參
照】大阪の語。諸國(しやう)年中(しやう)大成(しやう)三日、
潮干。この日、所所の海潮大いに潤く。殊
に泉州堺浦、住吉の海濱甚し。これを見物
の輩、群をなし、干潟に出て、蛤を取り、
これをにじるといふ

にじり 踊る・踊る・踊る【動】四自【抑へ
つけられながら動くが如くにして進む。抑
へつけられつつ進む。押し摩るやうにし
て、靜かに動き進む。踏みつくるやうにし
て進む。若風(しやう)海水邊ににじる蟹あり】俳
諧(しやう)季(しやう)二(しやう)かたつぶり去(しやう)なれぬ方へ
にじりけり

にじり 二印岩岐【名】長き三
尺餘なる岩岐石。【翅類】に同じ。

にじり 二翅類【名】【動】しやう(二翅)の雙
にじり(しやう)西六條【名】【地】京都
六條通の、朱雀大路以西(東六條に對し
て)【前記】の西六條に在るよりいふに
しほん(しやう)西本願寺に同じ。(東六條
に對して)

にじり 二所參詣【名】【二所】の
權現を見よ。東海道名所記(しやう)伊豆の山は、走
湯山ともいふ。ここにまします御神をば、
走湯權現と申し奉る。昔、鎌倉の右大將、

にじろくでうしち 西六條藤 [名] 紋所の。西本願寺にて用ふる藤。

にしわか 西和賀 [名] [地] 陸中國の舊郡の一。明治二十九年東和賀郡と合せて、和賀郡を立つ。

にしを西尾 [名] [地] 三河國幡豆の郡の西北部にある町。郡役所あり。松平氏の舊藩地。

にしをか 西岡 [名] 西方にある丘陵。にす 假漆 [名] [化] わにす(假漆)の略。

にす 似す [動下] 二他 [名] 似るやうにす。まぬ。摸倣す。日まねて作る。偽造す。贋造す。

にすす 煮煤 [名] 煤の煮たるもの。板などの色つけに用ふ。

にすり 丹摺 [名] 赤き土にて、色をすりつくること。又その衣。虱にすりの袖にすり 荷摺 [名] 次條の略。

にすりいた 荷摺板 [名] 倉庫などの内部の周圍に張れる厚板。にすり。

にすぬ 二水 [名] 漢字の偏の一。「氷」「凍」「冷」などの字の左にある「水」の字の變體。「三水に對して」にすぬえい 二水永 [名] にすぬえい(二水寛永の略)。

二世を契る。二世を誓ふ。二世と替(ひきか)す。雜種(雑種)の月(ツキ)の紅葉(こうよう)二世と契りていとしいもの、そもじに怨のあるべきか

二世の縁(えん) [句] 夫婦の縁。諸曲(しよきょく)初瀬(はつせ)西行(さいぎやう)げにげに、二世の縁盡(えんじん)きず、今宵(けふ)御目(ごめ)にかかると、これ御本尊(ごほんそん)の御引合(ごひきあ)なり

二世の固(かた) [句] 夫婦の契を固む二世の語(ことば) [句] 二世の約束に同じ。二代男(にだいおとこ)二世の語らひ、人も知(し)って淺(あ)からず

二世の願(ねが)い [句] 夫婦の縁の、あの世に至りても絶(た)えざるやうにとの願望(ねが)い。二世の大願(だいがん)。諸曲(しよきょく)初瀬(はつせ)行(ぎやう)いよいよ二世の願成就(ねが)い成就(じゆじゆ)して、一蓮(いつれん)同生(どうせい)候(まう)

二世の契約(けいぎやく) [句] 二世の約束に同じ。替替(か)り代(しろ)り女(に)女(に)配(は)い(せ)の二家(にけ)兩姓(りうせい)の契(け)り。替替(か)り代(しろ)り女(に)女(に)配(は)い(せ)の二家(にけ)兩姓(りうせい)の契(け)り。

二世の大願(だいがん) [句] 佛(ほとけ)二世の願(ねが)いに同じ。榮花(えいげ)二世の大願(だいがん)、あひ叶(あひこ)はじやなどぞ云(い)ふ

二世の頼(たの)み [句] 來世(らいせい)にて逢(あ)はるべきたのみ。心中(しんじゆう)おぼはれ願(ねが)ひ世(よ)の中に絶(た)えて心中(しんじゆう)なかりせば、二世の頼(たの)み無(な)からまし

二世の契(け)り [句] 二世の約束に同じ。發誓(はつせい)誠(まこと)に二世の契(け)りや、愛念(あいねん)類(るい)なくして、月日(げつじつ)を重ねし程(ほど)に、その期(き)に(こ)も満(み)ちなければ、産(う)まらかにして

二世の夫(う)つ [句] 二世かけて變(か)らじと誓(ちか)ひし妻(つま)。佛(ほとけ)原(もと)原(もと)見(み)送(おく)るは二世の夫(う)つ、見返(みかへ)れば三世の父(ちち)二世の妻(つま) [句] 二世かけて變(か)らじと誓(ちか)ひし妻(つま)。五十(いそ)年(ねん)息(いき)念(ねん)佛(ほとけ)我(われ)こそ、清(きよ)十郎(じちろう)が二世の妻(つま)

かたらひ。二世の約束。一谷(いちや)敷(し)軍(ぐん)記(き)親(おや)が許(ゆる)さうが、どうせうが、敦(とん)盛(せい)棟(とう)とは二世の約束

二世を契る [句] 二世と契るに同じ。二世を誓(ちか)ふ [句] 前條(ぜんじょう)に同じ。八陣(はつじん)守(まも)りて

にせ あんらん 二世安樂 [名] 佛(ほとけ)佛(ほとけ)の慈悲(じい)によりて、現世(げんせい)も、安樂(あんらく)なること、又(また)その安樂(あんらく)なる現世(げんせい)と來世(らいせい)と。現世(げんせい)安樂(あんらく)後生(ごせい)善所(ぜんじよ) 諸曲(しよきょく)初瀬(はつせ)寺(てい)五障(ごじやう)の雲(うん)のかかる身(み)を、助(たす)けたまはば、この世(よ)より、二世安樂(にいせいあんらく)の國(くに)、はや生(な)れゆかんぞ嬉(よろこ)しき

にせす 二姓 [名] 二つの姓氏(せいせい)。兩姓(りうせい)。禮記(れいき)の昏(こん)我(われ)篇(へん)に「昏(こん)禮(れ)者(しや)、將(まさ)合(あ)合(あ)二姓(にせい)之(これ)好(こう)上(じやう)以(もつ)事(こと)宗(そう)廟(びやう)而(して)下(くだ)以(もつ)繼(けい)後(ご)世(せい)也(なり)」

二姓の好(こう) [句] 二姓(にせい)を合(あ)す [句] 前條(ぜんじょう)を見よ 婚(こん)を結(むす)ぶ。婚(こん)禮(れ)を行(な)ふ。

にせす 二星 [名] 二つの星。牛郎(びやうりやう)星(せい)と織女(おひめ)星(せい)。たなはた(七夕)參照(さんしやう)。芭蕉(ばせう)「鳥(た)の川(が)に翅(は)を並(なら)べて、二星(にせい)の媒(ま)いとなれり」其(その)二星(にせい)私(せ)かに憶(おも)ひ隣(りん)の娘(むすめ)年(とし)十五(じふご)

にせす 二聖 [名] 二人の聖人。二人(ににん)我國(わが)古代(こくたい)の二人(ににん)の歌(うた)聖(せい)即(すなは)ち柿(かき)本人(ほんにん)塵(ちん)と山部(やまべ)赤人(せきじん)と。諸曲(しよきょく)初瀬(はつせ)「古今(ここん)の歌(うた)歌(うた)を選(えら)び、二聖(にせい)六歌仙(むつかせん)を始(はじめ)として」二人(ににん)我國(わが)古代(こくたい)の二人(ににん)の書(か)聖(せい)、即(すなは)ち嵯峨(さあが)天皇(てんかう)と空海(くうかい)と。「二聖(にせい)三筆(さんぴつ)」

二聖一賢 [句] 一人(ひとり)「轉(ま)愈(よ)の評(へい)臣(しん)論(ろん)に出(い)づ」大禹(たいう)孔子(こうし)と墨子(ぼくし)と

にせいん 似印(にいん)偽印(ゐいん)贗印(わういん) [名] いっはり似(に)似(に)せて造(つく)りたる印章(いんじやう)。偽造(ゐぞう)の印(いん)。にせ

いんばん。にせはん。偽印(ゐいん)謀判(ぼくばん) [名] にせいんばん 似印(にいん)判(ばん)偽印(ゐいん)判(ばん)贗印(わういん)判(ばん) [名] 前條(ぜんじょう)に同じ。

にせがね 似金(にがね)偽金(ゐがね)贗金(わうがね) [名] いっはり似(に)似(に)せて造(つく)りたる貨幣(かへい)。贋造(ゐぞう)の貨幣(かへい)。

にせきん 似銀(にぎん)偽銀(ゐぎん)贗銀(わうぎん) [名] 贋造(ゐぞう)の銀貨(ぎんが)。にせきん 似銀(にぎん)偽銀(ゐぎん)贗銀(わうぎん) [名] 贋造(ゐぞう)の銀貨(ぎんが)。

にせむらさき

らうとしたれども」
にせむらさき 似手紙、偽手紙、贋手紙〔名〕
いつはり似せて書きたる手紙。にせぶみ、
偽書。
にせむらさき 似秤、偽秤、贋秤〔名〕いつ
はり似せて造りたる秤。露迦如來蓮生食、物
の懸からぬ贋秤、打折るが大法、國法」
にせむらさき 似判、偽判、贋判〔名〕にせむら
さき(似印)に同じ。會根橋心中「騙(ウラ)を言うて
縛られての、偽判して括られてのと、ろく
な事は一つも言はず」
にせむらさき 似版、偽版、贋版〔名〕いつは
り似せて造りたる版。にせの出版物。偽
版(ウラ)。
にせむらさき 似筆、偽筆、贋筆〔名〕にせむ
らさき(似筆)に同じ。白石「これに、最前作平
が贋筆、邪智深き筆七、必ず油断は致すま
じ」(俗間路山色義)「見す見す知れた、こり
や偽筆」
にせむらさき 似病氣、偽病氣〔名〕いつ
はりて病氣をよそほふこと。又その病氣、
つくりやまひ。假病(ウラ)。作病(ウラ)。
にせむらさき 似札、偽札、贋札〔名〕にせむ
らさき(贋札)に同じ。
にせむらさき 似筆、偽筆、贋筆〔名〕いつは
り似せて書くこと。又その書きたるも
の。偽筆(ウラ)。
にせむらさき 似文、偽文、贋文〔名〕にせむ
らさき(似手紙)に同じ。川中島合戦「そなたの似
文して、兄様を呼寄せんため」
にせむらさき 似枅、偽枅、贋枅〔名〕いつは
り似せて造りたる枅。
にせむらさき 似紫、偽紫〔名〕江戸時代に流
行したる、一種の紫染。一代玄明野(ウラ)が
原の茶屋風俗、さりとはをかしげに、似
紫のしつこく」
にせむらさき おなかげん 修紫田舎源
氏〔名〕「書」紫式部の作に倣ひたる意
にて、修紫といふ。柳亭種彦の著せる草
雙紙合巻物。源氏物語を饒案せるもの
にて、光る源氏を足利將軍光氏とし、實物詮
義のために不品行をなすやうに作り替
へ、實は徳川時代の事相を描きたるもの。

三十八編百五十二冊より成り、文政十二
年より天保十三年まで、前後十四年に互
りて出版せらる。作者死没のため、楨柱
の巻までにて終り、挿畫は歌川國貞の筆。
略して、田舎源氏ともいふ。
にせむらさき 似勤、偽勤、贋勤〔名〕を云ふ。
(安房國の方言)
にせむらさき 二千石〔名〕支那漢の世の
制度にて、郡の太守の祿二千石なりしよ
りいふ、支那にては、郡は縣の下に在れ
ども、支那にては、當時の制、郡は却りて
縣の上に在りたり。せき石(參照)「げんち
じ(府縣知事の異稱)
にせむらさき 二禪天〔名〕「佛」だいにせんで
ん(第二禪天)の略。
にせむらさき 二錢銅貨〔名〕次條の
にせむらさき 二錢銅貨幣〔名〕明
治四十年新貨條例に基きて發行せられ、
明治三十年青銅貨の發行と共に、その鑄
造の廢せられたる、二錢の補助銅貨。二
錢銅貨。
にせむらさき 二尖瓣〔名〕「醫」羅 Vah-
ha bhansradhols「そぼらへん(僧帽瓣)に同
じ。さんせん(三尖瓣)參照。
にせむらさき 二千里外〔名〕次條を見よ。
二千里の外(ウラ)〔句〕次條を見よ。増
築はるばると見やらの海の眺望、二
千里のほかも、残なき心地する、今更め
きたり」
にせむらさき 二千里の外(ウラ)の故人の心〔句〕「支
那唐の白居易の八月十五日夜、禁中獨
直對月憶三元九」と題する詩に「三五
夜中新月色、二千里外故人心」とあるに
本づく「月の光に對して、遠方にある友
も、この同じ月を仰ぎ眺むるならんと
思はれて、その友を懐しく感ずる意。
源氏合符は十五夜なりけりとおぼし出
でて、殿上の御遊戀しく、ところどころ
ながめたまふらんか」と思ひやりたま
ふにつけても、月の顔のみまもられた
まふ。二千里の外(ウラ)の故人の心と詠(ウラ)
じたまへるに、例の涙もどまらず」
にせむらさき 似銘、偽銘、贋銘〔名〕酒味、

醬油などの銘を、いつはり似せたるもの。
朝雲酒に、味噌桶のにせ銘を書きつけ」
にせむらさき 似物、偽物、贋物〔名〕いつは
り似せて作りたる物。偽造の品。まがへ
もの。偽物(ウラ)。贋物(ウラ)。
にせむらさき 似者、偽者、贋者〔名〕その人
らしく見せかけた人。川中島合戦二人の
中、一人は似者、何方(ウラ)か誠の信玄」
にせむらさき 似山伏、偽山伏、贋山伏
〔名〕山伏らしくよそほへる者。そらや
まふし。つくりやまふし。
にせむらさき 似野郎、偽野郎、贋野郎〔名〕
「やら(野郎)を見よ(臺)」などをか
ぶりて、狂言物真似などをなすことか。
寛文六年六月十一日町屋町内に、にせ野郎を
拵へ、附裝(ウラ)「裝束など持參致し、方方
へ參り、又借裝束などにて、狂言させ候
由、相聞」
にせむらさき 似繪、偽繪、贋繪〔名〕人又は動物などを寫
生せる繪。「鎌倉時代の語」書聞似繪を
御好みありけるに」機記「畫二牛馬之
似繪」
にせむらさき 二鼠〔名〕二匹の鼠。兩鼠。日
「佛」毛色の白きと黒きとの二匹の鼠の
義。次條參照。晝夜又は日月の譬。兩鼠。
「月の鼠(ウラ)の鼠參照。
にせむらさき 二鼠(ウラ)を認む〔句〕「寶頭盧突羅
闍爲院延王說法經に「昔日有、人、行
在曠野、逢二大惡象、爲象所、逐、狂懼
走突、無所依怙、見二丘井、即擊三樹
根、入三井中、藏。有白黑鼠、牙擊三樹
根、此井四邊、有四毒蛇、傍、擊三樹下
而此井下、有二大毒、飲、傷、其二人。
畏毒龍、所攀之樹、其根動搖、樹上有二
蜜三帝、墮其口中、于時動樹、樹、三環
蜂窠、衆蜂散飛、咬、螫其人。有二野火、起、
復來燃樹。乃至曠野者、噓、三生死。彼男
子者、噓、於凡夫、象、噓、無常、丘井、噓、於
人身、樹根、噓、人命、白黑鼠、噓、晝夜、
罽、三樹根、噓、一念、滅、四毒蛇、噓、四
大。蜜者、噓、五欲、衆蜂、噓、惡覺、野火
燒者、噓、老、下毒龍者、噓、死」とあるに
本づく。又、名義集の卷五に「大集云昔

有二人、遊三醉象、生死(緣、藤(命
根)、入井(無常)、有黑白二鼠(日月、
嚙、藤將、絕、傍有四蛇、欲、螫、四大)、
下有三龍、吐火、張爪、拒之(三毒)、其
人仰望、二象已臨、二井上、憂惱無託、忽
有蜂、過、遺、蜜、滴、入、口(五欲)、是人
嗔、害、空亡、危懼、ことあり」人生のは
かなく無常なる譬。
にせむらさき 二會〔名〕「人」會我前成と、その弟
時致(社)と。會我兄弟。
にせむらさき 二祖〔名〕高祖と世祖と。日(人)
「支那に於ける禪宗の第二祖なるよりい
ふ」(慧可)の異稱。「見よ。
にせむらさき 二祖斷臂(ウラ)〔句〕「佛」(慧可)を
二祖斷臂(ウラ)〔句〕「佛」(慧可)を
にせむらさき 二祖忌〔名〕「佛」(達磨)忌
と百丈(慧可)忌と。日(禪寺)にて修する達
磨忌と、その寺の開山忌と。
にせむらさき 二足〔名〕「驢」驅餘に「山徒法
師、井中方妻帶來、禁三足、二足、不禁
魚」とあり」(てうる(鳥類)の異稱。
にせむらさき 二足掛〔名〕相撲(ウラ)の手
にせむらさき 二束三文〔句〕「二束の
物も、錢三低くらに値するのみなる義」
價の甚だ低きこと。「二束三文に賣り捨
つ」和合人下手地口(ウラ)を十把一から
げ、二束三文に並べたがる輩は」
にせむらさき 二束引〔名〕豊前國より産
出する板紙。
にせむらさき 二尊〔名〕伊非諾(ウラ)尊と伊
非册(ウラ)尊と。二神。日(佛)釋尊、即ち
釋迦と慈尊即ち彌陀(ウラ)と。
にせむらさき 二尊庵〔名〕さかほら(ウラ)酒
井抱一(ウラ)の號。
にせむらさき 二尊院〔名〕山城國葛野(ウラ)
郡嵯峨村にある淨土宗の寺。小倉山(ウラ)
阿耨菩提(ウラ)寺と稱す。古は天台眞
言律淨土の四宗兼學、漸次退轉せしに、

にせむらさき

にせむらさき

にせむらさき

法然上人、教旨弘通の場とし、高足信空
その後を承けてより、また興隆す。本尊
は、快慶作の釋迦と彌陀(二)と。

に「さんおん」えんき 二尊院縁起(名)
「美」前條の二尊院の縁起を描けるもの。
畫は狩野元信、詞書は伏見貞致親王及び
三條西公條(二)、又、外題は後奈良天皇の
宸翰と傳へらる。「と、又その物。

にた「仁多」(名)「地」出雲國六郡の一。郡
役所を三成(一)村に置く。に同じ。
に「た」二諦(名)「佛」真諦(出世間門)
と俗諦(出世間門)。真宗にては、佛法、
王法をこれに配して、盛んに鼓吹せり。
佛典(下)「忍辱(三)」「二諦の衣(三)」「
二諦相資(三)」「句」「佛」真諦と俗諦と
相資(三)けて、圓滿なる結果を生ずるこ
と。真宗の要旨とする所なり。

にたいくわん 二諦觀(名)「佛」『空觀
成就する時は、單に空觀を成(三)するの
みならず、俗諦も歴然として顯現するに
よていふ。』

にだいにしほり 二代縛(名)「次條に同じ。
にだいにせつ 二代絶(名)「あざつ(後絶)
に同じ。

にだいのきさき 二代后(名)「人」『近
衛天皇と二條天皇との二代の皇后となり
たまひしよりいふ。』ふぢほらます(藤原多
子)の異稱。

にだいのふ 仁大夫(名)「江戸時代に、諸浪
人の頭(三)にて、江戸中の門附(三)渡世
の者に、鑑札を出だすことを掌りし者。
にたう 二刀(名)「りやうたう(兩刀)」「
に同じ。

にたう 二桃(名)「二箇の桃の實。
二桃三士を殺す(句)」「晏子春秋
の諫下篇に見ゆ」支那齊の景公に、公
孫捷、田開疆、古冶子の三勇士あり。皆、
功を誇りて、我儘なりしかば、景公患へ
て、宰相晏子の計を用ひ、三子、二箇の
桃を與へて功の大なる者二人、これを
食ふべしといひしに、公孫捷は虎を搏

ちし功ありとて、一桃を取り、田開疆は
三軍を禦ぎし功ありとて、一桃を取り
しが、古冶子の、その水に入りて、鱉を
殺しし功ありといふに及び、捷と開疆
との功、これに及ばず、まづ桃を取りし
ことを恥ぢて、共に死し、古冶子も、一
人生きんは不仁なりとて、やがて亦、死
にきといふ故事。『奇計を用ひて、人
を自殺せしむる譬。』

にたう 二島(名)「地」壹岐(一)島
と對馬(一)島と。さびよるうか(一)六十
六箇國(參照)。

にたう 二道(名)「文道と武道と。文
藝と武藝と。文武兩道。『佛道統紀の
卷三十に「殘穢在身、爲欲(三)除便、在二
二道、成男女根(三)とあり」身體の内、大
小便の通ずる道。正統記この稻米を食せ
しにより、身に殘穢出て來ぬ。この故に、
始めて二道あり。』佛、難行(三)道と
易行(三)道と。四「佛」有漏(三)道と無漏
(三)道と。

にたう てつじんりう 二刀鐵人流(名)
『鐵人は青木金家の號「劍道の流派の一。
宮本武藏(一)の門人青木城右衛門金家を
祖とするもの。』

にたう 二刀流(名)「劍道の流派
の一。左右兩手に、大小の刀を執りて闘
ふもの。宮本武藏(一)を祖とす。二天(三)流。
武藏流。政名(三)流。圓明流。神免
流。『りやうたう(三)か(兩刀流)』に同じ。

にたがひ 似目(名)「仁田貝(名)」「動」にた
りがひ(似目)を見よ(三)がひ(似目)に同じ。
にたか 似たか(名)「似たか寄ったか
(句)に(似る)の條下を見よ。

にたき 煮焚(名)「食物を煮又は焚
くこと。飯を炊(三)き、菜(三)を煮ること。
炊事(三)」。』

にたじ 荷出(名)「荷物を送り出すこ
と。略。』

にたじ 煮出(名)「だしじる(煮出汁)の
にだし(から)煮出殻(名)煮出したる殘
のかす。にから。
にたじ 煮出汁(名)「削りたる鰹節

又は昆布などを、湯にてよく煮出したる
汁に、味を附け、漉(三)して、滓(三)を去れ
るもの。吸物などの汁に用ふ。にだし
だしじる。なし。煎汁。

にたじ 煮立つ(動)「二他」煮え立つや
うにす。沸す。

にたじ 煮立つ(動)「動四自」にた(三)煮立つ(三)
にた(三)煮立つ(三)「動四自」にた(三)煮立つ(三)
にた(三)煮立つ(三)「煮立つこと。』
煮てより、未だ時を経ざること。』

にたじ 煮立つ(動)「うす氣味わるき顔つきし
て、續けて笑ふさま。にやにや。にたり
にたにたわらひにたにた笑(名)にた
にたと笑ふこと。うす氣味わるき笑。平
假名盛登記「乳房離れて、そろそると這ひ出
て、ひとりにたにた笑」

にたじ 二端(名)「りやうたん(兩端)に同
じ。』二端を持(三)す」

にたじ 二短(名)「二つの短所。』二不能
(三)短」參照。

にたじ 二段切(名)「文」にじぎれ(二
字切)に同じ。

にたじ 二段曲(名)「諸曲にて、上端
(三)の二箇所ある曲(三)」。山姥(三)な
どの曲(三)に在り。

にたじ 二段拔(名)「新聞紙にて、記
事の標題を、上下二段に互らしむること。
三段拔、四段拔等、これに準ず。

べし」といふべきを、その一段を略して、
「すべて人は死す。故に彼は死すべし」と
いふ類。

にたもの 似物鳥(名)「誰か鳥
の雌雄を知らん」の意なるべし」互に似
て、區別し兼ねること。魔氣(三)しやがの
葉が似たものからすあふぎかな」

にたもの 似た者夫婦(句)「に
(似る)の條下を見よ。

にたやま 仁田山新田山丹田山丹太
山(名)「次條の略。』仁田山、山
他の山に似てはをれど、性質の劣れるよ
りふないべしといふ。又仁田と似
た、音の同じきよりいへる點もあるべ
し」似て非なる物。えせもの。により。

にたやま 仁田山新田山丹田山
山織丹、太山織(名)「上野國仁田山即
ち今の同國山田郡川内村大字山田より製
出する織物。仁田山絹、仁田山絹、仁田山
木綿等あり。

にたやま 仁田山絹新田山絹丹田
山絹丹太山絹(名)「前條を見よ。
にたやま 仁田山侍(名)「元來
の侍に非ずして、假に雇はれて、兩刀をさ
したるもの。』

にたやま 仁田山紳新田山紳丹
田山紳丹太山紳(名)「にたまお(仁田
山紳)を見よ。曾呂利狂歌、丹田山紳を刈
安染(三)にしたる、をかし」

にたやま 仁田山八丈新田山
八丈丹田山八丈丹太山八丈(名)「似
せて作りたる八丈紳。

にたやま 仁田山木綿新田山木
綿丹田山木綿丹田山木綿(名)「にた
やまお(仁田山紳)を見よ。
にたがひ 似目(名)「動」にたがひ(似
目)の轉訛。

おえういあ

きけくきか

そせすしき

とてつちた

のねぬに

ほへふひは

もめんむみま

よゆや

るれるりら

ををわ

にたり

出て、開かして、火末は兩寄りに似たもの。
にたり【動】うす氣味わるき顔つきして笑ふさま。にたり。にたり。にたり。

にたり【動】助動詞ぬの連用形に似て、や動詞たりの添はりたる語にたりに似て、やや強き意。「古語」蓋蓋敷妙(妙)の枕に人はこと問へやその枕には苦おひにたり」

にたり【名】似柿(名)「植」味は劣りたれども、形は御所柿に似たるよりいふ、柿の一品種、果實は形扁くして、頂部凹み、果皮、橙黄色を呈して滑澤、果肉やや紅にして、褐色の斑なく、肉質柔軟にして、甘味少し。

にたり【名】似貝(名)「動」殼のさま、女の陰門に似たるよりいふ「似貝(貝貝)に同じ。

にたり【名】荷足船(名)和船の一。樞にたり【二】下に、下部は荷船(船)に似上部は關船(船)に似、兩者の用を兼ねる河上の小船。はんせき。にたり。「武藏國邊の方言」

にたり【動】似たり寄つたり【句】にたりよつたり【句】

にたり【動】似る(る)の條下を見よ。

にち【名】(る)の條下を見よ。本體二十不孝「博奕の場ににり込みて、讚(を)をいひても、口過(口)なるまじきからだにあらず」

にち【名】にち【動】日敷を敷ふるにいふ語。か。謔「百日の説法、尻一」

にち【名】日案【名】「英 Daily Item」一日間の教案。

にち【名】日印【名】「地」日本國と英領印度と。「日印協會」

にち【名】日印【名】「地」日本國と英領印度と。「日印協會」

にち【名】日印【名】「地」日本國と英領印度と。「日印協會」

にち【名】日印【名】「地」日本國と英領印度と。「日印協會」

にち【名】日印【名】「地」日本國と英領印度と。「日印協會」

にち【名】日印【名】「地」日本國と英領印度と。「日印協會」

にち【名】日印【名】「地」日本國と英領印度と。「日印協會」

にち【名】日印【名】「地」日本國と英領印度と。「日印協會」

にち【名】

の周圍に、環狀のあらはるる現象。はる。ひがき。

にち【名】日影【名】日景【名】日光のかけ。ひがき。日影。日景。

にち【名】日英【名】「地」日本國と英國にち【名】日英【名】「地」日本國と英國

にち【名】

にち【名】日曜【名】七曜の第一日。學校官衙會社など、大抵、その業を休む。どんたく。日曜日。

にち【名】

にち【名】日光【名】月光(光)の對して。御姿一。「日宮」に同じ。

譽に敬を受け、後、三井寺に學び、文應元年以後、日蓮の弟子となり、日蓮流さるるや、日向等四人と、交も佐渡に省し、池上にて病むや、晝夜看護を怠らず、遺骨を身延山(妙心)に納めて後、同門六人、輪番を定めて、祖塔を守る。延慶元年入寂す。年八十八。

にちごろう 日小僧(名)「人」にちれん(日蓮)を、他宗より諱りていふ稱。

にちざう 日像(名)「日」の形象。圓形にて示し、又はその中に三足の鳥の形をあらはして示す。(月像(名))に對して。

にちざう 日藏(名)「人」。高僧。三善清行(善忠)の弟。十二歳にして、金峰山(妙法)の椿山寺に出家し、精修六年、母の病を開きて歸省し、籍を東寺に諱して、密教を良鄰に學ぶ。金峰に往來すること二十六年。天慶四年金峰の窟に斷食祈念すること三十七日、藏王(善善)菩薩を感見て、延壽の法を得、後大和國室生(天)の童門寺に遷り、靈應多かりきと傳ふ。寛和元年寂す。年百餘歲。

にちざうくわん 日想觀(名)「佛」日没に、西方に向ひて正坐し、落日を觀じて、心を移らざらしむる法。十六觀法の第一。

にちざうどう 日像幢(名)仗旗の一。日像をあらはしたる錦幢。古、元日、御即位などの大儀に、大極殿の庭上に、鳥形(鳥)の幢の東に建てしもの。(月像(名))幢に對して。

にちじ 日時(名)日と時と。時日。をり。

にちじ 日次(名)日どり。日なみ。

にちじき 日食(名)一日の食物。著圓(日食す)にきして、飢を忍びがたきは、餓鬼の悲を報ふなり。

にちじふ 日什(名)「人」日蓮宗妙滿寺派の開祖。又、妙滿寺の開山。會津の人。父は石堂太郎覺知母は會津城主盛名盛宗の女清玉姫。俗名は權太夫重國。比叡山に學び、玄妙と稱し、建徳二年羽黒(山)山東光寺に入りしが、日蓮の説に感發して、その弟子となり、名を日什と改む。京都に上りて、洛中弘宗の勅許を得、元中三

年妙滿寺を創立し、八年將軍義滿に謁したれども、言用ひられず、妙滿寺を弟子日義に譲りて、會津に歸り、妙法寺を創立し、九年寂す。年七十九。

にちじん 日神(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神(名))に對して。

にちじんてん 日神天(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。(月神天(名))に對して。

にちじやう 日常(名)「ふだん」。平生。平常。茶素。

日常茶飯(ナツチ)「句」平生の食事。

にちじやう 日乘(名)「乘」は記録の義。しじやう(史乘)参照。にき(日記)に同じ。

にちぜん 日前(名)いつぞや。かつて。

にちぜんてん 日前國懸(名)次條の略。平室和歌吹上(天)の、衣通(天)の神と現れたまへる玉津島(天)の明神、日前國懸の御前(天)を過ぎて、紀伊の湊にこそ著きたまへ。

にちぜんてん 日前國懸(名)紀伊國の日前(天)神宮と國懸(天)神宮との併稱。各條を見よ。平室(天)内侍所(天)と申すは昔、天照大神の時の岩戸に閉ち籠らんとせさせたまひし時、いかにもして、わが容を映しおきて、御子孫に見せ奉らんとて、御鏡を繕たまへり。これ、なほ御心に合はずとて、又、鑄替へさせたまひけり。先の御鏡は、紀伊國日前國懸の社、これなり。

にちてん 日天(名)「佛」次條の略。(月天(名))に對して。

にちてんてん 日天子(名)「佛」梵語(蘇利亞)修利(修野)の譯語。印度の神話にて、太陽を支配すといふ神。四大天王の一、又、十二天の一。日光菩薩の所現とも、觀世音菩薩の化身(天)ともいふ。日光天子。日神(天)。寶光天子。寶意天子。にちてんし。(月天子(天))に對して。

(日輪)参照。日天子の城郭(句)「佛」次條に同じ。にちてんてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

にちてんてん 日天殿(名)「佛」にちてん(日天子)に同じ。

日本に駐佛特命全權大使栗野慎一郎、佛國の外務大臣ビション(Vison)の記名調印す。この協約によりて、佛露日英の兩同盟系統の結合成立せしめたり。

にちへい 日米(名)「地」日本國と亞米利加合衆國と。

にちへいけふやく 日米協約(名)明治四十一年十一月三十日附にて、駐米日本大使高平小五郎と亞米利加合衆國の國務卿ルット(Root)との間に往復したる書信の稱。太平洋に於ける兩國の所領に對する相互の尊重と、清國の獨立及び領土保全、並びに商工業の機會均等主義とに關し、高平大使より綱領を提出して、合衆國政府の見解も、これに一致するに於ては、國務卿の確認を得たき旨を申し添へたるに對し、ルット氏より確認の返書を廻付し來りしもの。

にちへち 日別(名)まいにち(毎日)に同じ。東宮(中)行軍(五)八月には、にちへちにしくわ。

にちへち 日暮(名)ゆふがた。ひぐれ。にちへち 日没(名)太陽の、西方地平線下に没すること。又その時刻。ひのり。(日出に對して)にちもつ(日没)参照。

にちへち 日米(名)にちりやう(日糧)に同じ。

にちん 二陣(名)陣立にて、一陣の次に在るもの。二番ぞな。二番勢。二番手。盛衰或一陣景家、二陣忠清、三陣盛俊、四陣長綱。

にちもつ 日没(名)「佛」(六時)をにちや 日夜(名)「佛」よるひる。晝夜。にちやう 二丁(名)錢(二百文)。「楊弓」又は大弓の賂物(物)にする時の隱語。

にちやう 二挺(名)「芝居」にて、役者の化粧済み、衣裳を著けんとする前に、二階の上り口にて、二つ打つ拍子木。二度目(大鼓)と小鼓。

にちやうがけ 二挺掛(名)にちやうなげ(二挺投)に同じ。

にちやうだち 二挺立(名)次條に同じ。

いちやう

いちやうだて 二挺立【名】小早(三)の、
艘の數二挺を用いて漕ぐもの。にちやう
だち

いちやうなげ 二挺投【名】投(三)とも
附かず、掛(三)とも附かぬよりいふ。相撲
(三)の手の一。わが足を相手の兩足に掛
けて投ぐるもの。にちやうなげ

いちやうのゆみ 二張の弓【句】ゆみ(三)
の條下を見よ

いちやうまち 二丁町【名】【地】【三】
やちまち(五)丁町を見よ。江戸日本橋の堺
町(三)と葦屋町(三)との併稱。葦屋町
はもと上(三)堺町といひ、堺町は下(三)堺
町といひしを改稱せしにて、兩町何れも
劇場の所在地として榮えたり。さかひちや
う堺町(三)参照。八笑(八)樂屋の者は、たまり
かね、呑(三)をひつ捕へ、有無を言はず、
下座(三)へ引きずり込む。そのさま、二丁
町にて、とんちを引出す様なり。根兩
本其佐(二)丁町の賑賑しき、中村座市村座、
外記(三)座辰松(肥)飯盛、軒を並べ、入(元)
を争ふ。分けて歌舞妓兩座を以て、根元
とし、大劇場(三)と稱す。和合人(吉)原や
二丁町の茶屋から、己(三)が家(三)、團扇
や扇を持って来る。【次條を見よ。】駿
河國静岡市安倍川町(三)の俗稱、遊廓の
在る處。藤栗毛(三)これから二丁町とやらへ
見物に行きてえもんだが、どつちの方だ
ね。……、かの安倍川町といへるは、安倍
川(彌)勤(三)の手前にて、道筋より少し引
き込みて、大門(三)あり。……、兩側に軒を
並べて、彈き立てる清(三)の聲賑はし
く、見世つきの趣は、東部の吉原町に、大
よそ似たり

いちやうまち 二長町【名】【地】東京市
下谷(三)區の町。東は三味線堀に接す。
もと對馬國の宗(三)、伊勢國久居(三)の藤
堂兩家の邸地。その他、幕府諸士の宅地等
を合併して、明治初年より町名を加へし
ものにて、町内を二丁町と呼ぶ所ありし
に基き、文字を變へたるなりといふ

いちやうめ 二丁目【名】次條の略。
二丁目目の芝居【句】葦屋町(三)の
芝居を見よ。

いちやうく 動四自【名】物にちやにちやとす。
にちやにちや【貌】物の油ぎりなどして
粘るさま。藤栗毛茶碗を……、嗅ぎて見て、
臭い、臭い、そして、酒でにちやにちやす
る。……と云はれて。【一屋に同じ。】

いちやう 荷茶屋【名】にちやちや(荷)茶
にちやう 二重【名】二つかさなるこ
と、又、二つかさなりである物。ふたへ。
【一つにて足るべき物の、二つあり、又
一度にて可なる事を、二度行ふこと。にぎ
い。重複。】昔、年始元服大迫物(三)の
などの時、菓子や臺に盛りて、神に供へし
もの。【四にちやちや(二)重舞臺の略。
にちやうい(二)重意識【名】【哲】『英
Double consciousness』意識が、同時に二
様に働くこと。例へば人と談話を交へ
ながら、畫を書くなどの類。

いちやう

いちやうり 二重賣【名】一旦賣約調ひ
て金を受け取りたる物を、更に他人に賣
ること。重賣(三)私(三)は、こへ身を賣つて、
先から連れに來た時は二重賣(二)重判【
にちやうり】もの、二重織物【名】(經)
【緯】、表の物と裏の物との二種を用ひ、
又、緯(三)【緯】も、表の經絲と組織せしむべ
き表の緯絲とを、裏の經絲と組織せしむべ
き裏の緯絲とを用ひて、表裏二重の組織
とし、且つその表裏を分離せぬやうにし
たる織物。例へば風通織などの類。

いちやうり 二重書入【名】一旦書
度書き入れたる文書など、更に書き加
ふること。【書入(三)を一旦行ひたる田
畑家屋を、更に他に書入すること。

いちやうり 二重火山【名】【地】
ふくわき(三)復火山に同じ。

いちやうり 二重結婚【名】前の
配偶者と離婚せずして、更に他の者と結
婚すること。

いちやうり 二重コイル【名】【理】
【英 Double coil】大なるコイル(通常、極め
て細き絶緣導線を用ふ)の中に、小なるコ
イル(前者よりも、太き絶緣導線を用ふ)を

入れて、組み合はせしもの。後者に電流
を通ずるを通例とし、その場合、後者を第
二コイル(二次線輪、二次回線)といふ。
【にちやうり】二重根【名】(農)禾穀類
を深く播種又は移植する時、最初に發生
したる根の、僅かに發育して、枯死したる
後、更に地に近き節より發生する冠根。
【にちやうり】二重像【名】眼の病的原
因により、又は人爲的方法によりて、外界
に存する一箇の物體の、二箇存するがこ
とに見ゆること。左右兩眼の何れか一
方によりて見たる場合と、雙方の眼によ
りて見たる場合との二種類あり。
【にちやうり】二重雙晶【名】【礦】
【英 Double twin】一(二)の式に従ひたる雙
晶の、更に他の式にて、雙晶を構成せるも
の。斜長石に、その例多し。
【にちやうり】二重下緒【名】二本と
なりて垂るやうにしたる下緒。
【にちやうり】二重式火山【名】
【地】にちやうり(二)重火山に同じ。
【にちやうり】二重質【名】一旦質入(三)
を行ひたる田畑家屋などを、更に他に
質入すること。
【にちやうり】二重人格【名】【哲】
【英 Double personality】自我(三)の分裂
を見よ。

いちやう

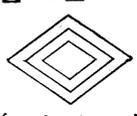
いちやうり 二重出版【名】他人
の著作權に屬する書籍を、その許諾を得
ずして出版すること。

いちやうり 二重星【名】【天】【英】
two stars【たふさ】多重星を見よ。
【二重星の週期【句】【天】二重星が、そ
の重心點を中心として、一廻轉するに
要する時間。

いちやうり 二重税【名】【英 Double
taxation】納税の済みし物件又は人に、更
に課税すること、又その税二重課税。
【にちやうり】二重生活【名】同
一の人、職業風俗などの、全く異なる
二様の生活すること。

いちやうり 二重選舉【名】【法】
かんせつせんきよ間接選舉)に同じ。
【にちやうり】二重底【名】【箱などの
底の下に、更に底を重ね置くこと、又そ
の造り方の底。【率直に眞意を吐露する
ことなく、偽りたる言行を爲すこと。
【にちやうり】二重違棚【名】四
十八棚の一。棚板を上下二重に設けたる
違棚。
【にちやうり】二重抵當【名】一旦
抵當品としたる物を、更に他に對して抵
當品とすること。
【にちやうり】二重電信法【名】
【英 Duplex telegraphy】一條の電線によ
りて、雙方より同時に送信と受信とをな
す方法。
【にちやうり】二重電話法【名】
【英 Duplex telephony】重信法の二。二
回線の實回線より、一回線の二重電話回
線を組織するもの。
【にちやうり】二重緞子【名】模様
の周圍に、他の色の絲を織り込みたる緞子。
【にちやうり】二重砲彈【名】【兵】
一箇の砲彈の中に、小き砲彈を仕込み、一
定の距離にて、外側の破裂する時中なる
小砲彈は、更に空中を進みて、倍距離に達
するやうにしたるもの。
【にちやうり】二重橋【名】東京市丸の
内なる宮城の正門に架れる橋。上下の二
つより成り、上なるは、舊の書院門の橋に
て鐵にて造り、下なるは、舊の西九大手
門の橋にて、石を以て積み、遠望すれば、
上下相重れるが如く見ゆ。
【にちやうり】二重判【名】一旦判を捺
して約束しながら更に他と、その約束に
損害を興ふる種類の約束をして、判を捺
すこと。重井(三)私(三)は、こへ身を賣つて、
先から連れに來た時は、二
重賣(二)重判【
【にちやうり】二重菱【名】
紋所の一。下の圖を見よ。
【にちやうり】二重蓋【名】
器物の蓋の内に、更に蓋を設けること、
又その造り方の蓋。

【にちやうり】二重蓋【名】
紋所の一。下の圖を見よ。
【にちやうり】二重蓋【名】
器物の蓋の内に、更に蓋を設けること、
又その造り方の蓋。



にちゆうふたい 二重舞臺「名」芝居の
大道具の一。縁側又は土手などの場面
見するために、舞臺の上に床(こ)を構
て高くすること。縁側の場合は、高足(たか
つ)と常足(つ)との二種ありて、前者は御殿
向又は大茶屋場に適するやう高く構
後者は商家又は農家に適するやう低く構
ふ。二重。又は(平舞臺)参照。
にちゆうふた 二重塀「名」柱を中にし、
両面より土を塗りて造りたる塀。
にちゆうぼいん 二重母音「名」(語)ち
うぼいん(重母音)に同じ。
にちゆうまほし 二重廻「名」さんびがっば
(駕合羽)に同じ。

にちゆうまき 二重焼「名」寫眞にて、雲
と景色人物とを、同一紙面に現す等
の場合に、兩者の濃淡の度を適當ならしむる
必要上、別別に撮影し、二枚の種板を重ね
て焼き付くること。
にちゆうゆか 二重床「名」音響の傳達
又は寒氣の侵入を防ぐ等の目的にて、床
板を、上下二重に設けること、又その造り
方の床。
にちゆうわ 二重輪「名」紋所の輪の一。
大小二つの輪を、二重に描けるもの。
にちゆうを 二重緒「名」二重に取附け
たる鼻緒。八笑(八笑)朱の二重緒の雪路(雪路)
を穿(き)る。

にちようひん 日用品「名」毎日用ふること。
物品。
にちようひん 日用品「名」毎日用ふる
物品。「翰文」に同じ。
にちようぶん 日用文「名」しよかんぶん書
にちらひ 日來「副」(日頃)に同じ。
にちらひ 日期「名」(日)日蓮宗の僧。六
老僧の一人。下總國本土寺の開基。筑後
房と稱す。下總國の人。千葉氏の族印東
治郎右衛門尉有國の子。幼名吉祥慶。父
の命によりて、日蓮の弟子となる。日蓮の教
佐渡に流されて、獄に下され、日蓮の教
に會ふや、その教状を佐渡に致し、從ひて
鎌倉に歸る。日蓮の身延(山)に去るや、
比企谷(比企谷)なる妙本寺の法席を承け、後
又武藏國池上(池上)の本門寺をも兼ねた

りしが、弟子日像に二寺を譲りて退隱し、
文保二年、池上の南窪に庵居し、元應二年
寂す。年七十八。「(註)國と。
にちらん 日蘭「名」(地)日本國と和蘭
にちりん 日輪「名」(佛)たいやう(太陽)
に同じ。(佛)教にては、日天子の宮殿の外
貌なりと説く。(月輪)に對し(月輪)
にちりんさう 日輪草「名」(植)ひまはり
(向日葵)に同じ。
にちりやう 日狼・日糧「名」古、圖書寮
等に、日、大炊寮(大炊寮)の飯を賜ひしこ
と。日(日)。「日料」。
にちる 動上一自「色道大鑑」に「にちる。
ねちるに同意、五音相通なり」とあり。ね
だり事を言ふ。にち参照。追善清十郎奴性
「佐保姫にいかなる奴(こ)かくどくらん
(さいふ)に役みそめてやにちる千話文(千
話文)」。心中萬葉(心中萬葉)「さあ證據を出せとにちけ
れば」。

にちれう 日料「名」にちやう(日糧)に同
にちれん 日蓮「名」(人)日蓮宗の
開祖。安房國小湊(小湊)の人。實名(實名)重
忠の子。十二歳の時、國內なる清澄(清澄)
寺に入り、十六歳(十六歳)に説に十八歳(十八歳)薙髮し
て、蓮長といひ、後、日蓮と改む。二十一
歳、比叡山に登りて、天台の玄旨に通じ、
法華經所説の眞理に基きて、當時流行の
諸佛敎を邪法と斷ず。三
十二歳、故郷に歸省し、地
頭の迫害に遭ひて鎌倉に
入り、立正安國論を
草して、執權
北條時頼に
呈したれど
も顧みられ
ず、ますます諸宗
を諷諷せしめ、北條
時宗の命にて、龍口(龍口)
に斬られんとせしが、輕減せられて、佐渡
に流さる。時に年五十。建長十一年赦さ
れ、甲斐國身延(山)に住し、弘安五年武
藏國池上(池上)に赴き、その十月寂す。年
六十一。上足に、六老僧、又、十八中老僧



(にちれん)

あり。その遺文に、高祖遺文録あり。大正
十二年立正(立正)大師の號を勅諡せらる。
にちれんき 日蓮忌「名」おめい(御影供)
に同じ。
にちれんじやうにん 日蓮上人「名」(人)
にちれん 日蓮「名」の敬稱。
にちれんじゆう 日蓮宗「名」(佛)佛
敎の一派。日蓮の創めしもの。事理不二
なるを以て、一心に妙法蓮華經の題目を
唱ふれば、一經所詮の諸法實相の功德、自
ら圓滿して、即身に常寂光(常寂光)の妙果
を成(成)ずといひ、他宗の如く、成佛のみ
を最終の目的とするこなく、凡夫の身
直ちに佛として、各自、分に應じて、社會
に活動すべきを説き、又、天台宗を、迹門
(迹門)と評し、我は本門(本門)の法華を弘めしもの
といへり。現今は日蓮宗(日蓮宗)顯本(顯本)法華宗(法華宗)
本門宗(本門宗)法華宗(法華宗)本妙法華宗(本妙法華宗)
不受不施派(不受不施派)法華宗(法華宗)八派に分る。
經宗(經宗)題目宗(題目宗)唱題宗(唱題宗)法華宗(法華宗)日宗(日宗)
にちれん 廣義の日蓮宗の一派。甲斐國
身延(山)山久遠(山久遠)寺を本山とし、初
身延派といひ、又會て一致派と稱せしを、
明治九年今の名に改む。日蓮を初代とし、
日向(日向)を第二代とす。一致派の名は、
法華經中の本門と迹門(迹門)との間に勝
劣の差を設けざるによる。廣義の日蓮宗
中、他の七派は、それぞれ小異はあれど
も、すべて、迹門未得道の説を主張する勝
劣派に屬す。
にちれんじゆうこうもんは 日蓮宗興門
派「名」(佛)こもん(興門派)を見よ。
にちれんじゆうふんは 日蓮宗富士派
(名)「佛)ふん(富士派)を見よ。
にちれんじゆうぎ 日蓮主義「名」日蓮の
教義に基き、凡夫の身そのまま佛たる眞
理に立脚し、生命改造の信念の下に、勇猛
精進の氣魄を以て、文化宣傳の勢力たら
んことを期する主義。「國と」
にちろ 日露「名」(地)日本國と露西亞
日露の役(日露)「名」にちせんさう(日露

戰爭)に同じ。
にちろく 日録「名」にき日記に同じ。
にちろけふやく 日露協約「名」明治四
十年七月三十日、同四十三年七月四日、大
正元年七月八日の三回に締結せられた
日露兩國締結の協約。第一回は、兩
國締結の條約より生ずる一切の權利を互
に尊重し、支那の領土保全列國の機會均
等主義を支持すべき旨を約し、第二回の
は、滿洲に於ける、各自鐵道の改善、聯絡
業務整備のため、相互に友好的協商を興
へ、且つ從來、締結の一切の條約約定に基
く滿洲の現状を維持尊重すること、及び
右現状侵害の事件發生の場合には、隨時
商議すべき旨を約し、その他に、附屬秘密
協約あり。第三回は、全然秘密に付せら
れたれども、滿洲及び蒙古に於ける兩國
の利益範圍を分るものといふ。にちよう
けふやく(日露協約)参照。「同じ」。
にちろせんさき 日露戰役「名」次條に
にちろせんさう 日露戰爭「名」北清事
件後、露國兵を滿洲に進めて、東洋の平和
維持を欲する我國の誠意を無視せしよ
り、明治三十七年二月三日、國交を斷絶
し、爾後約一年半繼續せし戰爭。陸には、
三十八年三月二日より十日に亘りたる奉
天の大戦、海には、同年五月二十八兩日
に於ける日本海の大戦に至るまで、概ね
我國の連捷に歸し、米國大統領ルオゼベ
ルト(Roosevelt)の斡旋により、九月一日、
休戰條約成立し、十月十六日、本條約の批
准交換完了し、我國にては、十月二十三日
に於ける横濱沖の大觀艦式、三十九年一
月三十日の東京青山原頭に於ける大觀兵
式を以て、その終を告げたり。ほつとつて
ちやう(ポーツマス條約)参照。
にちろき 日域「名」(地)魏書の李約子傳
に「世祖太武帝皇帝、英徽自天、籠三單日
域」とあり。日光の照す區域。天下。日
「前漢書の楊雄傳に「東征日域」とあり
て、註に「日域、日出之處也」とあり。太
陽の出づる處。日域「地」我國の異稱。じつ
むき。日東。日出國。平治日域に行きて、
那智山といふ所に赴けり」。

つひ

につ 貌 笑を含むさま。につこり。につたり。天の網鳥につと笑顔(笑)のしるじろと、霜に凍えて」

につか 日下 [名] 唐書李义府傳に「日下無蹊徑」、宋史韓琦傳に「日下五色雲見」とあり。太陽の照せる下。 日天。天下。 日京師。 日日本國。 日加奈陀。 日か 日加 [名] 日日本國と加奈陀にっか 日迦 [名] 「人」をほらにつか藤原日迦)を見よ。

につかひ 入海 [名] えりあひ(襟合)に同につかひ 日講 [名] 毎日講義又は講説をすること、又その講義又は講説。につかう 日向 [名] 「人」日蓮宗にて、ちと讀む習なれども、同じく六老僧の一人なる日興(日)と同音となるを避けていふ、「にかう」とも讀む。日蓮宗の僧。六老僧の一人。問答第一の稱あり。京都の人。俗姓は小林、名は藤三郎實長。父を民部實信といひ、日蓮の父重忠等と伊勢平氏に黨して、鎌倉幕府に叛き、上總國藻原(日)に流調中、日向を生む。日向、觀山に學び、東國に歸りて、日蓮の弟子となり、寺務を見ること二十六年、正和三年没す。年六十二。

につかく 日角 [名] 後漢書光武帝紀に「隆準日角」、南史の梁武帝紀に「狀貌奇特、日角龍額」とあり。額の骨の隆起して、日輪の如き狀を呈せるもの。貴人の相といふ。 日人相にて天庭(即ち額の中)の左の方(月角に對して)。

につかてん 日下點 [名] 「天」『英字のSolar point』太陽を天頂に見る地點。その經度は、本初子午線に於ける太陽の時角、即ち眞太陽時に等しく、その緯度は、太陽の赤緯に等しく。サムナー(Sunmer)氏法に於て、航海中の船舶の位置を決定するに、専ら使用する。

につかはし 似附かはし [形] 似合はし。似合ひてあり。ふさはし。につこらし。土蕉から歌ども、時に似つかはしきを言ふ」

つひ

につかふ 丹つかふ [動] にづらふ(丹づらふ)に同じ。「古語」蕪荳紅(丹)に丹つかふ色になつかしき紫の大綾の衣」

につかん 日刊 [名] 新聞紙などを、日刊行すること、又そのもの。につかん 日間 [名] にちゆう(日中)に同じ。 日韓 [名] 「地」日本國と朝鮮、即ち元の韓國と。

につかんがふばら 日韓合邦 [名] 明治四十三年八月、我國に、韓國を併合せしこと。同時に、舊韓國の地域を、古稱に復して、朝鮮と呼ぶこととせり。につかんけふやく 日韓協約 [名] 明治三十八年(韓國光武九年)十一月十七日、日韓兩國の間に締結せられたる協約。韓國の富強の實を認むる時に至るまで、韓國の外交權を日本政府の監理・指導に委す。日本政府は、その代表者として、一名の統監を韓國京城に駐在せしめて、自由韓國皇帝陛下に内請する權利を有せしめ、又、各開港場その他、日本政府の必要と認むる地に、統監指揮の下に、理事官を置き、從來の在韓國日本領事に屬したる一切の職權を執行し、且つ本協約の條款を完全に實行するに必要なる一切の事務を掌理せしむることを約せるもの。我國の特命全權公使林權助、韓國の外務大臣朴齊純、記名調印し、その發表と同時に、韓國駐在の各國公使は、同國を撤退したり。

につかんひんけふやく 日韓新協約 [名] 明治四十年(韓國光武十一年)七月二十四日、日韓兩國の間に締結せられたる協約。明治三十八年の日韓協約締結後、韓國皇帝、約に反きて、和蘭國海牙(日)に開會中なりし萬國平和會議に密使を派したる一事より、韓國の閣臣は韓皇に迫りて、讓位せしむると共に、締結を承諾するに至りしもの。我國は、前協約にては、韓國に於て、獨立の資格生ぜば、何時にても保護を解くべきを約し、且つ外交權を管理するのみに止まりしを、新協約にては、内治、外交の兩管理權を得、統監は、韓國の施政改善の指導、法令の制定及び重要なる行

つひ

政上の處分、並びに高等官吏の任免に對する同意不同意の權を有し、又、韓國政府をして、その推薦に係る日本人を韓國官吏に任命せしむる權利を有するに至れり。我國の統監伊藤博文、韓國の總理大臣李完用、記名調印せり。

につき 日記 [名] 日々に起る事を記すこと、又その記録。にき。日録。日誌。日乘。につき 日晷 [名] 太陽のかげ。日のかげ。ひあし。ひざし。

につきた 日記方 [名] 徳川幕府の職制の一。表右筆にて、日記に關する事を掌りての。につき 日晷儀 [名] ひざけい(日時計)につき 日わけちやう 日記仕分帳、日記仕譯帳 [名] しわけにつきちやう(仕分日記帳)に同じ。

につきちやう 日記帳 [名] 毎日の出來事を記入する帳面。日記簿。 日簿記の主要帳簿の一。日日の取引實質は勿論、財産に關する萬般の事項を洩なく記入し、他の諸帳簿の根據となるもの。につき 日附 [名] 犬造物(日)の時、射手の中(日)外(日)を記録する役。につき 日給 [名] 一日に若干と定めたる給料。日俸。日當。(月給・年給に對して)「毎日の給仕の義なるべし」古、宮中にて、朝臣の、その日の勤仕。上番。上日。著圍内裏にて、日給果てて、源仲朝以下、藏人町(日)へ罷り給へり」

日給の簡(日)「前條を見よ」古、朝臣の殿上(日)に出任したる時、その姓名を記しし簡。長さ五尺三寸、幅は、上方八寸、下方七寸、厚き五分、殿上人の名を、四位と五位と非藏人(日)とによりて、三段に分ち記し、殿上の奥の疊の未(日)の方に立ち、藏人これを掌る。殿上人は、毎日、未(日)の二刻に、東帯にて參内し、同三刻に、藏人「その勤怠を調査し、勤仕者に對しては、簡に十二支にて日を記し、宿侍せし者に對しては、傍に「夕」と註し、不參の者に對しては、「不」と記して、封をなし、夜は

袋に入れおきたり。姓名の下に、當番の日を書きて張りたる紙を、放紙數(日)、「その前後の當番の姓名を奏するを、日數(日)」、朔日ごとに、その前後の當番日數を奏するを、月奏(日)」、又は月の奏といへり。殿上の簡(日)。「仙籙、ちよせき(除籍)」「簡(日)に就く」「簡を削る」及び「女房(日)の簡(日)」「簡(日)の簡(日)」参照。

つひ

につき 日記簿 [名] につきちやう(日記)に同じ。 日勤 [名] 毎日出勤すること。 日日の勤務。ひつとめ。

につき 日脚 [名] ひあし(日脚)に同じ。 太平記、燒痕回縁春容早、松影穿紅日脚西なり」

につき 日記繪 [名] 平安朝時代に於ける國文の日記の内容を、繪畫にて示したるもの。につく 日工 [名] につこ(日工)に同じ。につく 似附く [動] 似附く(日工)に同じ。よあひかなふ。にあふ。蕪荳、いつはりも似附きてぞするうつつしくもまことわざも子われに戀ひめや」 「むに同じ。

につく 煮附く [動] 下二他(日)に煮染につく 憎し [形] 憎(日)に同じ。 憎(日)の音便。八笑人につく(日)「憎(日)の心憎し」に同じ。 馬曲(安宅)「我等を始めて、皆皆、につくい山伏にて候ふが」馬曲(國權)「身こそ賤しく思ふとも、此所にては、翁もにつくき者ぞかし。孫も有り。曾孫(日)も有り」

につく ねえむ (英 Kichuanmu) [名] あだな(徒名)に同じ。 「木」に同じ。につく 荷造 [名] 運送すべき物を、束ね又は包むこと。にこしらへ。裝荷。につくりき 荷造機 [名] 紡績機械の一。水壓機によりて壓搾し、製絲を、普通四十八貫の梱(日)に造る装置。

につくりかん 荷造賃 [名] につくり(荷造費)に同じ。につくりかん 荷造人 [名] 荷造をするにつくりかん 荷造費 [名] 荷造に要する

費用。にづくりちん。

にっくわ日貨 [名] 日本より生産輸入したる貨物。「日貨排斥」

にっくわ日課 [名] 日毎に割りあつる仕事。日日の課程。

にっくわ日會 [名] 天「英Solar day」同じ日が同じ週日に當る時の、一回循環し來る期間、即ち二十八年間。

にっくわ日光 [名] 日のひかり。太陽の光線。ひ。「佛」にちくわ(日光)に同じ。

にっくわ日光 [名] 地「明治の初年設置の縣の一。二年始めて、下野國日光に置き、これより先、元年同國眞岡に置きし眞岡縣をも併せ、三年喜連川(喜)藩を廢して、亦、これを併せ、四年七月藩を廢改正し、十一月同國王生(吹)上野野足利の四縣及び上野國館林(喜)縣も併せて、栃木に安蘇郡置き、下野國足利梁田(喜)寒川松蘇郡置きの五郡と上野國山田邑樂(喜)新田の三郡とを併し、六年宇都宮(喜)縣を併せ、九年上野國三郡を群馬縣に移し、十七年、治所を宇都宮に移ししもの。即ち今日の栃木縣なり。「地」

日光山、もと二荒(ツ)山と稱せしを言讀して、日光の雅字を充てたるもの。下野國上都賀(喜)郡日光山の麓大谷(喜)川の畔にある町。山水秀麗にして、二荒山神社、東照宮等あり。附近に、中禪寺湖及び華嚴裏具霧降など諸瀑の勝あり。「地」

にっくわ日光 [名] 佛にちくわ(日光)に同じ。

前條に同じ。

にっくわかいだう日光街道 [名] 地「徳川時代の五街道の一。江戸より下野國日光までの間の街道。江戸より宇都宮の間に、奥州街道と共通す。

にっくわがくもん日光學問所 [名] 萬延元年、下野國日光に設置し、日光山内の各寺院坊中を始とし、各樂人・社家及び百姓町人に至るまで有志の者を入所せしめし、幕府直轄の學問所。

にっくわ日光 [名] 佛にちくわ(日光)に同じ。

は法皇の宸筆、その他は、皇族公卿の寄合書、繪は狩野洞春の筆。享保五年完成す。一名、補陀洛山緣記。「書」

にっくわ日光 [名] 佛にちくわ(日光)に同じ。

の研究に必要なり。(地心視差に對して)
に「じんせんせき」日清戰役「名」次條
に同じ。

に「じんせんざう」日清戰爭「名」明治
二十七年六月より二十八年四月に互りたる
清國公使袁世凱、朝鮮の君臣を壓伏して、
清國を屬邦たらしめんとし、二十七年四月
月、同國に東學黨の亂あるや、韓廷、討伐
の力無きに乗じ、救援の兵を出して、明治
十七年の天津條約を破りしより、七月二
十五日の豊島(豊)沖の海戰、同二十九日
の牙山の陸戰を経て、八月一日、宣戰の大
詔發せられ、翌年三月に至るまでに、直隸
灣の海港並びに遼河の南岸一帯及び威海
衛澎湖島を占領し、清國遂に屈服して、
四月十七日、媾和條約を締結す。ばくわんで
らる(馬關條約)參照。

に「じんおち」日心位置「名」「天」「英
Heliocentric position」太陽の中心より
見たるものと假定したる、一天體の位置。
(地心位置に對して)

に「じや」日者「名」「史記の日者傳に「ト
築古候時日通名日者」とあり。に「く
わん(日官)參照」日の吉凶を卜する人。
に「じや」日者「副」さきごろ。むかし。
昔者。

に「じやう」日章「名」日の丸の徽章。
に「じやう」入聲「名」「語」漢字の四聲の
一。屋沃覺質物などの十七韻あり。
に「じやう」日章旗「名」日の丸の旗
即ち我帝國の國旗。

に「じやびやう」日射病「名」「醫」「英
Sunstroke」日光直射の熱に中りて、腦充
血を起し、卒倒する病。體温の昇騰、呼吸
の促進、心臓の麻痺を起して、斃る。睡眠
の不足、營養の不良等、その誘因となり、
郊外に勞動する者、行軍中の兵士等の間
に發生すること多し。熱射病。

に「じゆう」日宗「名」「佛」にちれんじゆう
(日蓮宗)の略。
に「じゆう」日出「名」太陽の東方、地平
線上に出づること。ひのて、又その時。

あき。(日没に對して)
日出の邦(日)「句」「元史の伯顏傳
に「梯航日出之邦、冠帶月支之域」と
あり「東方に在る國。」「地」我日本國
の異稱。日東。日域。

に「じゆうつてく」日出國「名」前條に同じ。
に「じゆうつてく」日出草「名」「植」はこへ
(紫梗)の漢名。
に「じゆうてく」日色「名」日のいろ。太陽の
こと能はざるに至る現象。月の本影が地
球に達する場合は、その地點にては、全く
太陽を見ること能はず、これを皆既日食
又は日食皆既といひ、本影の周圍なる半
影に蔽はるる地點にては、太陽の一部分
を見るを得、これを部分日食といふ。又、
月の本影が全然地球に達せざる場合に
は、皆既食を見ることなく、本影に當る地
點にて部分食を見るにとどまり、半影の
最終地點には、太陽の中央部黑色にして、
周圍のみ輝けるを見る、これを金環食と
いふ。に「そく。ぐわっしやう(月食)參照。
日曜日と大祭日とが、同じ日に重なる
こと。「勤人の俚語」

に「じよくかいき」日食皆既「日蝕皆既」
に「名」「天」かいきに「じよく(皆既)日食」に
同じ。
に「じよくき」入蜀記「名」「書」支那宋
の陸遊の著。著者、夔州の通判に任ぜ
られ、孝宗の乾道六年閏五月十八日に郷
を發し、十月二十七日、任地に到着せるま
ての紀行。六卷。紀行文の上乗として、
范成大の吳船錄と併せ稱せらる。

に「じよくけんかいかく」日食限界角「日
蝕限界角」名「天」「英」Solar eclipse
limit「日食は新月の時に生ずるものなる
が中に、太陽が黃道と白道との交點より

十五度二十一分以内に在る時は、必ず生
じ、十八度三十一分以外に在る時は生ぜ
ざる、その二つの限界の間の角。この角
の間に、太陽の中心の在る時は、日食の
生ずる場合と、生ぜざる場合とあり。

に「じよさ」日所作「名」毎日の所作。
日日の所行。盛衰記、維盛、少(むき)より身
を放たず、日所作に讀み奉る經御座(けい
す)。「かず」

に「じすう」日數「名」日の經過する數。ひ
に「じせい」日精「名」日の精。「周禮
に「疋服鞠衣、其色黃也」とありて、鄭玄の
註に「日精也」と見え、又、藝林伐山に「菊
有三兩種、花大氣香、莖紫者、爲「甘菊花、此
日精也」とあり、菊の花の異稱。
に「せい」支那「日精草」名「植」きん(菊
に「かず」)に同じ。夏秋葉萎、日精草、菊名」

に「じせき」日夕「名」ちや(晝夜)に同じ。
に「じせん」日鮮「名」日本人と朝鮮人と。
に「じせん」日選「名」「地」日本國と遼羅
に「せん」日選寺「名」尾張國名古屋市
外東山村にある寺。明治三十三年、暹羅
(暹)國皇帝より、我國佛教徒に頒與せら
れし佛骨を安置せる所。同三十六年の創
設に係り、各宗輪番にて、住職となる。
に「じそう」日奏「名」中古、禁中に、藏人
(藏)が、前夜宿直せし人の姓名を、日日奏
せしこと。(月奏(ツツ))に對して)
に「じそう」入宋「名」支那宋の時代に、我
國より、その國へ赴きしこと。

に「じそく」日食「名」易經の豐卦象傳に
「日中則昃、月盈則食」とあり「正午を過ぎ
て、太陽の西天に傾くこと」。

に「じそん」日食「名」「天」に「じよさ
(日食)の約。拾遺に「そくの時」
に「た」新田「名」「地」上野國十一郡の
一。郡役所を太田町に置く。に「たやま(新
田山)參照。姓氏の一。本姓は清和源
氏。義家の第三子義國より出づ。義國、
久安六年(内大臣藤原實能(實能))と争ひて、
下野國に流され、後、上野國新田郡に居り
しより、その子義重、新田太郎と稱す。南

朝の忠臣義貞、義助同郡助屋の地に居り
て、(助屋姓を稱す)義興等皆その裔に
て、支流に、山名・里田・中徳川・世良田
(世良田)・大館(大館)・須口・岩松等あり、又、義重
の弟義康は、足利氏の祖たり。岩松氏は、
江戸時代、新田郡の地を食み、頗る優遇せ
られしが、明治維新後、新田氏に復し、男
爵を授けらる。

に「たいじよく」日帶食「日帶蝕」名「
天」太陽の缺けながら出て、又は没する
日食、即ち中途にて、日出又は日没となる
場合の日食。「給予する手當」

に「たう」日當「名」一日若干と定めて
に「たう」入唐「名」支那唐の時代に、我
國よりその國へ赴きしこと。渡唐(たう)
(渡唐)に同じ。

に「たうり」入唐使「名」
に「たうり」遣唐使「名」
に「たさちゆうじやう」新田左中將「名」
に「たさちゆうじやう」新田義貞に同じ。
に「たにんじや」新田神社「名」武藏
國荏原(荏原)郡矢口(矢口)村に鎮座せる府
社。祭神は新田義興、背後の水田は、古の
多摩川の跡にして、義興終焉の地なりと
いふ。村内、別に十騎社ありて、義興の從
士の靈を祀れり。舊稱、新田大明神。
に「たにんじや」新田神社「名」上野國
上野郡新田郡太田町金山(金山)の頂に鎮座
せる縣社兼郷社。祭神は新田義貞、新田
郡は新田氏の世世居住の地なるにより、
郷民相謀りて、官に請ひ、明治六年創祀の
許可を得、八年に至りて、新築落成せり。
に「たにんじや」仁田四郎「名」「人」に「た
たね(仁田忠常)に同じ。
に「たね」新田大明神「名」
に「たね」新田神社「名」舊稱。
に「たね」新田大明神「名」伊豆國の人。通稱は四郎。源頼朝に
任へて、親近せらる。壽永中、範頼に従ひ
て平氏を西海に討つ。建仁二年將軍頼家



(りぎたつに)

にっぽんこうげふきんから 日本興業銀行「名」にほんこうげふきんから(日本興業銀行)に同じ。

にっぽんさる 日本猿「名」(動)にほんさる(日本猿)に同じ。

にっぽんさるもん 日本左衛門「名」(人)強盗。本名は濱島庄兵衛。もと京都の浪人。諸國を横行して、頗る人を惱ましより、幕府の捜索嚴重にして、遂に京都の町奉行永井丹波守に自首し、江戸町奉行能勢(肥後守)の手を経て、延享四年、その徒黨六人と共に、遠江國見附(三)に刑せらる。年二十九。

にっぽんしん 日本寺「名」安房國安房郡保田(町)の山腹にある曹洞宗の寺。本尊は藥師佛。聖武天皇の勅を奉じて、僧行基創立す。五百羅漢の石像有るによりて、俗に羅漢寺と稱す。境内、今は公園となれり。下總國香取郡中村にある日蓮宗の寺、四十四箇本山の一。正東山と稱す。開山は日常といふ。

にっぽんじん 日本人「名」にほんじん日本人に同じ。狂言唐人相替にならなり日本人をりやるか。「刀」に同じ。

にっぽんたう 日本刀「名」にほんたう日本にっぽんたまひ 日本魂「名」にほんたまひ(日本魂)に同じ。

にっぽんちゆうけ ちゆうけ 日本住血吸蟲病「名」にほんちゆうけ日本住血吸蟲病に同じ。

ちゆうけ 日本住血吸蟲病「名」にほんちゆうけ日本住血吸蟲病に同じ。

にっぽんばれ 日本晴「名」にほんばれ日本晴に同じ。萬葉千載湖の日本ばれの景色より雨の夜ゆかし唐崎の松

にっぽんふう 日本風「名」にほんふう日本風に同じ。「本米」に同じ。

にっぽんまい 日本米「名」にほんまい日本米に同じ。豊臣秀吉討明の軍を起きんとし、諸國に賦課して多數の大船を造らしめし時、別に船艦の模範として製作せし船。舳に層樓あり、それより舳に互りて、又、一段低き層樓を設け、中央に一本の大櫓を建てしものとす。

にっぽんまゐり 成臨丸の舊稱。

にっぽんみなみみるぶす 日本南アルプス「名」にほんみなみみるぶす(日本南アルプス)に同じ。

にっぽんやくきよくはう 日本薬局方「名」にほんやくきよくはう(日本薬局方)に同じ。

にっぽんらん 日本ライン「名」にほんらん日本ラインに同じ。

にっぽんらん 日本蠟「名」にほんらん日本蠟に同じ。

にっぽんえい 日本繪師「名」にほんえい(日本繪師)に同じ。

にっぽんえい 煮詰る「動四自」煮たるために、水分無くなる。

にっぽんえい 荷積人「名」荷積をする人。

にっぽんえい 荷積船「名」荷物を積み込む船。

にっぽんえい 煮詰む「動下二他」水分の盡くるに、似面「名」にっぽんえい(煮詰む)に同じ。

「人」書經の大禹謨篇の疏に「禹承三堯舜二帝、故云承二、小學紺珠に「二帝堯舜」とあり支那古代の天子なる堯と舜と。二帝、黄帝、炎帝とあり。黄帝と炎帝と。二帝、炎帝、參照。

二弟「名」二人の弟。

二庭を踐む「句」再び嫁入(再嫁)す。

二程「名」宋史の張載傳に「一夕二程至、與論易」とあり支那宋の程明道と程伊川の兄弟、二程子。

二程「名」書慶長三年八月四日より同七年十二月晦日に互りての、烏丸光廣と細川幽齋との歌學に關する問答、並びに當座の物語等を筆記したるもの。一卷。寛文元年刊行。

二程語錄「名」書二程遺書と二程外書とを刪訂したるもの。十八卷。清の張伯行の撰。二程語錄(二)程全書參照。

二程子「名」河南府城南」とあり(二)程に同じ。

二程全書「名」二程全書「名」(書支那宋の程明道、程伊川兄弟の語錄、詩文及び諸文書を集めたるもの。二程遺書二十八卷、二程外書十二卷、二程粹言二卷、經說八卷、明道先生文集五卷、伊川先生文集八卷、遺文續附錄各一卷、合して六十八卷。明の萬曆年間徐必達の編。

二調「名」音、樂曲の、音名ニに相當する音を主音とせるもの。

二條「名」山城國京都市の東西の通路の内、一條より南、三條より北に位せるもの。二條に同じ。

二條「名」本姓は藤原、九條家の支流。舊五攝家の一。九條の祖藤原兼實の孫光明寺の攝政道家の第三子良實の後、世世、藤原氏の長者となるを例とし、明治維新後、公爵を授けらる。その家、京都の二條に在りしよりいふ藤原爲家の長子爲氏の後。もと爲家の祖父俊成の、六條家と反目せしに始り、俊成の子定家、一家の歌風を立て、孫爲家に至りて、家學を固め、爲氏その風を襲きしもの。爲家の第二子爲教の後なる冷泉(爲氏)と共に、歌道流派の一として著れ、殊にその正統として重んぜられたり。爲氏の後、爲世、爲定、爲遠を經、爲衡に至りて統絶ゆ。二條傳授(二)條傳授に同じ。

二條藏奉行「名」徳川幕府の職制の一。京都二條城内の倉庫を管し、地役の輩に對する扶持米付與の事を掌りしもの。寛永二年の設置。定員、初は三人、元祿十二年、大津藏奉行の廢官と同時に四人に増し、後、二人となる。もと京都町奉行の支配、寛政以後は、勘定奉行の支配に屬す。

二條關白「名」(人)に二條家傳「名」に二條傳授「名」に同じ。

二條御所「名」に二條御所「名」に同じ。

二條御殿預「名」に二條御殿預「名」に同じ。

二條御殿番「名」に二條御殿番「名」に同じ。

二條在番「名」徳川幕府の職制の一。大番頭二人づつ、四箇月ごとに、番士五十人を率へ、交替にて、京都二條城に在勤し、その守衛の任に當りしもの。寛永十二年の制定に係り、文久二年廢して、二條城番を置けり。

二條城「名」京都の烏丸室町の間、勘解由小路の南に在りし城。もと室町幕府の管領斯波氏の第、將軍の居館となり、足利義輝、松永久秀のためにここに死し、館も燒失す。

二條城「名」京都の烏丸室町の間、勘解由小路の南に在りし城。もと室町幕府の管領斯波氏の第、將軍の居館となり、足利義輝、松永久秀のためにここに死し、館も燒失す。

二條城「名」京都の烏丸室町の間、勘解由小路の南に在りし城。もと室町幕府の管領斯波氏の第、將軍の居館となり、足利義輝、松永久秀のためにここに死し、館も燒失す。

二條城「名」京都の烏丸室町の間、勘解由小路の南に在りし城。もと室町幕府の管領斯波氏の第、將軍の居館となり、足利義輝、松永久秀のためにここに死し、館も燒失す。

二條城「名」京都の烏丸室町の間、勘解由小路の南に在りし城。もと室町幕府の管領斯波氏の第、將軍の居館となり、足利義輝、松永久秀のためにここに死し、館も燒失す。

ゆづり

織田信長新館を営みて、義輝の弟義昭を置く。尋いで義昭を逐ひ、自ら上洛の居第に充つ。天正七年歿して、東宮御所とせしより、誠仁(特)親王の居所となり、同十年本能寺の變に、信忠、妙覺寺よりこれに入り、皇太子を禁裏に移し奉り、賊に圍まれて自盡し、城も亦兵火のために廢墟となれり。一名、二條御所。[田原]ゆづり(二條離宮)を見よ。

にとうじやうだい 二條城代 [名] 徳川幕府の職制の一。京都二條城の警衛を掌りしもの。寛永二年設置、與力十騎同心三十人、これに屬せしが、元禄十二年廢したり。にとうじやうばん(二條城番)参照。

にとうじやうばん 二條城定番 [名] 次條に同じ。

にとうじやうばん 二條城番 [名] 徳川幕府の職制の一。京都二條城の城門を警衛せしもの。京都所司代の支配に屬し、定員も一人なりしが、元禄十二年二條城代の廢止後二人となり、各與力十騎、同心二十人、これに屬したり。一名、二條城定番。二條城門番頭。二條定番。にとうじやうばん(二條在番)参照。

にとうじやうばん 二條俊成 [名] [人] にとうじやうばん(二條城番)を見よ。にとうじやうばん(二條俊成)に同じ。

にとうじやうばん 二條高倉殿 [名] にとうじやうばん(二條城番)に同じ。

ゆづり

[名] 徳川幕府の職制の一。京都二條城内の鐵砲の事を掌りしもの。寛永六年の設置に係り、京都所司代の支配に屬し、定員は二人若しくは一人、同心十人これに屬せし。幕末に至りて二條武具奉行と改名せしもの如し。

にとうじやうばん 二條傳授 [名] 『僧頼阿、二條家の門に出て盛名あり、二條良基と力を協せて、二條家の歌風の興隆を計り、頼阿の後、經賢、孝尋、堯惠、堯孝を経て、常縁に至り、常縁二條家の正統を得たりと稱せしに因る』古今傳授の一。東(常縁)の唱道に係り、宗祇、三條西實隆、同公條、同實登、細川玄旨、法印と相傳へ、八條中院(特)鳥丸の諸家に傳はりしもの。二條家傳。

にとうじやうばん 二條天皇 [名] [人] 二條殿を皇居とせられしよりいふ。第七十八代(天皇)。御名は守仁(特)。後白河天皇の第一の皇子。御母は大納言藤原家經の女、贈皇太后懿子。御在位七年(紀元一八一九年—一八二五年)。永萬元年崩す。壽二十三。

にとうじやうばん 二條殿 [名] 藤原道長の、京都二條の南、押小路(特)の北、高倉の西、東洞院(特)の東に建てし邸宅。その子、教通(特)これを傳へしが、後冷泉天皇、大内裏焼失のため、ここに移りて御所とせられ、白河天皇に傳はり、崇徳天皇の里内裏となりて、一旦焼失し、後、後醍醐天皇、龜山天皇、後宇多天皇等傳領せられ、弘安元年また焼失し、同六年更に皇居となり、後、大覺寺派に傳はり、鎌倉時代まで存せり。一名、二條高倉殿。又、内裏として、二條の内裏と呼びたり。[五] 舞家の一なる二條家の第宅。押小路(特)の南室町の東に在り。南北朝の初、光明、崇光二主の居第となり、又その泉殿は、光嚴院退隱後の假御所たりしことあり。一名、押小路丸殿、押小路殿。[目] [人] はらみちかね(藤原道隆)に同じ。[四] [人] ふちほらみちかね(藤原道隆)に同じ。

にとうじやうばん 二條富小路内裏 [名] せせいとみこのころの冷泉

ゆづり

富小路殿)を見よ。

にとうじやうばん 二條師基 [名] [人] ちほらみちかね(藤原師基)に同じ。

にとうじやうばん 二條良貴 [名] [人] ちほらみちかね(藤原良貴)に同じ。

にとうじやうばん 二條良基 [名] [人] 朝臣。本姓は藤原。關白道平の嫡男。光明、崇光後光嚴後圓融の四朝に歴事して、北朝に重きをなし、關白氏の長者第一位。太政大臣に進み、二條關白と稱せられ、聰明博學にして、詞藻に富み、和歌を善くす。僧頼阿と和歌の奥旨を論じ、愚問賢註を著し、又、連歌の書菟玖波(特)集を撰す。嘉慶元年薨す。年六十九。にとうじやうばん(二條傳授)参照。

にとうじやうばん 二條流 [名] 筆策(特)一流。藤原敦家四世の孫定能を祖とす。楊梅流と共に應仁の頃に至りて絶へ。

にとうじやうばん 二條離宮 [名] 京都市上京區二條堀河の西岸にある離宮。舊稱二條城。慶長七年徳川家康の築造に係り、寛永三年後水尾天皇の行幸あり。又、將軍上洛の時の駐在所となり、慶應三年徳川慶喜此處に在りて、大政を奉還せり。東西五町餘、南北四町餘、面積八萬〇三百餘坪、本丸と二ノ丸とに分れ、結構壯麗なり。今は宮内省の所管に歸し、明治十七



ゆづり

年以來離宮に充てらる。

にとうじやうばん 二條院 [名] 古、京都市二條の北、堀河の東にありて、初、皇太后隱子(藤原基經の女、醍醐天皇の皇后)の御領なりしを、盛明(特)親王に傳へ、更に藤原兼家に傳へし家。ほつるん法興院参照。榮五、大殿、十五の宮の住またまひし二條院を、いみじう造らせたまひて、にとうじやうばん(二條院)に似る(似る)の條下を見よ。

にとうじやうばん 二疊系 [名] [地] 『英Bannin system』地質系統の一。二疊紀に屬する岩層。礫岩、砂岩、粘板岩、石灰岩、白雲岩等あり、又一種の含銅板岩あり。化石としては、動物には、巨大なる兩棲類、奇形の魚類あり、三葉族は全く衰へて、腕足類盛んに有孔蟲類は重要な位置を占め、植物には、羊齒類甚だ多く、その他、蘇鐵科、松柏科等あり。

にとうじやうばん 二疊臺 [名] 芝屋の舞臺にて、大將などの乗る臺。又、高(特)二疊臺といふもあり、對面の工藤などの乗るもの、これなり。

にとうじやうばん 二天 [名] 『後漢書』蘇章傳に「人皆有二天、我獨有三天」とあり、恩を蒙りたる人を、天と並べていふ語。『佛』日天子と月天子と。『佛』帝釋天と梵天と。じやうばん(二十天)参照。『鈴』の響も、耳に透り、讀經(特)の御聲も、肝に銘ず。二聖(特)二十天、十羅刹女も、十三大菩薩聖衆(特)も、いかにあはれとおぼしけん。

にとうじやうばん 二典 [名] 『書』書經の中の、堯典と舜典と。(但し、今の舜典は、もと堯典の文なりしを、古文書經の偽作者、これを中斷して、舜典を設け、篇首の語を偽作せしなりと)いふ。『佛』内典と外典(特)と。二典三謨(特)句(句)書經の中の堯典、舜典の二篇と、大禹謨、皋陶(特)謨、益

ニクニ

鎮痛薬とす。西曆一八四六年、ソブレロ (A. Sobrero) の発見に依り、一八六二年、ダイナマイトの發明者ノベル (A. Nobel) 始めて工業的に製造してより、爆發薬としての用途盛んなり。のべる油。

にどろりせりんえき ニトログリセリン液 (Nitroglycerin) 【名】ニトログリセリン一分を酒精百分に溶解したる液。無色・澄明にして、比重〇・八四。中性の反應を示し、酒精の蒸發によりて濃度を増す時は、爆發の虞あり。劇薬に屬し、二乃至十滴を水に和し、偏頭痛・神經痛・心胸絞痛・船酔等に用ふ。

にどろーんせん (英 Nitrobenzene) 【名】「化」ベンゼンを、四十度以下の温度にて攪拌しつつ、濃硫酸と濃硝酸との混合液を加へ、後加熱して、多量の水中に注入する時、器底に沈降する、黄色・油状の重き液。主にアニリンの製造原料とし、又やや有毒なれども、苦扁桃油に類する快香あるにより、香料とし、劣等なる石鹼に和して用ふ。にとろーんぞおる油。

にどろーんぞおる油 ニトロベンゾール油 (英 Nitrobenzol) 【名】「化」前條に同じ。の轉「腹足類」に屬する軟體動物。殼は厚くして、長さ一寸五分。頂端は尖り、各螺層の中央に、一列の小突起あり、表面に黒き表皮ありて、平滑又は種種の斑紋を有し、一對の觸角を具ふ。我國、九州より中國に互りて、淡水に産し、肉は賤民の食用となり、又、養魚の餌に供せらる。種類多く、テス



(な に)

にたま

トマの中間寄宿主となるものあり。いな。いつまでがひ。かはにな。みな。

にたひいろ 蛞蝓色【名】(製)の色の目。一、表は黄裏は青。二、青黒き染色。

にたがはしんさるもん 蛞蝓新左衛門【名】「人」次條に同じ。

にたがはちかまき 蛞蝓川親當【名】「人」歌人。帶刀(せ)丞親後の子。通稱は新左衛門。足利幕府に仕へて、伊勢守となる。武術に精しく、畫を善くし、兼ねて和歌をも巧にし、集外三十六歌仙の一に數へらる。晩に發心して、一休和尚の弟子となり、雅業して智達と號す。文安五年(一説に四年)寂す。

にたむ(似無し) 二無し【形】「には、似の義とも、二の義ともいふ、二ならば、史記の韓信傳に「功無二三於天下」などある。「無二」より出でしなるべし「二つ無し」參照)二つとなし、類なく。無雙なり。源氏「儀式、いとなく、もてかしたるたまふ」同「御目に近くては、げに及ばぬ磯のたたままひ、になく書きあつたまへり」

にたは 荷繩【名】物を荷造(せ)し、又はになふために、その物に結びつくる繩。八笑入(糞桶)の荷繩ちやあねえが、大丈夫にしておかねえと、始末の悪(い)い事が出来るて」

にたはひ 蛞蝓貝【名】(動)腹足類に屬する軟體動物。長さ約三分、殼は卵形をなし、螺塔短くして、紫褐色を呈す。我國、各地の沿海に多し。

にたひ(擔荷)の略。舟世(せ)担て、水をかつがれませが」

にたが

にたが(荷商)に同じ。空常盤「小行燈(コウジシ)き(身の油)荷賣する身代は」

にたがひ(擔) 擔荷籠【名】物を入れて、背負ひ運ぶに用ふる籠。

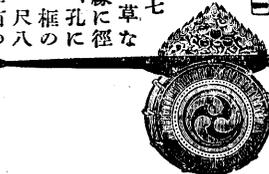
にたがひ(擔) 荷買【名】女郎を、青樓又は遊廓以外の場所に連出すことなるべし。

にたがひ(擔) 擔唐櫃・荷唐櫃【名】にたがひ(擔)に同じ。

にたがひ(擔) 擔担む 荷担む【動四他】せおひ(せ)背負込むに同じ。猿蓑(サルカサ)涼しきや朝草門に荷ひ込む」

にたがひ(擔) 擔鉦鼓 荷鉦鼓【名】鉦鼓(しん)の、道樂(みちがく)の際棒(せ)になひ、歩みながら打鳴すもの。眞鍮製にて、形は、鉦鼓(しん)に同じ、徑八寸。高さ、厚さ、これに準ず。

にたがひ(擔) 擔太鼓 荷太鼓【名】太鼓(太鼓)の、道樂(みちがく)の際棒(せ)になひ、歩みながら打鳴すもの。革は、徑二尺七寸、朱地に牡丹唐草などの花彩を施し、縁に徑八分の孔十箇あり、孔の調緒(と)を通ず。杵の長さ一尺三寸、徑一尺八寸。調緒の色と革面の模様とは、すべて、大太鼓(おほたいこ)に同じ。



(こい だ ひ な に)

にたひち

にたひち(太筒) 荷茶屋【名】茶釜と器物とを、天秤棒の前後に附けてなひ歩き、客の求に應じ、料金を受けて茶を立つること、又その商人。にちやや。大草(おほくさ)床脇(とこわき)は梅咲く方(う)か荷茶屋」

にたひち(太筒) 荷旋毛【名】次條に同じ。和漢三才圖會(わくわんさんさいとうゑ)荷旋毛(か)を、按(お)雙旋(た)俗云、爾奈(な)比豆(ひま)之」

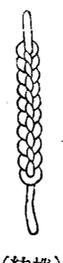
にたひち(太筒) 荷旋毛【名】頭髮の旋毛の二つ並びであること。ふたつ(ふたつ)むじ。

にたひち(太筒) 擔連る 荷連る【動下二自】相つらなりて、各になふ。荷(か)有屋(あ)の夕あがり(ゆふあがり)を荷ひつれ」

にたひち(太筒) 擔風呂 荷風呂【名】元祿の頃(ころ)所へになひ歩き、客の求に應じ、料金を受けて、浴せしめし風呂。になひする。つ(つ)は(つ)辻風呂(つじかぶ)參照。

にたひち(太筒) 擔棒 荷棒【名】てんびんぼう(天秤棒)に同じ。出世(しん)擔棒(せ)に仕込みたる件(けん)のあざ丸(あざまる)するりと扱(あ)ひて運ぶべき物。擔物(たんぶつ)茶(ち)の荷物(にせ)に備(ひ)置(お)く。世(よ)を忘れ草(わすれくさ)の庵(い)になひ物(もの)入れ、荷桶(にせ)の兩端(にせ)に一箇(ひと)づつ吊り下げて用ふる桶。になひ。

にたひち(太筒) 擔ふ 荷ふ【動四他】「なはは接尾語(せ)肩(か)にて支(た)へて運ぶ。かた。かつお。いな。萬葉(ま)常(つね)の戀末(こいすま)だやまぬに都(みやこ)より馬(うま)にこひこばになひあ(む)かも」



(結 蟻)

「四美具、二難并」とあり二つの困難なる事。文選の謝靈運の文に本づく「賢主と嘉賓とは、同時には得がたきこと」

になん 二南「名」詩經の國風中、周南と召南との二篇。「よ」

になめ 煮煮「名」おになめ(御煮嘗)を見にに 煮煮「名」物を煮ること。いにいに。「小供の語」

ににぎのみこ 邇邇藝尊瓊瓊杵尊「名」あめにきしににきしまつひだかひこのににぎのみこ(天通岐志國邇岐志天津日高彦火之邇邇藝命)に同じ。

にんにがかり 二人掛「名」二人にて、一つの事を爲すこと。日掛一挺を二人にて押すこと。二人こぎ。日掛ほろ(大掛)に同じ。(一人掛に對して)

にんにくわい 二人會「名」演奏會講演會落語會などの、二人にて演ずるもの。

にんにこぎ 二人漕「名」にんがかり(二人掛)に同じ。(二人漕に對して)

にんにだうじやうじ 二人道成寺「名」おもむきむすめだうじやうじ(百千鳥娘道成寺)を見よ。

にんにのり 二人乗「名」一輛の人力車に二人乗ること。又、二人乗り得る大きな車。あひのり。あひばこ。

にんにばかま 二人袴「名」能(じ)の狂言の一。己が袴の穿入に、従者と稱して附き添ひゆきしに、身に見あらはされ、二人揃ひて、座敷に出でねばならぬ場合となりたれど、親は袴の用意なきため一著の袴を二つに裂き、各前面にのみ着けて、體裁を繕はんとし、遂にまた看破せられ、赤面して逃ぐる趣を作れるもの。相合袴(袴)の曲に似たり。「前記の能」の狂言より脱化せる喜劇。親の名を高砂尉兵衛(高砂)と、髯を馬之助として作り、九代目市川團十郎が明治二十七年歌舞伎座にて演じたるを初とす。

にんにばり 二人張「名」一人が押し搦め、他の一人が張を掛くる程の強弱(強弱)三人張四人張五人張七人張などもあり。本年監職員、……、二人張に十三束二

伏(伏せ)、飽くまで固めて引き絞る」にんにびく 二人比丘尼「名」書(鈴木正三の著せる假名草子。二卷。下野國の住人須田彌兵衛といふ者、二十五歳にて戦死し、十七歳なるその妻、一周忌過ぎて後、戦死の跡を訪ねし時、姑と夫とに死に別れて悲しめる女の家に宿り、春にならば、共に修行に出てんと約せしに、その女もやがて世を去りし由を記せるもの。

にんにわんざう 二人椀久「名」長唄に合はせて演ずる舞踊。一中筋及び義太夫節にある「椀久末松山(のまつきやま)」に本づく、遊女松山の、片身は女片身は男にて踊るもの。作曲は松島庄五郎(飯田兵四郎)後、唄を改作して、名を「面影二人椀久(おもかげにんわんざう)」といふ。後には、「獨椀久」一名、「四季の椀久」といふも作られたり。

にぬ布「名」ぬ(布)を云ふ。「東國の古の方言」萬葉筑波に雪かも降らるいなをかもかなしけ子ろがにぬ干(ぬき)さるかも」

にぬぎ 煮抜「名」水を多くして炊きたる飯より取れる粘液。糊などに用ぶ。おねば。「生垂(ぬ)に、鹽を入れて、煎じて漉したるもの。煮貫」目次條の略。煮抜の玉子「句」次條に同じ。長町女(長町山葵)「おろしに煮ぬきの玉子」(茹玉子)に同じ。「煮つむ」

にぬきたま 煮抜玉子「名」ゆてたま(茹玉子)に同じ。

にぬく 煮抜く「動四他」十分に煮る。にぬくも 布雲「名」布を引き延べたる如くたなびける雲。「東國の古の方言」萬葉夕されびゆる山を去らぬにぬ雲のあぜか絶えむといひみし子ろはも」

にぬい 荷主「名」荷物の持主。にぬい(荷送人)に同じ。

にぬり 丹塗「名」丹(に)にて塗ること。又その塗りたる物。さぬり(狭丹塗)参照。「古語」

にぬりや 丹塗矢「名」矢幹(や)を丹塗(ぬ)にしてたる矢。「古語」麗美和(の)大物主(大物)の神……丹塗矢になりて」にぬい 二念「名」にん(二心)に同じ。

にねん(徐念)に同じ。にねんこん 二年根「名」(種)二年生草本の根。二年生根。二年根、多年根に對してにねんさう 二年草「名」(種)にねんせい(さう)二年生草本に同じ。(一年草、多年草に對して)

にねんじよくぶつ 二年植物「名」(種)にねんせい(さう)二年生草本に同じ。にねんせい 二年生「名」(種)にねんせい(さう)二年生草本の略。二年生、多年生に對して。日(第二)年級に屬する生徒。

にねんせいこん 二年生根「名」(種)にねんせい(さう)二年生根に同じ。(一年生、多年生根に對して)

にねんせいさう 二年生草「名」(種)にねんせい(さう)二年生草に對して。にねんせい(さう)二年生草に對して。にねんせい(さう)二年生草に對して。にねんせい(さう)二年生草に對して。

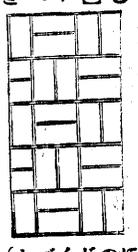
にねんせい(さう)二年生草に對して。にねんせい(さう)二年生草に對して。にねんせい(さう)二年生草に對して。にねんせい(さう)二年生草に對して。

にのう 二卵「名」はつち(初卵)を見よ。にのうて 二腕「名」肩と臂との間。太平記、御類、二の御腕」にのうま 二午「名」はつちま(初午)を見にのうら 二裏「名」(文)にのをり(二折)を見よ。「折」を見よ。

にのおもて 二表「名」(文)にのをり(二折)を見よ。にのかたな 二の刀「句」に(二)の條下を見よ。「條下を見よ」

にのかっせん 二の合戦「句」に(二)の替狂言。陰曆正月に興行す。はるきやうげん。さんのかはり(三替)参照。太馬婆婆連れた爺も來にけり二の替」見よ。

にのさざ 二の木戸「句」に(二)の條下を見よ。にのさざ 二の木戸「句」に(二)の條下を見よ。にのさざ 二の木戸「句」に(二)の條下を見よ。



二のせき

疫所あり。その山形富士山に似たるよ
り、安藤の小富士ともいふ。「よ。
にのせき」二席【名】はつせき(初席)を見
にのせき二膳【名】本膳の外に添へて
出す饗膳。「見よ。

にのたち 二の対【句】たさや(對座)を
に見よ。
にのたち 二の太刀【句】に(二)の條下

にのたに 二谷【名】地「いちのたに」(一谷)
にのつづみ 二鼓【名】古雅樂に
用ひし一種の鼓。今は傳はらねど壹鼓
【名】より大にして、頸に懸け、一本の桴に
て打鳴したりといふ。

にのて 二手【名】操(分)芝居の手摺分
【名】、三重に造れる内の、中間なるもの。
【本手】(分)三手【名】に對して。「よ。
にのて 二の手【句】に(二)の條下を見
にのてんじゆ 二轉手【名】三味線の轉
手の、三箇あるの中、に位するもの。

にのどら 二胴【名】身體の胴の下
部。傾城反魂香試してみたい新刀【名】は無
いか。一の胴か、二の胴か、望んでおけ」
【和船の胴の一部】。「二胴」

にのひと 二人【名】古の宮中の席次に
條殿、二人の人にておはすれど」
にのへ 二戸【名】地「陸奥國九郡の一。
郡役所を福岡町に置く。」「よ。

にのほ 丹の穂【句】に(丹)の條下を見
にのま 二町【名】「もと宮中の局町
【名】の區分の名」第二位に立つもの。第
二流(上町)【名】に對して「源氏」これは
二の町の心やすきなるべし」

にのま 二の松【句】まつ松の條下
を見よ。「下を見よ。
にのま 二舞【名】舞樂にて、案座
にのまの次に、赤くして怖しき假面【名】
をかぶり、醉狂の態を演ずる、滑稽なる
舞。【他人の振舞へる後に、同様な滑稽
稽失敗を振舞ふこと。漢衣「隠蓑の中納
言の二の舞にやならんと、むつかしけれ

二の舞

ば、撥つさしたまへるを」平出「源平兩
家の氏族、院宣を承りて、身命(形)を捨
てて勵み戦ふと雖も、十善の戒行(形)重
きに依つて打勝たまふ處に、少しも違
はぬ二の舞か」
二舞の翁(かき)【句】見ぐるしき翁。
【古語】大翁あはれ、幾とせにならせた
まひはべりぬらんとといへば、二の舞の
翁にてこそは侍らめ」

にのまる 二丸【名】城郭の第二の郭
【名】即ち本丸の次なるもの。にのくるわ
【名】江戶城の本丸の東方なる郭。後に至り
て、經營せしものにて、もと、後世の三の
丸の稱なりしもの如しといふ。

にのまる 二丸留守居【名】徳川
幕府の職制の一。若年寄支配の下に、江
戶城の二の丸の守衛を掌りしもの。焼失
間(分)初は、寛永十一年の創設に係
り、定員、詰は三人、後、漸次増加して、十
餘人に達し、同心三十九人、小人二十七人
づつ附屬したり。るる(留守居)【參照】

にのみや 二宮【名】その國の神社
中、古、一の宮に次ぎて崇敬せられしもの。
三宮【名】、四宮【名】乃至九宮【名】な
どもありたり。【第二の皇子】

にのみや きんじらう 二宮金次郎【名】
【人】にのみやきんじらう(二宮尊徳)に同じ。
にのみや しんじらう 二宮神社【名】下總
國千葉郡二宮村に鎮座する村社。もと武
内に列せり。祭神は、速須佐之男命、稻田
姫命、大國主命及び藤原時平。

にのみや そとく 二宮尊徳【名】【人】
經濟家。通稱は金次郎。相模國足柄郡柏
山の人。德行多く、夙に濟世を
以て己が務とし、自ら節儉力
行して、稼穡殖産
の事を説
き、經營す
る所、常に
人の意表に出
づ。里閭その徳
に浴し、諸侯、亦その
名を聞きて教を請ふ。幕府



(くんとんそやみのに)

二のや

も、封を賜ひて、吏籍に列し、日光廟社の
祭田の荒蕪を拓く策を問ふ。因りて策書
六十卷を獻じ、その事を掌る。安政三年
歿す。年七十。天保年間、報徳結社を作る
今日の信用組合の一種なり。

にのもも 二股【名】馬の後脚の、琵琶
股(形)の下の、狭き部分。「を見よ。
にのもり 二の鋤【句】もり(鋤)の條下
に見よ。
にのや 二の矢【句】や(矢)の條下を見
よ。「見よ。

にのやり 二の槍【句】に(二)の條下を
に見よ。二尾【名】山の一部、その絶頂
に次ぎて高き所。太平御領官の、一黨五百
餘人、鋒(形)を並べて、大山の崩るが如
く、二の尾より打つて出でたりける間」

にのをり 二折【名】【文】俳諧にて、連
句の懐紙の二枚目。その表を二の表、裏
を二の裏といふ。

にの庭【名】【と】ころ。場【名】。場所【名】
【靈時、マツリノヒ】。太平記「合戦の場
【名】」【邸内の、階の前などに在る平地
和名庭、通波。屋前也】。【邸内の空地
の、草木を植ふ、築山泉水などを設け、地
景色を作りたる境處。庭園。【京阪地
方の人家及びその他の地方の農家などに
一部に庭園などを構へ、又その家の
部屋(の上口)【名】ともなる土間。にはか
ま(庭園)には(庭子)にもなる(庭種)に
は(庭)庭【名】庭の禮【參照】。【土土、まづ、
女郎(長徳寺二百、宿の唄)に金子十
兩、庭に使はるる……男女にも、小判の花
を咲かせ】。【波の靜かに平かなる海面。
萬葉武庫】の海にはよくあらしいさり
する蟹の釣舟波の上ゆいゆ】。【にはせん
(庭鏡)の略。

庭の座【名】【句】臨時の祭を見よ。
庭の拜【名】【句】庭上にて行ふ拜舞。
大饗【名】の時、殿に昇る前、まづ中庭
にて行ふ拜。宇治西宮【名】殿の大饗
にて、小野宮殿を尊者におはせよとあり
ければ、年老い、腰痛く、庭の拜えす
まじければ、え詣づまじきて、雨降らば
庭の拜もあるまじければ参りなんと、

二の

御返事のありければ」
庭の者【名】【武家にて、塵埃の掃除を
職とせし者。【さるがく(祭樂)の異稱。
庭の禮心【名】【句】には(庭)園を見よ】來
客の辭し去るを、主人の、庭まで送り出
づること。古、玄關の設なかりし時代に
は、客は對面所の庭より、直ちに座敷に
上り、その辭し去る時、主人は縁を下り
て、庭まで送るを例とせしなり。

庭の教【名】【句】てい(庭訓)に同
じ。新草未遠き若葉の草の縁より庭
の教の跡ぞたがはぬ」

庭も狹【名】【句】庭も狹(く)なる
くらゐに。には(庭)庭參照。【古語
無(庭)庭もせに引連なれるもろ人の立居
を今日や千代の初春」

庭を萌して野にす【句】【にとはとを
庭の意に、のを野の意に取りなして、い
へる語】歌を作る時、助辭のに又ははを
のに改め用ふ。

にの丹羽【名】【地】尾張國八郡の一。
郡役所を布袋(袋)町に置く。【姓氏の
一。本姓は清和源氏。一色【名】氏の支
族。筑紫探題一色直氏の子孫、尾張
國丹羽郡に移りてより氏とす。氏明第十
世の孫氏勝、織田信長に仕へ、子氏次、織
田信雄に仕へしが、後、三河國に來りて、
徳川氏に屬し、後、武藏三河美濃の諸國
に轉封し、元祿十五年、氏常除封、族氏黨
【名】更に越後國高柳に封ぜられ、次に封
美作國に移り、更に播磨國(三草)に封
ぜらる。明治維新後子爵を授けらる。【
姓氏の一。桓武天皇の皇子良降安世より
出づ。その第三十二世の孫長政、尾張國
丹羽郡兒玉邑に住し、斯波義敏に仕へて、
屢ば武功を顯し、丹波氏を稱す。その子
長秀、織田信長に仕へて、近江國佐和山に
封ぜられ、信長歿せられて後、明智光秀
柴田勝家討伐の功により、豊臣秀吉より
越前國及び加賀半國を加へられ、後、事に
より除封、徳川氏に及びて、更に常陸國
敷(形)郡古渡(形)に封ぜられ、後、常陸國
江戸崎、陸奥國棚倉を経て、陸奥國白川城
に治し、嫡子光重、同國二本松(形)城に

移り、子孫相承く。明治維新後、子爵を授けらる。
にはあけ 庭上〔名〕稻の刈りをさめの
にはあふき 丹羽扇〔名〕『今の丹羽子爵の家の定紋なるよりいふ』ひあき(楯扇)に同じ。

にはは 二拜〔名〕さいはい(再拜)に同じ。其儀年行基北辰を拜する座にて、二拜にはいひ 庭石〔名〕庭に据ゑおく石、即ち飛石(石)敷石又は風致を添ふるための黒木(石)などの類。
にはいひつたひ 庭石傳〔名〕庭石を歩み傳ひて行くこと。

にはいひや 庭石屋〔名〕庭石をあきなふ家、又その人。
にはいひ 二杯酢〔名〕魚貝類を生食するため、浸す酢と鹽と、或は酢と醬油とをまぜたるもの。(三杯酢に對して)
にはう 二方〔名〕二つの方角。古物、物を載するに用ひし、一種の臺。三方に似て、前後の二方に孔ありしものと云ふ。

にはうぎん 二寶銀〔名〕寶の字の極印二つあるによりていふ。はうぎん(寶字銀)に同じ。
にはうくわうじん 二方荒神〔名〕にはうくわうじん(寶荒神)に同じ。續五元集、松に海を二方荒神、膝裏毛、いかさま。戻なら乗るべし……二方荒神で、百五十道るべし。

にはうじろ 二方白〔名〕兜の鉢の、左右二方に、金・銀又は白銀(の)を張りたるもの。(三方白四方白・八方白などに對して)
にはうぢやうぎん 二寶丁銀〔名〕はうぢやうぎん(寶字丁銀)に同じ。

にははちめ 庭梅郁李・棠棣〔名〕「植」薔薇(の)科に屬する落葉灌木。高さ二三尺に達し、枝條生ず。葉は互生し、廣披針形にして、李(形)のに似て小く、鋸齒を有す。早春、形、梅のに似て、淡紅色を呈し、往往重瓣をなす。小形の核果を結び、熟すれば、紫赤色を呈し、食ふべし。庭園に栽培して觀賞に供す。こらめ。にはぎんら(庭櫻)に參照。

にははつら 庭漆・枹・臭椿〔名〕「植」苦木(の)科に屬する落葉喬木。高さ數丈に達し、葉は奇數羽狀複葉をなし、各小葉は卵狀披針形にして、鈍尖頭と粗齒とを有し、葉脚歪形なり。夏季、帯緑白色の小花、圓錐花序をなし、開く。原産地は支那、我國、各地に栽培し、又、歐米にては、道路樹とす。葉は枹(蠶)を飼ふに用ふ。
にはか 俄〔名〕にはかきやう(俄狂言)の略。
にはか 俄か 遼か 貌〔名〕にはかしく(俄しく)を見よ。だしぬけ。たちまち。きふ。突然。俄然(の)。急遽。倉卒。
にはかあんどん 俄行燈〔名〕俄狂言を行ふ者の携ふる行燈。
にはかあめ 俄雨〔名〕俄かに降り来る雨。ゆふだち。はやさめ。急雨。驟雨。
にはかいられ 俄幽霊〔名〕俄かに幽霊となりて現るること。若風(盆)俄幽霊に「なる事」。

にはか 俄か 俄醫者〔名〕俄かに醫者になりたる人。柳屋(俄醫者)もしものためになりにたり。
にはか 俄か 俄風〔名〕俄かに吹き起る風。五人(玄)思ひもよらぬ俄風……これに焼けとまります程に。
にはか 俄か 俄川〔名〕俄かに生じたる川。若風(盆)さりと深く恨みまらすと、泪また俄川かと思はれ。
にはか 俄か 俄狂言〔名〕座興のために、俄かに趣向を考へ出して行ふ、滑稽なる狂言。にはかしば。遊廓にて催す、一種の茶番狂言。さまざまに扮したる男女と囃子(の)方とを、各別箇の小さ無臺に分ち配り、廓内の家家を、順次に流し歩く。にはか。
にはか 俄か 庭神樂〔名〕神社にて、舞臺を設けず、庭に篝火を焚きて奏する神樂。
にはか 俄か 庭隠る〔動下二自〕庭の物蔭に在りて、見えぬ。「古語」六帖、咲きはてて今はあらじと思ひしを庭がくれても、匂ひぬるかな。「遊」に同じ。
にはか 俄か 俄拵〔名〕拵(の)に同じ。

にはか 俄か 俄事〔名〕にはかに起りたる事。急事。保馬(俄事)にて侍る上。平家(思)ひも設けぬ俄事に「はあり」柳屋「親船(内裡)をくづす俄事」。「する者」にはか 俄か 俄師〔名〕俄狂言(の)職業とにはか 俄か 俄仕込〔名〕商品(の)を、急に仕込むこと。急に覺え込むこと。
にはか 俄か 俄死〔名〕俄かに死ぬること。頓死。急死。
にはか 俄か 俄芝居〔名〕にはかきやう(俄狂言)に同じ。
にはか 俄か 俄身代〔名〕俄かに起しにはか 俄か 俄攻〔名〕俄かに攻め立つること。急襲。
にはか 俄か 俄刺〔名〕俄かに刺殺すること。刺殺してより間のなきこと。世間(子)身(氣)醫學も一年に足らずして、俄刺の頭を振り。
にはか 俄か 俄大臣〔名〕にはかきやう(俄狂言)に同じ。若風(盆)金山(の)に「かかりて、思の外なる俄大臣となり」
にはか 俄か 俄道心〔名〕俄かに發心して、出家すること、又その人。今道心。にはか坊主。そうはち。
にはか 俄か 俄旅〔名〕俄かに思ひ立ちてする旅行。當年(七夕)の(や)裸禪の(俄)旅(は)か(ち)やう(の)や(の)俄(長)者(の)にはか(お)げ(の)俄(分)限(の)に(同)じ。二代(男)の(者)俄(長)者(となりぬ)。
にはか 俄か 俄辻風〔名〕俄かに吹く辻風。十訓(には)か(辻)風(出)て(來)りて、(か)の(經)を(卷)きて、(悉)く(虛)空(の)へ(吹)き(上)げ(け)り。
にはか 俄か 俄成〔名〕俄かになること。狂言(昆布)施(には)か(な)り(の)出(家)。
にはか 俄か 俄坊主〔名〕にはかだう(の)俄(道)心(に)同(じ)。五人(玄)様(子)あ(つ)て(の)俄(坊)主(若風(盆)江(戸)か(ら)尋(ね)て(俄)坊(主)。
にはか 俄か 俄日和〔名〕降り続け、又は曇り続けたる空の、俄かに晴天になること。
にはか 俄か 俄分限〔名〕俄かに富裕の身となること、又その人。いちじぶげん。にはかだいいじん。にはかちやう(の)や(の)なりきん。てきぶげん。博多(小)女(波)流(流)「昨日まで端(の)せせりした我我俄分限は、見らるる通り、今日からは太夫(ぐる)ひ」
にはか 俄か 俄普請〔名〕俄かに普請をする者、又その普請。一代(玄)聲(の)方(には)俄(普)請(に)は(俄)普(請)。
にはか 俄か 俄祭〔名〕神事の時、遺物(の)などを、俄かにこしらへて出すこと。
にはか 俄か 俄籠〔名〕昔、正月三箇日の間、庭園に新しく籠を築き、釜をかけて、火を焚き、又、庭に敷物して、一家の家族、召使(集)り、雑煮(の)を食ひ、酒飲みなどして遊びしこと。大和國(奈)良(の)は、今も、この風俗傳はれり。中古(の)地(火)爐(の)の遺風(なる)べしといふ。小町(師)知(秋)「世はなべて帝(の)歌(に)庭(籠)」
にはか 俄か 俄盲〔名〕俄かに盲目となること、又その人。「に」に同じ。
にはか 俄か 俄病〔名〕きびやう(急病)にはか 俄か 俄病〔名〕前條(に)同(じ)。博多(今年)も、人多くにはかやみして死ぬる中に、帥(の)の(御)子、重(く)惱(ま)せ(ま)ま(ひ)て」
にはか 俄か 俄闇〔名〕俄かに闇になること。聖徳太子(繪)馬(俄)闇(に)度(を)失(ひ)」
にはか 俄か 俄雁金〔名〕にはかびかり(が)な(二)羽(飛)雁(金)に(同)じ。
にはか 俄か 俄踊〔名〕俄狂言の踊。だうけ(を)ど(り)にはか。
にはか 俄か 庭木〔名〕庭に植うる樹木、又庭に植ゑある樹木。庭樹(の)若風(盆)若衆(と)庭木(と)、大(き)に(な)ら(ぬ)物(なら)ば」
にはか 俄か 庭木戸〔名〕庭口に設けてある木戸。
にはか 俄か 二白〔名〕馬の四肢の中、二股の下端に、白き毛の生えめぐりてあること。手紙(の)文(句)の(末)尾(に)本(文)の(補)足(として)行(を)改(め)て(書)き(足)す(こと)又(その)補(足)せ(る)文(句)お(つ)て(が)き。な(ほ)な(ほ)が(き)二(伸)追(啓)追(白)。
にはか 俄か 庭草〔名〕庭に生えたる草。

にはか 俄か 俄事〔名〕にはかに起りたる事。急事。保馬(俄事)にて侍る上。平家(思)ひも設けぬ俄事に「はあり」柳屋「親船(内裡)をくづす俄事」。「する者」にはか 俄か 俄師〔名〕俄狂言(の)職業とにはか 俄か 俄仕込〔名〕商品(の)を、急に仕込むこと。急に覺え込むこと。
にはか 俄か 俄死〔名〕俄かに死ぬること。頓死。急死。
にはか 俄か 俄芝居〔名〕にはかきやう(俄狂言)に同じ。
にはか 俄か 俄身代〔名〕俄かに起しにはか 俄か 俄攻〔名〕俄かに攻め立つること。急襲。
にはか 俄か 俄刺〔名〕俄かに刺殺すること。刺殺してより間のなきこと。世間(子)身(氣)醫學も一年に足らずして、俄刺の頭を振り。
にはか 俄か 俄大臣〔名〕にはかきやう(俄狂言)に同じ。若風(盆)金山(の)に「かかりて、思の外なる俄大臣となり」
にはか 俄か 俄道心〔名〕俄かに發心して、出家すること、又その人。今道心。にはか坊主。そうはち。
にはか 俄か 俄旅〔名〕俄かに思ひ立ちてする旅行。當年(七夕)の(や)裸禪の(俄)旅(は)か(ち)やう(の)や(の)俄(長)者(の)にはか(お)げ(の)俄(分)限(の)に(同)じ。二代(男)の(者)俄(長)者(となりぬ)。
にはか 俄か 俄辻風〔名〕俄かに吹く辻風。十訓(には)か(辻)風(出)て(來)りて、(か)の(經)を(卷)きて、(悉)く(虛)空(の)へ(吹)き(上)げ(け)り。
にはか 俄か 俄成〔名〕俄かになること。狂言(昆布)施(には)か(な)り(の)出(家)。
にはか 俄か 俄坊主〔名〕にはかだう(の)俄(道)心(に)同(じ)。五人(玄)様(子)あ(つ)て(の)俄(坊)主(若風(盆)江(戸)か(ら)尋(ね)て(俄)坊(主)。
にはか 俄か 俄日和〔名〕降り続け、又は曇り続けたる空の、俄かに晴天になること。
にはか 俄か 俄分限〔名〕俄かに富裕の身となること、又その人。いちじぶげん。にはかだいいじん。にはかちやう(の)や(の)なりきん。てきぶげん。博多(小)女(波)流(流)「昨日まで端(の)せせりした我我俄分限は、見らるる通り、今日からは太夫(ぐる)ひ」
にはか 俄か 俄普請〔名〕俄かに普請をする者、又その普請。一代(玄)聲(の)方(には)俄(普)請(に)は(俄)普(請)。
にはか 俄か 俄祭〔名〕神事の時、遺物(の)などを、俄かにこしらへて出すこと。
にはか 俄か 俄籠〔名〕昔、正月三箇日の間、庭園に新しく籠を築き、釜をかけて、火を焚き、又、庭に敷物して、一家の家族、召使(集)り、雑煮(の)を食ひ、酒飲みなどして遊びしこと。大和國(奈)良(の)は、今も、この風俗傳はれり。中古(の)地(火)爐(の)の遺風(なる)べしといふ。小町(師)知(秋)「世はなべて帝(の)歌(に)庭(籠)」
にはか 俄か 俄盲〔名〕俄かに盲目となること、又その人。「に」に同じ。
にはか 俄か 俄病〔名〕きびやう(急病)にはか 俄か 俄病〔名〕前條(に)同(じ)。博多(今年)も、人多くにはかやみして死ぬる中に、帥(の)の(御)子、重(く)惱(ま)せ(ま)ま(ひ)て」
にはか 俄か 俄闇〔名〕俄かに闇になること。聖徳太子(繪)馬(俄)闇(に)度(を)失(ひ)」
にはか 俄か 俄雁金〔名〕にはかびかり(が)な(二)羽(飛)雁(金)に(同)じ。
にはか 俄か 俄踊〔名〕俄狂言の踊。だうけ(を)ど(り)にはか。
にはか 俄か 庭木〔名〕庭に植うる樹木、又庭に植ゑある樹木。庭樹(の)若風(盆)若衆(と)庭木(と)、大(き)に(な)ら(ぬ)物(なら)ば」
にはか 俄か 庭木戸〔名〕庭口に設けてある木戸。
にはか 俄か 二白〔名〕馬の四肢の中、二股の下端に、白き毛の生えめぐりてあること。手紙(の)文(句)の(末)尾(に)本(文)の(補)足(として)行(を)改(め)て(書)き(足)す(こと)又(その)補(足)せ(る)文(句)お(つ)て(が)き。な(ほ)な(ほ)が(き)二(伸)追(啓)追(白)。
にはか 俄か 庭草〔名〕庭に生えたる草。

にはか 俄か 俄事〔名〕にはかに起りたる事。急事。保馬(俄事)にて侍る上。平家(思)ひも設けぬ俄事に「はあり」柳屋「親船(内裡)をくづす俄事」。「する者」にはか 俄か 俄師〔名〕俄狂言(の)職業とにはか 俄か 俄仕込〔名〕商品(の)を、急に仕込むこと。急に覺え込むこと。
にはか 俄か 俄死〔名〕俄かに死ぬること。頓死。急死。
にはか 俄か 俄芝居〔名〕にはかきやう(俄狂言)に同じ。
にはか 俄か 俄身代〔名〕俄かに起しにはか 俄か 俄攻〔名〕俄かに攻め立つること。急襲。
にはか 俄か 俄刺〔名〕俄かに刺殺すること。刺殺してより間のなきこと。世間(子)身(氣)醫學も一年に足らずして、俄刺の頭を振り。
にはか 俄か 俄大臣〔名〕にはかきやう(俄狂言)に同じ。若風(盆)金山(の)に「かかりて、思の外なる俄大臣となり」
にはか 俄か 俄道心〔名〕俄かに發心して、出家すること、又その人。今道心。にはか坊主。そうはち。
にはか 俄か 俄旅〔名〕俄かに思ひ立ちてする旅行。當年(七夕)の(や)裸禪の(俄)旅(は)か(ち)やう(の)や(の)俄(長)者(の)にはか(お)げ(の)俄(分)限(の)に(同)じ。二代(男)の(者)俄(長)者(となりぬ)。
にはか 俄か 俄辻風〔名〕俄かに吹く辻風。十訓(には)か(辻)風(出)て(來)りて、(か)の(經)を(卷)きて、(悉)く(虛)空(の)へ(吹)き(上)げ(け)り。
にはか 俄か 俄成〔名〕俄かになること。狂言(昆布)施(には)か(な)り(の)出(家)。
にはか 俄か 俄坊主〔名〕にはかだう(の)俄(道)心(に)同(じ)。五人(玄)様(子)あ(つ)て(の)俄(坊)主(若風(盆)江(戸)か(ら)尋(ね)て(俄)坊(主)。
にはか 俄か 俄日和〔名〕降り続け、又は曇り続けたる空の、俄かに晴天になること。
にはか 俄か 俄分限〔名〕俄かに富裕の身となること、又その人。いちじぶげん。にはかだいいじん。にはかちやう(の)や(の)なりきん。てきぶげん。博多(小)女(波)流(流)「昨日まで端(の)せせりした我我俄分限は、見らるる通り、今日からは太夫(ぐる)ひ」
にはか 俄か 俄普請〔名〕俄かに普請をする者、又その普請。一代(玄)聲(の)方(には)俄(普)請(に)は(俄)普(請)。
にはか 俄か 俄祭〔名〕神事の時、遺物(の)などを、俄かにこしらへて出すこと。
にはか 俄か 俄籠〔名〕昔、正月三箇日の間、庭園に新しく籠を築き、釜をかけて、火を焚き、又、庭に敷物して、一家の家族、召使(集)り、雑煮(の)を食ひ、酒飲みなどして遊びしこと。大和國(奈)良(の)は、今も、この風俗傳はれり。中古(の)地(火)爐(の)の遺風(なる)べしといふ。小町(師)知(秋)「世はなべて帝(の)歌(に)庭(籠)」
にはか 俄か 俄盲〔名〕俄かに盲目となること、又その人。「に」に同じ。
にはか 俄か 俄病〔名〕きびやう(急病)にはか 俄か 俄病〔名〕前條(に)同(じ)。博多(今年)も、人多くにはかやみして死ぬる中に、帥(の)の(御)子、重(く)惱(ま)せ(ま)ま(ひ)て」
にはか 俄か 俄闇〔名〕俄かに闇になること。聖徳太子(繪)馬(俄)闇(に)度(を)失(ひ)」
にはか 俄か 俄雁金〔名〕にはかびかり(が)な(二)羽(飛)雁(金)に(同)じ。
にはか 俄か 俄踊〔名〕俄狂言の踊。だうけ(を)ど(り)にはか。
にはか 俄か 庭木〔名〕庭に植うる樹木、又庭に植ゑある樹木。庭樹(の)若風(盆)若衆(と)庭木(と)、大(き)に(な)ら(ぬ)物(なら)ば」
にはか 俄か 庭木戸〔名〕庭口に設けてある木戸。
にはか 俄か 二白〔名〕馬の四肢の中、二股の下端に、白き毛の生えめぐりてあること。手紙(の)文(句)の(末)尾(に)本(文)の(補)足(として)行(を)改(め)て(書)き(足)す(こと)又(その)補(足)せ(る)文(句)お(つ)て(が)き。な(ほ)な(ほ)が(き)二(伸)追(啓)追(白)。
にはか 俄か 庭草〔名〕庭に生えたる草。

にはか 俄か 俄事〔名〕にはかに起りたる事。急事。保馬(俄事)にて侍る上。平家(思)ひも設けぬ俄事に「はあり」柳屋「親船(内裡)をくづす俄事」。「する者」にはか 俄か 俄師〔名〕俄狂言(の)職業とにはか 俄か 俄仕込〔名〕商品(の)を、急に仕込むこと。急に覺え込むこと。
にはか 俄か 俄死〔名〕俄かに死ぬること。頓死。急死。
にはか 俄か 俄芝居〔名〕にはかきやう(俄狂言)に同じ。
にはか 俄か 俄身代〔名〕俄かに起しにはか 俄か 俄攻〔名〕俄かに攻め立つること。急襲。
にはか 俄か 俄刺〔名〕俄かに刺殺すること。刺殺してより間のなきこと。世間(子)身(氣)醫學も一年に足らずして、俄刺の頭を振り。
にはか 俄か 俄大臣〔名〕にはかきやう(俄狂言)に同じ。若風(盆)金山(の)に「かかりて、思の外なる俄大臣となり」
にはか 俄か 俄道心〔名〕俄かに發心して、出家すること、又その人。今道心。にはか坊主。そうはち。
にはか 俄か 俄旅〔名〕俄かに思ひ立ちてする旅行。當年(七夕)の(や)裸禪の(俄)旅(は)か(ち)やう(の)や(の)俄(長)者(の)にはか(お)げ(の)俄(分)限(の)に(同)じ。二代(男)の(者)俄(長)者(となりぬ)。
にはか 俄か 俄辻風〔名〕俄かに吹く辻風。十訓(には)か(辻)風(出)て(來)りて、(か)の(經)を(卷)きて、(悉)く(虛)空(の)へ(吹)き(上)げ(け)り。
にはか 俄か 俄成〔名〕俄かになること。狂言(昆布)施(には)か(な)り(の)出(家)。
にはか 俄か 俄坊主〔名〕にはかだう(の)俄(道)心(に)同(じ)。五人(玄)様(子)あ(つ)て(の)俄(坊)主(若風(盆)江(戸)か(ら)尋(ね)て(俄)坊(主)。
にはか 俄か 俄日和〔名〕降り続け、又は曇り続けたる空の、俄かに晴天になること。
にはか 俄か 俄分限〔名〕俄かに富裕の身となること、又その人。いちじぶげん。にはかだいいじん。にはかちやう(の)や(の)なりきん。てきぶげん。博多(小)女(波)流(流)「昨日まで端(の)せせりした我我俄分限は、見らるる通り、今日からは太夫(ぐる)ひ」
にはか 俄か 俄普請〔名〕俄かに普請をする者、又その普請。一代(玄)聲(の)方(には)俄(普)請(に)は(俄)普(請)。
にはか 俄か 俄祭〔名〕神事の時、遺物(の)などを、俄かにこしらへて出すこと。
にはか 俄か 俄籠〔名〕昔、正月三箇日の間、庭園に新しく籠を築き、釜をかけて、火を焚き、又、庭に敷物して、一家の家族、召使(集)り、雑煮(の)を食ひ、酒飲みなどして遊びしこと。大和國(奈)良(の)は、今も、この風俗傳はれり。中古(の)地(火)爐(の)の遺風(なる)べしといふ。小町(師)知(秋)「世はなべて帝(の)歌(に)庭(籠)」
にはか 俄か 俄盲〔名〕俄かに盲目となること、又その人。「に」に同じ。
にはか 俄か 俄病〔名〕きびやう(急病)にはか 俄か 俄病〔名〕前條(に)同(じ)。博多(今年)も、人多くにはかやみして死ぬる中に、帥(の)の(御)子、重(く)惱(ま)せ(ま)ま(ひ)て」
にはか 俄か 俄闇〔名〕俄かに闇になること。聖徳太子(繪)馬(俄)闇(に)度(を)失(ひ)」
にはか 俄か 俄雁金〔名〕にはかびかり(が)な(二)羽(飛)雁(金)に(同)じ。
にはか 俄か 俄踊〔名〕俄狂言の踊。だうけ(を)ど(り)にはか。
にはか 俄か 庭木〔名〕庭に植うる樹木、又庭に植ゑある樹木。庭樹(の)若風(盆)若衆(と)庭木(と)、大(き)に(な)ら(ぬ)物(なら)ば」
にはか 俄か 庭木戸〔名〕庭口に設けてある木戸。
にはか 俄か 二白〔名〕馬の四肢の中、二股の下端に、白き毛の生えめぐりてあること。手紙(の)文(句)の(末)尾(に)本(文)の(補)足(として)行(を)改(め)て(書)き(足)す(こと)又(その)補(足)せ(る)文(句)お(つ)て(が)き。な(ほ)な(ほ)が(き)二(伸)追(啓)追(白)。
にはか 俄か 庭草〔名〕庭に生えたる草。

庭園

萬葉庭草にむら雨降りてきりぎりす鳴く
聲聞けば秋つきにけり」**庭**「植」にはやなぎ
(庭柳)に同じ。**庭**「植」はほまき(帶木)に
同じ。「地膚」和名「地膚」瀧波久佐一云、
末木久佐」

庭口「名」庭の出入口。和合人
「かの取締なき庭口を引き寄せたまま駈
け出す」

庭くさなぎ庭婚「名」(動)くさなぎ(婚ぐ)
を見よ「せまれの(鶴鶴)に同じ。日本振袖始
「あの鶴鶴を庭くさなぎ庭たき戀教鳥
とも云ふ」

庭くさぶり庭くさぶり「名」(動)前
條に同じ。「古語」起鶴鶴、ニハクナブリ」

庭下駄「名」庭を歩むにはく
下駄。齒なく、材の中央を刳(くり)りあけた
る、粗製なるもの。

庭子庭兒「名」(庭)庭園を見
よ「農家にて、僕と婢とが夫婦になりて
生みたる子の、引續き、その家に仕ふるも
の。かまご。爺譜代。にはさち(庭育)参照。

庭箱「名」庭に置いて、小鳥を入
れおく籠。五人玄熊笹むららとして、
その奥に庭籠ありて、白雁(ハシ)唐鳩金
雞、さまざまの聲なして」若鳥盆三十七
羽すぐりて、これを庭籠に入れさせ」

荷箱荷宮「名」荷物を入るるに
用ふる箱。

庭木陰「名」庭木の陰。若鳥
庭木陰の闇き中へ入りたまひしは、文
見んため心あてなるべし」

庭古草「名」(植)たちばな(橘)
の異稱。「古語」裏抄「植えおきし頃
は昔の庭古草咲ける花のみ今の思を」

庭舌「名」庭に生えたる舌。
にはごけ庭舌庭小手「名」形、左官職
の用ふるもの似て、それよりも鐵部の
肉厚き鏡。小草木を移植するに用ふ。

庭席「名」庭上の座席。江次重「被
にはささち庭掃除「名」庭を掃除する

庭先

こと。にははき。
にはさき庭先庭前「名」庭の、縁側に近
き部分。えんさき。庭前(前)庭除。鬼貫
「庭さきに白く咲いたる椿かな」

庭櫻「名」庭に植ゑたる
櫻。いへら。後拾遺「思ひおく事なから
まし庭櫻散りての後の船出なりせば」

庭波加「名」(上)不見櫻に同じ。
和名朱櫻波波加。一云、爾波佐久良」
「植櫻の一品種。葉やや大きく、花は重
瓣をなし、紅白の二種ありて、麗美なる
がために、庭園に栽まて觀賞に供す。「多
葉郁李」**庭**「植かば(椿)に同じ。

庭師「名」(場師)に同じ。
にはく俄しく「副」にはかに。急に。
「古語」萬葉「しほ舟のへこそ白波にはし
くおふせたまふか思はへなくに」

荷馬車「名」荷物を積みて運
ぶ馬車。ばりり。

庭白百合「名」(植)百合
に同じ。科に屬する多年生の草。高さ二三尺
に達し、葉は披針形又は線形をなし、花は
小形、白色の鐘狀花にして、内面平滑、往
往重瓣をなす。原産地は歐羅巴の南部よ
り波斯(ペル)にかけての地方とす。
又その名。庭好「名」庭をすき好むこと。
又その人。狂言藝大名「下京(下)邊に、
心やさかたな御方がござる。事の外の庭
すきてござる」

庭雀「名」庭に居るすずめ。
にはすすめ庭雀「名」庭に居るすずめ。
記「にはすすめ庭雀
まりかて」

庭砂「名」庭にある砂。三代男
圖を見よ。

庭砂「名」庭にある砂。三代男
圖を見よ。

庭瀨「名」(地)備中國古備(備)
郡にある町。岡山市の西二里。板倉氏の
舊藩地。「明治」の初年の縣の一。ふやま
(福山)参照。

庭石菖「名」(植)菖尾
にはせきじやう庭石菖「名」(植)菖尾
(福山)参照。

庭石菖「名」(植)菖尾
にはせきじやう庭石菖「名」(植)菖尾
(福山)参照。

庭園

に達し、葉は劍狀にして、全縁、葉間より
花莖出で、春、莖頂に、紅紫色の條を有す
る六瓣の華花を著く。亞米利加よりの船
載に係り、庭園に栽培す。いとあやめ。き
んしやうぶ。

庭錢「名」庭園に働く者にま
でも與へて賑ははする錢の義なるべし」
昔京阪地方の遊里にて、五節句を約束す
る客人の、祝儀として拂ひし錢。には
一代男大夫棟より宿への時服庭錢撒き散
らす「善の門松」この金を、このまま置け
ば揚屋の庭錢、埃になつて、廢ります」

庭宿「名」荷物を附け替へんとし
て、人馬なき場合に、問屋場に留め置く料
として、駄賃の外に請求せし錢。

庭甘遂「名」(植)なつさうだい(夏燈
臺)に同じ。和名甘遂、爾波會。一名、通
比會」

庭田「名」庭さきにある田。爲手
千貫十代(代)にも足らぬ庭田の早苗か
なゆひの手まある程だにもなし」

庭田「名」姓氏の一名。本姓は宇多
源氏、敦實(實)親王の子、一條左大臣雅信
の裔、中納言有資の子、經資を祖とす。神
樂の事を掌り、羽林家にして、將官を経て、
權大納言に至るを先途とす。明治維新後、
伯爵を授けらる。「犬芥子」に同じ。

庭大根「名」(植)いぬがら
にはたかつひのかみ庭高津日神「名」
大年(神)の御子、庭津日神の御弟。御
母、庭津日神のと同じ。一説に、庭津日神
の別名なるべしとす。

庭叩「名」(動)にはくさなぎ(庭
婚)に同じ。「古語」拾遺「さらぬだに霜枯
れはつる草の葉をまづうちらはらふ庭たた
きかな」

庭立「名」庭上におりたつ
こと。新六殿もりのよめかな」**庭立**
に姿かこき朝よとのめかな」**庭立**
略。江次重「御幼主之時、無官奏并庭立」
庭立の奏の(句)「還立」など
の時、庭前にて、音楽を奏すること。に

庭立「名」庭上におりたつ
こと。新六殿もりのよめかな」**庭立**
に姿かこき朝よとのめかな」**庭立**
略。江次重「御幼主之時、無官奏并庭立」
庭立の奏の(句)「還立」など
の時、庭前にて、音楽を奏すること。に

庭園

はだち。百練抄「申す高麗人夢掠鎮西之
由、仍止三音楽庭立奏」**庭**「御曆(曆)
の奏」に同じ。

庭行潦「名」雨水の、俄か
に地上に溜りて流るるもの。道ばたを流
るる根なし水。行潦(行)和名潦、雨水
也、爾八太豆美」

庭行潦「名」(枕)にはたづみは
流るるものなるにより、ながるる(流)にか
けていふ。萬葉「またたけし島を見る時に
はたづみ流るる涙とめざかねつる」

庭「名」十六歳。(女子)美少
年などの上にいふ。太平記、已に二八に
も成りしかば、巫山の神女雲となりし夢
の面影を留め」**庭**「後漢書」張衡傳に
「幸二八之選、與今、善二傳説生、殷」とあ
り。八元と八億との二つの義「多くの賢
良。歴代記「龍樓、鳳閣の上に、二八の主と
崇められて」

庭「名」二と八との乗積。
二八十六(句)「數」二と八とを乗ず
れば、その積(積)十六なり。即ち當然の
結果を得る體にいふ。

庭「名」二月八月「名」陰曆にて、
一年の内、二月と八月と。季節風の交
替する時期なるため、氣壓の配置不定に
て、海上の風波荒く、船舶の航行、危険な
り。につげちぐわつ。毛吹草(重)「めぐり
くる二八月こそ程なれ船路の旅はとめ
ん思子(思)」

庭「名」二八蕎麥「名」蕎麥粉二
分と温純粉八分とを割合して作りたる蕎
麥。「善庵隨筆」に「蕎麥粉二分、温純粉
八分、八分と二分との割合にするは、温純
粉を多くして切れざるやうにせしにやあ
らん。今の入、二八といふは價のことに
て、今、蕎麥二膳を十六文に賣る故に、二
八十六文の義と心得るは、誤なり」とあ
り。二膳の價十六文なる蕎麥。

庭「名」二八挺「名」じやうちやう
だて(十六挺立)に同じ。

庭帳「名」刈り收めたる作
物を庭園に積むによりていふ「年貢の事

庭帳「名」刈り收めたる作
物を庭園に積むによりていふ「年貢の事

を記したる帳簿。
にはつくり庭作【名】「樹石を按排し、

築山・泉水などを造ること、又それを職業とする人。うゑまき。新六、宿しめかひこそなけれ、昔の上の庭つくりせぬ山の岩かど」よゑあか、妙隆寺の庭より修性(修性)院の山つづきは、寶曆六の年、庭つくりのたくみ岡房軒が造る所にして」
徳川幕府の職制の一。作事奉行の配下に屬し、庭園の樹石泉水などを造る事を掌りしもの。目くつくりやん(露次作役)に同じ。

にはつげ庭黄揚【名】「植(ひめつげ)庭黄揚」庭を傳ひあること。
にはつたひ庭傳【名】庭を傳ひあること。和合入庭つたひに、奥の座敷に至る」
にはつち地膳【名】「動(つちばね)土斑猫」に同じ。名義多、地膳、蟲類、ニハツツ」
にはつづき庭續【名】庭が、鄰家のと接續すること。「深山樞」に同じ。

にはつり庭津島【名】「植(みやま)庭津島」枕詞より轉じたる語(はつり)庭津島に同じ。正治元年二年百長夜夜の夢覺むかとや庭つ鳥明け行く空を人に告ぐらん」便。
にはつり庭雞【名】にはつり(雞)の音に、つり庭津島【枕】庭の鳥の意なるより、人家の庭に棲むかけ(雞)に於けるいふ。つり(家津島)おきつり(沖津島)おきつり(鳥津島)おきつり(野津島)参照。詞にはつりかけは鳴く」

にはつり庭積【名】庭に積むこと。庭積の机代(ツツ)の物(句)大嘗祭の時、一般臣民より奉納せる地方特産の品を、案に載せて、神前に供ふるもの。明治四年の大嘗祭より、この事行はれ、大正四年の大嘗祭にも、道(府縣及

び朝鮮臺灣樺太等より、各精米一升、精粟五合及び魚類、海藻、野菜、雜穀、果實などの奉獻を允許せられたり。
にはつる二羽鶴【名】紋所の一。翼を張りたる鶴二羽を、頭と頭の向ひあふやうに、圓く置きたるもの。
にはどうい洞洞石【名】庭さきの築山の邊なる假瀧の右側に立てたる石。

にはご接骨木【名】「植(忍冬)科」に屬する落葉灌木。幹は、ねぢれて、高さ約一丈に達し、枝條四方に繁茂す。葉は奇數の羽狀複葉にして、藤のに似て、大さく、對生し、各小葉は長卵形をなし、細鋸齒を有す。早春、小形白色の花、圓錐花序をなして開き、果實は小球狀にして赤色を呈す。我國、各地の山野に自生し、又、人家にも植う。果實及び莖は薬用とし、又、この木の朽幹に生ずる木耳(ツツ)は、品質良好とす。こぶのき。せつこぶく。たづのき。みやつこぎ。みやとこぎ。



(こととはに)

にはとびかきがね二羽飛雁【名】紋所の一。翼を擴げて上方に向へる雁を、二つ、やや斜に重ねて描けるもの。にはかきがね。
にはつり庭雞【名】「動(庭鳥の義)にはつり(庭津島)参照」雞類に屬する鳥。頭部には、裸出せる雞冠、頸には、裸出せる肉垂あり。脚は力強くして疾駆に適し、嘴、爪も共によく發達し、土砂を掘撥して、食物を索むるに適す。雄は跼蹠部に距あり、雌に比して色美しく、雞冠、肉垂も大なり。翼は發育不完全なるため、飛翔に適せず。穀類及び昆蟲を食すとす。原種は馬來半島に棲める野雞にして、我國への傳來の年代、経路は明かにしなれど、歴史には、神代の記事中に既に見ゆ。卵肉共食用として貴ばれ、大別して、卵用種、肉用種

愛玩種の三とし、品種多し。あけつげどり。いへつどり。うすべりどり。かけときつげどり。ながなきどり。にはつどり。ゆふつげどり。
雞の口となるとも、牛の尻となるな(句)「雞口(口)となるとも、牛後となる勿れ」に同じ。「諺語」
雞を割(割)くに、焉(や)んぞ、牛刀を用ひん(句)「論語の陽貨篇に「子之武城、聞(き)て、弦歌之聲、夫子莞爾而笑曰、割(割)焉用(用)牛刀」とあるに本爾而笑曰、小事を處理するに、大人物又は大任掛なる手段を用ふる必要な言。諺語」
雞を割(割)くに、牛刀を用ふ(句)小事を處理するに、大人物又は大任掛なる手段を用ふる言。諺語」

にはとりあはせ雞合【名】鶏を飼はすること。鶏の職合。とりあはせ。五人女雞合、さまざまの遊興ありしに、若風(若風)沙室(沙室)の雞合いさきよく」
にはとりいさき雞軍【名】「雞の、時を作るに譬へていふ」遠方より岡の聲を響ぐるのみにて、近くには攻め寄せぬ戰。譯語にはとりいさき」
にはとりこや雞小屋【名】雞を入れおくり小屋。
にはとりのみね雞峯【名】「地(けい)そせん(雞足山)に同じ。
にはとりびと雞人【名】「けいじん(雞人)に同じ。奈良日記「今夜より雞人を我がためは鶏人といはん」とぞ思ふ」

にはとりほこ雞餅【名】山餅(山餅)の一種。屋形の櫛の形を取附けたるもの。京都の祇園神社の祭禮に饗き、名高し。福川(福川)の數一祇園會の長刀(長刀)鋒のきつ先に、打ちかけ時の雞餅」
にはとりむこ雞智【名】能(能)の狂言の一。智人をなさんとする男、その作法として、雞の鳴聲と職合ふ眞似とを覺えおくり必要ありと欺き教へられて、舅の迷惑する事を作りたるもの。
にはとりお雞類【名】「動(お)いける(鶏類)に同じ。

にはばな煮端煮花【名】煎じたてて、香味の程よき煎茶。てばな。讀誤毛「高坏(高坏)の餅菓を積み、煮花を添へて」
にはばな庭中【名】庭の中央。煮花庭中のあすはの神に木柴(木柴)さし香(香)はいはむ歸り來(來)まてに」
にはばな新嘗【名】「ひなめ(新嘗)に同じ。「古語」新嘗、ニハナヒ」
にはばな新嘗【名】前條に同じ。「古語」にはばな(新嘗)庭に立つ(枕)庭に生ずる麻といふ意より、あさ(麻)にかけていふ。煮花庭に立つあさてこぶすま今宵だにまつまよしこせねあさてこぶすま」
にははなき心やう庭拔狀【名】拔狀の一種。飛脚屋の店頭にて抜き出して、別に急飛脚に託するもの。
にはのあひ新嘗【名】「ひなめ(新嘗)に同じ。「古語」新嘗、ニハナヒ」
にはのり庭乗場騎【名】馬場にて、馬を乗り馴らすこと。盛衰(盛衰)三黒(三黒)といふ小馬を賜はつて、庭乗仕りける程に」
にははらき庭帯【名】庭を掃くに用ふる帚。多くは竹の枝を用ふ。
にははき庭掃【名】庭を掃くこと、又その人。にははきや庭はきの家の風花をわが世の朝きよめかな」に同じ。
にははき庭萩【名】「植(なつば)庭萩」にははらき庭働【名】庭にて働くこと、又その人。五人女「身をひききぎて、里の仕業の庭働」若風(若風)庭働の下女も、姿に構はん庭」
にはばな庭番【名】徳川幕府の職制の一。若年寄支配の下に、將軍の耳目となりて、地方を遍歴し、風聞を糾察することを掌りしもの。定員、大抵十人。兩番格、小十人(小十人)格の二階級に分れ、又、別に山里庭番といふもありき。
にはび庭火【名】禁中の御神樂の時など、庭にて焚く篝火。焚火、庭火も、いたうまよひて、吹きかけらるるを、拂ひわびつ(拂)「忌火(忌火)といふにては、六月、十二月の御神事の御膳をば調じけ

にはとりあはせ雞合【名】鶏を飼はすること。鶏の職合。とりあはせ。五人女雞合、さまざまの遊興ありしに、若風(若風)沙室(沙室)の雞合いさきよく」
にはとりいさき雞軍【名】「雞の、時を作るに譬へていふ」遠方より岡の聲を響ぐるのみにて、近くには攻め寄せぬ戰。譯語にはとりいさき」
にはとりこや雞小屋【名】雞を入れおくり小屋。
にはとりのみね雞峯【名】「地(けい)そせん(雞足山)に同じ。
にはとりびと雞人【名】「けいじん(雞人)に同じ。奈良日記「今夜より雞人を我がためは鶏人といはん」とぞ思ふ」

にはとりほこ雞餅【名】山餅(山餅)の一種。屋形の櫛の形を取附けたるもの。京都の祇園神社の祭禮に饗き、名高し。福川(福川)の數一祇園會の長刀(長刀)鋒のきつ先に、打ちかけ時の雞餅」
にはとりむこ雞智【名】能(能)の狂言の一。智人をなさんとする男、その作法として、雞の鳴聲と職合ふ眞似とを覺えおくり必要ありと欺き教へられて、舅の迷惑する事を作りたるもの。
にはとりお雞類【名】「動(お)いける(鶏類)に同じ。

にはばな煮端煮花【名】煎じたてて、香味の程よき煎茶。てばな。讀誤毛「高坏(高坏)の餅菓を積み、煮花を添へて」
にはばな庭中【名】庭の中央。煮花庭中のあすはの神に木柴(木柴)さし香(香)はいはむ歸り來(來)まてに」
にはばな新嘗【名】「ひなめ(新嘗)に同じ。「古語」新嘗、ニハナヒ」
にはばな新嘗【名】前條に同じ。「古語」にはばな(新嘗)庭に立つ(枕)庭に生ずる麻といふ意より、あさ(麻)にかけていふ。煮花庭に立つあさてこぶすま今宵だにまつまよしこせねあさてこぶすま」
にははなき心やう庭拔狀【名】拔狀の一種。飛脚屋の店頭にて抜き出して、別に急飛脚に託するもの。
にはのあひ新嘗【名】「ひなめ(新嘗)に同じ。「古語」新嘗、ニハナヒ」
にはのり庭乗場騎【名】馬場にて、馬を乗り馴らすこと。盛衰(盛衰)三黒(三黒)といふ小馬を賜はつて、庭乗仕りける程に」
にははらき庭帯【名】庭を掃くに用ふる帚。多くは竹の枝を用ふ。
にははき庭掃【名】庭を掃くこと、又その人。にははきや庭はきの家の風花をわが世の朝きよめかな」に同じ。
にははき庭萩【名】「植(なつば)庭萩」にははらき庭働【名】庭にて働くこと、又その人。五人女「身をひききぎて、里の仕業の庭働」若風(若風)庭働の下女も、姿に構はん庭」
にはばな庭番【名】徳川幕府の職制の一。若年寄支配の下に、將軍の耳目となりて、地方を遍歴し、風聞を糾察することを掌りしもの。定員、大抵十人。兩番格、小十人(小十人)格の二階級に分れ、又、別に山里庭番といふもありき。
にはび庭火【名】禁中の御神樂の時など、庭にて焚く篝火。焚火、庭火も、いたうまよひて、吹きかけらるるを、拂ひわびつ(拂)「忌火(忌火)といふにては、六月、十二月の御神事の御膳をば調じけ

にはとりあはせ雞合【名】鶏を飼はすること。鶏の職合。とりあはせ。五人女雞合、さまざまの遊興ありしに、若風(若風)沙室(沙室)の雞合いさきよく」
にはとりいさき雞軍【名】「雞の、時を作るに譬へていふ」遠方より岡の聲を響ぐるのみにて、近くには攻め寄せぬ戰。譯語にはとりいさき」
にはとりこや雞小屋【名】雞を入れおくり小屋。
にはとりのみね雞峯【名】「地(けい)そせん(雞足山)に同じ。
にはとりびと雞人【名】「けいじん(雞人)に同じ。奈良日記「今夜より雞人を我がためは鶏人といはん」とぞ思ふ」

にはとりほこ雞餅【名】山餅(山餅)の一種。屋形の櫛の形を取附けたるもの。京都の祇園神社の祭禮に饗き、名高し。福川(福川)の數一祇園會の長刀(長刀)鋒のきつ先に、打ちかけ時の雞餅」
にはとりむこ雞智【名】能(能)の狂言の一。智人をなさんとする男、その作法として、雞の鳴聲と職合ふ眞似とを覺えおくり必要ありと欺き教へられて、舅の迷惑する事を作りたるもの。
にはとりお雞類【名】「動(お)いける(鶏類)に同じ。

にはばな煮端煮花【名】煎じたてて、香味の程よき煎茶。てばな。讀誤毛「高坏(高坏)の餅菓を積み、煮花を添へて」
にはばな庭中【名】庭の中央。煮花庭中のあすはの神に木柴(木柴)さし香(香)はいはむ歸り來(來)まてに」
にはばな新嘗【名】「ひなめ(新嘗)に同じ。「古語」新嘗、ニハナヒ」
にはばな新嘗【名】前條に同じ。「古語」にはばな(新嘗)庭に立つ(枕)庭に生ずる麻といふ意より、あさ(麻)にかけていふ。煮花庭に立つあさてこぶすま今宵だにまつまよしこせねあさてこぶすま」
にははなき心やう庭拔狀【名】拔狀の一種。飛脚屋の店頭にて抜き出して、別に急飛脚に託するもの。
にはのあひ新嘗【名】「ひなめ(新嘗)に同じ。「古語」新嘗、ニハナヒ」
にはのり庭乗場騎【名】馬場にて、馬を乗り馴らすこと。盛衰(盛衰)三黒(三黒)といふ小馬を賜はつて、庭乗仕りける程に」
にははらき庭帯【名】庭を掃くに用ふる帚。多くは竹の枝を用ふ。
にははき庭掃【名】庭を掃くこと、又その人。にははきや庭はきの家の風花をわが世の朝きよめかな」に同じ。
にははき庭萩【名】「植(なつば)庭萩」にははらき庭働【名】庭にて働くこと、又その人。五人女「身をひききぎて、里の仕業の庭働」若風(若風)庭働の下女も、姿に構はん庭」
にはばな庭番【名】徳川幕府の職制の一。若年寄支配の下に、將軍の耳目となりて、地方を遍歴し、風聞を糾察することを掌りしもの。定員、大抵十人。兩番格、小十人(小十人)格の二階級に分れ、又、別に山里庭番といふもありき。
にはび庭火【名】禁中の御神樂の時など、庭にて焚く篝火。焚火、庭火も、いたうまよひて、吹きかけらるるを、拂ひわびつ(拂)「忌火(忌火)といふにては、六月、十二月の御神事の御膳をば調じけ

にはとりあはせ雞合【名】鶏を飼はすること。鶏の職合。とりあはせ。五人女雞合、さまざまの遊興ありしに、若風(若風)沙室(沙室)の雞合いさきよく」
にはとりいさき雞軍【名】「雞の、時を作るに譬へていふ」遠方より岡の聲を響ぐるのみにて、近くには攻め寄せぬ戰。譯語にはとりいさき」
にはとりこや雞小屋【名】雞を入れおくり小屋。
にはとりのみね雞峯【名】「地(けい)そせん(雞足山)に同じ。
にはとりびと雞人【名】「けいじん(雞人)に同じ。奈良日記「今夜より雞人を我がためは鶏人といはん」とぞ思ふ」

にはとりほこ雞餅【名】山餅(山餅)の一種。屋形の櫛の形を取附けたるもの。京都の祇園神社の祭禮に饗き、名高し。福川(福川)の數一祇園會の長刀(長刀)鋒のきつ先に、打ちかけ時の雞餅」
にはとりむこ雞智【名】能(能)の狂言の一。智人をなさんとする男、その作法として、雞の鳴聲と職合ふ眞似とを覺えおくり必要ありと欺き教へられて、舅の迷惑する事を作りたるもの。
にはとりお雞類【名】「動(お)いける(鶏類)に同じ。

にはばな煮端煮花【名】煎じたてて、香味の程よき煎茶。てばな。讀誤毛「高坏(高坏)の餅菓を積み、煮花を添へて」
にはばな庭中【名】庭の中央。煮花庭中のあすはの神に木柴(木柴)さし香(香)はいはむ歸り來(來)まてに」
にはばな新嘗【名】「ひなめ(新嘗)に同じ。「古語」新嘗、ニハナヒ」
にはばな新嘗【名】前條に同じ。「古語」にはばな(新嘗)庭に立つ(枕)庭に生ずる麻といふ意より、あさ(麻)にかけていふ。煮花庭に立つあさてこぶすま今宵だにまつまよしこせねあさてこぶすま」
にははなき心やう庭拔狀【名】拔狀の一種。飛脚屋の店頭にて抜き出して、別に急飛脚に託するもの。
にはのあひ新嘗【名】「ひなめ(新嘗)に同じ。「古語」新嘗、ニハナヒ」
にはのり庭乗場騎【名】馬場にて、馬を乗り馴らすこと。盛衰(盛衰)三黒(三黒)といふ小馬を賜はつて、庭乗仕りける程に」
にははらき庭帯【名】庭を掃くに用ふる帚。多くは竹の枝を用ふ。
にははき庭掃【名】庭を掃くこと、又その人。にははきや庭はきの家の風花をわが世の朝きよめかな」に同じ。
にははき庭萩【名】「植(なつば)庭萩」にははらき庭働【名】庭にて働くこと、又その人。五人女「身をひききぎて、里の仕業の庭働」若風(若風)庭働の下女も、姿に構はん庭」
にはばな庭番【名】徳川幕府の職制の一。若年寄支配の下に、將軍の耳目となりて、地方を遍歴し、風聞を糾察することを掌りしもの。定員、大抵十人。兩番格、小十人(小十人)格の二階級に分れ、又、別に山里庭番といふもありき。
にはび庭火【名】禁中の御神樂の時など、庭にて焚く篝火。焚火、庭火も、いたうまよひて、吹きかけらるるを、拂ひわびつ(拂)「忌火(忌火)といふにては、六月、十二月の御神事の御膳をば調じけ

おえういあ かくきさ せすしき とつちた のねにた ほへふひは もめんむみま よゆや るれるりら ぞあわ

新潟裁判所の設置あり、これを越後府と改め、又新潟府と改め、二年新潟縣と改め、尋いで水原縣と改め、再び新潟縣に合す。又元年設置の柏崎縣をも合し、長岡、新發田、黒川、三日市、村松、岸岡、村上、高田、清崎、興板、椎谷等の諸藩のすべと縣とせしをも合し、高田以下の四縣佐渡國の相川縣及び越後國東蒲原(新野)郡の福島縣の所管なりしをも合して、今日に至る。 新潟縣に屬する市。西蒲原(新野)郡の北部。信濃川の河口西岸に在り。北陸第二の都會にして、縣廳の所在地。

にひがたから 新潟港【名】「地」越後國新潟市の前面にある港。信濃川の海門たり。明治元年十一月始めて開港し、五港の一に數へられたれど、今は外國貿易は振はず。河口西岸に、燈臺の設あり。

にひがたぶきやう 新潟奉行【名】徳川幕府の職制なる遠國奉行の一。老中支配の下に、越後國新潟に駐在して、当地の民政を行ひ、又その港に出入する船舶等の事務を掌りしもの。佐渡奉行の次席にして、定員一人、支配組頭二人あり。

にひかづぶ 新冠【名】「地」日高國七郡の一。浦河支廳の所管。

にひかは 新川【名】「地」越中國の舊郡の一。明治十三年、分ちて上新川、下新川の二郡とし、同三十年上新川を割きて、中新川郡を置けり。「にふかは」とも稱す。

にひきひよ 二匹鎌【名】紋所の一。二の鎌を描きたるもの。

にひへん 新草【名】「わがさ」若草(に同じ)に同じ。舊草面白き野をばな焼き古草に新草まじり生ひばるるがに。葉。にひへんは 新菜【名】新しく採りたる菜の

にひくはまゆ 新菜繭【名】新しく取りたる繭。今年取りたる繭。「古語」惣次みつき物にひくは繭の絲をもて練る手もたゆく供へつるかな。

にひくはまよ 新菜繭【名】前條に同じ。「古語」舊菜根(に同じ)にひくはまよの衣(に同じ)はあれど君がみけししあやに著はし。

にひくら 新座【名】「地」武藏國の舊郡の一。上古の新羅(に同じ)郡にて、和名鈔には、すてに新座とあり。後世、その稱區區となりて、「にひざ」とも「しんざ」とも呼びしが、明治二十九年廢して、北足立(に同じ)郡に合す。

にひらも 新衣【名】新しく仕立てたる衣服。新衣(に同じ)。「古語」夫衣紫の初入染(に同じ)のにひころも程なく色のあかれとぞ思ふ。

にひざ 新座【名】「地」にひくら(に同じ)に派遣せられたるさきもり。「古語」舊菜今かはるにひざさきもりが船出するうならばの上に浪なさきせね。

にひざと 新里【名】まだ住みなれぬ里。「古里に對して」曾我殿は、故里をも、新里をも詠めたまへ、時致は、親の敵より外に、心にかかるとも候はず。

にひにし 新し【形】「あらたし」(新し)に同じ。「古語」又、甲斐國の方言「新新、ニヒシキハリ」。

にひじね 新稻【名】今年出来たる稻。しにひじね 新搾【名】新に醸したる酒。舊酒にほ島の葛飾早稻(に同じ)にひしぼり酌みつづれば月かたぶきね。

にひしまり 新島守【名】新に島守となりたる者。將島われこそは新島守よおきの海の荒き波風心して吹け。

にひす 新巢【名】屋根に新しく設けたる、煙出(に同じ)の管(に同じ)。みず(御寒)参照。「古語」

にひす 新巢【句】神代の新巢。記「この我(に同じ)が燧(に同じ)れる火は、高天の原には、神産日巢御祖命(に同じ)のとたる天(に同じ)の新巢の凝烟(に同じ)の、八争(に同じ)垂るまで燒裂(に同じ)げ」。

にひそ 甘途【名】「舊」なつどうた(夏燈臺)に同じ。本草和名甘途、爾波會。一名爾比會。

にひた 新田【名】「地」陸前國の舊郡の一。舊陸奥(に同じ)五十四郡の一にして、足利尊氏大斷家兼と奥羽の探題に任じて、この郡に治せしめし時、附近の地を大崎郡と私稱せしより、新田の稱亡ぶ。その舊地今、東半は登米(に同じ)、西半は栗原郡に入る。「にふた」とも稱す。田にた(新田)の舊稱。

にひたかやま 新高山【名】「地」臺灣の我領土となりてより、富士山よりも高きこの山を加へたる意にて、明治三十年七月、明治天皇の命じたまへる「臺灣本島の脊梁をなせる中央大山脉の西側に分岐する山脉の主峯。北山南山中峯の三峯より成り、高さ一三〇七五尺。我國第一の高山。もと支那人は玉山(に同じ)、西洋人はモリソン山と呼びたり。

にひたし 煮浸【名】鯛鮎などの小魚を、焼きて砂糖醤油味噌味醂節などに煮なほその汁に浸し置きて、骨まで食ひ得るやうにしたるもの。

にひたじんじや 新田神社【名】薩摩國

薩摩郡東水引村大字宮内に鎮座せる國幣中社。祭神は瓊瓊杵(に同じ)尊。社地は尊廟御の地に於て、可愛之山陵(に同じ)も、この地に存す。一宮(に同じ)八幡。

にひたまつさ 新玉章【名】新に送り來れる手紙。最初の言づれ。「古語」夫衣(に同じ)の秋のひ玉づきのことづても今こそあれと雁は來にけり。

にひたやま 新田山【名】「地」上野國にある山。今の新田(に同じ)郡太田町の金山(に同じ)に、小新田(に同じ)山ともいへり。一説に、仁田山(に同じ)なり。舊葉「にひた山(に同じ)には附かなな我(に同じ)によりしはなる兒らしあやにかなしき」。

にひつ 荷櫃【名】種種の荷物を納めたる櫃。舊葉「御衣櫃(に同じ)一かけ、荷櫃一かけ持たせたまふ」。

にひつくり 新作【名】新に作れること、又その物。武家舊稱「榎屋敷とて、……にひつくり」。

にひつづま 新妻【名】結婚してまもなく妻。娶りたるばかりの妻。

にひな 新字【名】「かな(假字)まな(真字)を見よ」新しく作れる文字。「古語」聖傳「造新字一部十四卷、ハジメテニヒナ……」。

にひなへや 新管屋【名】前條に同じ。「古語」記「にひなへやに生ひ立てる百(に同じ)は」。

にひやま 新山 [名] 「地」駿河國富士山の別稱。

にひよね 新米 [名] しんまい (新米) に同じ。

にひわかき 新若草 [名] わかき若草) に同じ。古語) 夫木) 春日野の新若草につなげて立ちも離れずあたる春駒) にひわかき) 新綿 [名] 新しきわた。しんわた。新六) 駿河なる富士の桑子のにひ綿は高嶺の雪の色に似るらし。

にひひぬ 新居 [名] 「地」にぬ (新居) を見よ。にふ入 [名] 「語」にひやう (入居) の略。「平」上入。

にふ二夫 [名] 二人のをと。眞貞女、二夫に見えず。 「四衛二府」にふ二府 [名] 右近衛府と左近衛府と。

にふ丹生 [名] 「地」越前國八郡の一。郡役所を朝日村に置く。 大和國吉野郡南芳野村の大字。丹生川上神社あり。玉葉) 柿人のとらぬまきさへ流るなり丹生のかはらのさみだれの頃。 今の上野國北廿樂) 郡丹生村の邊。 眞金吹く丹生のまほほの色に出て言はなくのみぞわが戀ふらくは。

丹生の長谷寺 (長谷) [句] 伊勢國多氣 (多) 郡佐那村大字長谷 (多) の山上にある。眞言宗の寺。正しくは、近長谷 (長谷) 寺といひ、丹生山と號す。古來、その西方なる丹生村の神宮寺に屬して、元祿中及びべり。仁和元年大和國長谷寺を撰して創建せしもの。古稱、光明寺。

丹生の初瀬 (初瀬) [句] 前條に同じ。

にふ鈍 [名] にぶら (鈍色) の略。

にぶ丹生 [名] 「地」にぶ (丹生) に同じ。

にぶ二十分 [名] 諸國の目 (二) は、公解稻 (二) の十分の二、即ち二分を職祿とするの制度なりしよりいふ。さくわん (主典) の異稱。(一分三分に對して) にぶだ (二分) 參照。

にぶいろ 鈍色 [名] にびいろ (鈍色) に同じ。 「古語」十訓) にぶの色ぬども著て。平家) 二位殿は、...、思しきけたる事なれば、にぶ色の二衣 (打覆) き練袴のそば高く挟み。

にふえい 入營 [名] 徵兵検査に合格せし壯丁の、新に營所に入ることを、兵營に入つて新兵となること。

にふえいろうよ 入營猶豫 [名] 徵兵検査に合格せらるる一般壯丁は入營する規定なれども、家事上の都合本人の疾病、入營猶豫の認可ある學校に在學中の者等は、入營を猶豫せらる。舊稱、徵兵猶豫。

にふえいじや 入營者 [名] にふえいへい (入營兵) に同じ。 「る土地」

にふえいち 入營地 [名] 新兵の入營せしる所。

にふえいび 入營日 [名] 新兵の入營する期日。 「入營者」

にふえいへい 入營兵 [名] 入營せる新兵。にふえいりよび 入營旅費 [名] 徵兵旅費の一。新兵がその居住地より、營所に至るための旅費。

にふかい 入海 [名] 海中に沈みて死ぬること。 著聞船、樺津國に入らんとしける時、悪風に逢ひて、既に入海せんとしける時。

にふかう 入校 [名] 學校に入りて、新にその學生生徒となること。入學。

にふかう入港 [名] 船舶が、港に入ることを。入津。(出港に對して)

にふかうせけんじよ 入港届書 [名] にふかうせけんじよ (入港届書) に同じ。

にふかうせい 入港税 [名] 一定の港に移入し來れる貨物に對し、その移入を條件として、港にて課する國內消費税。(出港税に對して)

にふかうてすうれう 入港手数料 [名] 入港したる船舶が、税關に納むる手数料。入港料。

にふかうとどげ 入港届 [名] 入港したる外國貿易船の、船長より船名、噸數、乗組員、發船港、總積載貨物等を記入して、入港の旨を、税關に届出づること、又その届書。入港後、二十四時間以内、第一著に届け出づべく、届書は貨物を陸揚すべき倉庫、又は陸揚場所に在る税關吏に送致すべきものとす。

にふかうとどげじよ 入港届書 [名] 入港届の旨を記して、税關に差出す書面。入港届。入港申告書。著港届。

にふかうれう 入港料 [名] にふかうてすうれう (入港手数料) に同じ。

にふががにふ 入我我入 [句] 「佛」如來の三密は、我に入り、衆生の三業 (彩) は、如來に入り、彼此相應じて、一切諸佛の功德の、我が身に具足するに至ること。三平等。

にふかく 入閣 [名] 國務大臣に任ぜられ、閣員に列すること。 「すること」

にふかく入格 [名] 所定の格式に適合し、入學 [名] 或人を新に師と頼みて、教を受くること。てしり。入門。 空經) 昨日、けふ入學して、黒し赤しきと無きが。 にふかう (入校) に同じ。

にふかくん 入學金 [名] 入學の際、その證として納むる金。入學料。

にふかくくわんじよ 入學願書 [名] 入學を望む旨を記したる願書。

にふかくじき 入學式 [名] 新に入學せる學生生徒を一堂に集めて、入學後の心得に關して注意を與ふる式。

にふかくじや 入學者 [名] 入學せる人。入學生。 「たる學生生徒」

にふかくせい 入學生 [名] 新に入學しにふかくん 入學難 [名] 希望者多くして、容易に入學し得ぬこと。

にふかくねがひ 入學願 [名] 入學を願ふこと、又その旨を記したる願書。

にふかくれう 入學料 [名] にふかくん (入學金) に同じ。

にふかは 丹生川 [名] 「地」 大和國吉野郡より西南に流れ出て、南芳野村を過ぎ、西北流して、吉野川に合する川。 萬葉) 丹生の川瀬は渡らずてゆくぬくと戀痛 (よ) 吾弟 (弟) いて通ひゆく。 羽前國) に在る川。 尾花澤町の西一里餘の所に、最上 (上) 川に注ぐ。

にふかん 入間 [名] 「りあひ (入會) を見よ」地所の境界。ちぎかひ。 運歩色葉集

「入間、ニフカン、地界事」

にふかん 入監 [名] 新に監獄に拘禁せらるること。入獄。

にふかん 入眼 [名] にぶけん (入眼) を見よ。 にぶかん 入籠 [名] にぶわん (入棺) に同じ。 「られたる者」

にふかんじや 入監者 [名] 入監せしめ歸入。八丈) 今、この犬が、欲を忘れて、讀經 (經) の聲を聴くを樂しみ、如入歸の友となること。昔、おん經の力により。

にふきん 入金 [名] 金錢を收入し、又は拂ひ込むこと。入金。 支拂ふべき金錢の中、幾分かを入ること。入金。

にふきん 入銀 [名] 前條に同じ。 「徳川時代の語」 書籍出版業者が、新刊書を仲間内へ配りて、その引受の部數を帳面に記すこと。

にぶきん 二分金 [名] 徳川時代の通貨の一。二分、即ち今の五十錢に通用したる、長方形の金貨。文政二分金、安政二分金、萬延二分金などあり。二分列金。二分列。

にぶきんきつぷ 入金切符 [名] 「商」しよなぶん (收納傳票) に同じ。

にぶきんちやう 入銀帳 [名] 書籍出版業者が、新刊書を仲間内へ配りて、その引受の部數を記し置く帳面。

にぶきんてんへう 入金傳票 [名] 「商」しよなぶん (收納傳票) に同じ。

にぶきんへう 入金票 [名] 「商」前條に同じ。

にぶきやう 入京 [名] 京地に入り來ること。正補) 平氏、未だ西海に在りし程、源義仲といふ者、まづ入京す。

にぶきやう 入境 [名] 其の土地の境に入ることを。 入國) 入國) に同じ。 調任來) 入境者任之儀式)

にぶきよ 入渠 [名] 船盤を修繕するために、船渠 (入) に入ること。

「入間、ニフカン、地界事」

にふかん 入監 [名] 新に監獄に拘禁せらるること。入獄。

にふかん 入眼 [名] にぶけん (入眼) を見よ。 にぶかん 入籠 [名] にぶわん (入棺) に同じ。 「られたる者」

にふかんじや 入監者 [名] 入監せしめ歸入。八丈) 今、この犬が、欲を忘れて、讀經 (經) の聲を聴くを樂しみ、如入歸の友となること。昔、おん經の力により。

にふきん 入金 [名] 金錢を收入し、又は拂ひ込むこと。入金。 支拂ふべき金錢の中、幾分かを入ること。入金。

にふきん 入銀 [名] 前條に同じ。 「徳川時代の語」 書籍出版業者が、新刊書を仲間内へ配りて、その引受の部數を帳面に記すこと。

にぶきん 二分金 [名] 徳川時代の通貨の一。二分、即ち今の五十錢に通用したる、長方形の金貨。文政二分金、安政二分金、萬延二分金などあり。二分列金。二分列。

によせよ

にせむ

によせ

によせ

にふきよ入御〔名〕貴人の奥御殿に還り入りたまふこと。じゆきよ。
にふきり入寄留〔名〕いりきり(入寄留)に同じ。

にふきりらじや入寄留者〔名〕入寄留(入寄留簿)に同じ。
にふくつお二幅對〔名〕つあやく(對幅)に同じ。二つのおよく釣合ひたる物の聲。

にふくわ入花〔名〕いれはな(入花)に同じ。
にふくわい入會〔名〕或會に加入すること。會員になること。

にふくわいけん入會權〔名〕法じりあひけん(入會權)に同じ。
にふくわん入棺〔名〕死骸を棺に納むること。じゆくわん入棺。納棺。棺斂。

にふけい入京〔名〕にふきやう(入京)に同じ。
にふけうじゆ二部教授〔名〕學校の校舍教員が不足せる場合、又は貧民の兒童の就學時間乏しき場合などに、兒童の一部又は全部を、午前と午後との二部に分ちて教授すること。單式混式及び複式の三種あり。獨逸などの半日學校に倣へるもの。

にふて入庫〔名〕倉庫に預け入れること。くらいれ(出庫に對して)。
にふてら入貢〔名〕外國より入朝して、貢物を奉ること。すこと。使進。

にふてら入寇〔名〕群をなして來り侵入すること。國内に入り込むこと。領土の始めて、その領地に入ること。入部。入境。

にふてら入獄〔名〕新に監獄に拘禁せらるること。入監。入牢。「る貨物。
にふてらくわぶつ入庫貨物〔名〕入庫せらるること。くわぶつ入庫貨物證書〔名〕入庫貨物に對して、倉庫業者の發

する有價證券。預證券。「じ。
にふてら入魂〔名〕じゆん(入魂)に同じ。
にふてら入藏〔名〕或佛經を藏經の一部として數へ入ること。西藏の國に入る。

にふさつ入札〔名〕さう(投票)に同じ。「徳川時代及び明治初年の語、己人)どんな紙屑屋に入札させたて、己人)なんざあ、先づ座頭(株)の役者、和事師(と)と見立てられるかられ」遠來使日記

にふさつ入札者〔名〕入札者が自己の見込の價格を記して差出す文書。
にふさつ入札のしや入札者〔名〕入札者が自己の見込の價格を記して差出す文書。(入札人)に同じ。

にふさつ入札者〔名〕入札者が自己の見込の價格を記して差出す文書。
にふさつ入札のしや入札者〔名〕入札者が自己の見込の價格を記して差出す文書。(入札人)に同じ。

にふさつ入札のしや入札者〔名〕入札者が自己の見込の價格を記して差出す文書。
にふさつ入札のしや入札者〔名〕入札者が自己の見込の價格を記して差出す文書。(入札人)に同じ。

方法によりて賣拂ふこと。
にふさつ入札のしや入札者〔名〕入札者が自己の見込の價格を記して差出す文書。
にふさつ入札のしや入札者〔名〕入札者が自己の見込の價格を記して差出す文書。(入札人)に同じ。

にふじや入社〔名〕新に或社團に加入すること。始めてその社の一員となること。
にふじや入合〔名〕塾舎などに入るに同じ。
にふじや入射〔名〕理「英 Incidence」光などの反對屈折などをなす場合、或媒質を通して、これと相接する他の媒質の面上に向ふこと。投射(反射に對して)。「聲)を見よ。

にふじや入聲〔名〕語にじやう(入聲)に同じ。
にふじや入城〔名〕城中に入ること。
にふじやかく入射角〔名〕理「英 Angle of incidence」入射線と入射點に立てたる法線とがなす角。投射角。「反射角に對して)。「に同じ)。

にふじやく入寂〔名〕佛にじやく(入寂)に同じ。
にふじやくわうせん入射光線〔名〕理「英 Ray of incidence」光の入射線。
にふじやくせん入射線〔名〕理「英 Line of incidence」光などの入射する方向。投射線。反射線に對して)。

にふじやくてん入射點〔名〕理「英 Point of incidence」光などの、入射して、兩媒質の境界面上に當りたる點。投射點。「反射點に對して)。
にふじやくめん入射面〔名〕理「英 Surface of incidence」光などの入射して當りたる面。投射面。

にふせき入籍〔名〕一家の戸籍に入るに同じ。理「法」或家の戸籍に屬する者が、轉じて、他家の戸籍に加入すること。入戸。

にふせき入籍〔名〕一家の戸籍に入るに同じ。理「法」或家の戸籍に屬する者が、轉じて、他家の戸籍に加入すること。入戸。

にふせん 入船〔名〕港に入る船頭。いりふね。著船。出船に對して。

にふせん 入選〔名〕出品などの審査に合格すること。當選。落選に對して。

にふそく 荷不足〔名〕荷物の員數が不足すること。

にふた 新田〔名〕「地」にひた(新田)を見にふた 荷札〔名〕荷送人の名、又はその届先などを記して、荷物に附くる札。木片又は布片を用ふ。

にふたい 入隊〔名〕軍隊に編入せらるること。にふえい。除隊に對して。

にふたい 二分代〔名〕「にぶ」二分を見よ。古、年給の場合に目(目)の代りに、内官たる内舍人(内舍)又、諸司の助(助)・允(允)・廣(廣)の中を任せしこと。

にふたう 入湯〔名〕湯に入ること。ゆあみ。入浴。

にふたう 入唐〔名〕にたら(入唐)に同じ。運歩色葉集。入唐、ニフタウ。

にふたり 入黨〔名〕或黨に加入すること。その黨の黨員となること。

にふたう 入道〔名〕「佛」佛道に歸入して、一身をこれに捧ぐる。出家。大鷲肥前の孫(孫)・摘良利・殿上に候ひけるが、入道して、修行の御供にも、これのみぞ仕らまつりける。佛在家(在家)のままにて、剃髮染衣(剃髮)せる者、(寺)に入りて、僧と別る出家といひて、平安朝の中頃より區別するに至れり。佛三位以上の人、在家(在家)のままにて剃髮染衣(剃髮)せる者、(新發意)に對して、源氏かの入道の遺言破りつべき心はあらんかし。四坊主頭の人を嘲りて、いふ。佛に(佛)入道(入道)參照。四坊主の姿たる妖怪。四坊主(廻道)に同じかるべしといふ。古語。中務内侍目對事果てぬれば、梨原へ歸りぬ。ついでに、ちとにふたうなどして、京へ歸り著きぬ。

入道の宮〔句〕入道したまへる親王・内親王又は女院(女院)。

親王又は女院(女院)。

入道の宮〔句〕入道したまへる親王・内親王又は女院(女院)。

入道の宮〔句〕入道したまへる親王・内親王又は女院(女院)。

入道の宮〔句〕入道したまへる親王・内親王又は女院(女院)。

入道の宮〔句〕入道したまへる親王・内親王又は女院(女院)。

にふたら 入道大臣〔名〕入道したる大臣。攝關西八條の入道おとど、やうやう榮花装(へんとと)。

にふたう 入道草〔名〕「植」しぶき(蕨)を云ふ。筑前國の方言。

にふたう 入道雲〔名〕夏の雲の、入道のごとく見ゆるもの。

にふたう 入道親王〔名〕親王の出家は、平城天皇の廢太子高岳(高岳)親王以來、屢ばその例ありたれども、三條天皇の皇子師明(師明)親王の仁和寺に入り、出家ありて、性信(性信)と號せられし時、始めてこの稱あり。ほふんわ(法親王)參照。攝關かの入道親王の御子の、十になりたまふ。

にふたう 入道禪下〔名〕入道したる禪下。起略。中宮奉爲入道禪下(被入道)。

にふたう 入道杖〔名〕入道したる杖。入道杖(杖)に突く杖。

にふたう 入道蟲〔名〕「動」に同じ。ち復晴(ち復晴)に同じ。ちむし(地蟲)に同じ。

にふたう 入道鴨〔名〕「動」もず(鴨)を見よ。ひたる諸王。

にふたう 入道王〔名〕入道したる王。荷札用布〔名〕荷札を製するに用ふる布。天竺木綿などの、強力なる白木綿に、糊を施して、質を強靱ならしめ、且つ表面を滑かならしめたるもの。

にふたう 入竺〔名〕天竺に入ること。印度に赴くこと。

にふちん 入陣〔名〕陣營に入る。出陣に對して。

にふちん 入陣〔名〕陣營に入る。出陣に對して。

にふちん 入陣〔名〕陣營に入る。出陣に對して。

にふちん 入陣〔名〕陣營に入る。出陣に對して。

にふちん 入陣〔名〕陣營に入る。出陣に對して。

にふちん 入陣〔名〕陣營に入る。出陣に對して。

にふちやう 入場券〔名〕その場所に入ること。入場券(券)に對して。

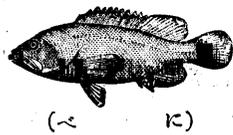
にぶつ ちゆうげん 二佛中間〔名〕「佛」二佛の中間に同じ。太平記二佛中間の大導師。

にへ 贄 [名] 前條の語の轉義。朝廷

又は神社に獻る土產(殊に食用の魚鳥など)。「牲」にけ(生贄)参照。「古語」夫木「嚴降る玉野の原に御狩して天」の日文(贄)の贄たまつる。「おくりもの。みやげ。進物。苞苴。大盛人の奉りたる贄などいふ物は、御前の庭に置かせ給ひて」牲に赴く羊「句」屠所(羊)の羊に同じ。「謬語」太平記に赴く羊の、驅られて、隣に近く思をなす。

贄の土師(ひ)「句」雄略天皇の十七年、日用の清器を作らしめられし、攝津山城、伊勢、丹波、但馬、丹後の土師。贄の初刈(か)「句」贄に用ふるその年の稻を、始めて刈取ること。にへ(かり)贄狩参照。「古語」散木「こり果てぬ贄の初刈あさりする宿にもあらで人歸しつる」

にへ 鰐 [名] 「動」硬骨類に屬する魚。石首魚(石)の成長したるもの。深海の泥底に棲み、形、甘鯛(甘)に似て、長さ三尺餘に達し、背に紅と淡黒との斑あり、腹は黄色を呈し、脊鰭は灰色にて、鱗は細やかなり。肉は食すべく、腹中の鰾(は)は、優良なる魚膠の材料となる。くち。和名「鰐」通倍一云、久知



にへ 魚膠(鰾) [名] 「動」(鰾)の鰾(は)を始とし、鱈(鱈)・鱈魚(鱈)・鱈(鱈)・鱈(鱈)などの鰾、狸の皮などにて製する膠(は)など。普通の膠よりも粘着力強く、薬用として、刺戟緩和の目的にて、内服又は注射に供し、又、食料品の製造等、工業上の用途頗る汎し。にへには、人(人)にやきにくいふこと。つや。愛敬、世辭。雙在岡田川「詞」に魚膠もしやしやりも無し「句」次條に同じ。

魚膠も無い「句」愛想無し。愛敬に乏し。すげなし。あはつけし。諸國物語「にへもなく言ひ切つて」

にへ 植 [名] 「植」(黄蜀葵)に同じ。

にへ 二柄 [名] 「韓非子の二柄篇に「明主之所導、制其臣一者、二柄而已矣。二柄者、刑德也、劉勰新論に「以賞罰爲二柄、賞勸功、罰懲過」とあり」君主の、臣下を賞するのと、罰するのと。政治と兵馬との二つの権力。

にへ うみ 贄海 [名] 次條の略。贄海の神事(ひ)「句」昔、伊勢神宮の御贄物の料として、毎年六月十五日、彌宜(引率)の下に、伊勢國二見(二)の浦と志摩國答志(答)島の西なる群礁阿原岐(岐)島との間の海上にて、鰐(鰐)・海松(松)の三種を採りし神事。

にへ かり 贄狩 [名] 「贄」(贄)の料とするために、狩獵をなすこと。「贄の初刈(初)」参照。「古語」蘇維摩首「贄狩の日なみの今日は來にけりとはつとやだしの鷹のかりぎぬ」

にへ へら 贄食坊主 [名] 次條を贄食坊主の布施好(好)「句」なまごき坊主、とかくに布施を得ること。を好む。「謬語」

にへ へら 贄 [名] 「動」(贄)の贄(は)を常體にて、下の字のみを、草體にくづすこと。にへ(二合)参照。

にへ へら 贄殿 [名] 「贄」(贄)を納めおき、又は調理する建物。朝廷のは、内膳司に屬し、職員に別當藏人(藏)・預(預)・出納ありて、諸國より貢進し、供御の料とする物を納めおき、又は調理し、攝關大臣家のは、別當・預膳夫(膳)等の職員ありて、

饗饌を納めおき、又は調理したり。又、大嘗會の時、悠紀(悠)・主基(基)の内院の中に設けて神供を納むる所をもいへり。にへや。書國、妙音院入道殿、……贄殿の別當なりける侍を召して、麥飯(飯)に觸合せて煮て、只今調進すべき由仰せられれば、宇治、茂經、大殿に參りて、贄殿に居たる程に、淡路守頼親の朝臣の許より、鯛(鯛)の苞苴(苴)を多く獻りたりけるを。

にへ どり 贄 [名] 「動」(贄)に(贄)に同じ。にへ(に)かは 魚膠鰾膠 [名] (魚膠)に(鰾)に同じ。

にへ のうら 贄浦 [名] 「地」伊勢國度會(會)郡鵜飼(鵜)村の大字。鵜柄(柄)の浦の一支灣に臨み、古は、南海、船舶の上下するもの寄泊し、故樓などありて賑はしかりきと傳ふ。遠江國濱名郡に在りし地といふ。萬葉とほたあふみしかはの磯とにへ(浦)とあひしてあらば言(言)も通はむ。

にへ のき 贄櫛 [名] 古、出羽に在りし櫛。藤原泰衡の將河田次郎ここに居り、泰衡を襲殺せし所。羽後國北秋田郡三井田村は、その址なりといふ。能代(代)の川の左岸、大館(館)町の南に近し。又、大館町がその址なりともいふ。

にへ のき 魚膠木 [名] 「植」のり(ぎ) (糊洩流)に同じ。

にへ びと 贄人 [名] 「贄」(贄)に供する魚鳥などを捕る人。にへ(り)する人。古語「神樂歌(神樂)」も枕高瀬の流にや誰(誰)がにへ(人)ぞ鳴突きこぼる網おろし、さでさしのぼるあいど誰(誰)がにへ(人)ぞ」

にへ べん 二掃 [名] いっはること。兩舌(豊後國の方言)。「尿と。兩便。にへ(ん)二便(名)大便と小便と。糞とにへ(や)贄屋(管)屋(名)に(ぎ)の(贄殿)に(に)同じ。鎌倉年中行世人人、各御管屋に集まり、初獻(初)の御看を始として、皆皆請

取り、持參せらるる」

にへ たり 魚膠折・鰾膠折 [名] 管をも切らず、撻めもせざる弓を、疊又は板などに當て、未管(管)を人に持たせて、押し試みること。七・職人歌合「この弓は、弦をきらはんずるぞ。にへ(を)り大事なるべき」

にへ 堆 [名] いなむら(稻)に同じ。にへ 鳩 [名] 「動」鳩は、水中に入る鳥の義にて作りたる和字。游禽類に屬する鳥。湖沼に棲み、鴨に似て小く、長さ七八寸、尾、極めて短く、兩翼も亦短く、足、尾部に偏在し、各趾扁闊にして、板狀の蹼あり。體色、背面は黒褐、胸部は黄色を帯び、腹部は灰色、嘴短けれども堅硬・尖銳、基部は黄綠色、先端は黒色、頬と頭上とに長毛あり。巧に水を滑りて、魚を捕へ食ひ、又、藻樹葉などを集めて、水上に巢を營み、「鳩の浮巢(浮)の稱あり。にへは」古名にて、今は「かいつぶり」又は「かいつむり」と呼ぶ。にへ(り)。むぐり。むくつてら。もぐり。もぐりつちよ。いよ。うよめ。しながどり。つぶら。字鏡「鳩、爾保」無名抄ににの、巢をくふには、葉の莖を中に籠めて、しかも枯小葉をくつろげて、めぐりにくひたれば、潮満てば、上へあがり、汐干れば、隨ひて下(下)るなり」

「地」に(は)のみ(海)の略。猿蓑(去來)「螢火や吹飛ばされて鳩の團」鳩の浮巢(浮)「句」前條を見よ。鴉(鴉)子を思ふ鳩の浮巢のゆられ來て捨てじとすれやみがくれもせぬ」

鳩の下水道(下)「句」鳩は巧に水を滑る性質あるによりて、下水道に言ひかけたるなり「物の陰にある通路。續載「えぞ知らぬ鳩の下水道みがくれて通ふ心のありやなしや」と

にへ ほう(わ)く(ん) 三寶荒神 [名] 「さんぼう(わ)く(ん)」馬の鞍の左右に、框(の)又は箱やうの物を取附けて、二人にて乗り、又は二つの物を乗すること。にはうくわうじん。藤原(馬)その荷を附けてお一人、この旦那と二ほう荒神に乘らんせんかいな」

にほかは

にほかは 仁保川〔名〕「地」にほろみ(鳩海)を見よ 近江國日野川の downstream. 「煮乾」〔名〕煮て乾すこと、又、煮て乾したる物。 鯉(ニ)などの煮て乾したるもの。

にほす 句す〔動四他〕にほす(句はす)に同じ。「古語」蕪葉、奈良山を丹(ニ)ほす紅葉をたをり来て。

にほつひめの一みこと 兩保都比賣命〔名〕にほつひめのかみ(丹生津比賣神)に同じ。

にほてる 鳩照る〔動四自〕「にほどり」(鳩鳥)の轉訛にて、古事記の中卷なる「鳩鳥の近江の海にかづきせな吾(ニ)」は、鳩鳥の「...かづき」と、句を隔ててかかる枕詞なるを、「近江」にかかるものと誤解し、その枕詞を、直ちに近江國の意に用ふるに至れるなりとの説もあり「にほの海、照りかがる。 續後撰唐崎やにほ照る沖に雲消えて月の水に秋風ぞ吹く」月清集、志賀の海の汀ばかりは米にてにほ照る月を寄する白波。

にほてるとも 鳩照海〔名〕「地」近江國琵琶湖の別稱。 新後撰海山の名を分けてはいはじ月影のにほてる海も鏡なりけり。

にほどり 鳩鳥〔名〕「動」にほ(鳩)に同じにほどりの鳩鳥の「枕」鳩鳥は水鳥なるより、あしぬらす(足濡らす)にかけていふ。 蕪葉思ふにも餘りにしかば鳩鳥の足ぬらしくを人見けむか。 鳩鳥は小魚を捕へ食はんとて、水に潛(ひく)鳥なるより、かづき(潛)く、又はそれに發音近きかづきにかけていふ。 鳩鳥の淡海(近江)の海にかづきせな吾(ニ) 蕪葉、鳩鳥のかつしか早稻(こ)をにへすとものかなしきを外(に)立てめやも。 鳩鳥は水に著く鳥なるより、なづき(潜)にかけていふ。 蕪葉「鳩鳥のなづきさひ行けば」四鳩鳥は潛(ひく)きたる後、水面に首を出して、長く息づくより、おきなが(息長)にかけていふ。 蕪葉「鳩鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむこと盡きめやも」四鳩鳥は雌雄並び居

るより、ならびる(並居)にかけていふ。 蕪葉「鳩鳥のふたりならびる、語らひし心そむきて」

にほのうみ 鳩海〔名〕「地」もと、その一部、仁保川、日野川の下流仁保村を流るるによりていふ。 近江國琵琶湖の別稱にほしといふ。 千尋わが袖の涙や鳩の海ならんかりにも人をみるめなれば。 左衛門

にほはし 句はし〔形二〕にほひやかなり。「古語」源兵衛なども、あざやかなる所なうねびれて、句はしき所も見えず。

にほはす 句はす〔動四他〕「にほふ」やうにす。 本草又は赤土などの色を染(ぬ)附かせて、色どる。 蕪葉草枕旅行く君と知らませば岸のはにふににほはさましをも 同秋の野(こ)をにほはす秋は咲けれど見ゆるしなしし旅にあれば。 香氣あるやうにす。 かをらす。 源兵衛「そらだきもの、心にくきほどににほはして」かすめて言ふ。 ほのめかす。 暗示す。 源兵衛「にはあらねど、うちにはほはしおきて出でたまふ」

にほはす 臭はす〔動四他〕「前條」の轉義。 臭(ニ)をかをりを發す。

にほひ 句〔名〕「にほふ」こと。 色の添ひて、美しくなること。 花やかなること。 つやめくこと。 麗美。 蕪葉、なごしが花見るごとく少女がなまひのにほひ思ほゆるか。 香(か)の香氣。 かをり。 にほひが。 狭衣かうはしきににほひ。 四ひかり。 いきほひ。 威光。 源兵衛「この君に似るにほひ無く見ゆ」 鶯、日頃は、何の御にほひにも觸れず、數ならぬ人、及ばぬ身までも。 四おもむき。 風韻。 風致。 韻致。

にほもん(刃文)に同じ。 染色(製)の色の目、鏝(こ)の(せ)などに、上部は濃く、中程に至るに隨ひて淡く、下部は次第に白きもの。 にほひをさし(句)絨参照。 拵、紅のにほひの三衣(こ)、同じ單(こ)、... 萌黄のにほひ。 四女の黛(こ)の、下の方の薄く散りたる部分。 句の玉(句)にほひたま(句)玉に同じ。

にほの

にほひ 句〔名〕「文」句はぬ花を見よ 連句の名殘(こ)の折の花の句。 この句の時、香(こ)をたくを法とす。

にほひ 臭〔名〕「にほひ」句の轉義。 臭ふこと。 くさみ。 臭氣。

にほひ あぶら 句油〔名〕芳香を發する油。 髪などに塗る。 かうゆ。

にほひ あぶら 句油賣〔名〕句油を賣ること、又その人。 一代男句油賣の太左衛門

にほひ ありせし 句紫羅欄〔名〕「植」十字花科に屬する多年生の草。 普通のあるせしとうは屬を異にす。 莖は木質を帶び、葉は披針形にして、鋭尖頭をなし、多くは全縁なれども、小齒を具ふることあり。 春夏の頃、黄色、黄褐色又は赭褐色の花、總狀花序をなして開く。 原産地は歐羅巴。 觀賞用とす。 きあらせしとう。 けいらいさう。

にほひ 入り 句入〔名〕芳香を加へてあるにほひが 句香〔名〕にほひ句に同じ。 六點鐘はいたくな鳴きそにほひがにめてわが摘む花ならなくに

にほひ かけ 句懸〔名〕ふせ(伏懸)を云ふ。 〔女の語〕

にほひ かた 句肩〔名〕わたしろをさし(肩白)に同じ。 一説には、鏝(こ)の袖、胴草摺(せ)など、各の上の板又は上二段を、白或は淺葱(せ)の絲にて織し、その下を、他の色絲にて織したるものともいふ。

にほひ かた 句肩白〔名〕にほひわたしろ(句)肩白に同じ。

にほひ が 句貝〔名〕「動」うめのはながひ(梅花貝)に同じ。 蓮歩色葉集「句貝ニホヒガヒ」に同じ。

にほひ が や 香茅〔名〕「植」からぼう(香茅)にほひからびつ 句唐櫃〔名〕唐櫃の一種。 足なく、抽出(こ)ありて、その中に香燻を入れ、上の底板に透(こ)を設けたるもの。 にほひたす(句)筆管参照。

にほひ ぐさ 句草〔名〕「植」にほひどり(句)鳥を見よ 句梅〔名〕の異稱。「古語」にほひこ 句粉〔名〕芳香を加へて製し

たる白粉(こ)。 織吉楊貴妃の句粉を塗りくり

にほひ

にほひ さくら 句櫻〔名〕「植」櫻の一品種。 山櫻の野生品又はその培養品中、花に芳香あるもの。 紋所の一。 この種の花を、正面より見たる形に描けるもの。

にほひ しげ 句重簾〔名〕重簾の一種。 段重簾に似て、簾の巻き方の、一層細かきもの。

にほひ じやうぶ 句菖蒲〔名〕「植」菖尾(こ)科に屬する多年生の草。 高さ二三尺に達し、葉は廣き劍狀花は花莖の頂に生じて、白色に青色の條あり。 黄色の毛を具へて、芳香を有す。 原産地は歐羅巴の南部。 觀賞用とす。

にほひ すみ 句罌〔名〕芳香を加へて製したる罌。 罌火、花も香れと、句罌燻べんとせしを

にほひ すみれ 句菫〔名〕「植」菫菜(こ)科に屬する多年生の草。 莖は、やや多肉の根莖を成し、各節より根を下す。 葉は叢生し、圓形、廣卵形又は心臟形にして、細鋸齒と細毛とあり、葉柄長くと細毛密生す。 春、紫青色、又稀に、紫褐色又は白色の、芳香ある花開き、花冠は通常の菫に同じ。 原産地は歐羅巴。 觀賞用とし、又、花より香料を製す。 せいやうすみれ。

にほひ せんかう 句練香〔名〕芳香を發する練香。 八笑人「句練香、清明香」

にほひ たち 句立壺〔名〕

にほひ 菜 科に屬する多年生の草。 我國、寒地に自生し、葉は小さき心臟形又は圓形にして、鈍頭をなし、鋸齒あり。 長卵形にして、細裂せる托葉を有し、春、葉腋より長梗を抽き、淡紫色にして芳香ある、やや大なる花を開く。

にほひ たて 句蓼〔名〕「植」蓼科に屬する一年生の草。 我國、中部以南の各地に産す。 高さ四尺乃至五尺に達し、密に分

るより、ならびる(並居)にかけていふ。 蕪葉「鳩鳥のふたりならびる、語らひし心そむきて」

にほのうみ 鳩海〔名〕「地」もと、その一部、仁保川、日野川の下流仁保村を流るるによりていふ。 近江國琵琶湖の別稱にほしといふ。 千尋わが袖の涙や鳩の海ならんかりにも人をみるめなれば。 左衛門

にほはし 句はし〔形二〕にほひやかなり。「古語」源兵衛なども、あざやかなる所なうねびれて、句はしき所も見えず。

にほはす 句はす〔動四他〕「にほふ」やうにす。 本草又は赤土などの色を染(ぬ)附かせて、色どる。 蕪葉草枕旅行く君と知らませば岸のはにふににほはさましをも 同秋の野(こ)をにほはす秋は咲けれど見ゆるしなしし旅にあれば。 香氣あるやうにす。 かをらす。 源兵衛「そらだきもの、心にくきほどににほはして」かすめて言ふ。 ほのめかす。 暗示す。 源兵衛「にはあらねど、うちにはほはしおきて出でたまふ」

にほひ

にほひ すみれ 句菫〔名〕「植」菫菜(こ)科に屬する多年生の草。 莖は、やや多肉の根莖を成し、各節より根を下す。 葉は叢生し、圓形、廣卵形又は心臟形にして、細鋸齒と細毛とあり、葉柄長くと細毛密生す。 春、紫青色、又稀に、紫褐色又は白色の、芳香ある花開き、花冠は通常の菫に同じ。 原産地は歐羅巴。 觀賞用とし、又、花より香料を製す。 せいやうすみれ。

にほひ せんかう 句練香〔名〕芳香を發する練香。 八笑人「句練香、清明香」

にほひ たち 句立壺〔名〕

にほひ 菜 科に屬する多年生の草。 我國、寒地に自生し、葉は小さき心臟形又は圓形にして、鈍頭をなし、鋸齒あり。 長卵形にして、細裂せる托葉を有し、春、葉腋より長梗を抽き、淡紫色にして芳香ある、やや大なる花を開く。

にほひ たて 句蓼〔名〕「植」蓼科に屬する一年生の草。 我國、中部以南の各地に産す。 高さ四尺乃至五尺に達し、密に分

るより、ならびる(並居)にかけていふ。 蕪葉「鳩鳥のふたりならびる、語らひし心そむきて」

にほのうみ 鳩海〔名〕「地」もと、その一部、仁保川、日野川の下流仁保村を流るるによりていふ。 近江國琵琶湖の別稱にほしといふ。 千尋わが袖の涙や鳩の海ならんかりにも人をみるめなれば。 左衛門

にほはし 句はし〔形二〕にほひやかなり。「古語」源兵衛なども、あざやかなる所なうねびれて、句はしき所も見えず。

にほはす 句はす〔動四他〕「にほふ」やうにす。 本草又は赤土などの色を染(ぬ)附かせて、色どる。 蕪葉草枕旅行く君と知らませば岸のはにふににほはさましをも 同秋の野(こ)をにほはす秋は咲けれど見ゆるしなしし旅にあれば。 香氣あるやうにす。 かをらす。 源兵衛「そらだきもの、心にくきほどににほはして」かすめて言ふ。 ほのめかす。 暗示す。 源兵衛「にはあらねど、うちにはほはしおきて出でたまふ」

にほひ 句〔名〕「文」句はぬ花を見よ 連句の名殘(こ)の折の花の句。 この句の時、香(こ)をたくを法とす。

にほひ 臭〔名〕「にほひ」句の轉義。 臭ふこと。 くさみ。 臭氣。

にほひ あぶら 句油〔名〕芳香を發する油。 髪などに塗る。 かうゆ。

にほひ あぶら 句油賣〔名〕句油を賣ること、又その人。 一代男句油賣の太左衛門



(れみすひに)

岐す。葉は廣披針形にして、莖にも、葉にも、一種の香氣あり。夏季、枝の先端に、桃紅色の花、穗狀花序をなして開く。

にほひたば 匂煙草(香煙草) 香氣高く、又は特に芳香を加へて製したる煙草。東海通名所記「烟草盆に、真刺(まき)の煙草など、金銀の煙管(たばこ)を取添へ」

にほひだま 匂玉(名) 球形に造りたる匂袋。織置(織置)の紅の大房に、匂玉を結び下げ」

にほひだんす 匂簞笥(名) 簞笥の一種。全部に透(透)を設け、下に香爐を入れ、香(香)をたけり、上まで通る様にしたるもの。にほひかひつ(匂唐櫃)参照。

にほひつ(匂) 匂躑躅(名) 『にほひつ(匂)』を見よ。染色又は製(製)の色目の一なる躑躅を匂はしたるもの。并簞(並簞)にほひつつじの三衣(三衣)』

にほひとり 匂鳥香鳥(名) 『動』にほひくさ(匂草)を見よ。うぐいす(鶯)の異稱。『古語』篠目(篠目)「雪もはや消えがてに無。山里にめづらめづらに鳴く匂鳥」』

にほひひのき 匂檜(名) 『植』次條に同にほひひば 匂檜葉(名) 『植』松杉(松杉)科に屬する常綠喬木。高さ數丈に達し、圓錐形をなし、葉は鱗狀にして、やや圓形。鈍頭をなし、古き枝には、やや長くして、鈍頭又は鋭尖頭をなす。春、單性の花開き、球果を結ぶ。原産地は北亞米利加。

にほひびん 匂瓶(名) 香水を入れて、惡臭ある所に置く瓶。

にほひぶくろ 匂袋(名) 『名』かけがら(惡香)に同じ。大體大宮の一の車の口の屑に、にほひ葉かけられて。『香料』

にほひもの 匂物(名) 芳香を發する物。にほひやか 匂や(名) 『名』つやつやと美しきさま。つやつや。にほやか。源氏」と匂やかに笑みたまひて」

にほひやか 匂やか(名) 『名』にほひやかなる度合。『古語』源氏この姫君の御さまのにほひやかけさをおほし出てられて。『鐵砲百合』に同じ。にほひゆり 匂百合(名) 『植』つばゆりにほひれせだ 匂レセダ (羅) Reseda odor.

にほひわたしろ 匂肩白(名) わたしろ(名) 肩白(名)に同じ。異本「我」にほひ肩白(肩白)の別名』

にほひをど 匂絨氈(名) 絨の絨の一。上より下へ、又は下より上へ、又は左右より中央へ、又は中央より左右へ、もしくは肩(肩)の(肩)など、大體同じ色の糸にて、濃きより次第に薄き色に絨したるもの。下より上へ薄くせる場合は、濃の濃きの甚だしからざるによりて、裾(裾)と區別す。

にほふ 匂ふ(動) 『丹』(丹)にほふの義、ほふは接尾語。にほふ(丹)類(丹)参照。本草又は赤土などの色染(色染)附きて、美しく見ゆ。に染まる。にほゆ。萬葉「たぐひれの驚坂山の白躑躅(白躑躅)われににほはね妹に示さむ」 『日』つやつやに美しく見ゆ。うるはしほのほく。艶麗に見ゆ。つやめ。ろく。萬葉集のにほへる妹(にほへる)をくあらば人妻ゆゑにあれ戀ひめやも」

にほふ 匂ふ(動) 『動』四自 『にほふ』(匂ふ)の氣、鼻に入る。嗅官に感ず。香氣立つ。かをる。萬葉集のにほへる香(か)も子規(子規)鳴く夜の雨に移ろひぬらむ」

漢字を音讀したるもの。わが帝國の名稱。にほん。みづほの國。ひのもと。おほやしま。やまとしまね。油鹽日本の者の口の廣きよまゝにふに君が代とがの字を附けて讀む歌に。日本に一つ。『句』にほんいち(日本)に同じ。香曲(香曲)「日本に一つのあはれの候ふを、語て聞かせ申さん」

にほん 二品(名) 『親』親王の位階の第二。『二品』に同じ。

のよそほひ。國語(國語)「裝束脱ぎ棄て、日本にいたちに、身を固め」

にほん いぬ 日本犬(名) 『動』西洋犬の渡來以前、我國に普通に棲息せし犬。毛、粗剛にして、尾を上方に巻き、耳直立し、外貌粗野なり。その毛のやや長くして密生せるを、むく犬といふ。和犬(和犬)。西洋犬に對して(ぬいんほに)



にほん かい 日本海(名) 『地』日本列島と朝鮮半島及び露領沿海州との間の海。南北五百里、東西は六百里に及ぶ處あり。北は問宮(問宮)宗谷(宗谷)津輕の三海峡、西は朝鮮海峡、對島によりて、東西の二水道に分るを以て、各、外海に通ず。

にほんか

我國在來の構造に依る船舶、即ち帆と櫓とによりて航走する、極めて幼稚なるもの。政府は明治二十年を以て、その五百石積以上の建造を禁せり。現存するものには、大和船・北前船・段平船・船達摩船・船傳馬船・荷足船・猪牙船等あり。日本形船。

にほんかがふ 日本樂府 [名] [書] 「日出處」三韓來「吹烟起」に始まり「夜又來」裂封册に終る樂府六十六首と、每篇の事歴とを記したるもの。一卷。頼山陽の著。李賓の明史樂府に擬したるなり。

にほんき 日本紀 [名] [書] にほんしよき (日本書紀) 同。我國の歴史。國史。大領翁らが説く事は、日本紀を聞くとおぼすばかりぞかし。一、磐坂の雲林院の苦提講に參りありし翁の言の葉をこそ、假名の日本紀にはすめれ。

日本紀の家 [句] 古、我國の歴史を専門の職とせし家、即ち紀傳道文章の道などの家。大抵、神代代をば、いかに日本紀の家に存じ知るべき事なれば、くはしく尋ねたまはんとて。

にほんきうたのかい 日本紀歌解 [名] [書] 次條に同じ。

にほんきかかい 日本紀歌解 [名] [書] 日本書紀の中にある歌を解釋せるもの。三卷。荒木田久老の著。

にほんききやうえんのうた 日本紀竟宴歌 [名] [書] 昔、日本書紀の竟宴の折、その書中にある神人名を題として詠める歌を集めたるもの。一卷。

にほんきくけつ 日本紀口訣 [名] [書] 日本書紀を註釋説明せるもの。尾形正通の著。その一部、神代卷のみを傳寫せるを、神代卷口訣といひ、五卷あり。

にほんきざんざん 日本紀纂疏 [名] [書] 日本書紀の神代の卷を、漢文にて註釋し、勅撰の由來、撰者の事、修史上の舊説、和訓の本末等を、巻頭に詳述せるもの。上下二卷、上卷を五册、下卷を三册に分つ。一條兼良の著。一名、神代纂疏。

にほんきしき 日本紀私記 [名] [書] 日

にほんき

本書紀の中の語句に訓を附したるもの。昔朝廷にて、日本書紀を講せしめたまひしその時々の、博士の私記ありたりとの説あれど、現存のこの書が、即ちその當時のものなりやは、明かならず。十五卷。

にほんきのつぼね 日本紀局 [名] [人] 二條天皇、式部の作りたる源氏物語を見たまひて、式部は、日本紀を熟讀したる者なるべしとの仰ありしに、なにがし局の妬みて、日本紀の局といひし由、紫式部日記に記せるによりていふ「むらさきしき」(紫式部)の異稱。

にほんきんかう 日本銀行 [名] 我國金融機關の中心たる中央銀行。株式組織にして、明治十五年に設立せられ、總裁理事等の職員は、政府より任命せられ、政府の特別なる監督の下に、特別の義務を負ひて、普通の銀行業務の外、國庫金の取扱、兌換銀行券の發行、又、公債の募集償還等の業務を取扱ふ。本店は東京市日本橋區本兩替町に在り。

にほんきんかうかんりくわん 日本銀行監理官 [名] 大藏大臣の命を承けて、日本銀行の業務を監理する職。

にほんきんかうそうざい 日本銀行總裁 [名] 日本銀行の重役の一。日本銀行事務を總理し、日本銀行が、國庫金を取扱ふ場合に、金庫出納役として、國庫金の出納を掌る職なり。

にほんきりすざい ちけうくわい 日本基督教一致教會 [名] [書] 次條に同じ。基督教一致教會 [名] [書] 我國の基督教の一派。安政六年亞米利加長老教會派遣の宣教師へボン (D. H. Bond) 博士、次に、亞米利加の和蘭改革派教會派遣の宣教師ブラウン (S. R. Brown) ・シモンズ (D. B. Simons) ・ナニヤキ (G. J. Yanaki) の諸氏によりて、宣傳せられ、明治九年亞米利加長老派・蘇格蘭長老派・長老派及び和蘭改革派教會の三派合同して、日本基督教一致教會と稱せしもの、同二十三年今の名に改む。井深樞之助、植村正久など、この派の

名士たり。にほんきりやく 日本紀略 [名] [書] 神代より後一條天皇の長元九年に至るまでの重要な史實を、漢文にて編年的に略記したるもの。二十册。編者詳かならず。宇多天皇以前の部は、大抵六國史の抄出に係る。

にほんき

にほんきま 二本限 [名] 芝居の限取の一種。二筋に限取るもの。芝翫筋の一種。

にほんくま 日本熊 [名] [動] 我國に産する普通の熊。體軀大ならずして、毛色純黒、ただ喉の部分に、白色の差毛ありて、月輪(うづ)と呼ぶ。

にほんくわ 日本畫 [名] 我國在來の畫風、又その畫。

にほんくわい 日本繪畫協會 [名] 美術學校長岡倉覺三の、後進推獎の目的にて設立せし、日本畫研究の團體。西洋畫の白馬會と對峙して、嘗ては、各その一方を代表したり。にほんびじゅつ(日本美術院)参照。

にほんくわい 日本外史 [名] [書] 源氏より徳川氏に至るまでの武家の歴史を、漢文にて書き、所所に史論を挿めるもの。二十二卷。頼夷の著。

にほんくわい 日本畫史 [名] [書] ぜんげん(前賢故實)を見よ。

にほんくわん 日本館 [名] 東京市淺草公園の日本館と呼ぶ興行場の歌劇の、飛び跳ぬることにて有名なるよりいふ「御轉婆」娘、おはね。(俚語)

にほんくわんげふきんかう 日本勸業銀行 [名] 我國の特殊銀行の一。農業と工業との改良發達のために、不動産を抵當として、長期貸付を目的とし、農工債券の引受、勸業債券の發行等の業務を取扱ふ株式會社。明治三十年日本勸業銀行法に基き、資本金壹千萬圓を以て設立す。本店は東京市麹町區内山下町一丁目に在り。

にほんくわんげふきんかうかんりくわん 日本勸業銀行監理官 [名] 大藏大臣の命を承けて、日本勸業銀行の業務を監理する職。

にほんくわんげふきんかうそうざい 日本勸業銀行總裁 [名] 日本勸業銀行の重役の首席として、同銀行を代表し、その業務を總理する職。

にほんく

にほんくわんげふきんかうそうざい 日本勸業銀行總裁 [名] 日本勸業銀行の重役の首席として、同銀行を代表し、その業務を總理する職。

にほんく 日本硯 [名] 日本硯 [名] [書] 宋景濂集に「日本硯、夷而華、四海一家、此非文明之化耶」とあり、方遜志にも見ゆ。日本にて製造せる硯を、支那の明人が呼びし稱。

にほんく 日本語 [名] 我國の言葉。國語。

にほんく 日本後紀 [名] [書] 桓武天皇の延暦十一年正月より、淳和天皇の天長十年二月までの事蹟を、漢文にて記せるもの。六國史の一。四十卷。撰者は、藤原冬嗣なりとも、藤原繼繩なりともいふ。

にほんく 日本興業銀行 [名] 我國の特殊銀行の一。政府の特別なる監督補助を受け、工業を改良進歩せしむる目的にて、國債證券地方債證券株式を質とする貸付、これら證券債券の應募引受、及び信託業務債券の發行等の業務を取扱ひ得る株式會社。明治三十五年日本興業銀行法によりて設立す。本店は東京市麹町區錢瓶(元)町一番地に在り。

にほんく 日本興業銀行監理官 [名] 大藏大臣の命を承けて、日本興業銀行の業務を監理する職。

にほんく 日本興業銀行總裁 [名] 日本興業銀行の重役の首席として、同銀行を代表し、その業務を總理する職。

にほんく 日本弘道會 [名] 國民道徳の發展を圖らんがために、西村茂樹の主率せし團體。明治三年同氏の阪谷素等と創立せし修身學社の後身にして、同十三年講道會と改稱し、同十七年西村氏等の會長となり、二十年更に日本弘道會と改む。

にほんく 日本國總追捕使 [名] [書] 平家物語の卷十二に、鎌倉殿、日本國の總追捕使を給はりて、段別に兵糧米を宛て行はるべきの由、申されけれ

を五むろ なるるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねにほ とつちた そせすしそ こけくきか おえういあ

ば、増鏡の新島守に「頼朝、……諸國の總追捕使といふ事承り、地頭職に、我家のつはものどもをなし集めけり」とある等の文意の紛はしきに基づく誤なり。そうらぶ(總追捕使)を見よ。諸國に守護地頭を置きて、自ら總轄せし源頼朝の、地位の俗稱。正しき職名にはあらず。諸國總追捕使。六十六國總追捕使。

にほんごだいむかひばなし 日本五大昔噺 [名] 曲亭馬琴、始めて、この五話を、その著燕石雜話中に、童話と名づけて、考證を試みたり。我國の古來有名なる五つの御伽話、即ち桃太郎、かちかち山猿、合戦、古切雀及び花咲爺(ハナサキジヤ)。

にほんごへんてん 日本五辯天 [名] 我國にて祀れる辯天の有名なる五箇所、即ち近江國の竹生(タケノ)島、相模國の江ノ島、安藝國の嚴島、大和國の天川(アマガハ)及び陸前國の金華山。

にほんごさいしき 日本歲時記 [名] 「書」一年間の故事、雜事を漢土の書によりて、假名文にて記し、又、我國の故實習俗を見聞に從ひて述べたるもの。七卷。貝原益軒の著。

にほんごさいもん 日本祭文 [名] 「日本一流の祭文の義」ひたさいもん(常陸祭文)に同じ。

にほんごさじ 二本差 [名] 「二本差す」を見よ。よし(武士)の異稱。にほんごさじ(二本棒)参照。「徳川時代の語」。白燒豆腐又は豆腐田樂の稱。

にほんごさんぎふりち 日本三急流 [名] 「地」我國にて最も有名なる、三箇所の急流、即ち羽前國の最上(モリノ)川、駿河國の富士川、肥後國の球磨(クマ)川。

にほんごし 日本史 [名] 「書」にほんれきし(日本歴史)に同じ。にほんごし(大日本史)の略。

にほんごしき 日本詩紀 [名] 「書」平治以前に於ける我國人の漢詩を、ほほ年代の順に排纂したるもの。五十卷。外集別集各一卷を附す。市河寬斎の撰。

にほんごしにけい 日本十二景 [名] 「地」日本全國の中に、景色の絶勝なる十二箇所の地、即ち日本三景の外に、駿河國の田子浦、筑前國の箱崎、武藏國の芝浦、金澤、近江國の琵琶湖、羽後國の象潟(ゾウガタ)、伊勢國の朝熊(アサノ)、出雲國の松江、播磨國の明石(アカヒ)を加へていふ稱。

にほんごじん 日本人 [名] 「日本國の人」にほんじん。三宅雪嶺井上圓了、志賀朔川(シラカハ)棚橋一郎等の、日本主義を標榜して組織せし政教社にて、明治二十一年より發行せし雜誌。

にほんごじんえいたいぐら 日本新永代藏 [名] 「書」日本永代藏に倣ひたる浮世草子。六卷。北條國水の著。

にほんごやくみやう 日本釋名 [名] 「書」支那漢の劉熙の釋名に倣ひて、天象地理宮室より、衣服器物、虚字等に至る二十餘目に分ち、日本書紀、萬葉集以下の古書を參考し、自語、轉語、略語、借語、義語、反略子語、音語の八綱目を立て、和訓の義を釋せるもの。三卷。貝原益軒の著。

にほんごじゆ 日本酒 [名] 我國在來の醸造法に依る酒(殊にその清酒)。和酒。(支那酒、西洋酒などに對して)。

にほんごよき 日本書紀 [名] 「書」神代より持統天皇の十一年八月までの事蹟を、漢文にて記せるもの。六國史の一。三十卷。その内、一、二の兩卷は神代紀。養老四年(718)親王、太安麻呂(タカマロ)等、勅を奉じて撰ぶ。外に系圖一卷ありたりといへど、今傳はらず。略して、書紀又は、單に紀とも、又、日本紀ともいふ。

にほんごよきしやう 日本書紀通證 [名] 「書」日本書紀の中より、字句を摘出して、漢籍、佛書を引き、又諸家の説を擧げて、漢文にて註釋せるもの。三十五卷。谷川士清(シズキ)の著。

にほんごよきてん 日本書紀傳 [名] 「書」日本書紀を註釋せるもの。四十一卷、百四十七冊。鈴木重風の著。

にほんごよふ 日本食 [名] 日本風の食事。(洋食に對して)。

にほんごよせきから 日本書籍考 [名] 「書」日本紀古事記、舊事記(キコ)より近代の雜記に至る百二十部の作者、卷數及び内容の大意等を記せるもの。一卷。林道春の著。我國最初の解題書なり。

にほんごすぎ 二本杉 [名] 紋所の一。立木の杉の形二つを並べて描けるもの。

にほんごせいでい 日本政記 [名] 「書」神武天皇より後陽成天皇に至る百八代二千年間の事蹟を、一代毎に本紀を立て、史實を悉くこれに依り、その間に自家の論斷を交へ、漢文にて記せるもの。十六卷。賴襄(ライ)の著。

にほんごせいけうくわい 日本正教會 [名] 「書」我國の基督教中、露國正教會を母教とせるもの。ニコライ(ニコライ)大主教の開拓によりて發達す。明治五年東京市神田區駿河臺に、宣教館を建てて傳道に従事し、二十四年同地に大聖堂落成してより基礎確立し、四十五年ニコライ主教死後のため、ベトログラアド宗教大學總長セルギイ(セルギイ)主教、その後を繼ぎ、露西亞本國の革命後、傳道費の出途を失ひて大打擊を受く、大聖堂は、面積一四六六平方呎、堂宇の高さ一五呎、鐘樓の高さ一二五呎に及び、俗にニコライ堂と呼ばれ、その鐘聲と共に、市内の一名称物に數へられしが、大正十二年の震災災によりて、舊觀を失へり。

にほんごせいけうくわい 日本西教史 [名] 「書」基督教の我國への傳來並びにその當時の我國の國狀を記せるもの。佛人クラッセの原著を、太政官にて翻譯、出版せるもの。

にほんごせいけうくわい 日本聖公會 [名] 「書」我國の基督教中、羅馬教會の誤謬を排斥して、教義を立てたるもの。我國新教の率先來朝者なる米人リッギンス(Riggins)監督、ウイリアムス(Williams)の開創に依り、明治二十年、英、米兩派の合同ありて、今日に至る。

にほんごせんぱく 日本船舶 [名] 我國の國籍を有する船舶。

にほんごそうこくふとぎ 日本總國風土記 [名] 「書」我國全土の地理の沿革を、國別に記したるもの。山背(ヤマセ)和泉攝津三河遠江、瀧河(タニカハ)、甲斐、相模、武藏、安房、上總下總、常陸、近江、信濃、陸奥、加賀、但馬、備中等二十三國の分存し、今非加開は、その著書萬葉緯に收められど、實は偽書にして、事實に合はざる記事多し。

にほんごたう 日本刀 [名] 我國固有の鍛錬法によりて作りたる刀劍。

にほんごたうぐ 二本道具 [名] 江戸時代に、諸侯の家格によりて、行列に立てたる二本の槍。ふたつたうぐ。二代男、二本道具の大名。

にほんごたうのうた 日本刀歌 [名] 「文」支那宋の歐陽修が、日本刀の銳利なるを譽めて作りたる七言二十四句の詩。

にほんごたまじり 日本魂 [名] やまだまじり(大和魂)に同じ。

にほんごちゆけつ 日本血吸蟲病 [名] かたまたまやち(片山病)に同じ。

にほん

ふ」荒川の溢流に備ふるため、東京新吉原より三輪(六)に至る間の堤。吉原とて。

にほんどうじんけうくわい 日本同仁教會 [名] はばりまをを見よ。

にほんどうじやうれんどうろく 日本洞上聯燈録 [名] 「書」本朝に於ける曹洞宗の名僧七百四十三人の傳を撰録したるもの。十二卷。僧秀恕の編。

にほんは 日本派 [名] 「文」まさかかしき(正岡子規)を見よ。

にほんばし 日本橋 [名] 東京市日本橋區通(六)一丁目より同區室町(七)一丁目に架したる橋。慶長八年始めて架設し、前後十二回の改築を經、何れも木橋にて明治五年の時は長さ二十八間、幅六間、後、幅八間とし、同四十四年長さ二十七間、幅十五間の石橋に改め、今日に至れり。その中心は、我國里程の元標たり。[地] 東京市十五區の一。

にほんばりあみ 二本針編 [名] 編物の方法の一。二本の針を用ひて、兩面より編むもの。

にほんびじゆつゐん 日本美術院 [名] 美術學校長にして、日本繪畫協會の設立者たる岡倉覺三の、明治三十一年美術學校に紛擾起りし時、橋本雅邦等と共に、別に設立せし日本畫の學校。後、衰へて、岡倉は亞米利加に去り、美術院は常陸國五浦(三)に移轉す。

にほんし 日本府 [名] 上古、任那(六)に在りし我國の官署。崇神天皇の末年、任那、我に内附せしより、幸(三)を設けて、これを統治せしもの、その起原にして、後、神功皇后、新羅を征服するや、新羅卒を置き、百濟來屬し、高麗、我權下に歸するに及び、重臣を任那に駐割せしめて、韓地全土の政務を執らしむることとなりし結果を生ぜしもの。後、新羅漸く強く、高麗もこれと結託し、任那の諸小國、壓迫を被るに至り、遂に欽明天皇の二十三年新羅の任那を滅すに及びて、廢せらる。[式] 式

にほんしやう 日本風 [名] 我國傳來の形

にほん

にほんしやく 日本服 [名] 日本風の著物。和服。洋服支那服などに對して。

にほんふりそてはめ 日本振袖初 [名] 「書」近松門左衛門の作に係る戯曲。我國の神代的事蹟を材料とせるもの。大山祇(三)の臣の女木花開耶(三)姫に對するその姉若長(三)姫の嫉妬より説き起し、素盞鳴(三)尊の出雲國姫(三)の川上に至りて、寶劍を取ることに終る。

にほんぼう 二本棒 [名] 大小の兩刀を二本の棒に見做していふ語。徳川時代の(二)本差(三)を嘲りていふ語。徳川時代の語。[三]鼻汁を左右二本垂して居るといふ義。はなたらし(鼻垂)と同じ。和合人(三)言ふも更なる二本棒、三本足らぬ戲作者(三)と思へば。

にほんほんてん みるらうりう 日本本傳三浦流 [名] 柔術の流派の一。三浦義辰第十九世の孫高橋玄門齋展歴を流祖とするもの。

にほんまい 日本米 [名] 我國の内地より産出する米。(外國米朝鮮米南京米などに對して)

にほんまつ 二本松 [名] 「地」岩代國安達(三)郡に在る町。郡役所の所在地。陸羽街道の一驛。丹羽氏の舊藩地。二本松城址。二本松神社あり、又その東に安達原(三)あり。[雙松] 明治の初年設置の驛の一。ふくしま(福島)を見よ。

にほんまつしんじや 二本松神社 [名] 岩代國安達(三)郡二本松町に鎮座せる驛社。祭神は伊弉諾(三)尊、伊弉册(三)尊、事解男(三)命、速玉男(三)命、岩田別(三)命。

にほんまつじやう 二本松城 [名] 岩代國安達(三)郡二本松町に在りし城。町の中央、觀音山の端に遺址あり。北朝の康永年中、島山高國居り、後、伊達政宗の手に歸し、蒲生上杉の兩氏、相次ぎて會津に入るや、この地に城代を置き、加藤氏の時、丹羽氏部明利を分封し、寛永二十年以後、丹羽氏の治城となりて、明治維新に及ぶ。にほんまつだけ 二本松嶽 [名] 「地」岩

にほん

代國安達太郎山(三)の別稱。にほんみねみあるぶす 日本南アルプス [名] 「地」赤石(三)山系の異稱。

にほんめ 日本目 [名] 我國の稱目。新永代(三)一分小判の目を知り、平野目(三)唐目(三)日本目の一斤を覺え。

にほんめさすすけうくわい 日本メソヂスト教會 [名] 「基」我國の基督教會中、明治四十年、在日本メソヂスト教會派の合同して成立せしもの。教義は日本聖公會と異なる所なし。

にほんもの 日本物 [名] 日本にて出来たる物。我國特有の物。鹽麩(三)自ら蠶をとらへ、弓矢八幡日本物(三)。

にほんのり 二本矢 [名] 紋所の矢の一。矢羽根の形二つを並べて描けるもの。

にほんやくきよくほう 日本藥局方 [名] 我國法定の藥局方。明治十九年始めて内務省令を以て發布し、三回の改正を経て現行のものとなれり、現行のものは大正九年の改正にかかれり、第四版のものなり。やくきよくほう藥局方(三)參照。

にほんやちいそく 日本輿地實測録 [名] 「書」我國の地理の實測の結果を記せるもの。十四卷。伊能忠敬(三)の著。

にほんやちいつうじ 日本輿地通誌 [名] 「書」支那の地誌に依りて、我國の地理を記したるもの。並河永の著。

にほん

「書」支那漢の冥報記に依りて、雄略天皇の時より光仁天皇の時までの因果應報に關する事蹟を、漢文にて記せるもの。三卷。僧景戒の著。[前條] 同じ。

にほんれいりき 日本靈異記 [名] 「書」にほんれいりき 日本料理 [名] 日本風の料理。(支那料理西洋料理などに對して)

にほんれきき 日本歴史 [名] 我國の歴史。日本史。本邦史。國史(學校の課目などにいふ)

にほんれつたう 日本列島 [名] 「地」我國を亞細亞洲中の一列島として呼ぶ稱。

にほんわうだいたいちौरん 日本王代一覽 [名] 「書」神武天皇より正親町天皇までの史實の要を、編年體に記せるもの。七卷。林春齋の著。續編ともいふべき書に、片山圓然の續日本王代一覽(三)卷、佐野郷成の續日本王代一覽(二)卷、栗原信充の重修續王代一覽(十)卷等あり。

にほんしやく 日本繪師 [名] やまさし(大和繪師)に同じ。

にほんやか 句やか [名] 句(三)にひやか(句)か(三)に同じ。「古語」並いと細うにはやかなる獨鈷(三)を取らせて。

カビネ形より小く、手札形より大く、四時に五時のもの。

にまいがた二枚肩【名】駕籠を、二人にて昇くこと、又その駕籠。俗曲三谷がへり

「二枚肩にもえ乗らいて、焼印(34)編笠うちかざし、丹波口にて蹴つまつて」

にまいかちの二枚棍葉【名】紋所の

一、棍の葉を二枚並べて描けるもの。

にまいがひ二枚杖【名】「動」左右二枚の介殻を有する軟體動物、即ち海鰓(シ)類に属するもの。

にまいかんさつ二枚鑑札【名】一人にて、藝妓と娼妓とを兼ねる女。陽東新話

「使下藝妓兼娼妓之業、曲中稱曰二枚鑑札」

にまいくひ二枚櫛【名】昔、遊女が、櫛二枚を、左右に並べ挿して、飾とせしこと。



にまいじた二枚舌【名】「舌」を二枚に使ふ「舌」を見よ前後矛盾して、二様にいふこと。兩舌。二言(34)。

にまいたこ二枚扇【名】西内紙(34)二枚を用いて造りたる扇。

にまいつるがひは二枚蔓柏【名】紋所の柏の一。左右に開ける葉の上方に蔓を配して描けるもの。

にまいど二枚月【名】二枚びらきの月。若風俗「二枚月をあけて、長廊下、さし足して行く」

にまいどらびら二枚扉【名】二枚びらきのにまいはかぶど二枚葉胃【名】紋所の胃の一。左右に開ける葉形を、胃の廂上につけたる形に描けるもの。

にまいはたてかぶど二枚葉立胃【名】紋所の胃の一。立てたる二枚の葉形を、胃の廂上につけたる形に描けるもの。

にまいびらき二枚開【名】「わんぱんびらき(観音開(34))と同じ」

にまいみおし二枚水押【名】二枚より成る、一種の水押。その二枚の間を咽込(34)といひ、水押の上にある板を、棹走(34)

にまいめ二枚目【名】「まい(枚)」を見よ「昔の芝居にて、名題役者の内、立役(34)ならば座頭(34)に次ぐ者、女形(34)ならば立女形(34)に次ぐ者、又、立作者(34)に次ぐ作者、二枚目の立役(34)、二枚目の女形(34)、二枚目の作者など呼ばれり。」

にまいめがたき二枚目敵【名】昔の芝居の敵役の、二枚目の位置にあるもの。梅屋辰巳婦言(34)の藤兵衛に、どうか似よりの役廻(34)名さへも同じ二枚目敵、金を遣つて嫌(34)がられ分らぬ人と云はるれども」

にまう二毛【名】『左傳の僖公二十二年の條に「君子不重、傷、不禽、三毛」とありて、註に「二毛、頭白有三色」と見ゆ』頭髮に、白髮のまじりてあること、又その年輩の人。しらがまじりて、じまう。斑白。

にまう二孟【名】次條を見よ。

二孟の句(34)【句】四月朔日と十月朔日と。近次孟幼主時、二孟句(34)養勝殿抄、節會、二孟句、主上、東宮、御元服など行はる」

二孟の句(34)の儀【句】古、二孟の句に、臣下に酒饌を賜ひ、政をきこしめし儀式。九條年中行、二孟句儀(34)をなす場合にはいはず「ふたききく」

にまうてん二毛田【名】二毛作の田地。通常、夏作として、稻を植まつて、冬作として、麥、油菜、蠶豆(34)及び綠肥作物などを栽培す

にませ煮雜【名】「越前國の方言」にませのき、煮雜記【名】「書」諸種の事項につきて、考證的記事を載せたる隨筆。二卷。曲亭馬琴の著。文化八年の刊行。百家説林續篇に收めらる。

にまた二又【名】二本の丸太を、その一端に近き部分にて交又、結合し、他端は開きて地に立て、左右に繩を張りし、これを直立せしめ、その中央に滑車を取附けて、

起重機を用をなすやうにせるもの。にまんごせん【名】二萬五千日【名】京都・長崎などの清水寺の観音に、毎年七月十日に諸人の参詣すること。この日詣れば、二萬五千日参詣したると同じ功德ありといふ。四萬六千日の類。風俗、七月十日、日かふは、二萬五千日の功德とかや。殊に、女心の頼みおける物語の日なるべし」

にまめ煮豆【名】大豆、黑豆などの、砂糖醬油などにて煮染めたるもの。

煮豆に花の咲きたる如し【句】「炒豆(34)に花が咲く」に同じ。「諺語」

にまめや煮豆屋【名】煮豆を賣る家、又その人。

にまゆ煮繭【名】生絲(34)製造の際、繭を湯にて煮て、互に膠着せる繭絲を分離すること。

にみな任那【名】「地」みま(任那)に同じ。

にみん二眼【名】「農」みん(眼)を見よ。

にみゆう【名】「うす(白)を云ふ。「アイヌの」にん人【名】ひと。ひとがら。ひととなり。じん。沙石集、五郎殿ぞ、器量の人にておはする」

人たる人【句】重みありておとなしき人。「足利時代の諺」

人を見て法を説け【句】「機によりて法を説け」に同じ。「諺語」

にん任【名】「身」に負へる務。せめ。責任。負荷。【名】まかせられたる職務。やくめ。勤務。任務。「任を情る」【名】官職に在任する期限。任期。後撰「みちの國ののみ」。任果てて後「櫻花」その程に造りたへたらんあらば、任を延べ、位を増させたまふべきよし」

回職務を行ふ土地。任地。「任に赴く」

任重くして道遠し【句】「論語の泰伯篇に「士不可弘毅、任重而道远。仁以為己任、不亦重乎。死而後已、不亦遠乎」とあるに本づく。任は、負擔にて、大心の全徳たる仁を指す「士人たる者は、堅忍不拔、死に至るまで、

身より仁を離さざること、重き荷を負ひて遠き道を行くに等し。「諺語」

にん忍【名】「し」のぶこと。こらふること。我慢。【名】「佛」已も怒らず、他人に對しても、憤怒の念を生ぜしめぬこと。【名】身を隱すこと。忍術。

にん仁【名】「中庸」に「仁者人也」とあり、佛經中に、同輩の者を呼ぶに「仁」又は「仁者」の語を以てせること多し「にん(人)に同じ。【名】「生」せら(小核)に同じ。【名】「植」しゆか(種核)に同じ。

にん人【名】「助數」人數を數ふるに用ふる語。「何人」十五人。

にんあん仁安【名】六條天皇の御代の年號(紀元一八二六年—一八二八年)。

にんい任意【名】心のままにすること。きまかせ。こころまかせ。隨意。勝手。任意上の代理人【句】「法」にんい(任意代理人)に同じ。

任意の【句】「數」英と「何れ」を選ばざる。欲するがままなる。制限なく自由なる。「直線」中任意の點「任意の數を取り來りて」

にんいきてい任意規定【名】「法」にんい(任意規定)に同じ。

にんいきせらば任意競賣【名】「法」にんい(任意競賣)に同じ。

「獨」Freiwiliges Amt(任意)をなす權利を有する者が、任意に執達吏に委任して行ふ競賣。

にんいんあひ任意組合【名】「法」公共組合の一種。その設立を、全く組合員たるべき者の自由意思に放任し、國家は國家の目的に符合する場合に認可する外、組合員の加入を強制せざるもの。例へば、商業會議所の類。(強制組合半強制組合に對して)

にんいんあひ任意公債【名】「經」獨「Freiwiliges Obligation」その募集を應募者の任意とする公債(強制公債に對して)

にんいんあひ任意國債【名】「經」任意公債なる國債。

にんいんあひ任意債務【名】「法」獨「Freiwiliges Obligation」債務者が、その債

にまい

にまい

にまい

にまい

2320

務の内容たる給付に代へて、他の給付をなすことを得る場合、又は債権者がその債権の内容たる給付に代へて、他の給付を請求することを得る場合の債務。例へば損害賠償として、金千圓を支拂ふべきを、十日間の謝罪廣告掲載を以て、これに代ふるも可なりといふ類。せんたむむ(選擇債務)参照。

にんじやうたり 任意上代理 [名] 法律に對して(任意代理)に同じ。(法律上代理に對して)

にんじやうたりにん 任意上代理人 [名] 法律に對して(任意代理人)に同じ。(法律上代理人に對して)

にんじやうたりにん 任意出頭 [名] 法律に對して(任意出頭)に同じ。(法律上代理人に對して)

にんじやうたりにん 任意準備金 [名] 銀行などが法律の規定によらず、定款の規定に基づき、任意に積立する準備金。

にんじやうたり 任意代理 [名] 法律に對して(任意代理)に同じ。委任代理(法定代理)に對して(委任代理)参照。

にんじやうたりにん 任意代理人 [名] 法律に對して(任意代理人)に同じ。委任代理(法定代理)に對して(委任代理)参照。

2321

法上の雇傭契約によりて、給料を定むるなどの、強制的にして、強制的にあらざるもの(強制的給料制度に對して)

にんじやうたりにん 任意代理人 [名] 法律に對して(任意代理人)に同じ。委任代理(法定代理)に對して(委任代理)参照。

2322

は、忍びて悪行を爲すよりいふこの世。娑婆世界。忍土。堪忍の境。堪忍世界。

にんかい 忍界 [名] 佛のこの世界の者に忍びがみたる。人我の相(心)深く、貪欲甚しく、物の理を知らず。

人我無相(心) [句] 人身に常一の主宰者ありて、一定の相を具ふとの誤想を去ること。本記「道學の者に三機あり。上機は、人我無相れば、心に懸かり。事なし。中機は、人我無理を、観する故に、二念と相續して思ふ事なし」

人我無理(心) [句] 佛の人身は、因縁によりて生ぜざるに過ぎずして、真理の顯現には非ざる事。じり(事理)参照。

にんかい 忍界 [名] 佛のこの世界の者に忍びがみたる。人我の相(心)深く、貪欲甚しく、物の理を知らず。

2323

にんから 人柄 [名] ひごから(人柄)に同じ。

にんき 人氣 [名] じんき(人氣)に同じ。人間の意氣。新永代産、四十五十まで何にても勤めたる功は、天道人氣に空しからず。

にんき 人氣 [名] 佛の人間と鬼類と。間。任限。任。

にんき 人氣 [名] 在職の期限。就任の期間。任限。任。

にんき 人氣 [名] 有無が大關係ある商賣。例へば、俳優、力士、藝人などの類。

にんき 人氣 [名] 新聞雑誌などに、俳優力士藝人などの人氣を、廣く世人の投票に問ひて發表すること。

にんき 人氣 [名] 人氣のある人。諸方面の評判よき人。

にんき 人氣 [名] 有無が大關係ある商賣。例へば、俳優、力士、藝人などの類。

にんき 人氣 [名] 新聞雑誌などに、俳優力士藝人などの人氣を、廣く世人の投票に問ひて發表すること。

にんき 人氣 [名] 人氣のある人。諸方面の評判よき人。

にんき 人氣 [名] 有無が大關係ある商賣。例へば、俳優、力士、藝人などの類。

にんき 人氣 [名] 有無が大關係ある商賣。例へば、俳優、力士、藝人などの類。

にんき 人氣 [名] 新聞雑誌などに、俳優力士藝人などの人氣を、廣く世人の投票に問ひて發表すること。

にんき 人氣 [名] 人氣のある人。諸方面の評判よき人。

にんき 人氣 [名] 有無が大關係ある商賣。例へば、俳優、力士、藝人などの類。

にんき 人氣 [名] 有無が大關係ある商賣。例へば、俳優、力士、藝人などの類。

にんき 人氣 [名] 新聞雑誌などに、俳優力士藝人などの人氣を、廣く世人の投票に問ひて發表すること。

にんき 人氣 [名] 人氣のある人。諸方面の評判よき人。

にんき 人氣 [名] 有無が大關係ある商賣。例へば、俳優、力士、藝人などの類。

にんき 人氣 [名] 有無が大關係ある商賣。例へば、俳優、力士、藝人などの類。

にんき 人氣 [名] 新聞雑誌などに、俳優力士藝人などの人氣を、廣く世人の投票に問ひて發表すること。

にんき 人氣 [名] 人氣のある人。諸方面の評判よき人。

にんき 人氣 [名] 有無が大關係ある商賣。例へば、俳優、力士、藝人などの類。

にんぎやうそで 人形袖 [名] にんぎやうじ
たて (人形仕立) 同。同。

にんぎやうだる 人形樽 [名] 寛文延寶
の頃、その長柄の上に編笠を冠らせ、醉
興に舞はすこと流行せしよりいふ。たるに
にんぎやう (樽人形) 参照 (えたる (柄樽) 同
じ。寶蓋こら行きかふわび人、人形
樽に詰めて、懷辨當にをさめて、花はいづれ
の情に見つるか知らねども、とりどり誇
顔なる顔つきも、實に春は春なれや」

にんぎやうつかひ 人形遣 [名] 操 (のび) 人
形をあやつること、又その人。にんぎや
うまはし。

にんぎやうて 人形手 [名] 唐子人形の
模様を染め出だしたる、上品なる更紗 (び
り) 又は陶器。日地色は紫、鼠色、栗色、金色
などありて、これに鐵印 (てつし) にて、人物、
模様を打出し、彩色せる草。

にんぎやうとり 人形取 [名] 是より繪
取) 同。

にんぎやうら 人形原 [名] 地 筑紫國
磐井 (い) の遺跡と稱する土地。筑後國八
女 (や) 郡長峯村大字吉田より西北廣川
村大字一條に至る方一里の野、その中心
をなせる高原 (土俗長峰と呼ぶ) の概稱。
古曠及び石人石馬の類、今も存す。

にんぎやうひやうおん 人形病院 [名]
人形、その他、玩具の破損せるものを、客
の需に應じて修繕する家。

にんぎやうふて 人形筆 [名] 軸より人
形の出入するやうに装置してあるよりい
ふ (ありま) 有馬筆 (あ) 同。毛吹草人
形筆、ニンギヤウペン

にんぎやうぶり 人形振 [名] 芝居にて、
役者が、義太夫の文句に合はせつつ、一舉
一動すべて操 (あ) 人形の如くにして踊
ること。これ歌舞伎狂言が、その技の模範
を操芝居に採りたる一證なり。

にんぎやうまはし 人形廻 [名] にんぎや
うつかひ (人形遣) 同。二代男 (に) 人形まは
し。握握飲をするもあり

にんぎやうみせ 人形店 [名] 人形を賣る
店。一代男 (に) の里に、人形見世出して

にんぎやうや 人形屋 [名] 人形を造り、
又は商ふ家、又その人。若風 (わ) 某、このあ
たりの人形屋なるが、この形、一しほ心を
こめて作り、看板に立ておきし事、久し

にんぎやうやからゑもん 人形屋幸右衛
門 [名] 人 (に) いかるが (か) ゑもん (鶴幸右衛
門) 同。

にんぎやくじや 人氣役者 [名] 人氣あ
る役者。譽めは (や) ざる役者。

にんぎよ 認許 [名] みとめゆるすこ
と。法 (は) 或事件につき、その準備を正
常なりと認めて許可すること。認可し、免
許すること。

にんぎよ 人魚 [名] 山海經などに見
ゆ 支那にて、胴以上は人身 (多くは、女
體)、それ以下は魚類にて、啼く聲小兒に
似たりといふ想像上の怪物、儒艮 (に) を
指せるなるべしとも、山椒魚 (や) なるべ
しともいふ。かいていし物なるや。新米代
蕨 (あ) 身代暮しかねぬ人は、成る程若若とし
て、しかも煩ふ事なし。これ人魚の汗を
吸ひたるにもあらず、銀 (ぎ) の延びるも面
白く、朝夕心ゆくそ故なり

にんぎよじよ 認許書 [名] 認許したる旨
を證明する文書。認許證書。認許證。

にんぎよじよう 認許證 [名] 前條に同
じ。

にんぎよじようじよ 認許證書 [名] 前條
にんぎよを (と) 人氣男 (に) 人氣者の男。
にんく 人工 [名] りきしや (力者) に同じ。
太平記 當務の僧ども、人工行者に至るま
で、打殺すのみならず

にんく 人供 [名] ぶつ (佛供) じんく (神
供) に見よ。修法 (し) などの時、その事を
勤むる僧俗に給與する米。

にんく 人空 [名] 佛 (が) 空 (我空) に
にんく 任槻 [名] さくわ (三槻) を
見よ。三公 (に) に任すること。非爾葉 (あ) 河
内洲 (名) 虎を攝政、關白、有常も、任槻、宗岡
を大将にもなすべかりしを

にんくわい 人外 [名] 人の道に外 (ふ)

ること。ひとでなし。にんげんはづれ
じんくわい。非道。また (穢多) を云
ふ。摩羅國の方言

にんくわつ 二月 [名] にぐわつ (二月) の音
便。京都大阪の語

にんくわつ 二月堂 [名] にぐわつたう
(二月堂) 見よ。

にんくわん 任官 [名] 官吏に任ぜらる
ること。官職に任ぜらるること。拜命
日 江戸時代、從五位下に敍せられて、何
何のかみ (守) 又は頭) と稱せしこと。

にんけふ 任俠 [名] 任は相與に信する
義、俠は是非を同じくする義) をとこた
て。をときぎ。けふにん。じんけふ。俠氣。

にんけん 忍劍 [名] しもつ (仕込杖) に
二三寸、すたりと抜きければ、只今 (あ)
忍劍の所持致すを見受けました。只今 (あ)
忍劍記 (あ) 任限 (に) にんき (任期) に同じ。
慶長記 (あ) 任限 (に) にんき (任期) に同じ。
任限 (に) にんき (任期) に同じ。

にんげん 人間 [名] 史記の留侯傳に
「願乘 (二) 人間事、欲下從 (三) 赤松子 (遊) 耳、法
華經の法華品に「生 (三) 於此人間」とあり
人類の棲息せる所、よのなか。世間。人
世。人間 (に) 人間界。平常人間のあだ
なる習、今更驚くべきには候はねども」

人間盛 (あ) に、神樂 (あ) 無し (あ) 凡
夫 (あ) 盛に神樂無し) に同じ。諺語
人間の一炊 (あ) 天 (あ) 邯鄲の枕) に同じ。
諺語 太平記 (あ) 天上の五衰、人間の
炊、唯夢かとのみぞ覺えたる

人間第一の水 (あ) 支那宋の黃山谷
の省中 (あ) 茶懷 (三) 子瞻 (と) 題する詩の註
に「陳舜俞廬山日記、康王谷有三水、飛
泉被 (あ) 而下者、三派、其高不可計、
其廣七十餘尺、陸鴻漸茶經、管第二其水、
爲天下第一」とあるに本づく其水、
太平記に、蘇東坡の語なるが如く記
せるは、記憶の誤なるべしといふ。地上
における、無比のよき水。太平記 芳甘を
酌みて立つる時、建溪の風味こまやか

なり。東坡先生が、人間第一の水と譽め
たりしも、この中より出でたりけん」
人間の皮を被 (あ) る (あ) うはべのみ
は人間らしく見ゆ。人面獸心。

人間の四月 (あ) 支那の白居易の大林
寺桃花の詩、即ち「人間四月芳菲盡、山
寺桃花始盛開、云云」とあるもの。甚あ
すは、いかなる詩をかといふに、いきさ
か思ひめぐらし、とどこほりもなく、人
間の四月をこそはといらへたまへる、
いみじうをかしこそ

人間の用捨は貧富に在り (あ) 人
は、材能の有無に係らず、富める者は世
に用ひられ、貧しき者は捨てらる。「諺
語」太平記 世上の毀譽は、善惡にあら
ず、人間の用捨は貧富に在りとは、今
の時を申すべき

人間は實 (あ) が入ると仰向 (あ) く、
菩薩は俯 (あ) く (あ) 次條に同じ。
「諺語」 舟人 (あ) 實稻といふ物は、實が入
ると俯く善薩は、諺に人間は實が入ると
仰向く善薩は、俯くといふことあり

人間は實 (あ) が入れば仰く、善薩は
實 (あ) が入れば俯 (あ) く (あ) ぼさつ (善
薩) (あ) 見よ) 人は學力、權力など加は
るに従ひて、高慢に流ること常なれ
ど、稻は實のるに従ひ、ますます俯き
て、謙讓の姿を示す。「諺語」

人間萬事塞翁が馬 (あ) さいごう (塞
翁) の條下を見よ。塞女 (あ) 羽子板 (あ) 戀か
ら生れた人間萬事塞翁が馬の打った太
鼓の撥 (あ)

人間僅か五十年 (あ) 法苑珠林に
「天壽者如人間五十年、爲四天王一日
一夜」とあり。人生は、極めて短し。諺
語) 問 (に) 同。

にんげんかい 人間界 [名] 佛 (に) げん (人
に) げん (し) ゆき 人間主義 [名] 哲 (ひ) び
まに) 同。

にんげんせい 人間世 [名] にんげんかい
(人間界) に同じ。室町千景 (あ) 忠と不忠と
善惡は、人間世の堺目にて。書 (あ) 莊子
の三十三篇中の一。太平記 蟪蛄 (あ) 蟬を窺

をえわわ りれるりら よゆや もめんむみま ぼへふひは のねぬにほ とてつちた そせすしそ こけきか おえういあ

いんげん

へば野鳥、蟻螂を窺ふといふ。莊子が人間世の譬げにもと思ひ知られたり」

にんげんせい 人間性(名) 人間らしき性情。人間の悪しき方面なる我利・私慾に對してもいひ、その善の方面を誇張して、神の如しとする見方に對してもいふ。

にんげんせかひ 人間世界(名) にんがひ(人界)と同じ。

にんげんぢやう 人間道(名) じんぢやう(人道)と同じ。魯我五輪聖佛の眞似する身なれども、人間道に外れしは、主でもなし、僧でもなし」

にんげんてんわう 仁賢天皇(名) (人名) 第二十四代の天皇。御名は大御(大御尊)。初名は億計(ひこ)。履中天皇の皇子なる市邊押磐(おし)皇子の第一子。御母は美(み)姫。在位十一年(紀元一四八年—一八五年)。即位の十一年崩す。壽五十一(一説に五十)。弟押磐皇子の雄略天皇の害に遭ふや、弟弘計(ひら)と共に、難を難波に避けしが、清寧天皇に迎へられたる、皇太子と爲り、天皇崩御の後、位を避けて、弘計(顯宗天皇)に譲り、後に即位せらる。

にんげんぢやう 人間並(名) 普通一般の人と同様なるありさま。ひとなみ。

にんげんはづれ 人間外(名) 人間の道にはづること。又その人。人外(じんがいの)。重寶玉(むねたから)さては、お前も、私も、人間はづれの畜生になつたか」

にんげんばぢやう 人間離(名) 普通の人とちがひて、名譽・利慾などの念の薄きこと。

にんげんほんめせつ 人間本位説(名) 〔英〕Anthropocentric theory 尤くは、宇宙は特に人間のために設けられたらといひ、近世は、宇宙は自然のままに放置すれば、人間のために適應すること甚だ不十分なれども、これに努力を加ふれば、一層完全に適應せしむるを得べしといふ説。

にんげんみ 人間味(名) 人間性の根本に觸れたるあぢはひ。人情味。

にんげんぢやう 人間らし(形) 人がま

いんげん

し。ひとらし。

にんげんわぎ 人間業(名) 人の爲るわざ。人間の能力に依る仕事。(神業(かみ)に對して) 若風盆(わかしん)二つ繩を一筋にして渡り、都人の目を覺ましける、これ人間業とは思はれず」

にんごく 任國(名) 國司の任命せられたる國。ザリヤ(ザリヤ) 正統王、任國に赴く事も絶えて久しくなりにしかば、古き例を尋ねて、罷申(まがしん)の儀あり」

にんさう 人相(名) 一人の相貌、即ち顔面・骨格・手足等の形状・色澤・斑紋・黒子(くま)など、及び顔面の表情・音聲、その他身體の舉止・動作に至るまでの特徴。さう。二人の相貌を見て、その人の未來の運命吉凶を判断すること。さう。觀相。

にんさうか 人相家(名) にんさうみ 人相見と同じ。

にんさうがき 人相書(名) 失踪者を捜索するために、その人の相貌・年齢・言語・衣服などを、すべて、他人と識別しやすき特點を記載して配布するもの。物色。 舞臺劇日記(たいぎ)たしか、右の高須(たかす)に黒子(くま)見知らぬ者もあらうとあつて、村村(むらむら)配る人相書、出して見せたる姿繪(すがた)に、

にんさうじや 人相者(名) 次條に同じ。新美記(しんみぎ)世世の人相者も、天理の常を以て勘(かん)へば、何の中りたる事かこれあらん」

にんさうみ 人相見(名) 人相を見るを業とする人。さうみ。人相家。人相者。相師。觀相家。

にんさうめがね 人相眼鏡(名) てんがんにんさうじや 人相書(名) 人相のよきこと。 伊世風目(いせいふうめ)だ。とんだ人相よし。よ。おぞま。だ。

にんざん 人相(名) 一人の相貌、即ち顔面・骨格・手足等の形状・色澤・斑紋・黒子(くま)など、及び顔面の表情・音聲、その他身體の舉止・動作に至るまでの特徴。さう。二人の相貌を見て、その人の未來の運命吉凶を判断すること。さう。觀相。

いんげん

てし祠。 類聚(るいぎゆ)元禄(げんろく)圓城寺(ゐんじやうじ)……故尙侍贈正一位藤原朝臣繼子、發願建(はつげんけん)斯仁祠(すいにしろ)二百餘(にひゃくじゆ)爲(な)崇徳院(たかたけいん)並(な)宇治左大臣(うぢさだ)保元戰場(たけのくにばた)地(ぢ)可被(よ)立(た)仁祠(にしろ)事始也」

にんざん 任子(名) 高官にある父兄の庇蔭によりて、試験などを經ず、官に任ぜらるる子弟。蔭子。門蔭。

にんざん 任使(名) 委任して使ふこと。公平(へいびん)任使(にんざん)その人を得る時は、天下おのづから治まる」

にんざん 人事(名) じんじ(人事)と同じ。佛教に關したる文(ぶん)に用ふ。 徒然(とら)生活(せいか)の(が)摩訶止觀(まがし)を待列(まちりやく)」

にんざん 認識(名) 事物をみとめ知ること。 哲(てつ)「英(えい) Ognition 又(また) Knowledge(ノウレッジ) 獨(ひとり) Erkenntnis」心が、外界及び内界に於ける對象(たいざう)を、知力作用(ちりきよう)によりて、その在るがままに心に會得(くわいてつ)すること。その結果は知識(ちしき)となる。認識(にんざん)は、認識の主體たる自我(じが)と、認識の客體たる事物(じぶつ)との一致の上(じゆう)に成るものたるは、明(みやう)かなれども、なほ進(ま)んで、これを細(こま)かに説明(せうめい)せんとするは、認識論(にんざんろん)の主とする所なり。

にんざん 哲学(名) 充足原理(じゆうじきりんり) 認識充足原理(にんざんり) 充足原理(じゆうじきりんり) 一。いかなる判断(はんぱん)も、それが成立(ていりやう)するには、十分(じふぶん)なる理由(りゆう)あること。

にんざん 戦争(名) 戦死者(せんじや)の識別(けつべつ)を容易(ゆい)ならしむるために、出戦者(しゅせんじや)の携帯(けいたい)する姓名札(せいせいしか)我國(わがくに)にては、眞鍮製(しんすうせい)小判形(せうはんがた)のものとし、准士官(じゆんじかん)以上(いじやう)は官姓名(くわんせいめい)を、下士官(げじかん)以下(いげ)は、所属(しゆしゆ)部隊(たいたい)號(ごう)と番號(ばんごう)とを刻す。

にんざん 認識論(名) 哲(てつ)「英(えい) Epistemology 獨(ひとり) Erkenntnis 理論(りろん)の起(おこ)る原因(げんいん)を研究(けんきう)するもの。哲學(ていがく)の一分科(いふんか)にして、自然哲學(ぜんぜんていがく)精神哲學(せいしんていがく)實踐哲學(じやうぎていがく)に次(つ)ぎて、最も遅(おそ)く現(あら)われ、認識(にんざん)の本質(ほんしつ)、即ち認識(にんざん)と實在(じやうぜん)との關係(かんが)い如何(いか)の問題(もんじ)によりて、實在論(じやうぜんろん)と觀念論(くわんねんろん)とに分(わか)れ、認識(にんざん)の起原(きげん)、即ち眞正(しんせい)の認識(にんざん)はいかにして得(た)るるかの問題(もんじ)によりて、經驗論(げんぱんろん)と唯理論(たいていろん)とに分(わか)る。 ほんたいたるん(ほんたいたるん)本體論(ほんたいろん)參照(さんしやう)。

いんげん

にんじん 妊娠(にんじん) 妊娠(にんじん) 婦人(にん)が、受精(じゆうせい)せる卵(らん)子(ご)子(ご)宮内(うご)に包蔵(ほうざう)する状態(じたい)。受精(じゆうせい)即ち卵(らん)子(ご)と精蟲(せいぢゆう)との結合(けつごう)に始(は)まり、分娩(ぶんべん)即ちこの卵(らん)子の排出(はいしゅ)に終(しま)る。凡(およ)そ二百(にひゃく)八十(じゅうはち)日間(じつかん)持續(くじく)し、胎兒(たいじ)はその間に於(お)いて、出生後(しうしんご)獨立(どくりつ)して生活(せいか)を営(い)み得(た)る様(よう)發育(はついく)を遂(た)ぐ。その徵(しるし)として、月經閉止(げつけいへいし)及(及び)び多くは連(つ)和(わ)を生(な)じ、往往(むじ)悪阻(あくそ)の(を)發(は)し、又(また)乳房(にゅうぼう)の著(し)る色(いろ)帯(たい)下(か)の増量(ぞうりやう)等(とう)を來(き)し、四(よ)乳(にゅう)房(ぼう)以上(いじやう)に纏(まと)れば、腹部(ふぶ)の表面(めいめん)より卵(らん)子(ご)子(ご)に觸(ふ)るを得(え)べく、概(おほ)ね初(は)妊(にん)娠(じん)は五(ご)箇(かん)月(げつ)、その他(その他)は四(よ)箇(かん)月(げつ)半(はん)頃(ぎょう)より、胎動(たいどう)を感(か)ずるに至(いた)る。 受胎(じゆうたい) 懷妊(わいにん) へんじ(へんじ) 參照(さんしやう)。

にんじん 人身(にんじん) (人身)と同じ。佛教(ぶつぎ)に關(かん)する文(ぶん)に用(もち)ふ。 勝(かた)典(てん)奉(ほう)養(やう)小(せう)町(ちやう)「たまたま受け難(がた)き人身(にんじん)を受け、遂(た)ひ難(がた)き如來(にょらい)の佛(ぶつ)教(ぎょう)に逢(あ)ひ奉(ほう)る事(こと)」

にんじん 人參(にんじん) 植物(じゆつぶつ) 根(こん)の形(がた)人の五(ご)體(たい)に似(に)たるよりいふ。五(ご)加(か) (五加皮(ごかひ)) 科(か)に屬(ぞく)する多年生(たねんせい)の草(くさ)莖(せい)は高さ約(たいてい)二(に)尺(せき)、葉(は)は掌(てのひら)狀(じやう)複葉(ふくはつ)にして、通常(じゆじょう)五(ご)箇(かん)の小葉(せうはつ)より成(な)る。各(おの)小葉(せうはつ)は、披針形(ひしんけい)又は長卵形(ちやうらんけい)をな(な)し、鋸(のこ)齒(ぢ)あり。秋(あき)帶紫(たいむらさ)白色(はくしやく)の小花(せうが)繖形花序(さんけいけい)をな(な)して開(ひらく)。根(こん)は、多(た)肉(にく)にして、身體(しんたい)及び神(しん)經(けい)の疲勞(たいらう)の恢復(かふたう)及び健胃(けんい)の効(き)ありとて、東洋(とうやう)の藥物(だくぶつ)中(ちゆう)最もその名譽(めいよ)を著(し)れ、我國(わがくに)朝鮮(ちやうしん)及び内地(うち)の諸地(しよぢ)に栽培(さいがい)し、中(ちゆう)にも朝鮮(ちやうしん)開城(かいじやう)の産(た)み有名(よめい)なり。かうらいにんじん

てうせんにんじん。かのにげき。人參(にんじん) 人參(にんじん) 八笑(はつせう)お袋(おぶく)の病氣(びやうき)で、人參(にんじん)の代(しろ)に賣(う)られた時の事(こと)など。 繖形(さんけい)科(か)に屬(ぞく)する二年生(にねんせい)の草(くさ)。地下(ちか)に黃赤色(わうせきしやく)なる多(た)肉(にく)の圓錐根(えんすいこん)あり。葉(は)は根生(こんせい)し、數回(すくわい)羽狀(えうじやう)に分裂(ぶんれつ)せる複葉(ふくはつ)にして、葉柄(はびん)長(なが)く、莖(せい)には白毛(はくもう)あり。花莖(けうせい)は高さ四(よ)五(ご)尺(せき)、葉間(はま)より抽出(しゅしゅ)し、初夏(じゆげ)白色(はくしやく)の小花(せうが)繖形花序(さんけいけい)をな(な)して開(ひらく)。我國(わがくに)各地(こくぢ)の園圃(えんぼ)に栽培(さいがい)せり、根(こん)及び嫩莖(ねんせい)を食用(じゆうじゆう)す。な(な)にんじん

にんじん 人參(にんじん) (人參)と同じ。異稱(いしやう) 永代(えいだい)人參(にんじん)のつきつけ。筒(つつ)もたせ大釣(おほたつ)」

おえういあ こけくきか そせすしさ とてつちた のねぬにん ほへふひは もめんむみま よゆや りるるりら おをるわ

にもち(こ)ぶ 荷持瘤【名】に(こ)ぶ(荷瘤)に同じ。又義同「あのお婆(お)は荷持瘤の傳(つ)が婆」根拠其田舎から山出(お)と見えて、荷持瘤しやちこぼった黒鬼の長助」

にもつ(じ) 荷物【名】輸送する貨物、荷に責任となる物事、負擔

にもつ(お)くり(じ)やう 物荷送状【名】荷物に添ふる送状

にもつ(か)た 荷物方【名】にかた(荷方に)にもつ(き)や 荷物汽車【名】へ(か)じや(貨車)に同じ

にもつ(せ)ん 荷物船【名】くわぶつせん(貨にもつ)ぶ(く)る 荷物袋【名】荷物を入れるに用ふる袋。だんぶ(く)る

にもつ(ぶ)ね 荷物船【名】こ(だ)ぶ(ね)小荷駄船に同じ

にもつ(れ)つ(じ)や 荷物列車【名】くわぶつれつ(じ)や(貨物列車)に同じ。「條下を見よ」

にも(に)ず(じ)似も似ず【句】に(に)る(に)る(の)にも(の)煮物【名】食物を煮ること、又その食物。傾城酒呑童子「鯉の煮物」

にも(ん)ん(じ)二文字【名】横に二本の線を劃したる形。盛衰記「兵衛佐、治承の謀叛の時、昌俊二文字に結雁(か)の旗を賜はりたり候」とかや

にも(ん)じ(やう)二問状【名】鎌倉時代及び室町時代に、被告の陳狀に對して、原告の重ねて發する訴狀。重申狀。重訴狀。(二)答狀に對して「三問三答の訴陳狀」参照

にも(ん)せん(じ)二文錢【名】紋所の錢(じ)の一。一文錢を二つ並べて描けるもの。

に(や)あ(じ)【動】「感嘆詞にやあ」の轉義「ね二猫」を云ふ。「幼児の語」

に(や)あ(が)【動】「句」「猫の糞(じ)を踏んだやう」に同じ。「諺語」伊世風呂「猫(じ)が尿(じ)ちや濟まされねぞ」

に(や)あ(の)【動】「猫の鳴聲」にやう。にやうにやあ(に)や【名】「動」ね(に)猫を云ふ。「幼児の語」

に(や)ら(の)【動】「猫の鳴聲。ならねら参照。醒睡笑兒の語」

「大なる猫があるといふに、彼方(かた)に肝をつぶし、にやうといふべきを打忘れ」

に(や)き 煮焼【名】食物を煮又は焼くこと

に(や)く 荷役【名】繁船壁埠頭又は棧橋などにて、船の荷の積御をなすこと

に(や)ん【名】「こん(に)や(ん)弱弱」を云ふ。「女の語」

に(や)ん(ち)わ(ら)じ(じ)や 若一王子社【名】に(や)ん(ち)わ(ら)じ(じ)や(若王子神社)に同じ

に(や)ん(か)じ(や)う(ぶ)つ 若我成佛【句】「佛」『觀無量壽經に見ゆ』阿彌陀佛の四十八願の中、第十八願の初の句。蘇曲(三)〇「若我成佛、十方世界、念佛衆生、攝取不捨」同義願寺「若我成佛の光を受くる世の人の」

に(や)ん(さ)う 若僧【名】年わかき僧。正尊千句「霞はくまぬ山の若僧」

に(や)ん(ぞ)く(ま)ね(の)若族【名】多くの若者。狂言(老武者)昔は知らず、當代は、若族どもこそひと手は取れ「千紅萬紫」一休は、子をにやくぞくと呼び

に(や)ん(だ)う 若道【名】わかしゆだう(若衆道)に同じ。に(や)ん(だ)う(女若)参照。運歩色葉葉若道、ニヤクダウ

に(や)ん(や)【動】「に(や)ん(や)を見よ」決断せず曖昧なるさま。煮えきらぬさま

に(や)ん(わ)ら(じ)【動】若王子【名】次條の略

に(や)ん(わ)ら(じ)【動】若王子神社【名】「若王子は、若宮(じ)一王子(じ)の略稱。若一(じ)王子を、更に略して呼べるもの。熊野參詣道の諸王子中、第一位に居る。紀伊國東牟婁郡(じ)那本宮(じ)村に鎮座せる官幣中社(じ)祭神は天照大神又は泥土煮(じ)尊、又は國底立(じ)尊などいへど、信すべからずといふ。熊野座(じ)神社十二社の一。別稱、若一王子社。東京都上京區南禪寺町永觀堂の北、宇若王子に鎮座せる神社。後白河天皇の、熊野の若王子神社を勸請して建てられしもの。聖護院に屬し、修驗(じ)道を兼修せり。應仁の亂に堂宇燒失したれど、なほ名勝として明ゆ

に(や)け 若氣【名】「に(や)ん(だ)う(若道)に同じ。古語」長季は、宇治殿若氣也。仍大意にて、不(ふ)加(か)怨給ひけり。久(く)參(ま)の時、は、い(い)み(じ)く(急)給ひけり。大飲之間、依(よ)酒(さ)事、御(み)お(ほ)え(は)き(が)りにけり。『ご(も)ん(肛門)に同じ。紫長季記「ちこ小袖柳櫻をこきまて(い)ふ(句)じ」にやけのあたりはたひだ菊の花」きのふはけの物馬おちご様、ひさびさ御里に御遊びなさるるが法印様より、御見舞にて、三位に御文(じ)持たせて遣さる。……、そ(も)じ(様)は、ひ(さ)び(さ)御里に御逗留にて、この頃は、お(に)や(け)に(支)へ(申)すと、繰返し繰返し遊ばしける」

に(や)ける 若氣弱。弱氣弱【動】下「自」前條の語の動詞となりたるもの「柔弱にて、色めかしく見ゆ。あま(ま)ち(や)ける。男子の上(に)い(ふ) 伊世風呂「あのおしやん(す)事はいなと、弱氣(じ)た言葉也」

に(や)け(を)ご(ご) 若氣男弱氣男【名】「に(や)けたる男

に(や)て【動】「に(や)に同じ

に(や)て【形】「に(や)としてあり。女に對して、心弱し。夕霧阿波の鳴瀬、下地がに(や)こ(い)且(な)那(な)小舌たるう仕懸けたら、ほ(つ)かりと喚ひ付いて」

に(や)じ【形】「う(つ)くし」古語「馬あなに(や)し、え(を)と(こ)を」

に(や)す【動】四他「ね(やす)の轉といふ」うちたたく。なぐる。打擲す。「肥前國佐賀の方言」藤栗毛「づくにうどもにやいてくれるぞ」

に(や)つ(か)し 荷(や)つかし【名】「に(や)ん(か)し(荷)に(や)つ(煮)奴【名】奴豆腐を、醤油經節などにて煮たるもの」

に(や)つ(に)や(つ)【動】「に(や)ん(や)を見よ」意味ありげに、冷かに笑を含むさま。に(や)り。に(や)は(じ) 似合はし【形】「に(や)は(じ) (似合

はし)の訛。狂言(文相)「やあ、似やはしい者が參つた。昔葉を掛けて見よう」

に(や)ふ 似合ふ【動】四自「に(や)ふ(似合ふ)の訛。狂言(藤)「か(が)ね(下)やう(た)連(じ)ちや。同道哉さう」

に(や)ば(や)【動】「嬉(し)きに(や)に(や)と笑ひか(は)して、心(お)ち(つ)か(ぬ)さま。手(ま)舞(御)息女(の)刈屋(娘)齋(世)の君(と)に(や)ば(や)した、世間の取沙汰」

に(や)む(に)や(む)【動】口中にて、低聲に、眞言(じ)の文句などを唱ふるさま。狂言(藤)「妙法蓮華經、に(や)む(に)や(む)に(や)む」

に(や)も(に)や(も)【動】「前條に同じ。狂言(藤)「舞(勁)の」を致さる。南無歸命禮(じ)に(や)り(に)や(り)に(や)に(や)も(に)や(も)」

に(や)り【動】「に(や)に(や)に(や)も(に)や(も)」に(や)り、こ(つ)り【句】「柔(き)中(に)、又、一點剛(き)所(あ)る(形)容」

に(ゆ)煮物【動】下「自」煮たる物、全體に熱とほりて熱す。『水沸きて、湯となる。』目(ま)甚(し)しく腹立(つ)つ。業(じ)が沸(こ)く。に(え)か(る)。心中(じ)萬(ま)年(念)者(ぼん)の俗(俗)辨(辨)は、蹈(踏)殺(す)とて、煮(え)さ(し)や(る)』四上(を)下(へ)と騒動(さうどう)す。鼎(たぎり)の沸(こ)が如(ごと)くなる。に(え)り(か)へ。ひ(つ)り(か)へる。世(世)無(無)雙(雙)二(郎)は追(追)放(はな)て、八(八)幡(はな)は煮(煮)える」

に(ゆ)あん(す)【佛】Nanto【名】「文(美)音、調子意味感情などの微細なる差異。に(ゆ)う(乳)【名】「ハ(わた)に(ゆ)う(乳)に(同)じ。『ち(乳)圓(圓)に(同)じ。太平記「九乳の免鐘も、取(と)る人(無)ければ、空(く)しく焼(焼)けて、地(に)落(お)ちたり』に(ゆ)う(乳)に(同)じ。に(ゆ)あ(る)【乳(乳)參照。平(平)獨(獨)針(針)を以て、腦(脳)の」を撞(つ)碎(さい)き、乳(乳)に和(あ)して、護(護)摩(摩)を燒(こ)き」

に(ゆ)う(粥)【句】「牛(牛)又は羊(羊)の乳汁をあたため煉(練)りて造(造)りたる滋養(じやう)飲料。ク(リ)ム又はミルク(類)の類。乳酪(じ)。「古語」『果(果)實(實)の實(實)を搾(搾)りたる汁(汁)にて造(造)りたる飲料」

に(ゆ)う(乳)管(管)及び乳器(乳器)の内に含有(含有)する、白色

に(や)は(じ)

に(や)は(じ)

に(や)は(じ)

に(や)は(じ)

1262

〔稀には黄色又は橙赤色)なる液。種種の有機物及び無機物を含み、その植物體に對する生理的作用は、多くは植物の營養分となりて、諸所に運搬せられ、或は含有物の凝固によりて、傷口を閉塞し、或は有毒物質を含みて、動物の嗜食を防ぐ等の作用をなす。

にゆうかう 乳香〔名〕〔植)橄欖科に屬する常綠亞喬木。高さ約二丈。葉は羽狀複葉、各小葉には鋸齒あり。白色又は淡赤色の小花を開く。原産地は紅海沿岸。亞弗利加のソマリランド(Somaliland)に生ず。〔にゆうせい(乳香)に同じ。〕

〔植)漆樹科)科に屬する常綠亞喬木。高さ約一丈五尺。葉は偶數羽狀複葉にして、各小葉は長卵形をなし、單性の小花を開く。樹脂は假漆(漆)又は香料とす。原産地は歐羅巴の南部。〔前記の幹より浸出せる樹脂の凝固したるもの。薬用及び香料に供す。〕

にゆうかん 乳柑〔名〕〔植)くねほ(九年にゆうがん)乳膏〔名〕〔醫)乳房に發する癌腫。初は乳腺に、やや大なる結節を生じ、順次疼痛を覺ゆ。多くは婦人に發す。

にゆうき 乳器〔名〕〔植)英)Latiferous vessels)多くの細長き細胞が縦に連接し、その隔壁の消滅して、管状をなせるもの。桔梗科(罌粟科)科、菊科などの體內に存し、膜壁の性質も、内容物も、全く乳管と同一なれども、乳液の色は、橙赤色又は黄色なるもあり。

にゆうきう 乳牛〔名〕〔醫)乳汁目的にて飼養する牛。ちちうし(肉牛に對して)にゆうきうおん 乳牛院〔名〕〔中)古、京都の左近馬場の西にありて、典藥寮に屬し、攝津國の牛を取寄せて飼養せし所。別當、乳師預(預)などの職員あり。その搾り取れる乳は、主上中宮、東宮の御飲料となりたりといふ。〔養乳牛院)〕

にゆうくわ 乳化〔名〕〔英)Emulsion)或液體が、或他の液體にて、無數の小球となりて存在する状態。乳球のことき、その代表たるべきものなり。この状態にある小球は、多くは烈しく光線を反射するにより、その液をして、白色を呈せしむ。乳汁が白色を呈するは、この理に因る。

1263

にゆうくわん 乳管〔名〕〔植)英)Latiferous tubes)大戟科(大戟科)科、毒麻(毒麻科)科、夾竹桃科(毒麻科)科等に屬する植物の根莖、葉などに存在する、一種の細胞。多くは分岐せる細長き管状をなし、内壁は原形質膜にて被られ、内に數多の核と乳液とを含む。乳液は、通常白色なり。

にゆうこ 乳戸〔名〕〔中)古、典藥院に屬して、乳牛の飼養、牛乳の搾取等に從事せし部民。

にゆうざい 乳劑〔名〕〔獨)Emulsion)と油類、もしくは樹脂様物質とを、人工的に、或適當なる媒介物の補助によりて、均等に混和したる藥劑。外觀は乳汁のごとく、種子乳劑、油脂乳劑、樹脂乳劑の三種に分つ。

にゆうざん 乳酸〔名〕〔化)英)Lactic acid)糖類、澱粉などが、空氣中より入り來りたる乳酸菌の作用によりて生ずる酸。無色澄明、或は微かに類黄色を帯びたる、舍利別(別)状の稠厚液にして、臭氣なく、強き酸味を有す。牛乳、糊飯餅などの腐敗によりて生ずる如き、これなり。醫藥又は染色術などに使用す。

にゆうざん 乳酸菌〔名〕〔植)羅)acidophilus lactis)甘蔗糖、葡萄糖、乳糖のごとき糖類の液に繁殖して、乳酸醱酵を起し、これを乳酸に變せしむる菌類。既知のもの二十餘種あり。牛乳の酸變、清酒醸造に於ける瓶(瓶)製造中に生ずる酸味、その他、酒精製造を始とし、醬油、味噌溜(溜)の香味増なるとの酸味の大部分は、この菌類の作用に因る。乳酸醱酵菌。

にゆうざん 乳酸銀〔名〕〔化)英)銀) lactate)新に造れる酸化銀及び乳酸を冷温にて作用せしめ、その溶液を、暗所にて、常温減壓の下に蒸發せしめて得る、無色の針狀結晶。二十倍の水に溶解し、アルコホルに對しては、冷きものには溶けざれども、温きものには容易に溶く。暗所にて、八十度以上熱すれば無水の鹽(鹽)となる。

1264

にゆうざん 乳酸鉄〔名〕〔化)英)iron lactate)鐵劑の一。乳酸カルシウムの濃溶液に、計算量の鹽化第一鐵を加へ、放冷して沈澱したるを取り、アルコホルにて洗ひ、五十度の熱にて乾したるもの。帶緑白色にて、無臭なる粉末又は針狀結晶をなす。萎黃病、貧血症等に用ふ。

にゆうざん 乳酸醱酵〔名〕〔化)乳糖の醱酵して、乳酸に變ずること。乳酸菌の作用に因る。よるご参照。

にゆうざん 乳酸醱酵菌〔名〕〔植)にゆうざん 乳酸菌)に同じ。

にゆうじ 乳劑〔名〕〔醫)乳牛院)を見よ。

にゆうじ 乳齒〔名〕〔醫)小兒の出生後、六七箇月の頃より三歳頃までに生ゆる齒。大白齒を缺き、上下各十枚にして、十歳前後に至れば、全部脱け去りて、永久齒これに代る。ちのみば。

にゆうじ 乳児〔名〕〔中)乳牛院)に同じ。

にゆうじ 乳兒〔名〕〔中)ちのみば(乳牛院)に同じ。

1265

にゆうじ 乳兒〔名〕〔中)ちのみば(乳牛院)に同じ。

し簡。「日給」の簡参照。禁抄「東
倚子、其南女房簡」

女房の奉書(抄)。「句」によらばほうし
よ(女房奉書)に同じ。夏山雜談「勅旨を
受けて、勾當の内侍より書き出される
文を、女房の奉書といふなり。これを内
侍宣と覺えたる人もあり。ひが事なり」

によらばうきどり 女房氣取「名」女房
「ら」しき風をすること。

によらばうへるま 女房車「名」女房の乗
れる牛車(抄)。簾の下より下簾(抄)を
出し垂れたり。をんなぐるま。今昔この
女房車、如何なる人の乗りたるにか有
らん」

によらばうへくわじ 女房懷紙「名」女
房の用ふる懷紙。親長卿記所詮可被交
女房懷紙中治定せり」

によらばうご 女房子「名」つまご(妻子)
に同じ。日蓮上人御法蓮女房子は、なう情
(抄)なや、悲しやと、川に駆けおり、駆け
上り」

によらばうごじ 女房輿「名」下簾(抄)
など美しく飾りて、女房の乗用に供する
輿。をんなかご。をんなごし。をんなのり
もの。女中のりもの。女房のりもの。明
月鳥自鳥羽「御幸八幡、女房輿三」

によらばうごご 女房事「名」女房に
關する事柄。によらばご(女房事)参照。

によらばうごば 女房詞「名」昔禁中
の女房、又は御殿女中などが、食物などの
異名に用ひし言葉。豆腐を「おかべ」、團子
を「いしし」、葱を「ひとじ」、恥かしを
「はもじ」などいふ類。中古、皇室式微の
餘、後土御門天皇の御代頃より、下品なる
物をも供御に供へまつりたる隠語より始
まれりといふ。女中ことば。大上御前名之事
「女房ことば」

によらばうごんじ 女房三
十六歌仙「名」(「人」女房)の中、詠歌に
すぐれたる者三十六人、即ち小野小町式
子(抄)内親王伊勢宮内卿中務(抄)周
防内侍齊宮女御藤原俊成女右近少將季
繩女待賢門院堀川藤原道綱女宜秋門院

丹後馬内侍嘉陽門院越前赤染衛門二
條院讃岐和泉式部小侍從女藏人(抄)左
近後鳥羽内侍下野崇式部辨内侍小式
部内侍少將内侍伊勢大輔殿富武三位
輔清少納言土御門院小宰相大貳三位
八條院高倉高(抄)内侍後醍醐中納言典
侍一宮紀伊式乾門院御匣(抄)相模深
壁門院少將を遷出したるもの。應安六年
の奥書ある寫本あれば、南北朝頃に選ば
れしものなるべしといふ。

によらばうごひや 女房衆「名」女房た
ち。「に」によらば(女房)の敬稱。

によらばうごひり 女房乗物「名」によ
らばうご(女房輿)に同じ。「代男、女房乗
物入れれば、勝手灯(抄)消して」

によらばうごひてり 女房日照女房早
「名」(老)なひり(女日照)に同じ。「代男
下司つかふ親方もある」

によらばうごぶん 女房分「名」女房(抄)た
るべき者。五十年忌歌念佛言ひなづけの女
房分」

によらばうごぶり 女房振「名」女房(抄)と
しての人品。女房としての様子。娘加留
多「女房ぶりが上のつて」

によらばうごぶつ 女房奉書「名」詔
勅の様式手續の、漸次簡略に流れて、内
侍宣となり、内侍宣の文體も、漢文より宣
命體となり、更に假名文のものとなりた
る、その假名文の、更に一變して、假名の
散書(抄)となれるもの、長橋局(抄)散書、
散書を奉書して、自ら文書に作製したり。
女房の奉書。

によらばうごみやが 女房冥加「名」よき
女房(抄)を得たる幸福。今國姓爺「この美し
い者を、土百姓めが小澤山に抱いて寝た、
その詞女房冥加に盡きて斬られた」

によらばうごもち 女房持「名」妻帯してあ
ること、又その男子。

によらばうごやく 女房役「名」女房(抄)の、
夫を輔佐するに譬へていふ「輔佐の地位
に立つ役」

によらば 女房「名」によらば(女房)の

によらばご 女房子「名」によらば(女房
子)の訛。天の御鳥によらば子にも見代へ
しは尤も」

によらばごん 女院「名」によらば(女院)の
音便「國母又は女御、内親王等の、佛門に
入りて、特に何某門院の尊號を贈られた
まひたる御方。東三條院(一條天皇の御母
藤原詮子)に始る。もと御在所を以て名と
せしが、後には宮門號に依り、又は地名
を取りたるもあり、又宮門號の上に、後又
は新の字を冠せられたるものあり。例へば、二
條院建禮門院新待賢門院など。待遇は
概ね上皇に准じて、院司を置きしが、國母
准母その他との間には、多少の差別を設
けらる。もんのん(門院)参照。兼五「おりの
みかどになぞらへて、女院と開えさす」

によらばごんづき 女院附「名」徳川幕府
の職制の一。女院のおはします時、臨時
に設けしもの。定員二人。掌る所禁裡附
と同様に、與力同心隸屬したり。

によらばごんちやう 女院廳「名」女院
の官廳、即ち女院司の政務を執る所。もんの
のちやう(院廳)参照。

世會の頃、信實の朝臣といひし歌よみの
女の少將内侍、大内の女工所にさぶらふ
に」中務内侍鳥羽女工所の女房を、はしに
出して、御簾のきはへ、かの行事官を召寄
せて、衣の寸法など、こまかにあひしらは
せられたれば」

によらばごんせい 女群勢「名」女群の群と
軍と音相同じきより、軍勢の意にて續け
たる語「群り集まれる女。和合人、われ口
説(抄)き落さん」と馳せ向ひたる女群せい
を、薙ぎ立て、薙ぎ立て、追ひまわれば」

によらばごんちやう 女藏人「名」男官の藏人
に對しての稱呼「禁中にて、命婦(抄)に
次げる下稱の女房朝賀白馬節會(抄)踏
踏歌などに、天皇の出御せらるる時、内侍
に従ひて供奉し、その他、雜役を勤仕し、
踏歌の妓女をも勤めたり。又、御匣殿(抄)
御匣殿藏人、東宮所屬の女藏人もありた
り。によらばごんちやう。源氏「うねべによく
らうどなど」

によらばごんちやう 女藏人「名」前條に同じ。

によらばごんちやう 女官「名」宮中に仕ふる婦
人。奈良朝の頃までは宮人と呼び、平安
朝以後は、多くは女房(抄)といひ、現今
は女官(抄)といふ。によらばごんちやう。
わんちやう。

によらばごんちやう 女系「名」女子の血統。母方の
によらばごんちやう 如幻「名」佛一切諸法は、實
在せるやうに思はれるれども、空(抄)にして
はかなきこと、恰も幻(抄)の中に、何事かを
成さん。すべ、所願みな妄想なり」

によらばごんちやう 女御「名」によらば(女御)に同じ。

うたふ

寺の舊境内にある鳥羽院の寵姫祇園女御の館の跡。「語」によきよき。

によよ(一)女護島(名)「女子のみ住めりといふ、想像上の島。一代男女護の島に渡りて、採取(採)の女を見せんと云へば」藤原「おれも、去年怖(おそ)い夢、天狗の鼻に取附いて、女護の島へ渡ると見た」(一)伊豆國八丈島の異稱。

によよ(二)女根(名)「女子の生殖器(男根(オビ))に對して」(一)「(如左)に同じ。五代帝玉鬘冷泉萬里小路(オホノ御所)へ入らせたまひて、賢所劍置など渡しまわらせて、踐祚の儀あり。……、開院は、この程、なほ如在の儀にて」(一)物事をなほざりにすること。事物を疎略にすること。兼「上下格子奉仕。是藏人等、如在不當故也」

によよ(三)女相(名)「(女相)に同じ」

によよ(四)女裝(名)「(女裝)に同じ」

によよ(五)女三(名)「次條の略。柳尊老い込んだ女三火鉢の猫を抱き」

によよ(六)女三宮(名)「第三の皇女の義にて、正しくは、女(三)の宮といふべきなれど、源氏物語のは、古來、斯く呼び習はせり。によよ(七)女二宮(參照)源氏物語の中に、朱雀院の第三の皇女(源氏の君の異母妹として記されたる人物。大納言普賢、それは昔の女三の宮、これはお當世女)」

によよ(八)女(名)「(女子)に同じ。枕博士の、打續き、によよ(九)女(名)「(女兒)に同じ」

によよ(十)女(名)「(女兒)に同じ」

によよ(十一)女(名)「(女兒)に同じ」

によよ(十二)女(名)「(女兒)に同じ」

によよ(十三)女(名)「(女兒)に同じ」

によよ(十四)女(名)「(女兒)に同じ」

によよ(十五)女(名)「(女兒)に同じ」

によよ(十六)女(名)「(女兒)に同じ」

によよ(十七)女(名)「(女兒)に同じ」

によよ(十八)女(名)「(女兒)に同じ」

によよ(十九)女(名)「(女兒)に同じ」

うたふ

ること。「世相を、如實に書く」

によよ(二十)女(名)「女と生れたる者。をみな。をんな。ちよしやう。女人(オナ)。婦人。女流。歴史記「女性は何事かあるべきなれば」

によよ(二十一)女(名)「(女)に同じ」

によよ(二十二)女(名)「(女)に同じ」

によよ(二十三)女(名)「(女)に同じ」

によよ(二十四)女(名)「(女)に同じ」

によよ(二十五)女(名)「(女)に同じ」

によよ(二十六)女(名)「(女)に同じ」

によよ(二十七)女(名)「(女)に同じ」

によよ(二十八)女(名)「(女)に同じ」

によよ(二十九)女(名)「(女)に同じ」

によよ(三十)女(名)「(女)に同じ」

によよ(三十一)女(名)「(女)に同じ」

によよ(三十二)女(名)「(女)に同じ」

によよ(三十三)女(名)「(女)に同じ」

によよ(三十四)女(名)「(女)に同じ」

によよ(三十五)女(名)「(女)に同じ」

によよ(三十六)女(名)「(女)に同じ」

うたふ

如是我聞(オシカニ)「佛」禁(オヒス)「釋迦入滅の後に於ける諸經の編輯は、多聞第一の弟子阿難の手に成りしものなるより、諸經の冒頭に釋して、是(オシカニ)の如く我聞意を示せる語。論語などに、「子曰」とあると同意。又「我聞如是」とせるもあり。信成就(オシカニ)の句參照。

によよ(三十七)女(名)「(女)に同じ」

によよ(三十八)女(名)「(女)に同じ」

によよ(三十九)女(名)「(女)に同じ」

によよ(四十)女(名)「(女)に同じ」

によよ(四十一)女(名)「(女)に同じ」

によよ(四十二)女(名)「(女)に同じ」

によよ(四十三)女(名)「(女)に同じ」

によよ(四十四)女(名)「(女)に同じ」

によよ(四十五)女(名)「(女)に同じ」

によよ(四十六)女(名)「(女)に同じ」

によよ(四十七)女(名)「(女)に同じ」

によよ(四十八)女(名)「(女)に同じ」

によよ(四十九)女(名)「(女)に同じ」

によよ(五十)女(名)「(女)に同じ」

によよ(五十一)女(名)「(女)に同じ」

によよ(五十二)女(名)「(女)に同じ」

によよ(五十三)女(名)「(女)に同じ」

うたふ

によよ(五十四)女(名)「(女)に同じ」

によよ(五十五)女(名)「(女)に同じ」

によよ(五十六)女(名)「(女)に同じ」

によよ(五十七)女(名)「(女)に同じ」

によよ(五十八)女(名)「(女)に同じ」

によよ(五十九)女(名)「(女)に同じ」

によよ(六十)女(名)「(女)に同じ」

によよ(六十一)女(名)「(女)に同じ」

によよ(六十二)女(名)「(女)に同じ」

によよ(六十三)女(名)「(女)に同じ」

によよ(六十四)女(名)「(女)に同じ」

によよ(六十五)女(名)「(女)に同じ」

によよ(六十六)女(名)「(女)に同じ」

によよ(六十七)女(名)「(女)に同じ」

によよ(六十八)女(名)「(女)に同じ」

によよ(六十九)女(名)「(女)に同じ」

によよ(七十)女(名)「(女)に同じ」

によよ(七十一)女(名)「(女)に同じ」

をえむわ ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた せせすしそ こけくきか おえういあ

べきもの。によさんのみや(女三宮)参照。源氏物語に、朱雀院第二の皇女にて、柏木右衛門督の妻となりし由記せる人物。藤曲(藤葉)この落葉の宮と申すは、光る源氏の見(源)朱雀院女二の宮、一條の御息所(源)の御息女なり。

によんに 女女 [名] 「佛」をんな。女子。婦人。ぢよんに。によしやう。源氏「女人の悪しき身を受け、長夜の闇に惑ふ」曰つま妻に同じ。大鏡「いで、この翁の女人こそ、いとかしこく物は覺えはべれ」

女人禁制(特) [句] 寺院にて、修道の障害を避くるために、女の入るを禁ずること。によんだう(女人堂)参照。諸曲(竹生鳥)この鳥は、女人禁制とこそ承りて候ふに。

女人結界(特) [句] 女人禁制の結界。醒睡(高野山)は、女人結界なれば。女人成佛(妙) [句] 「佛」によんにじやうぶつ(わん)女人成佛願を見よ。きのふはけふの物語(彌陀如来の御誓願に、女人成佛の沙汰を申さう)。「生寺」を見よ。

によんに かうや 女人高野 [名] むろじ室によんに ころう 女人講 [名] 佛道修行又は信念談合等のために、婦人の結べる會。によんに じやうぶつ(わん) 女人成佛願 [名] 「佛」によんにわうじやうぶつ(わん) 女人往生願に同じ。

によんに だう 女人堂 [名] 古、女人禁制の山寺にて、參詣の女人を、別に門外に堂を建てて、通夜せしめし所。若風俗「草葺の庵あつて、軒に女人堂と、しやれ板に書きつけ」心中萬年草「曉の五障の雲に埋もるる女人堂にぞ著きにける」

によんに ばい 女人拜 [名] 「傳燈錄に「麻谷作二女人拜」とあり」女子の、膝を屈するのみにて、立ちながら拜すること。によんに わうじやうぶつ(わん) 女人往生願 [名] 「佛阿彌陀佛の四十八願中の第三十五願。男子よりも、罪障深重にして、成佛の器にあらずといふ女人を、特に淨土に往生せしめて、男子の身とならしめん

との悲願。女人成佛願。じやう(五障)へんじやう(なんじ) (變成男子)「八歳の龍女(龍)参照。によんやう 女若 [名] 女と若衆(若)と。女色と男色と。女道と若道(若)と。重難子「語り難らす美男草、女若二つの戀草を」

によんよ 如如 [名] 「佛」諸法皆然るにりよて、によ(如)を重ねていふ。諸法の理體の、何れも不二平等なること。八犬傳「今、この犬が、欲を忘れて、讀經(經)の聲を聴くを樂しみ、如如入歸の友となること、皆、御經の力に依れり」

によんよ 女筆 [名] 女の手跡。一代女女筆指南の張紙して。によんよ 呻吟 [動四自] 次條に同じ。「古語」靈異記(呻吟、爾與ふ)によんよ 呻吟 [動四自] うめく。うなる。によんよ 呻吟 [動四自] うめく。うなる。によんよ 呻吟 [動四自] うめく。うなる。

によんよ 如夫人 [名] 「左傳の僖公十七年の條に、齊公好内、多内寵、内嬖如夫人(者六人)とあり」めかけ(妾)の異稱。によんよ 女別當 [名] 古、齋宮寮と齋院司とに仕へし女官。遷居(女別當して聞えたまへり)。

によんよ 如法 [名] 「次條の語の轉義」無量壽經の卷下に「應當信順如法修行」とあり。如来の教法のごとくすること。理に契(ひ)たること。かたのごとくすること。偈偈の、行狀よきこと。氣だてのよきこと。柔和。「元祿時代の語」今當心中(菱屋介五郎は、如法なる、氣も丸びたひ、にこやかに)。

によんよ 如法 [副] 「前條」の轉義。まことに。大いに。全く。もとより。保元「十一日の如法夜更けて」平並(如法暗夜の事なれば)盛衰(文)學、紙を取り向けて見れば、如法雅稚(や)なり。如法、如説に [句] 「佛」によんよ(如法に)同じ。著書(書寫の上人、みづから如法、如説に法華經書きたまひけるに)。

によんよ あいぜん 如法愛染 [名] 「佛」次條の略。増廣(大法)秘法、殘なく行はる。七佛藥師……如法愛染など、すべて數知らず。によんよ あいぜん 如法愛染法 [名] 「佛」如法に修する愛染法。大愛染法。によんよ きやう 如法華經 [名] 「佛」に經文を書寫すること。もと慈覺大師一人の行法に成りしものなれど、後には種種の作法・儀式も定まり、多人數、式場に集りて行ふに至れり。多くは法華經を書寫して、これを如法華經(經)といひ、又、如法大般若經もあり、又、圓光大師は、淨土三部經の如法經を始めたり。によんよ 如法堂 今昔「慈覺大師は……山に大なる相(の)木あり。その木の空(の)に住して、如法に精進(の)して、法華經を書かれける。書き畢りて、この經を安置す。如法經これより始る」

によんよ けきやう 如法華經 [名] 「佛」如法法華經の略。前條を見よ。によんよ じゆぎやう 如法修行 [名] 「佛」如来の教法の旨趣に従ひてその道を修行すること。如説修行。によんよ せんじやう 如法尊勝 [名] 「佛」次條の略。増廣(如法尊勝は)恒守(僧正……勤めらる)。

によんよ せんじやう 如法尊勝法 [名] 「佛」如法に修する尊勝法。によんよ だいにんわう 如法大仁王會 [名] 「佛」王は、仁の字の韻に引かれて、ナウと發音す。「一代一度の仁王會」に同じ。

によんよ だいはん 如法大般若經 [名] 「佛」によんよ(如法)を、如法經を見よ。本朝(世)近日於二院有(如法大般若經書寫事)。

によんよ だう 如法堂 [名] 「如法經の堂の義」慈覺大師が、叡山の横川(の)に建てて、三十番神をして、日毎に守護せしめし、石を墨とし、一字三禮して、三年の間に法華經一部を書寫して、小塔に納めた

るを安置す。によんよ きやう (如法經) 参照。發覺(如法堂と申すも、慈覺大師の御建立、六根懺悔の行儀は、この道場より始まり、三十番神の守護こそ貴くは覺ゆれ)によんよ だいにんわう 如法仁王會 [名] 「佛」王は、仁の字の韻に引かれて、ナウと發音す。「一代一度の仁王會」に同じ。によんよ ねんぶつ 如法念佛 [名] 「佛」によんよ(念佛)に同じ。によんよ ぶつげん 如法佛眼 [名] 「佛」次條の略。増廣(如法佛眼は、昭訓門院の御志にて、慈覺僧正承りたまふ)。

によんよ ぼけ 如法法華 [名] 「佛」如法に法華經を讀誦すること。野守(慈覺大師は、獨行(の)に如法法華を修して、懺悔(の)のなじみの聲を、懺法(の)の妙典にとどめ)。

2422

2424

2424

2424

2265

もの、即ち真如の人格化せられたるもの
の義』佛の十號の一。天尊

如来果上（マツシ）の法門（句）「佛」諸
宗の果は、如来の應身が、因位の凡夫、
二乗菩薩に、彼等が修行、證悟の分際を
説きしものなるに對して、大日如来が、
内證の眷屬を集めて、自愛法樂のため
に、自證のままを談ぜしよりいふ（正統記）
「東寺は、……、如来果上の法門にして、
諸教を超えたる極秘密と思へり」

にやういへん 如来藏（名）「佛」梵語
Hare-garbhā（ハレガ）はがら（法藏）に同じ。
にやういへん 如来様（名）「佛」にやう
いへん（如来）の敬稱。「おまたにやういへん（阿彌陀）
如来」を略していふ敬稱。「眞宗信者の語」
無賴者（ハ）外の佛へ（願）掛けたら、雜行
（マツシ）ぢやと思しめし、娘を救うて下さる
まいと、如来様ばっかり念じてゐた」

にやういへん 如来寺（名）「磐城國石磐
寺」郡夏井村大宇山崎にある淨土宗の
寺。名越（シ）派、四本山の一。嘉元年中、
鎌倉光明寺の眞戒比丘の開基といふ。
常陸國新治（シ）郡柿岡町にある眞宗の
寺。親鸞（ニ）二十四輩の隨一なる、乘然坊の
遺跡といふ。「信濃國下伊那（シ）郡座光
寺村にある天台宗の寺。善光寺如来が、
水内（シ）郡に移るまで安置せられたる處
と傳へ、古善光寺の名あり。

にやういへん 如来身（名）「佛」十身の
一。佛果の徳の圓滿したる體、即ち佛自
身の身。佛身

にやういへん 如来禪（名）「佛」釋迦如
來の所説に依る禪法の義。楞伽經の卷二
に見えたる四種禪の一。佛經所説の禪定
（マツシ）を以て開悟するもの、即ち經行（マツシ）
に依りて禪行を起すもの。（祖師禪に對し
て）「元亨釋教」曰。我有二心法、曰二如来
禪。昔三藏菩提達磨自天竺來付此法
于慧可」

にやういへん 如来堂（名）「佛」阿彌陀
如来を安置せる堂。龍曲（土重）「信濃國に
開えたる善光寺にも著きにけり。……こ

の如来堂には、叶ふまじきぞ。急いで出
て候へ」

にやういへん 如来唄（名）「佛」ほんばい
（梵唄）に同じ。太平記、延曆寺の中堂供養
の日に、上人、當山に坐しながら、風（シ）か
に、如来唄を引きたまひしかば、梵音、遠
く叡山の雲に響きて」

にやういへん 如来肌（名）人の體温の
ために暖かなること。應永（シ）戀のおこり
も皆法（シ）の道（シ）ある句に君様の熱氣さむ
れば如来はた」

にやういへん 似寄（名）似寄ること。似たり
寄つたり。近似。類似。八笑人（シ）似寄どこ
るか、南瓜（シ）を二つに割らずに、その
儘だ」

2265

の如来堂には、叶ふまじきぞ。急いで出
て候へ」

にやういへん 如来唄（名）「佛」ほんばい
（梵唄）に同じ。太平記、延曆寺の中堂供養
の日に、上人、當山に坐しながら、風（シ）か
に、如来唄を引きたまひしかば、梵音、遠
く叡山の雲に響きて」

にやういへん 如来肌（名）人の體温の
ために暖かなること。應永（シ）戀のおこり
も皆法（シ）の道（シ）ある句に君様の熱氣さむ
れば如来はた」

にやういへん 似寄（名）似寄ること。似たり
寄つたり。近似。類似。八笑人（シ）似寄どこ
るか、南瓜（シ）を二つに割らずに、その
儘だ」

にやういへん 如理智（名）「佛」こんぼん（ち）根
本智（シ）に同じ。（方便智に對して）

にやういへん 似寄る（動四自）よく似る。近似
す。類似す。萬葉（シ）木綿機（シ）の袖つけ衣
著しわれを似寄れる子らがよには」

にやういへん 如露（名）「佛」次條を見よ。
如露（シ）如電（シ）あり「佛法の實體な
く無常なるを、電光と露とに譬へてい
ふ語。諸曲（シ）谷行（シ）一切有爲（シ）の世の
習（シ）如夢幻泡影（シ）、如露亦（シ）如電。
應作（シ）如是觀の心を」

にやういへん 如鷲（名）「佛」瘦せたる鷲
か。正章（シ）句による鷲のやうな男に思ひ
つき」

にやういへん 如鏡（名）ゆるやかにうねりつ
つ進み又は延ぶるさま。そのそ。のこ
のこ。にやういへん。にろり。流離（シ）世世（シ）に
よるよる來たれば、肝潰し」

にやういへん 如樹（名）「佛」次條の語の轉義。そ
の形によりていふ。さほてん（シ）霸王樹（シ）を云
ふ。「伊豫國の方言」

にやういへん 如野（名）「佛」のよると高き冬野かな
にやういへん 女王（名）「佛」ちやう女玉（シ）に同
じ。善達（シ）太皇太后宮女王玉（シ）大殿（シ）北の方を
始めて」

2265

にやういへん 女院（名）にやういへん（女院）に同
じ。諸曲（シ）天原御幸（シ）女院も、御身を投げさ
せたまひ候を」

にやういへん 葎（名）「植」百合（シ）科に屬する多年
生の草。高さ尺餘。葉は一根に叢生し、
やや扁平にして、細長く、多肉にして柔
軟、色は淡青、花莖は無枝にして、葉間よ
り抽出し、夏、莖頂に、白色の小花、繖形花
序をなして開く。全體に臭氣多し。山に
生ずるを山葎（シ）、水中に生ずるを水葎
（マツシ）と稱す。かみから。こみから。なめみら
ふたもじ。みら。

にやういへん 葎（名）「植」百合（シ）科に屬する多年
生の草。高さ尺餘。葉は一根に叢生し、
やや扁平にして、細長く、多肉にして柔
軟、色は淡青、花莖は無枝にして、葉間よ
り抽出し、夏、莖頂に、白色の小花、繖形花
序をなして開く。全體に臭氣多し。山に
生ずるを山葎（シ）、水中に生ずるを水葎
（マツシ）と稱す。かみから。こみから。なめみら
ふたもじ。みら。

にやういへん 葎（名）「植」百合（シ）科に屬する多年
生の草。高さ尺餘。葉は一根に叢生し、
やや扁平にして、細長く、多肉にして柔
軟、色は淡青、花莖は無枝にして、葉間よ
り抽出し、夏、莖頂に、白色の小花、繖形花
序をなして開く。全體に臭氣多し。山に
生ずるを山葎（シ）、水中に生ずるを水葎
（マツシ）と稱す。かみから。こみから。なめみら
ふたもじ。みら。

にやういへん 葎（名）「植」百合（シ）科に屬する多年
生の草。高さ尺餘。葉は一根に叢生し、
やや扁平にして、細長く、多肉にして柔
軟、色は淡青、花莖は無枝にして、葉間よ
り抽出し、夏、莖頂に、白色の小花、繖形花
序をなして開く。全體に臭氣多し。山に
生ずるを山葎（シ）、水中に生ずるを水葎
（マツシ）と稱す。かみから。こみから。なめみら
ふたもじ。みら。

にやういへん 葎（名）「植」百合（シ）科に屬する多年
生の草。高さ尺餘。葉は一根に叢生し、
やや扁平にして、細長く、多肉にして柔
軟、色は淡青、花莖は無枝にして、葉間よ
り抽出し、夏、莖頂に、白色の小花、繖形花
序をなして開く。全體に臭氣多し。山に
生ずるを山葎（シ）、水中に生ずるを水葎
（マツシ）と稱す。かみから。こみから。なめみら
ふたもじ。みら。

にやういへん 葎（名）「植」百合（シ）科に屬する多年
生の草。高さ尺餘。葉は一根に叢生し、
やや扁平にして、細長く、多肉にして柔
軟、色は淡青、花莖は無枝にして、葉間よ
り抽出し、夏、莖頂に、白色の小花、繖形花
序をなして開く。全體に臭氣多し。山に
生ずるを山葎（シ）、水中に生ずるを水葎
（マツシ）と稱す。かみから。こみから。なめみら
ふたもじ。みら。

にやういへん 葎（名）「植」百合（シ）科に屬する多年
生の草。高さ尺餘。葉は一根に叢生し、
やや扁平にして、細長く、多肉にして柔
軟、色は淡青、花莖は無枝にして、葉間よ
り抽出し、夏、莖頂に、白色の小花、繖形花
序をなして開く。全體に臭氣多し。山に
生ずるを山葎（シ）、水中に生ずるを水葎
（マツシ）と稱す。かみから。こみから。なめみら
ふたもじ。みら。

にやういへん 葎（名）「植」百合（シ）科に屬する多年
生の草。高さ尺餘。葉は一根に叢生し、
やや扁平にして、細長く、多肉にして柔
軟、色は淡青、花莖は無枝にして、葉間よ
り抽出し、夏、莖頂に、白色の小花、繖形花
序をなして開く。全體に臭氣多し。山に
生ずるを山葎（シ）、水中に生ずるを水葎
（マツシ）と稱す。かみから。こみから。なめみら
ふたもじ。みら。

にやういへん 葎（名）「植」百合（シ）科に屬する多年
生の草。高さ尺餘。葉は一根に叢生し、
やや扁平にして、細長く、多肉にして柔
軟、色は淡青、花莖は無枝にして、葉間よ
り抽出し、夏、莖頂に、白色の小花、繖形花
序をなして開く。全體に臭氣多し。山に
生ずるを山葎（シ）、水中に生ずるを水葎
（マツシ）と稱す。かみから。こみから。なめみら
ふたもじ。みら。

にやういへん 葎（名）「植」百合（シ）科に屬する多年
生の草。高さ尺餘。葉は一根に叢生し、
やや扁平にして、細長く、多肉にして柔
軟、色は淡青、花莖は無枝にして、葉間よ
り抽出し、夏、莖頂に、白色の小花、繖形花
序をなして開く。全體に臭氣多し。山に
生ずるを山葎（シ）、水中に生ずるを水葎
（マツシ）と稱す。かみから。こみから。なめみら
ふたもじ。みら。

2264

て、座を立ち騒ぎけるに」。「古語」

にらみ 睨（動四他）にらむ（睨む）に同
じ。にらみ 睨ま（動下二他）にらむ（睨む）
に同じ。「古語」平家（シ）大の眼（シ）をいか
らかし、前座主（シ）を、しばし睨まへたて
まつりて」

まはしてなほ行くを」
にらむ 睨む【動四他】「目を顧らして見
る。烈しき目つきにて見る。にらまふ。
ねむ。」「怪しと思ひて、目ぼしを附く。
和合人」私」などもは、兩個の」ながら大
阪ぢやはいな。然しうだらう、何」て
も大阪と睨みやした」
にらむ 睨む【動下二他】前條と同じ。
にらむ 蕪蟲【名】「蕪」ぢむし(地蟲)に
同じ。

にらん 二卵【名】二箇の雞卵。
二卵を以て、干城【カシ】の將を棄つ
【句】「孔叢子に「子思居衛、言苟變於
衛君、曰、其材可將五百乘。衛君曰、
吾知三其材可將、然變也管爲吳賦於
民、而食三雞子、以故非用也。子思
曰、……、今君處戰國之世、選三爪牙之
士、而以二卵棄干城之將、此不可、
使聞於隣國、者也」とあるに本づく」
僅かなる過失を咎めて、大器量の人物
を用ひず。

にらめくら 脱鏡脱比【名】にらめくら脱
鏡と同じ。八笑人襟から胸へばかり白
粉【粉】を附け、齒【歯】に直り、鏡とにらめ
くらをして」
にらめくら 脱鏡脱比【名】前條の音
にらめくら脱鏡脱比【名】前條に同じ。
にらめくら 蕪藻【名】「蕪」ぢあまも(小大葉藻)
に同じ。

にらま 葎山【名】「地」伊豆國田方【地】
郡にある村。三島町の東南二里餘。幕
府の舊領地。北條長氏の城址、及び江川
太郎左衛門の大砲を鑄造せし反射爐の址
あり。【地】明治の初年設置の縣の一。
元年立てて伊豆國(伊豆七島及び八丈島
を含む)を管轄せしめしむ。四年廢止
し、相模國の小田原・荻野中山【山】の二
縣と合せて足柄縣とし、小田原に治し
て、伊豆全國及び相模國の七郡を管せし
め、九年、又足柄縣を廢して、伊豆國を靜
岡縣に、その他は神奈川縣に轉屬せしめ、
十一年、伊豆七島と八丈島とは、東京府の
管轄となる。【次條】の略。

にらやまがさ 葎山笠【名】紙捻【カシ】に
て製し形編笠の如く窄りて、
多くは黒漆を塗り、記號を箱
押に描けるもありて、徳川
幕府の銃隊の歩卒などの用
ひし笠。伊豆國葎山の代官
江川太郎左衛門等の創製して、
西洋砲術の訓練にかぶりしに創
る。やぶくぐり。にらやま。中島藩葎
山笠。一名、葎澤【カシ】」
にらやま 葎山城【名】伊豆國田
方郡葎山村に在りし城。もと北條氏の據
りし所。伊勢長氏その遺跡を繼ぎて、姓を
北條と改め、小田原城攻後、この城に
居りて卒し、後小田原より將を置きて守
らしむ。豊臣秀吉の小田原征伐の際に、北
條氏規城主たりしが、敵の攻圍に逢ひて
降らず、開城して、小田原に還る。慶長六
年、三島代官の設置と頭にて廢城となれり。
にらやま 葎山頭【名】徳川幕
府の鐵砲隊の被りし、黒天鵝絨【カシ】製の
頭巾。砲術の師なる伊豆國葎山の代官江
川太郎左衛門の創製に係る。講武所頭巾。
にり 二利【名】「佛」自利と利他と。暹羅
天笠「自家の飢渴も、亦、救ふこと能はず、
かの二利の順行に於ては、望をその間に
絶つものなり」
にりうくわ 二硫化炭素【名】「化」
【英 Carbon bisulfide】赤熱せる發炭或
は木炭に、硫酸の蒸氣を觸れしむる時生
ずる氣體を冷却せる有毒なる液。無色に
して流動し易く、水に溶け難くして、水よ
り重し。揮發し易く、點火すれば、よく燃
焼す。純粹なるは、不快ならざるエチレン
様の香あれども、通常不純なるがため、不
快なる臭氣あり。光を強く屈折するが故
に、光學實驗に供し、よく他物殊に硫酸、
樟腦、脂肪、沃素、彈性エム等を溶解す
るを以て、工業上用ふ。硫化炭素。
にりうくわ 二硫化鐵【名】「化」【英
Iron bisulfide】硫化鐵と硫酸とを熱し
又は赤熱せる酸化鐵又は鹽化鐵の上に硫
化水素を通すれば得る物質。天然には、



(さがまやらに)

黄鐵礦として、廣く且つ多量に産し、白鐵
礦としても産すれど、多量ならず。又、石
炭も、屢ば黄鐵礦を含有す。
にりく 二陸【名】「人」支那脊の陸機
にその弟陸雲と。共に詩文を以て名あり。
【支那宋の陸九齡兄弟。
にりく 二陸【名】「哲」英
Anthologia 論理上等しく妥當なりと見
做さる。二箇の原理、又はこれより導か
れたる命題にてありながら、その間に、矛
盾あること。カントが擧げたる純粹理性
の二律背反と行的理性の二律背反とは、
哲學上有名にして、この語の、術語として、
特に著名なるに至りしも、カント以來の
事に屬す。
にりにり【名】「滑」滑る(滑滑)ゆる
のろ等と共通の語なるべし。柔く粘る氣
味にて垂れ落つるさま。東海道名所記、余り
の難所なれば、いかなる旅人も、くたびれ
て糞を垂るる故には、谷より谷に、
古き歌に、四里【カシ】のぼり谷より谷に「め
ぐりて二里二里くたるはこれ山かな」
にりのまつばら 二里松原【名】「地」に
じのまつばら(虹松原)に同じ。「つ」の花輪。
にりん 二輪【名】「二」つの車輪。【三】
にりん 二輪【名】兄弟と朋友との道。
にりん 二輪【名】草履【カシ】と瓶梅【名】「植」毛
萸【カシ】科に屬する多年生の草。高さ三
四寸。葉は地下莖より生じて、葉柄長く、
掌狀に三深裂し、各裂片には、缺刻狀の齒
牙あり。花莖は葉叢の間より出て、四月
頃、通常二箇の花を著け、花下に、二箇の
葉より成れる總苞あり。花は花冠を缺き、
萼は白くして、花冠の如くに見ゆ。果實は
瘦果にして、一箇の種子を含む。有毒な
り。がしやうさう。ふくべら。
にりん 二輪車【名】「二」つの輪のあ
る車。【輪】の二つある自転車。
にりん 二厘錢【名】「二」の價格、二
厘に當るによりていふしんちゆうせん(眞
銀錢)に同じ。
にりよう 二陵【名】二箇所の山陵。
【今上天皇の御父母の山陵。建武年中行事

「北辰を拜する座に、式の筥を置く(藏人
これを置く)。もし二陵有らば、うしろに、
また一帖を敷く」
にる 似る 尙る【動上一自】互に等しき
さまに見ゆ。類す。「りにり」
似たか寄ったか【句】「似たり寄った
似たり【句】「似寄りたる物。【何れ
を優れりとも認めがたき物。
似た者は夫婦【句】夫婦は、その性質
よく相似たるものなり。「似合ふ夫婦
の鍋の蓋【カシ】」参照。「諺語」伊世眞似
た者は夫婦とやらで、どれもどれも、隣
(カシ)の無き无代物【カシ】「推唐」似た
者は夫婦ぢやあないか」
似た者夫婦【句】前條に同じ。「諺語」
似たり寄たり【句】互に優劣高下
の差無きこと。兄【カシ】たりがたく、弟【カシ】
たりがたきこと。大同小異。似たか、
寄ったか、より。
似たるを友とす【句】「似るを友」に
同じ。「諺語」太平記、相從ふ兵も、皆、似
るを友とする事なれば、目に當る敵を
ば、取つて返しては、氣と破る」
似て非なり【句】「孟子の盡心下篇に
「惡似而非者」とあり「似ては居れど、
眞物に非ず。えせものなり。
似ても似附かず【句】次條に同じ。
似も似す【句】すこしも似ず。保西和
漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事
なれば」
似るを友【句】性質の相似たる者は、
親友となる。似たるを友とす。「諺語」
平盛(似る)を友とかやの風情にて、忠盛
の好(似)たりければ、かの女房も優な
りけり」
にる 煮る 煮る【動上一他】火にかけ、沸
して、熱をとす。沸きたる液體の、熱に
て熱せしむ。たく。煮沸【カシ】す。
煮ても焼いても【句】「次條
に同じ。「諺語」心中刃は氷の崩且「惡性の
酒と色との鏡【カシ】、煮ても焼いても
嘔まれぬは、鐵釜【カシ】、あぶりこ鐵火釜」
煮ても焼いても【句】「煮はれぬ【句】手に

にらやまがさ 葎山笠【名】紙捻【カシ】に
て製し形編笠の如く窄りて、
多くは黒漆を塗り、記號を箱
押に描けるもありて、徳川
幕府の銃隊の歩卒などの用
ひし笠。伊豆國葎山の代官
江川太郎左衛門等の創製して、
西洋砲術の訓練にかぶりしに創
る。やぶくぐり。にらやま。中島藩葎
山笠。一名、葎澤【カシ】」
にらやま 葎山城【名】伊豆國田
方郡葎山村に在りし城。もと北條氏の據
りし所。伊勢長氏その遺跡を繼ぎて、姓を
北條と改め、小田原城攻後、この城に
居りて卒し、後小田原より將を置きて守
らしむ。豊臣秀吉の小田原征伐の際に、北
條氏規城主たりしが、敵の攻圍に逢ひて
降らず、開城して、小田原に還る。慶長六
年、三島代官の設置と頭にて廢城となれり。
にらやま 葎山頭【名】徳川幕
府の鐵砲隊の被りし、黒天鵝絨【カシ】製の
頭巾。砲術の師なる伊豆國葎山の代官江
川太郎左衛門の創製に係る。講武所頭巾。
にり 二利【名】「佛」自利と利他と。暹羅
天笠「自家の飢渴も、亦、救ふこと能はず、
かの二利の順行に於ては、望をその間に
絶つものなり」
にりうくわ 二硫化炭素【名】「化」
【英 Carbon bisulfide】赤熱せる發炭或
は木炭に、硫酸の蒸氣を觸れしむる時生
ずる氣體を冷却せる有毒なる液。無色に
して流動し易く、水に溶け難くして、水よ
り重し。揮發し易く、點火すれば、よく燃
焼す。純粹なるは、不快ならざるエチレン
様の香あれども、通常不純なるがため、不
快なる臭氣あり。光を強く屈折するが故
に、光學實驗に供し、よく他物殊に硫酸、
樟腦、脂肪、沃素、彈性エム等を溶解す
るを以て、工業上用ふ。硫化炭素。
にりうくわ 二硫化鐵【名】「化」【英
Iron bisulfide】硫化鐵と硫酸とを熱し
又は赤熱せる酸化鐵又は鹽化鐵の上に硫
化水素を通すれば得る物質。天然には、

262

263

264

265

にれ

のらめ簀。〔談語〕
にれ 榿〔名〕「植」あきになれ(秋榿)に同
じ。字彙「榿皮榿禮」はるになれ(春
榿)に同じ。
にれ 榿〔名〕次條を見よ。
にれを噛む〔句〕にれを噛む(噛む)に同
じ。徒然牛は馴れて、大理の座の濱床
(か)の上にのぼりて、にれうち噛みて
臥したりけり

にれ 煎〔名〕あわつること。〔商〕に
れ(煎)煎退の略。
にれ 二柱の神、武陰陽斯開、二靈群品禮
にれ 二柱の神、武陰陽斯開、二靈群品禮
にれ 二柱の神、武陰陽斯開、二靈群品禮
にれ 二柱の神、武陰陽斯開、二靈群品禮

にれいさん 爾靈山〔名〕「地」にちやん
かうち(二百三高地)の雅稱。
にれかむ 榿〔名〕牛、羊、鹿などが、
噛みて呑み込んだる物を、再び吐き出し
て食ふ。にげがむ。ねりがむ。はんすう(反
芻)みけ参照。〔古語〕字彙集「爾、ニレ
カム、サケブ」

にれくわ 榿科〔名〕「植」顯花植物、被子
類、雙子葉門、離花區の科。榿(榿)・朴
(榿)・榿(榿)・榿(榿)など、これに屬す。
にれきんら 榿櫻〔名〕「植」さくらほく
(扶移)に同じ

にれたげ 榿芽〔名〕「植」榿に生ずる齒。
にれのき 前退〔名〕「商」あわてて、賣退
(か)又は買退(か)をなすこと。にれ。〔取
引所の語〕葉莖(に)に同じ。

にれはき 榿萩〔名〕「植」さくらほく(一
にれんさう)はら二聯裝砲〔名〕「兵」英
「win gun」連裝砲の一。二門の砲を裝
備したるもの。

にれんさうはら 二聯裝砲塔〔名〕
「兵」英「win mounting barbets」二
聯裝砲を備へたる砲塔。現時の大艦は、
この種の砲塔數基を備ふるを常とし、又
要塞にも備へつることあり。

にれんせい 二連星〔名〕「天」英Binary
star「二つの恆星の、互に廻轉しつつか
るもの。その一つの星に對する他の星の

にれ

軌道は、楕圓形をなす。共通の重心の周
圍を、引力の法則に従ひて廻轉せるもの
として説明す。連星。
にれんせい きくわん 二聯成機關〔名〕
蒸氣機關の一。第一の汽筒(か)より排出
したる蒸氣を、更に第二の汽筒に送給す
る組織なるもの。

にれんせんか 尼連河〔名〕「佛」梵
Naliniana(尼連河)の略。尼は不の
義、連河那は樂著の義、印度ガングス川
に注ぐフアルガ(Phalga)川の支流の一
なるリランジャン(Trilanga)川の古稱。
釋迦の河に浴せし後、その左岸の菩提
樹の下にて成道(か)せりといふ。ぼだい
じ(菩提樹)参照。

にれめん 榿麩榿麵〔名〕秋榿の幹の粗
皮を去り、その下の白皮を碎きて得たる
粉にて製せる食品。
にれもち 榿餅〔名〕秋榿の幹の粗皮を
去り、その下の白皮を日に干し、臼に搗き
て得たる粉にて製せる餅。

にれもみ 榿椀〔名〕「植」たろひ(唐榿)
に同じ。〔たけもみ(だけ椀)に同じ。〕
にろぎ 〔名〕「動」ぎちに同じ。
にろひちちゆう 二六時中〔名〕「昔は、晝
も、夜も六時(か)づつに分ちたるため、
合せて十二時なりしよりいふ。しんじち
ゆう(四六時中)参照」晝夜の間、一日
中。終日。

にろくちちゆう 二六挺〔名〕じよにちやうた
て(十二挺立)に同じ。
にろくちちゆう 二六對〔名〕「文」漢詩の近
體なる七言の句に於て、第二字と第六字
とは平仄の相同じきを通則とすること。
(二四不對に對して)

にろくちちゆう 二六燒〔名〕伊豫國宇摩(か)
郡松栢(か)村の人、佐佐木六太郎二六
が、明治年間に燒き創めたる陶器。現時は
海外に輸出するに至れり。

にろくちちゆう 二六蹄 〔名〕陸摩國鹿兒
島に行はるる、一種の蹄。

にろり 貌〔名〕にろりにろりと差し出す」
が鼻の先へ、にろりにろりと差し出す」

にわ

にわう 二王〔名〕二人の王。蒼天に
二日なく、地に二王なし。〔人〕支那東
晉の王羲之と、その第三子王獻之と。〔
佛〕密宗にて、愛染明王と不動明王と。前
者は煩惱(か)即の菩提(か)を表し、後者
は生死(か)即の涅槃(か)を表す。

にわう 仁王二王〔名〕「佛」彫刻とし
て、寺門に左右相並べて安置し、又繪畫
として、寺殿の壁及び諸種の佛畫中に描
く、佛法守護の二神。もと體の金剛力士
を左右の二像
に分ちたる
もの。
にわう 右を金剛
といひ、阿
吽(か)の吽を表し
て、口を閉ぢ、智徳を示す
男性とし、左を力
士といひ、
阿吽の阿
を表して、
口を開き、
理徳を示す女性
とす。〔能(か)の狂言の一。生活に窮し
たる男、仁王に扮し、錢籠を手に入れんと
せしに、看破せられ、こそぐられて、正體
をあらはすことを作れるもの。〕
にわう かほ 仁王額・二王額〔名〕仁王
の如き怖し顔つ。 緋繪種月(か)の紅雲目
に角立てたる仁王額」

にわうそん 仁王尊・二王尊〔名〕「佛」に
わう(仁王)の敬稱。
にわうたら 仁王堂・二王堂〔名〕仁王
を安置せる堂。蘇我仁王堂のおこなひを
局(か)とせさせたまへり。

にわうたち 仁王立・二王立〔名〕仁王
の像のごとく勢よく突き立つこと。力士
立(か)。 毘沙門立(か)。 太平廣濟言
吐いて、仁王立にぞ立たりける」
にわうもん 仁王門・二王門〔名〕仁王
の像を左右に安置せる社寺の門。二代男
「仁王門を出る時」

にわうりき 仁王力・二王力〔名〕仁王
のごとき大力。 徳將御本陣(か)金剛兵衛が金



にわ

剛力、茨菰(か)次郎が二王力」
にわじ 仁和寺〔名〕にんわじ(仁和寺)に
同じ。 甚にわ寺の僧正のにやと思へど」
にわたし 荷渡〔名〕荷物を渡すこと。貨
物の交付。
にわたしき 荷渡切符〔名〕「商」そ
の所持者に、庫入貨物を引渡すべきこと
を請求する有價證券。出庫報告。

にわらび 〔名〕「植」おほかま(狗脊)に同
じ。 養籬菜(か)「狗脊、ニワラビ」を見よ。
にわ 二位〔名〕ニワラビ」を見よ。
にわ 新居〔名〕「地」伊豫國十二郡の一。
郡役所を西條(か)町に置く。古くは「に
ひる」と呼びたり。

にわ どの 二位殿〔名〕「人」次條に同
じ。
にわ 新居〔名〕「地」伊豫國十二郡の一。
郡役所を西條(か)町に置く。古くは「に
ひる」と呼びたり。

にわ 新居〔名〕「地」伊豫國十二郡の一。
郡役所を西條(か)町に置く。古くは「に
ひる」と呼びたり。